上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書10

―長野市内　その８―

川田条里遺跡（かわだじょうり）

第２分冊（遺物編）

2000．3

日　本　道　路　公　団
長　野　県　教　育　委　員　会
長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書10

―長野市内　その８―

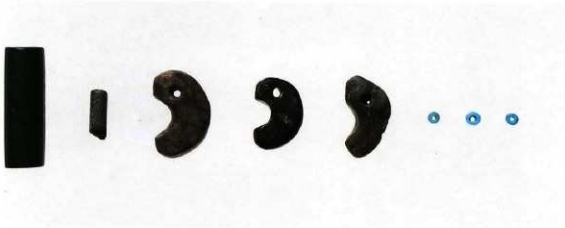
川田条里遺跡（かわだじょうり）

第２分冊（遺物編）

2000.3

日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター

珠文鏡（古墳前期）



管玉・勾玉・ガラス玉（弥生後期～古墳前期）

ベンガラが付着する磨製石斧（左：弥生中期、右：弥生後期）

凡　例

1　本書に掲載した遺物実測図は原則として下記の縮尺である。

土器　拓本１：３　器形復元をした土器実測図１：４

石器　石鏃など小型石器２：３　刃器・磨製石斧・石包丁１：３　打製石斧１：４　石臼１：８

木製品　農具１：６　祭祀具・武具・服飾具１：３と１：４　容器１：４

建築部材１：８と１：12　用途不明材１：６と１：８　杭１：16

2　本書に掲載した遺物写真の縮尺は、原則として実測図と同一であるが、適宜縮尺を変えたものがある。

3　遺物の出土地点は、図版中の実測図の下と遺物観察表に表記した。

4　実測図に用いたスクリーントーンは下記の通りである。

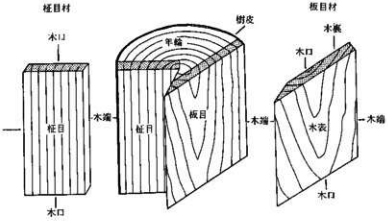
1）土器実測図

古代の土器は、土師器を断面白抜き、須恵器を断面黒塗り、灰釉陶器を断面網点とし区別した。

2）石器実測図

3）木器実測図

5　木製品の木取り及び木材の部分名称は下記の通りである。



第２分冊（遺物編）目次

巻頭図版
凡例

第１章　遺物の概要……1
　1 出土遺物の概要　2 遺物出土状況の概要
第２章　土器・陶磁器
　第１節　縄文時代……3
　　1 概要　2 晩期前半の土器　3 晩期後半の土器
　第２節　弥生時代……3
　　1 概要　2 壺形土器・広口短頸壺形土器　3 高坏・鉢形土器・甕形土器　4 甕形土器
　第３節　古墳時代……6
　　1 概要　2 土師器　3 須恵器
　第４節　奈良・平安時代……7
　　1 概要　2 須恵器・土師器・灰釉陶器　3 箆書土器・墨書土器・墨痕
　第５節　中世・近世以降……9
　　1 概要　2 カワラケ・内耳鍋　3 陶磁器
第３章　石器・土製品・石製品・金属器
　第１節　石器……11
　　1 縄文時代・弥生時代の石器　2 古墳時代以降の石器
　第２節　土製品・石製品・金属器……14
　　1 土製品・石製品・ガラス玉　2 金属器
第４章　木製品
　第１節　木製品の概要……16
　　1 木製品の分類　2 木製品の概要と出土状況
　第２節　農具……18
　　1 鍬　2 鋤　3 扶（柄振）　4 農具の柄　5 馬鍬　6 田下駄（大足）　7 横槌
　　8 編具　9 主な用途不明木製品
　第３節　武具・祭祀具……25
　　1 弓・矢・盾　2 祭祀具
　第４節　服飾具……26
　　1 下駄　2 櫛
　第５節　容器……27
　　1 刳物　2 挽物　3 曲物　4 その他の容器
　第６節　用途不明木製品および加工材……31
　　1 有頭状木製品　2 弓状木製品　3 棒状木製品および加工材
　　4 板状木製品（含む加工材）　5 有孔棒・有孔板木製品（含む加工材）　6 その他
　第７節　建築部材……35
　　1 建築部材の分類　2 縦材（竪材）　3 横架材　4 屋根材　5 付属材
　第８節　小　結……43
　　1 農具について　2 建築部材について

土器観察表……52
石器観察表……64
木製品観察表……66
遺物図版……73
写真図版

遺物図版目次

縄文時代晩期の土器 …… 図版１・２
弥生時代の土器 …… 図版３～18
古墳時代の土器 …… 図版19～22
奈良・平安時代の土器 …… 図版23～25
中世・近世の焼物 …… 図版26～29
石器 …… 図版30～38
金属器・土製品・石製品 …… 図版39～41
木製品（農具） …… 図版42～54
木製品（武具・祭祀具） …… 図版55・56
木製品（服飾具） …… 図版57
木製品（容器） …… 図版58～65
木製品（用途不明木製品および加工材） …… 図版66～81
木製品（建築部材） …… 図版82～113
木製品（加工材・杭） …… 図版114～118

写真図版目次

縄文時代土器 …… ＰＬ１～２
弥生時代土器 …… ＰＬ３～６
古墳時代土器 …… ＰＬ６
須恵器・陶磁器・カワラケ …… ＰＬ７
石器 …… ＰＬ８～10
金属器・土製品・石製品 …… ＰＬ11～12
木製品（農具） …… ＰＬ13～23
木製品（武具・祭祀具） …… ＰＬ24～25
木製品（服飾具） …… ＰＬ26
木製品（容器） …… ＰＬ27～33
木製品（用途不明木製品および加工材） …… ＰＬ34～46
木製品（建築部材） …… ＰＬ47～75
骨 …… ＰＬ76

挿図・挿表目次

第１図　農耕具（鍬・鋤・扶）の分類
第２図　主要農具の細部名称
第３図　臼形木製品略図
第４図　柱仕口加工の比較
第５図　楣・蹴放材の比較
第６図　垂木仕口加工部の比較
第７図　有頭状垂木仕口加工部の比較
第８図　梯子の比較

第１表　Ａ２地区遺構別土器破片数
第２表　出土銭貨一覧表
第３表　木製品の時期別点数
第４表　農具の時期別出土点数

第１章　遺物の概要

１　出土遺物の概要

中世の居住域であるＡ２地区以外はほとんどが水田関連遺構であり、水田域から土器、石器、土製品、石製品、木製品、金属器が出土した。水田畦畔と水路内より6000点の木製遺物が出土しており、農具や建築部材などの木製品が多数出土した。建築部材は弥生時代後期から古墳時代のものが多く、農具などの小形の木製品は弥生時代後期から近世に至るものが出土した。第２分冊「第４章木製品」で報告したもの以外にも建築部材と思われる板状の加工材などが認められ、それらについては、第３分冊第12章に概要をまとめた。また、木製遺物の分類・樹種・法量などの属性を、添付したフロッピーディスクに収録した。

土器は縄文時代晩期から近世陶磁器まで各時期のものが出土した。縄文時代晩期はＡ地区とＤ地区に集中して出土した。弥生時代中期は出土土器が少なく、弥生時代後期には中期と比べ多量の土器が出土した。後期土器の多くは集落域に近いＥ２地区で出土したものである。古墳時代に入ると遺物は少なくなり、特に中期、後期の遺物は極めて少ない。奈良時代以降も水田域の土器は少なく、おもに溝内より出土する。水田耕作土（水田層）からの遺物採取を行っていないので、厳密さを欠くが、水田に残された土器の量は、弥生時代中期、後期には比較的多く見られるのに対し、古墳時代中期以降極めて少なくなる。Ｂ地区ＳＤ103より古墳時代から平安時代前半期の土器が多量に出土し、古代においては出土した土器の大半はＢ地区ＳＤ103の遺物である。また、中世では、出土遺物の９割以上はＡ２地区の集落域から出土したもので、水田域より出土したものは極めて少ない。

土器は時代別にまとめて報告したが、時代の境界部分でどちらの時代に含めてよいか迷うようなものは古い時代の項で報告した。なお、土器の実測図において、器面調整のミガキとナデの表現に矢印を用いたものがある。矢印はミガキ又はナデの方向を示しており、詳細は遺物観察表の記載を参照して頂きたい。

石器では縄文時代晩期から弥生時代中期のものが多く出土しており、打製石斧、打製石包丁と考えられる刃器、磨製石包丁など水田に関わる石器が出土した。また、中世以降の石臼、石鉢などがＡ２地区の集落域より多く出土した。

この他に、人骨、獣骨、種子などの自然遺物が多数出土した。これらについては第３分冊第９章、第13章を参照して頂きたい。

２　遺物出土状況の概要

本分冊では個々の遺物の特徴について記述し、遺物出土状況は第１分冊当該遺構で記述した。なお、埋納などの人為的な設置状況が想定されるものなど、特異な出土状況のものを以下に列挙する。

木製品では以下の事例がある。

・Ｃ地区第４水田の下層より馬鍬が出土。（古墳時代後期から奈良時代）

・畦畔の構造材として用いられた木製品。畦畔内の木材の敷設は、弥生時代後期から古代まで確認されるが、弥生時代後期から古墳時代にかけて、大形の建築部材が転用される例が多い。また、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて多量の杭の打設を伴う畦畔が見られる。（Ｃ地区ＳＡ01、Ｄ地区ＳＣ

1001など）

・Ｄ地区第６Ａ水田上面より臼形木製品が出土。（弥生時代後期）

・Ｂ地区ＳＤ103より大量の土器と共に斎串と馬形が出土。土器には墨書土器が含まれる。（奈良・平安時代）

石製品・土製品・金属器では以下の事例がある。

・Ｄ地区ＳＣ1001（杭列群）内より赤彩されていたと思われる偏平片刃石斧と、勾玉が出土。（弥生時代後期埋没）

・Ｃ地区ＳＡ01（杭列群）内より勾玉、管玉、ミニチュア土器などが出土した。（古墳時時代初頭）

・Ｄ地区の第６調査面に軽石が多く出土する。（古墳時代初頭埋没）

・Ｅ２地区第２水田大畦畔（ＳＣ38）の盛土内より珠文鏡が出土。（古墳時代前期埋没）

土器では以下の事例がある。

・畦畔内にほぼ完形の土器が単独で出土した。古墳時代ではＢ地区ＳＣ1005、Ｃ地区ＳＣ52、Ｃ地区ＳＣ02、弥生時代後期ではＣ地区ＳＣ41、Ｄ地区ＳＣ110などの事例がある

・Ｅ２地区第4調査面に弥生時代後期の壺・甕が集中して出土した。

・Ｅ２地区の井戸址（ＳＫ01）より多量の土器が出土した。

これらの他に鳥形土製品、密教法具の鈴など特殊な遺物が出土したが、出土状況が明らかでない。

第2章　土器・陶磁器

第1節　縄文時代

1　概要

縄文時代は晩期の遺物のみである。縄文晩期の遺物はＡ４地区で氷Ⅱ式、Ｄ地区では佐野Ⅱ式の土器群が出土した。Ａ地区で焼土址が伴った以外遺構は検出されず、約20ｍほどの範囲にまとまって出土したのみで、遺物量も少ない。キャンプサイト的な性格の遺跡であろう。

晩期の調査面は地表下1.5ｍ～2.3ｍほどの深さであり、更に下層の調査は行っていない。長野市松原遺跡、長野市石川条里遺跡、更埴市屋代遺跡群[注1]などの沖積地に立地する縄文時代の調査例から、更に下層に縄文時代後期以前の包含層が存在する可能性を否定できない。

なお、個々の土器の記載は土器観察表に記す。

2　晩期前半の土器（図版１―1～27）

１～27はＤ３地区27-1層よりブロック状にまとまって出土したものである。５・13・23・26は弥生時代中期の溝（ＳＤ11）より出土したものであるが、これらは下層の包含層から巻き上げられたものであり、他の土器と一括遺物と考えられる。いずれも佐野Ⅱ式であり、８・16・17は口縁部に縄文施文の後、赤色の顔料が塗られている。15は赤漆と思われる塗料が塗布される。提示していないが赤漆が塗られた土器片が数点確認される。底部７点中４点には網代痕が認められる。

なお、図示はしていないが、Ｄ１地区第８調査面より縄文時代晩期前半の無文土器が数点出土した。

3　晩期後半の土器（図版１―28・図版２―29～55）

Ａ４地区とＤ２地区から出土した。28はＤ２地区出土で、佐野Ⅱ式の遺物集中区とは別地点であり、肩部に段を有し、口縁に向かって外湾する器形から晩期後半のものと判断した。胴部はナデ調整であり、条痕が顕著であるＡ４地区のものとは異なる。29～55はＡ４地区のＳＱ01とした直径20ｍほどの範囲に集中して出土し、一括遺物と判断される。なお、土器の多くは氷Ⅱ式に対比され、細密条痕の施された甕形土器である。細密条痕は木口によると思われる条の整ったもので、遺物観察表ではハケメと表記した。

第2節　弥生時代

1　概要

水田の時期を示すために、弥生時代を以下のように４期区分した（第１分冊第３章４節参照）。遺物観察表はこの時期区分に従う。弥生Ⅰ期は栗林式より古い段階、弥生Ⅱ期は栗林式の時期、弥生Ⅲ期は後期

前半の吉田式の時期、弥生Ⅳ期は箱清水式の時期に概ね対応する。氷Ⅱ式並行を弥生時代に含める見解もあるが、本書では氷Ⅱ式並行の土器（29～55）は縄文時代晩期の節で提示した。これらはＡ４地区で焼土と共に纏って出土したものである。これらの他に川田条里時期区分弥生Ⅰ期と考えられるものが同じＡ地区より２点出土した（262・263）。この２点は条痕による文様が認められ、胎土も類似する。これらは水Ⅲ区画に伴うものではなく、当該期の水田の存在を示す資料は今回の発掘調査では得られていない。

弥生Ⅱ期の土器は畦畔内や水田面から出土したもので、特にＢ地区、Ｄ地区に纏ってみられるが、その数はあまり多くない。これに対し弥生Ⅲ・Ⅳ期になると全地区に遺物が出土し、ＥⅠ・Ｅ２地区を中心に、完形品及びほぼ器形が復元できる土器が比較的多数得られた。これらの土器は水田域以外の微高地上及び水路や井戸の中から出土したものが多い。

図版は器種毎に遺物を提示し、概ね時期的な変遷を考慮して配置した。壺形土器（56～129・235・242～260）、外来系の壺形土器（130～132）、広口短頸壺（133～148・261）、高坏（149～185・187）、鉢形土器（145・147・186・188～191）、壺形土器（192・193）、甕形土器（194～234・236～241・262～331）の順に示した。

土器の器面調整、使用痕跡などの項目は土器観察表に記した。なお、甕形土器・壺形土器には焦げ付きのような炭化した黒色付着物と、光沢のある薄い膜のようなタール状の黒色付着物が観察された。前者は「黒色付着物」、後者は「タール状の黒色付着物」と表記した。「黒色付着物」は煮沸に伴う焦げ付き、「タール状の黒色付着物」は漆の痕跡と判断したが、理化学的な分析は行っていない。「タール状の黒色付着物」は壺形土器と高坏のみに見られ、「黒色付着物」は甕形土器に多く見られる。

2　壺形土器・広口短頸壺形土器

壺形土器（図版３～図版10―56～129、図版16―235・242～260）

56～66・242～253は弥生時代中期（弥生Ⅱ期）、67～120・254～260は弥生時代後期（弥生Ⅲ期・Ⅳ期）、121～129は弥生時代後期末～古墳時代初頭（弥生Ⅳ期末～古墳Ⅰ期）である。65・66は口唇部が細かな波状で、65は口縁部内面のみ赤彩され、後期前半の壺形土器の特徴を持つ。67～81・116～118は小形、82～115・119・120は大形のもので、小形のものは後期前半のものが多い。75は小破片であり、古墳時代土師器の可能性がある。

69・71には漆と思われるタール状の黒色付着物が見られ、71は胴部下半に大きな穿孔部がある。タール状の付着物は112・120などの大形の壺にも認められる。112は輪積痕跡に沿って帯状に付着しており、割れ口にも付着している。120も同様に割れ口に付着しており、タール状の付着物は接着材として用いられたものであろうか。タール状の黒色付着物が見られる小形の壺は接着剤の容器として用いられたと考えられる。141などの広口短頸壺にも同様の付着物が見られる。72は頸部Ｔ字文の横位と縦位の施文具が異なっており、90・100・103・258などにも異なった施文具によるＴ字文が見られる。74・82・96・97・99・106は赤彩がなく、頸部文様が櫛描直線文又は櫛描簾状文のものにはハケメが顕著に残り、Ｔ字文のものにハケメは認められない。また、口縁内面のみ赤彩されるものにもハケメが顕著なものが見られる（84・86・90）。67・260は頸部文様帯の下部に鋸歯文が見られる。また、85・101などは赤彩による文様表現が伺われるが、欠損部が多く確証はない。74・259などは焦げ付き状の黒色付着物が見られ、煮沸に用いられた壺形土器の存在を示唆する。112は大形で復元に歪みが生じているが、Ｔ字文のボタン状貼付は本遺跡で希な例である。

121～124・127～129は胴部下半に稜を有する箱清水式の特徴を残しつつ胴部が球胴化したものである。赤彩がなされないもの、Ｔ字文が無いものなどが見られる。これらは頸部が屈曲しており、弥生時代終末

から古墳時代初頭（弥生Ⅳ期末～古墳Ⅰ期）の特徴を示している。125・126は同一個体と推定され、出土層位から弥生時代終末～古墳時代初頭（弥生Ⅳ期末～古墳Ⅰ期）のものと判断される。

外来系の壺形土器（図版10―130～132）

130は肩部に二列の刺突列が巡り、132と共に北陸系の壺である。131は弥生時代中期（弥生Ⅱ期）の土器と共に出土したもので、赤彩と細かな櫛描波状文が見られるが器形が不明である。外来系の土器は図示した３点のみである。

広口短頸壺（図版11―133～144・146・148、図版16―261）

133は弥生時代中期（弥生Ⅱ期）、134～139は弥生時代中期末から後期前半（弥生Ⅱ期末～弥生Ⅲ期）、140～148は弥生時代後期（弥生Ⅲ期・Ⅳ期）のものであろうか。

3　高坏・鉢形土器・蓋形土器

高坏（図版11・12―149～185）

149・150は中期（弥生Ⅱ期）、153・162・169・170などは中期末～後期前半（弥生Ⅱ期末～弥生Ⅲ期）の土器と伴出しており、後期の中でも古い様相を示すものである。162は坏部内面のみ赤彩され外面はハケメがのこり、脚部が弥生Ⅳ期のものに比べ短い。167・184・185は後期末～古墳時代初頭（弥生Ⅳ期末～古墳Ⅰ期）のものである。器形が復元できるものの大半はＤ地区、Ｅ地区に集中し、Ｅ地区の土器集中（ＳＱ）は弥生Ⅲ期の水田面の上層に形成されたものである。

鉢形土器（図版11―145・147、図版12―186～191、図版19―332～336）

145と147は底部内面にも赤彩があり、鉢形土器であろう。186は中期（弥生Ⅱ期）、他は後期（弥生Ⅲ・Ⅳ期）の所産である。147・188・191は後期前半（弥生Ⅲ期）、190は中期～後期前半（弥生Ⅱ期～弥生Ⅲ期）の土器と伴出する。なお、332～336はいずれも赤彩が無く、赤彩された鉢形土器とは形態が異なるが、弥生時代の鉢形土器とした。332、336は後期前半（弥生Ⅲ期）の土器と伴出し、333と334は遺構の検出層位から、弥生時代後期の遺物と認識した。なお、187は高坏の可能性がある。

蓋形土器（図版12―192・193）

192は古墳時代前期の水田の被覆層、193は弥生時代後期の水田面より出土したものである。本遺跡で蓋形土器はこの2点のみである。

4　甕形土器

甕形土器（図版13～図版16―194～234・236～241、図版17・図版18―262～331）

194～197・241・262～275・280・284・285は中期（弥生Ⅱ期）、198・277・279・281～283・288・289は中期末～後期前半（弥生Ⅱ期末～弥生Ⅲ期）、他は後期（弥生Ⅲ・Ⅳ期）のものと思われる。

中期の甕形土器では、194と196が畦畔の構造材として埋め込まれていたものである。197は水式の甕形土器（28）、弥生Ⅰ期の壺形土器（59）と同一層位（27-1層）で出土し、27-1層では中期（弥生Ⅱ期）の溝（ＳＤ2005）が検出されている。中期の甕の大半は栗林式であるが、262・263は栗林式以前のもので、本報告書では弥生Ⅰ期としたものである。当該期の土器は少なく、弥生Ⅰ期の水田遺構は検出されていない。

後期では、より古い様相（弥生Ⅲ期）を示す198～205・207～209・218～221・286～295・300と、より新しい様相（弥生Ⅳ期末～古墳Ⅰ期）を示す224～226・231などが見られる。他のものはこれらの中間に位置するものである。前者は頸部から口縁が短く、やや内湾するものが多い。頸部の文様が２段の櫛描簾状文のもの（219・295）、Ｔ字文のもの（200・208・293・294）などが見られ、口縁内面の赤彩（201）な

ど特異な例がある。202・203は胴部内面にハケメが顕著で、他の甕形土器の胴部内面がミガキであるのと異なる。また、器面にハケメを残す例（218・221など）が古い段階のものに多く見られる傾向がある。後者の新しい様相を示すものは胴部が球胴化し、頸部の屈曲が顕著となり、櫛描波状文が乱れる。

223・225・226・238は畦畔内より出土しており、ほぼ完形に復元されることから、人為的に埋納したものと思われる。

第3節　古墳時代

1　概要

水田の時期を示すために、古墳時代を以下の4時期に区分した（第1分冊第3章4節参照）。遺物観察表はこの時期区分に従う。古墳Ⅰ期は箱清水系の土器[注2]が残る時期である。古墳Ⅱ期は箱清水系の土器が姿を消し、土師器坏形土器が出現するまでの時期である。なお、古墳Ⅱ期は屈折高坏出現を境に前半期と後半期に区分した。古墳Ⅲ期は土師器坏形土器が出現し定着する時期である。古墳Ⅳ期は榎田遺跡の時期区分Ⅲ期以降に相当し、屈折高坏が消滅し、坏形土器の内面の稜が底部付近に見られる形態が出現し、甕の長胴化が明確になる時期である。

弥生時代に比べ出土土器量は少なく、土器の多くは古墳Ⅰ期～Ⅲ期前半のもので、Ⅲ期後半～Ⅳ期のものは少ない。特に、Ⅳ期の長胴の甕形土器はほとんど見られない。338・356・398・399・419・426・427など畦畔に埋納されたと思われる出土状況を示したものがある。

2　土師器

坏形土器・鉢形土器・甑（図版19―332～356、図版20―381）

坏形土器と鉢形土器の区別が明確ではなく、まとめて報告する。332～336は手ずくねで、器形もあまり整っていない鉢形土器である。これらは供伴土器、出土層位から弥生時代後期のものである可能性が高い。343～356は内面黒色処理が施されている。350～354は内面の稜が底部付近に認められ、他の坏形土器より後出の形態である。338・355・356はほぼ完形であるが、他は小破片である。381は甑で、平安時代の水田面より出土した。

高坏・器台（図版19―357～380）

357・358・360・361は器台、他は高坏である。358は勾玉、管玉などと共に杭列群に伴って出土した。Ｂ２地区ＳＤ103より多く出土しているが、ＳＤ103は弥生時代中期～平安時代前半の遺物が多量に出土した溝である。379・380は坏部内面黒色処理を施したもので、古墳Ⅳ期の高坏はこの２点が確認されたのみである。

壺形土器（図版20―382～399）

382～392は小形の壺形土器で、385～387は薄手の小型丸底土器である。386はほぼ完形で、Ｂ地区第６水田の畦畔上部から出土しており、埋納した土器であろうか。396は残存部が多く、399はほぼ完形であり、これらも畦畔内に埋納された土器の可能性がある。396・398など甕形土器との分類が曖昧なものがある。なお、382は出土層位より弥生時代後期のものである可能性が高い。

甕形土器（図版21・図版22―400～427）

402は無文であるが、箱清水式の甕形土器の器形を示しており、供伴土器から弥生時代の遺物であると

思われる。417・421・424などは焼成が良く、薄手の甕形土器である。419はD地区第5水Ⅲ大畦畔内より出土しており、ほぼ完形であることから埋納した土器であろう。401・407などにタール状の黒色付着物、415・416・418・422・426などに黒色付着物が見られるなど、使用痕跡を残すものがある。破片資料が多く壺形土器との区別が曖昧であるが、甕形土器は古墳Ⅰ期・Ⅱ期のものが多く、Ⅲ期・Ⅳ期のものが少ない傾向にある。

3　須恵器（図版22―428～432）

古墳時代の須恵器は428～432の他に返しを有する坏蓋が数点出土したのみである。428・432が坏、430が坏蓋、429と431は甑である。430は軟質で暗灰褐色をであり、他は青灰色で焼成が良く硬質である。428は底部外面に「×」印の箆書がある。429は、破片下端部に屈曲が認められ、そのまま胴部に至り、頸部の短い器形を示す。431は2本の沈線と板状工具の木口による連続刺突文が認められる。

図版25―500・501は内面に青海波紋があり、古墳時代の甕形土器である可能性がある。

第4節　奈良・平安時代

1　概要

水田の時期を示すために、以下のように古代Ⅰ期～Ⅳ期の時期区分をした（第1分冊第3章4節参照）。古代Ⅰ期は奈良時代以前の年代を示すが、古代の時期区分の中に含めた。古代Ⅰ期は口縁部に返しを有する須恵器坏蓋が存在する時期である。古代Ⅱ期は蓋受け部分を持つ丸底の須恵器坏が消滅し、須恵器坏が平底のみとなる時期で、前半期は底部ヘラ切りが主体となり、後半期は底部糸切りが主体となる。古代Ⅲ期は灰釉陶器の出土例が確認され、高台付きの土師器椀が出現する時期である。古代Ⅳ期は一部の貯蔵具を除き須恵器が姿を消す段階から土師器坏や内面黒色の椀などが消滅する段階までの時期である。実年代は概ね以下の通りである。古代Ⅰ期は7世紀後半から7世紀末、古代Ⅱ期は7世紀末から9世紀初頭、古代Ⅲ期は9世紀前半から9世紀末、古代Ⅳ期は10世紀前半から12世紀後半の年代を想定している。

出土遺物の大半はB2地区SD103より出土したものである。この他にA地区第3水田自然流路からも比較的多くの土器が出土したが、水田跡に伴うものは極めて少ない。弥生時代、古墳時代には水田面及び、畦畔内より土器が出土しているが、古代には水田に伴う遺物が少ない。古代の水田跡の調査面積が、弥生時代、古墳時代のものに比べ少ないことを考慮しても、出土遺物は少ないと言える。また、他の時期に見られた煮沸形態である甕形土器はほとんど出土していない。弥生時代、古墳時代では水田畦畔や水田面に破片ではあるが、甕形土器が多く出土したのと対照的である。なお、甕形土器の稀少性は古墳Ⅳ期から見られる現象である。

当該期の遺物が多数出土したB2地区SD103について、出土遺物の概要を記す。SD103は弥生中期から平安時代の遺物が出土しており、特に奈良・平安時代の遺物が多く、古代Ⅱ期・Ⅲ期の須恵器、土師器が多く、古代Ⅳ期の遺物は見られない。墨書・箆書須恵器、墨痕がある須恵器、斎串・馬形などの木製品、牛・馬・鹿の獣骨など、祭祀的様相の遺物が出土した。古代の土師器・須恵器は破片資料が多く、55㎝×34㎝×15㎝のコンテナに4箱分採取された。口縁部及び底部の残存率の累積加算数を最小個体数とした場合、須恵器坏A74個体（底部集計）、須恵器坏Bは14個体（底部集計）、須恵器坏蓋6個体（摘み部集計）、須恵器壺蓋1個体、土師器坏4個体（底部集計）、土師器黒色土器坏10個体（口縁部集計）であった

[注3]。坏類は須恵器が圧倒的に多く、須恵器坏Ａの底部糸切りとヘラ切りの割合は13：10で糸切りが多い。土師器坏は全て底部ヘラ切りで、糸切りは認められない。なお、内面黒色土器坏は破片のため古墳時代のものと区別できず、まとめてカウントした。土師器甕類は11個体（口縁部集計）であるが、小破片のため古墳時代のものを含む。また、須恵器壺・甕類は口縁部の個体識別により最小個体数を出した。須恵器大甕９個体、須恵器短頸壺・甕19個体、須恵器四耳壺３個体である。

２　須恵器・土師器・灰釉陶器

須恵器（図版23～図版25―433～503）

434～440・442～468は坏Ａ、469～480は坏Ｂ、441・481・482は坏蓋、483は壺蓋、484・493は短頸壺、433・485～490は長頸壺、491は瓶類、492は高坏、494は横瓶、495～498は甕、499は四耳壺、500～503は大甕である。坏Ａは450～453が底部ヘラ切り、454～468が糸切り、墨書土器はいずれも糸切りである。468は口縁端部が外面に屈曲した特異な形状である。473は高台部が摩耗している。479・480は口縁に１条の沈線が巡る。485・486は肩部に凸帯が巡る特異な形態である。499の四耳壺は口縁部の形態が特異な例である。491・492・500・501などは古墳Ⅳ期～古代Ⅰ期の特徴を示す。

黒色土器（図版25―504～516）

504は内面に稜を持ち口縁が外湾する古墳時代的な口縁形態を示すが、平底の底面は丁寧なヘラケズリであり、類例が見当たらない。505は口縁外面に浅い沈線が巡る。底面は全面静止ヘラケズリ、全面糸切り、中央部に糸切り痕を残し外周部のみ静止ヘラケズリするものがある。512～515は底面にヘラ記号「×」又は「－」が記されている。

土師器（図版25―517～521）

土師器の出土量は少なく、517は坏、518・519は椀である。いずれもⅢ期後半から古代Ⅳ期のものである。521は甕である。この時期の甕は溝から出土するもののみで、水田面、畦畔などからは出土せず、古墳時代以前とは異なった出土状況である。520は甑の把手で、古墳時代の遺物であろうか。

灰釉陶器（図版25―522・図版29―656）

522は碗、656は段皿である。いずれも破片であり、特別な出土状況は示さない。656は中世末から近世に埋没した溝より出土したもので、中世の遺物図版に掲載した。656の底部外面には僅かに墨痕が認められ、硯に転用されたものであろうか。

３　箆書土器・墨書土器・墨痕（図版23―433～449）

箆書土器１点・墨書土器12点が出土した。いずれも溝より出土した須恵器である。これらの多くはＢ２地区ＳＤ103より出土した。ＳＤ103出土遺物には表面に付着物が見られ、器面観察ができないものもあり、更に多くの墨書土器が含まれている可能性がある。433は壺の胴部に「大」と思われる文字が焼成前に刻まれたものである。墨書土器は坏が多く、434・435は底面に墨書が見られるが、文字が判読できない。441は坏蓋の表面に「几」が記されている。他の墨書土器は坏の胴部表面に記されたもので、「中」「大」などの文字が認められる。434・446～449の内面には墨痕が認められる。

第5節　中世・近世以降

1　概要

中世・近世の遺物はＡ２地区に集中している。中世から近世には、Ａ２地区が居住域、Ｂ地区からＥ地区は水田域である。Ｂ地区、Ｅ地区では当該時期の水田の存在は予想されるが、当該層位の調査を行っていないため、出土遺物が無い。図版26～28と図版29の内耳鍋が居住域のＡ２地区より出土したもので、図版29―649～668が水田域で出土したものである。

2　カワラケ・内耳鍋

カワラケ（図版26・図版27―523～621、図版29―649・650）

器形復元可能なものは、ほとんど図示した。色調が橙褐色のものと、これより白い灰白色の２種類に大別される。525・561・563・571・574～576・591・598・621などが灰白色のもので、全体に占める割合は少ない。黒色付着物が認められ灯明皿と推定されるもの（528・537・538・542・548・553・556・564・584・587・589・595・606・619）、穿孔があるもの（528・531・543・546・547・564・565・590・617）などが見られた。穿孔の多くは体部であるが、590のように底面に穿孔するものがある。528は内面より穿孔を行っているが、貫通していない。

Ａ２地区では遺構別の出土破片数を見ると、ＳＨ02・ＳＨ03・ＳＨ11、ＳＤ101、整地面Ⅰ～Ⅵに多く出土した（第１表）。Ａ２地区のカワラケの口縁部残存率累積加算数[注4]は33.3、底部残存率累積加算数は142.4である。底部残存率の累積加算数を最小個体数とした場合、Ａ２地区のカワラケは143個体以上存在したことになる。この内、灯明皿と推定されるものが、35個体ある。

内耳鍋（図版28―641～648、図版29―669～671）

水田域からも少数の内耳鍋の破片が出土するが、器形復元可能なものはＡ２地区のもののみである。Ａ２地区ではＳＨ02・ＳＨ03・ＳＨ11・ＳＨ14、ＳＫ02、整地面などから多く出土した（第１表）。Ａ２地区出土内耳鍋の口縁部残存率累積加算数が8.7、底部残存率累積加算数が7.9であるが、内耳部の破片が47点有り、１個体に２ヵ所の内耳とすると、最小個体数は24点となる。

3　陶磁器（図版27―622～640、図版29―651～668）

622～640は居住域であるＡ２地区より出土、649～668はＡ３地区～Ｄ地区の水田域より出土したものである。

Ａ２地区では中世・近世の陶磁器が87点出土した。いずれも破片であり、その内訳は以下の通りである。近世の伊万里が26点。16世紀末～17世紀の唐津の皿５点（638～640）、すり鉢４点（636・637）。香炉

第１表　Ａ２地区遺構別土器破片数

出土地点	ＳＨ01	ＳＨ02	ＳＨ03	ＳＨ06	ＳＨ09	ＳＨ11	ＳＨ12	ＳＨ14	ＳＨ18	ＳＨ19	ＳＨ20	ＳＨ21	ＳＨ23	ＳＨ25	ＳＨ26	ＳＨ27	ＳＫ02	ＳＫ03	ＳＫ36	ＳＫ51	ＳＫ80	ＳＫ99	ＳＴ101	ＳＤ101	整地面Ⅰ	整地面Ⅱ	整地面Ⅲ	整地面Ⅳ	整地面Ⅴ	整地面Ⅵ	その他整地面	中世面下	出土地不明	合計
内耳鍋破片数	33	98	80	11	2	46	3	35	21	1	7	15	6	1	1	5	28	4	4	2		1	10	25	258	21	111	89	122		231	72	46	1389
カワラケ破片数	11	44	33	4	2	29	1	14	7	1	14	9	4		1	1	2	4	1	1	1			30	79	20	37	78	78	48	54	16	27	651

2点（632）。青磁皿・碗11点（624～627）。古瀬戸では大窯天目茶碗、腰折皿（628）、瓶類など4点。16世紀～17世紀の瀬戸美濃大窯の志野丸皿、天目茶碗、丸ノミ折縁皿など15点（629～631）。近世の瀬戸美濃本業焼6点。白磁2点（622・623）。近世の肥前系陶器皿・碗8点などである。

水田域では、龍泉窯系蓮弁文碗（651・652）などの青磁、口禿の白磁皿、古瀬戸皿（653）、瀬戸美濃鉄釉碗、瀬戸美濃灰釉碗、瀬戸美濃天目（654）、瀬戸美濃大窯皿（657・658）、瀬戸美濃輪禿皿（659）、志野焼（655）、肥前系陶器碗（660）、伊万里（662）、山茶碗系こね鉢（665）、唐津すり鉢（667）、珠洲焼すり鉢（666・668）などが出土した。663・664は近世末から近代のものである。

註

1　石川条里遺跡では地表下2.5mから縄文時代前期初頭の遺物と遺構が検出された。松原遺跡では地表下2.4m～約4mで縄文時代後期、前期末葉から中期初頭、早期末葉から前期後葉の遺物と竪穴住居跡などが検出された。屋代遺跡群では地表下2.8m－5.2mで縄文時代前期後葉から晩期後葉の遺物と遺構が検出された。

2　箱清水式土器は壺形土器と甕形土器の器面調整が明瞭に区別されており、甕には櫛描波状文、網目籠状文が施文され、壺形土器には赤彩と櫛描工字文が見られる。箱清水式土器の器形、又はこれらの文様の一部を取り入れている土器を箱清水系土器と呼称した。

3　器種名は『(財) 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4　中央自動車道長野線坪藏文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編』による。須恵器坏Aは無高台の坏、須恵器坏Bは糟型の体部に高台を付したものである。黒色土器は器面に意図的に炭素を吸着させたものである。

4　残存率累積加算数とは口縁もしくは底部の残存率を合計した数値。例えば、口縁部が1／4残存したものが5片あった場合、残存率累積加算数は1.25となり、最小個体数は2個体と算定した。

第3章　石器・土製品・石製品・金属器

第1節　石　器

1　縄文時代・弥生時代の石器

縄文時代晩期では石鏃、石錐、削器、二次加工を有する剥片、楔形石器、打製石斧、敲石・磨石・凹石が出土した。弥生時代中期では石鏃、刃器、磨製石包丁、偏平片刃磨製石斧、太形蛤刃磨製石斧、敲石・磨石などが出土した。なお、個々の石器については、石器観察表を参照していただきたい。

石鏃（図版30―1～26）

27点出土した。有茎のものが22点、無茎のものが4点、基部が欠損しており分類不能なもの1点である。1は無茎のように図示しているが、有茎石鏃の返し部が欠損しているものと判断した。石材は珪質頁岩10点、黒曜石7点、チャート5点、安山岩1点、不明4点である。D2・D3地区27-1層、A4地区SQ01出土のものは確実に縄文時代晩期であり、D3地区SD11出土のものは縄文時代晩期の可能性が高い。他は、縄文時代晩期から弥生時代中期のものである。なお、観察表計測値の長さは茎部を除いた、鏃身部の寸法である。

石錐（図版30―27・28）

2点出土した。27は石材不明、28は珪質頁岩である。いずれも縄文時代晩期佐野Ⅱ式土器に伴伴した。

削器（図版31―36）

刃部に連続的な調整加工が見られる小形のものを削器とした。1点出土した。珪質頁岩製で、縄文時代晩期佐野Ⅱ式土器に伴伴した。

刃器（図版32～図版34―42～56）

23点出土した。安山岩・輝石安山岩の剥片の鋭利な縁辺をそのまま刃部とする大形の石器を刃器とした。刃部には微細な剥離痕や光沢痕が認められるものもある。実測図のスクリーントーンは光沢痕を示す。但し、42は腹面に研磨痕が認められ、他の刃器の光沢痕とは異なった使用痕である。刃縁を水平にした時に全体の形状が横長のものをⅠ類、縦長のものをⅡ類とした。Ⅰ類が多いが、平面形状に規格性はなく、刃部以外に調整加工が有るものと無いもの、二側縁に抉りが見られるものなど様々な形状を示す。なお、計測値は刃部を水平に置いた時の縦の寸法を長さ、横の寸法を幅とした。石材は安山岩5点、輝石安山岩18点で、安山岩を用いたものは縄文時代晩期土器に伴なう。輝石安山岩を用いた刃器は、大半が弥生中期（弥生Ⅱ期）の土器と供伴しており、輝石安山岩を用いた刃器が弥生Ⅱ期に限定された石器と考えたい。図版に示したものでは、42・44は縄文時代晩期、他は弥生時代中期（弥生Ⅱ期）のものである。

二次加工を有する剥片（図版31―29～35）

調整加工が認められ、定型的な石器でないものを「二次加工を有する剥片」として一括した。石器観察表ではre.Flと表記した。14点出土した。石材はチャート7点、珪質頁岩3点、黒曜石2点、不明2点である。29は尖端部を作り出しており、石鏃又は尖頭器の未製品であろう。30・35は両極打法による剥離が

認められ、楔形石器とされるものである。34は側縁部を切断している。出土層位より、29は弥生時代中期の可能性があるが、30～35は確実に縄文時代晩期の石器である。

打製石斧（図版35―57～62）

6点出土した。石材はいずれも黒色で、板状に剥離するものがある。すべて頁岩としているが、黒色の安山岩と思われるものもあり、石材の断定は保留する。59～61は縄文晩期水Ⅱ式土器に供伴し、57・58・62はD2地区27-1層上面より出土したもので、図版3―59、図版13―197の栗林式古段階[注1]の土器に供伴するものと思われる。川田条里遺跡の発掘調査では、D3地区27-1層の佐野Ⅱ式土器の散布地には打製石斧が供伴しないこと、栗林式中段階以降の土器に打製石斧が供伴しないことが確認された。縄文時代晩期以降の打製石斧の消長は、水Ⅱ式前後の短期間に限って見られる石器であると推定できる。打製石斧が出土したD2地区27-1層上面では磨製石包丁（64）が出土しており、耨作開始に関わる石器として、水田開発との文脈の中で打製石斧を検討する必要がある。

長野県北部地域では、縄文時代後期に石器組成の重要な位置を占めていた打製石斧が、縄文時代晩期にはほとんど見られなくなる現象が指摘されている[注3]。近接する縄文晩期の集落跡である宮崎遺跡では打製石斧がほとんど出土していない。縄文時代晩期終末から弥生時代にかけての打製石斧の出現は、水田開発との関わりを想定させる。また、更埴市屋代清水遺跡[注3]、更埴条里遺跡・屋代遺跡群[注4]などで出土した打製石斧も、本遺跡と同じ文脈の中で評価されるものと考えている。特に、更埴条里遺跡の例は、集落域以外で打製石斧のみが多出しており、本遺跡の出土状況と共通する。更埴条里遺跡は一部未報告であり、今後の資料の蓄積を待って、検討を要する問題である。

磨製石包丁（図版35―63～66）

4点出土した。65は二つに割れていたものが接合したものであり、66は完形で出土した。石材は63～65が安山岩、66が頁岩である。安山岩としたものは全て輝石を含んでおり、刃器に主体的に用いられる石材に近い。頁岩は黒色で、打製石斧の石材に近い。

磨製石斧（図版36―67～73）

7点出土した。石材はいずれも輝緑岩あるいは閃緑岩とされるものである。67は偏平片刃石斧で、敲打痕を多く残し、刃部には使用痕跡と思われる微細な剥離も認められる完形品である。器面全体の細かな窪みにベンガラと思われる赤色顔料が僅かに認められ、全面に赤色顔料が塗布されていた可能性があり、勾玉などと共に大畦畔内より出土した。68～73は太形蛤刃石斧ですべて欠損品である。73は欠損面に摩耗痕が認められ、敲打具として二次転用されたものであろう。71は赤色顔料が付着し、研磨後の剥離が著しい。

敲石・磨石・凹石（図版37―80～91）

敲石12点、磨石1点、凹石5点が出土した。80～87は敲石、88～91は凹石である。これらの石器は弥生時代中期から古墳時代前期の土器と供伴する場合が多い。80～84の棒状礫の端部に敲打面がある敲石は、近接する春山B遺跡からも多く出土する[注5]。これらは安山岩製である。87はチャート製で全面に加工痕が認められ、弥生時代中期の土器と供伴する。

この他に、スタンプ形石器と呼べるものが1点出土した。棒状礫を分割し、分割面に敲打痕が見られる石器であるが、縄文時代早期のものに比して細身である。

その他の石器（図版31―41、図版36―74）

41は石英の結晶で、端部の稜に敲打痕が認められる。水Ⅱ式土器に伴って出土したものである。74はチャートの円礫で、全面に細かな線条痕が顕著に認められる。土器製作のミガキ調整に用いられたものであろうか。E2地区古墳時代の水田層（7b層）より出土した。

石核・原石（図版31―37～40）

石核は10点出土した。多くはD３地区出土の佐野Ⅱ式土器に伴うものである。黒曜石４点、チャート３点、硅質頁岩２点、不明１点である。

D２地区とE２地区第４水田大畦畔上に磨製石斧の石材である輝緑岩の原石が出土した。いずれも弥生時代後期以降のものであり、磨製石斧製作に関わる遺物とは言えない。

剥片

調査区全体で255点の剥片が出土した。D３地区27-1層の縄文時代晩期遺物集中区に114点が出土した。これに対し、A地区の晩期の遺物集中区SQ01では11点と少ない。調査区別の出土点数を比べると、A２地区３点、A３・A４地区47点、B２地区７点、C地区15点、D地区170点、E地区13点となり、縄文時代の遺物が検出されたA３・A４地区とD地区に剥片が集中する。剥片は、概ね縄文時代の遺物と判断できる。

2　古墳時代以降の石器

古墳時代以降用いられた石器では、軽石33点、砥石１点、石鉢３点、石臼21点が出土した。出土層位から、軽石は弥生時代から古墳時代、砥石は古墳時代前期のものと推定される。石鉢、石臼は中世以降の遺物である。なお、軽石は利器とは考え難く、石製品として分類すべきかもしれないが、用途不明であり、特別な加工も認められないため、石器の中で報告する。

軽石（図版36―75～79）

33点出土した。全てD地区、E地区より出土しており、出土層位から判断すると弥生時代と古墳時代のものが中心となる。特に方形周溝墓が検出されたD２地区の17層直上より出土しているものが多く、水田域と微高地の境界部から微高地上に出土していると考えられるが、詳細な出土位置が不明確であるため明言できない。また、E地区は弥生時代後期には水田域と集落域である春山B遺跡との境界域に当たる。

形状は、卵形の整ったものと不整形なものとがある。欠損状況の判定に苦慮する資料もあり、石器観察表に欠損としてあるものも、人為的に破損したものかどうかは判断できない。欠損品を含めて、長さ2.3㎝～7.4㎝、幅1.5㎝～6.3㎝である。

砥石

D地区SM01の周溝内より、有溝砥石の小破片が１点出土した。

石鉢・石臼（図版37・図版38―92～109）

石鉢（92～96）が５点、粉挽臼（97～107）が21点、茶臼（108・109）が3点出土した。92は片口部周辺に黒色付着物が顕著に見られる。93は片口以外の口縁部が欠損している。95・96は底面に孔があく。94～96は水田域の溝内の構造材として用いられたものと思われる。97～103は上臼で、104～107は下臼であり、機能面の刻み目のみを示したものがある。97は上臼上面の縁辺部に文様を刻む特異な例である。101は割れ面が摩耗（スクリーントーン部）する。104は刻み目がほとんど見られなくなるまで摩耗している。109の上面に黒色付着物（スクリーントーン部）が見られる。粉挽臼・茶臼はすべてA２地区より出土したもので、石列などに転用されたものが多い。

第2節　土製品・石製品・金属器

1　土製品・石製品・ガラス玉

土製品（図版40―35～44）

35・36・42・43は土錘、37・38は紡錘車、39はミニチュア土器、40・41は鳥形土製品、44は土偶である。出土層位と遺構の時期から、37・40～42は中世・近世、36・43は古墳時代、35・39は弥生時代終末から古墳時代初頭、38は弥生時代後期、44は弥生時代中期の遺物である。35・39は管玉、勾玉、磨製石斧などと共に大畦畔内より出土したものである。40は高さ3.5cm、底面が平坦で、嘴を作り出しており、鳥をかたどったものである。底面に直径4mm程度の孔があり、この孔に棒を刺して立てたとものと推定される。41も同様に鳥をかたどったもので、底面は平坦でなく、幅2mm、長さ10mmの長方形の孔があり、尾にあたる部分にも同規模の孔がある。底部の孔は中央に段差が有り、2本の細い板を差し込んでいる。それぞれの孔に板状のものを刺して、鳥の足と尾を表現したと推定される。A4地区第3水田自然流路からは中世の土器と共に平安時代の須恵器・土師器が出土しており、41は中世以前のものであることは明確で、平安時代まで溯る可能性もある。なお、管見に触れる限り孔を持つ鳥形土製品の類例は近隣に出土例が無い。山梨県明野村課訪原遺跡、同村寺前遺跡より中世のものと思われる鳥形土製品が出土している。大きさはほぼ同じであるが、明野村の資料は底面が窪んでおり、川田条里遺跡のものと形態は異なる(注6)。44は土偶の足と思われ、沈線による文様が描かれている。

石製品・ガラス玉（図版40―45～52）

45～47はガラス玉で、直径3.2mm～3.8mm、厚さ2.1mm～2.3mmである。D地区の方形周溝墓主体部より出土したものである。48・49は管玉である。48は滑石で直径3.6mmである。49は碧玉で長さ32.2mm、直径10.3mmである。50～52は勾玉である。50は灰色で石材不明、51はヒスイ、52は黒色で石材不明である。48～50・52は畦畔内より出土したもので、いずれも多量の杭を伴う畦畔であり、畦畔の構造が共通する。51・52が弥生時代後期に埋没した水田跡、45～50は弥生時代終末から古墳時代初頭頃に埋没した水田跡と方形周溝墓より出土したものである。

2　金属器

1～3は鉄釘、4は楔状鉄製品、5～7は用途不明の鉄製品である。5はリング状、6は板状の先端が曲がり、7は針状の先端が曲がる鉄製品である。8の簪、9～11のキセルは銅製品である。12は密教法具の鈴で、真鍮製であろうか。最大径6.2cm、高さ6.6cmである。13は蹄鉄で、孔に釘が1本刺さっている（PL12）。1～11は中世から近世の遺構内及び包含層より出土したものである。12はトレンチ調査の廃土中より採取したもので、出土状況、供伴遺物の有無は不明である。

銭貨は25点出土しており、整理番号15・16、整理番号24・25はそれぞれ2枚ずつ接着して出土した。その他に特別な出土状況を示したものはない（第2表）。

53は珠文鏡で、E2地区第2水田の道路状遺構（SC38）より出土した。両径5.6cm、鏡面が僅かに湾曲する。鈕が僅かに欠けているのみで、完形品である。内区には18個の珠文と、細隆起線による櫛歯文が巡る。珠文の間隔は均等でなく、鈕座部分に鋳型の傷と思われる刀形の突起が認められる。また、鈕座部の右側で細隆起線が途切れるが、ここは錆が広がっていた所で、鋳型の傷であったかどうかは疑問である。外区は鋸歯文が巡っており、実測図左側で鋸歯文が途切れる。鋸歯文の三角の窪みが欠けているもの

が２ヵ所ある。内区に珠文と櫛歯文、外区に鋸歯文を配する鏡式で、長野市川柳将軍塚古墳、飯田市座光寺地区内より出土した珠文鏡と共通する。川柳将軍塚古墳のものは直径7.3cmであり、座光寺出土のものは面径が不明である。長野県内で珠文鏡は17面出土しており、面径が７cm以上のものが多い[注7]。この中で長野市篠ノ井遺跡群ＳＭ7016（木棺墓）より出土した珠文鏡は面径4.4cm、内区に珠文と櫛歯文があり、外区に文様はない。篠ノ井遺跡群出土例は小形仿製鏡とされており、本遺跡のものもこれに類するものであろう。川柳将軍塚古墳、篠ノ井遺跡群の例は古墳時代前期に比定されており、本遺跡の珠文鏡の時期を暗示している。53が出土したＥ２地区第２水田（ＳＣ38）の埋没時期は明確でないが、Ｅ２地区第２水田がＥ１地区第１水田と同じ面である可能性があり、古墳Ⅱ期には埋没していたと推定される。出土層位からも古墳時代前期の鏡であると判断される。

第２表　出土銭貨一覧表

図版番号	地区名	出土地点	銭貨名	外径(cm)	厚さ(cm)	初鋳年代	備　考	整理番号
図版40-14	不明	不明	開元通寶	2.40	0.14	621年		28
図版40-15	C	ＳＤ03	嘉祐通寶	2.40	0.13	1056年	真書体	36
図版40-16	Ａ２	不明	照寧元寶	2.38	0.12	1068年	篆書体	23
図版40-17	C	ＳＤ03	元豊通寶	2.49	0.13	1078年	行書体	37
図版40-18	C	不明	元豊通寶	2.43	0.14	1078年	行書体	38
図版40-19	Ｄ３	ＳＤ03	元豊通寶	2.40	0.11	1078年	行書体	39
図版40-20	Ａ２	整地面下	元祐通寶	2.49	0.12	1086年	篆書体	17
図版40-21	不明	不明	元祐通寶	2.42	0.11	1086年	篆書体	27
図版40-22	Ａ２	ＳＨ02	紹聖元寶	2.37	0.14	1094年	行書体	19
図版40-23	C	ＳＤ03	紹聖元寶	2.40	0.14	1086年		31
図版40-24	Ａ２	出土地不明	聖宋元寶	2.46	0.11	1101年	行書体	18
図版40-25	Ａ３	道路下（水田面）	洪武通寶	2.28	0.17	1368年	背面右側「一銭」	30
図版40-26	Ａ２	整地面下	永樂通寶		0.10	1408年		15
図版40-27	C	13-1層	永樂通寶(模鋳銭)	2.48	0.14	1408年		25
図版40-28	Ａ２	ＳＤ101上面	寛永通寶(波銭)	2.78	0.10	1851年	真鍮銭、４文銭	20
図版40-29	Ａ３西	第１調査面	寛永通寶	2.20	0.11	1740年	背面上部「足」	21
図版40-30	Ａ３西	第１調査面	寛永通寶(波銭)		0.13	1851年	真鍮銭、４文銭	22
図版40-31	C	13-1層	寛永通寶	2.52	0.11	1668年	背面上部「文」	33
図版40-32	C	13-1層	寛永通寶	2.43	0.12	1636年		34
図版40-33	C	13-1層	寛永通寶	2.52	0.11	1668年	背面上部「文」	35
図版40-34	C	13-1層	雁首銭(模鋳銭)	2.06	0.21	近世		32
	Ａ２	整地面下	不明(模鋳銭)		0.08			16
	C	13-1層	永樂通寶(模鋳銭)	2.37	0.15	1408年		24
	C	13-1層	不明(模鋳銭)		0.12			26
	Ａ１	テラス１整地土中	半銭	2.19	0.11	明治16年		29

註

1　寺島孝典　1999　「長野盆地南部の様相」『長野県の弥生土器編年 発表要旨』長野県考古学会弥生部会

2　鶴田典昭　1999　「村東山手遺跡の石器群の検討」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書８　長野市内その６　村東山手遺跡』長野県埋蔵文化財センター他

3　佐藤信之 他　1992 『屋代清水遺跡』長野県教育委員会・更埴市教育委員会

4　上信越自動車道建設に伴ない、長野県埋蔵文化財センターが発掘調査をおこない、弥生時代の遺構・遺物は『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25　更埴市内その４　更埴条里遺跡・屋代遺跡群－弥生・古墳時代編－』1998に報告されており、縄文時代の遺構・遺物は平成12年３月に報告書刊行を予定している。屋代遺跡群③ａ区では川田条里遺跡Ａ地区ＳＱ01とほぼ同時期の遺物集中区が確認され、打製石斧が出土している（前述の報告書に掲載）。また、更埴条里遺跡では弥生時代中期の水路が検出される面の下層に打製石斧が散布しており、川田条里遺跡Ｄ２地区27-1層上面の出土状況に類似する。

5　弥生時代中期から後期の集落遺跡。『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書11　―長野市内その９－　春山遺跡・春山Ｂ遺跡』長野県埋蔵文化財センター　1999

6　明野村教育委員会の佐野隆氏のご教示による。

7　岩崎卓也　1988　「４古墳時代の遺品(5)青銅鏡」『長野県史 考古資料編　遺構・遺物』、西山克己　1997　「第４章第６節　金属製品について」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書　16　―長野市内その４－　篠ノ井遺跡群　成果と課題』

第4章　木製品

第1節　木製品の概要

1　木製品の分類

川田条里遺跡の木製遺物は、大半が水田跡より出土した。これらは畦畔の芯材として横水や杭に用いられており、大形の加工材が多数含まれている。これらの加工材には建築部材を転用したと考えられるものが見られ、農具などの小形の木製品にも増して多数の建築部材が出土したことが本遺跡の特徴といえる。しかしながら、建築部材を含む大形の加工材は杭などへの転用が多いため、二次的な加工や欠損に加え変形で当初の形態が不明なもの、遺存状態が悪く細部の観察が困難なものが多い。

本遺跡出土の木製遺物は、畦畔などの芯材に用いられる前に何らかの用途（第一次用途）を持った木製品と、第一次用途がなく、そのまま畦畔の芯材や杭に用いられたものに大別される。この大別は概念上では可能ではあるが、実際の木製遺物を分類する際は、その基準が極めて曖昧なものとなる。すなわち、第一次用途で加工痕跡を残さないもの、加工部分が欠損しているもの、第一次用途の加工痕が杭状のもので加工痕が第一次用途によるものなのか、芯材とするための加工であるのか判断が出来ないものなどは明確に分類できない。便宜的に、加工痕がないもの、加工痕が杭状の先端作出に限定されるものを第一次用途のない「木材」とし、第一次用途の加工が明瞭なものを「木製品」として分類した。第一次用途を有する木製品については、第一次用途の形態における分類を行ない、それ以外のものは本章では対象外とする。

第一次用途を有する木製品の分類は、石川条里遺跡および榎田遺跡の発掘調査報告書[註1]を参考とし、下記のとおりとした。

(1)農具	鍬・鋤・抉（柄振）・馬鍬・犂・鎌・田下駄（大足）・臼・杵・横槌・編具・田舟など
(2)武具・祭祀具	弓・矢・盾、斎串・馬形・その他
(3)服飾具	下駄・櫛
(4)容器	刳物・挽物・曲物
(5)用途不明木製品	有頭状木製品・弓状木製品・棒状木製品および加工材・板状木製品（含む加工材）・有孔棒状，有孔板状木製品（含む加工材）・その他（樹皮製品）
(6)建築部材	縦材（竪材）……柱・方立・小屋組の垂直材（屋根材には含めない）など
	横架材……梁・桁・台輪・壁板・床板・榻・蹴放（閾）・小屋組の水平材（屋根には含めない）など
	屋根材……垂木・屋根板および葺材・扶首・屋根木舞・破風板・屋根飾りなど
	付属材……梯子・眼柱などの構造材とは区別されるもの
	その他

なお、図版は以下の器種分類別に配置し、括弧内に出土地点を示した。このため、所属時期別の順序に

は並べていない。また、木製品の時期は、出土層位又は出土遺構に伴出する土器から判断される時期を記した。木製品の大半は畦畔の芯材や杭列などに転用されたもので、遺構の時期がそのまま木製品の製作・使用時期を示すとは限らない。第2節に示した木製品の時期は、厳密には出土した遺構の時期であり、そこより出土した木製品の製作・使用時期はさらに古くなる場合があることを付記しておきたい。

2　木製品の概要と出土状況

農具では鍬16点、鋤4点、抉2点、馬鍬2点、田下駄18点、横槌3点、網具1点などが出土した。武具・祭祀具では弓3点、矢1点、盾1点、馬形1点、斎串1点などが出土した。服飾具では下駄7点、櫛1点が出土した。容器では刳物5点、挽物7点、曲物20点などが出土した。建築部材では柱を中心とした縦材が16点、梁・桁・棟木・台輪・梠・蹴放（閾）などの横架材が76点、垂木などの屋根材が7点、梯子などの付属材が4点出土した。この他に、有頭状木製品、弓状木製品、棒状木製品、板状木製品、有孔棒、有孔板などの用途不明の木製品および部材が137点出土した。用途不明な木製品の中には建築部材と思われるものが含まれており、木製品と判断した373点の内、三分の一以上を建築部材が占めるものと思われる。建築部材の多さが本遺跡の木製品の特徴といえる。

出土した木製品を時期別にまとめたものが、第3表のとおりである。弥生時代後期～古墳時代の木製品が全体の67%を占める。なお、弥生時代中期の建築部材の4点は、D地区SD10の堰に打ち込まれていた矢板であり、建築部材である可能性を指摘するに留めたい。

本遺跡では木製遺物が約6000点出土しており、そのうち373点を木製品と認識し本章で報告した。しかしながら、棒状木製品、板状木製品などについては、整理不十分のため十分な観察が行えず木製品と認定できなかったものもある。第一次用途を持たない「木材」を含め、木製遺物の全容は第3分冊第12章を参照して頂きたい。

前述のとおり、本遺跡出土の木製品は水田域より出土したものである。その大半は畦畔と溝より出土したものである。

第3表　木製品の時期別点数

時期	農具	武具・祭祀具	服飾具	編具	容器	用途不明木製品	建築部材	合計
近世以降	1		3		2		3	9
中世・近世			5		12	7		24
奈良・平安	7	2			14	7	2	32
古墳中期～奈良	16			1	10	14	9	50
古墳中期～後期	17	2			7	23	23	72
古墳前期	10	1			2	26	36	75
弥生後期～古墳前期	3	3			3	17	21	47
弥生中期～後期	2	1			1	7	2	13
弥生中期	1					27	4	32
不明	2				1	9	3	15
合計	59	9	8	1	52	137	103	369

第2節　農　具

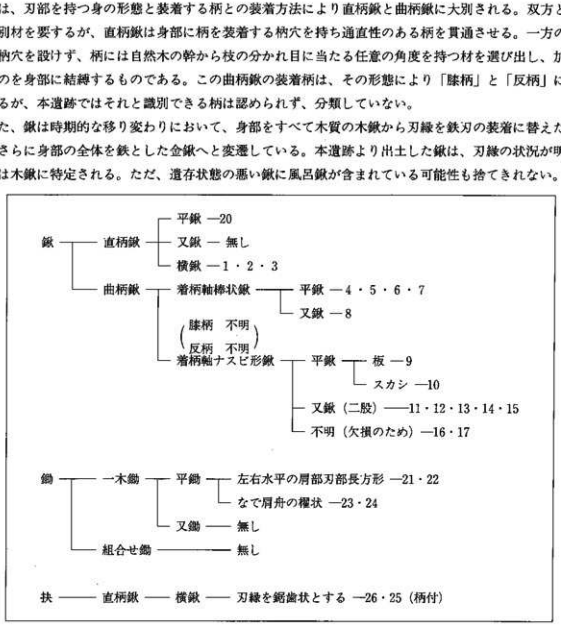
農作業が器械化される以前、農具・農耕具の主流は、鍬（クワ）、鋤（スキ）、扶（エブリ）、鎌、田下駄（タゲタ）、杵（キネ）、横槌に、牛馬を利用した馬鍬（マグワ）や犂（カラスキ）などであった。それに編具が加わる。川田条里遺跡では鍬、鋤、扶、田下駄、横槌、臼、馬鍬、編具が出土した。

当時の農事暦がどの様なもので、農具・農耕具との関係がいかなるものであったのか、推察するに足る資料に乏しい。これまでに、発掘調査された水田遺構や農具・農耕具もまた、今日伝えられる史料等の農作業形態を参考としている[註2]。したがって、本遺跡における農耕具の名称および農作業形態もまたこれらを参考とし、第1図「農耕具（鍬・鋤・扶）の分類」の様に便宜上先学の形態分類を使用する。

1　鍬（図版42～図版45）

鍬は、刃部を持つ身の形態と装着する柄との装着方法により直柄鍬と曲柄鍬に大別される。双方とも柄には別材を要するが、直柄鍬は身部に柄を装着する枘穴を持ち通直性のある柄を貫通させる。一方の曲柄鍬は枘穴を設けず、柄には自然木の幹から枝の分かれ目に当たる任意の角度を持つ材を選び出し、加工したものを身部に結縛するものである。この曲柄鍬の装着柄は、その形態により「膝柄」と「反柄」に分類されるが、本遺跡ではそれと識別できる柄は認められず、分類していない。

また、鍬は時期的な移り変わりにおいて、身部をすべて木質の木鍬から刃縁を鉄刃の装着に替えた風呂鍬、さらに身部の全体を鉄とした金鍬へと変遷している。本遺跡より出土した鍬は、刃縁の状況が明瞭なものは木鍬に特定される。ただ、遺存状態の悪い鍬に風呂鍬が含まれている可能性も捨てきれない。含ま



第1図　農耕具（鍬・鋤・扶）の分類

れていたとしても稀な存在であることにはかわらず、主体は木鍬である。

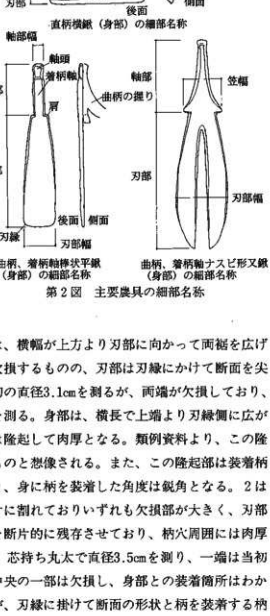
(1) 直柄鍬

直柄鍬は、身の形状より平鍬、又鍬、横鍬に細分される。「直柄平鍬」は、20の1点が出土し、「直柄横鍬」は、1・2・3の3点が該当する。なお、「直柄又鍬」は出土していない。

直柄平鍬（20）

20は身部のみで、柄は出土しておらず、身部も半分以上が欠損しており原形を留めていない。身部は縦長であることがわかるが、その形状の詳細は不明瞭である。柄の装着する枘穴周囲に肉厚となる隆起は見られず、両面とも平坦なままである。

時期は、古墳時代後期～奈良時代で、樹種はケヤキである。



第2図　主要農具の細部名称

直柄横鍬（1・2・3）

1は身部と柄が装着した状態で出土した。身部（1a）は、横幅が上方より刃部に向かって両裾を広げた形状にあり、柄との装着箇所の途中より上を覆う部分を欠損するものの、刃部は刃縁にかけて断面を尖らせる形状は読み取れる。柄（1b）は、芯持ち丸太で当初の直径3.1cmを測るが、両端が欠損しており、身部との装着箇所を留める程度である。その全長は約14cmを測る。身部は、横長で上端より刃縁側に広がる台形の形状が想定される。柄の装着する身部の枘穴周囲は隆起して肉厚となる。類例資料より、この隆起部は逆撥形に上の方に開き、欠損部分は半円形であったものと想像される。また、この隆起部は装着柄との関係より柄の持ち手の反対側（外部）に造り出しており、身に柄を装着した角度は鋭角となる。2は身部と柄が近接して出土した。遺存状態が悪く、身部は三片に割れておりいずれも欠損部が大きく、刃部は一片のみしか留めていない。ただ、柄を装着する枘穴部を断片的に残存させており、枘穴周囲には肉厚とする隆起は見られず、両面とも平坦なままである。柄は、芯持ち丸太で直径3.5cmを測り、一端は当初の切断加工を残し全長64.7cmを測るが、もう一端部および中央の一部は欠損し、身部との装着箇所はわからない遺存状態にある。3は、身の端部の欠損が著だしいが、刃縁に掛けて断面の形状と柄を装着する枘穴があく位置より、直柄横鍬として判断したものである。横長の身部の両端は欠損しているものの柄を装着する枘穴の位置からしてほぼ原形を留めているものと推定される。柄の装着する枘穴周囲は、2と同様に肉厚とする隆起は見られず、両面とも平坦なままである。

時期は、1・2が古墳時代中期～後期、3は古墳時代後期～奈良時代である。樹種は1aがクリ、1bがスイカズラ科タニウツギ属、2aがクヌギ節、2bがヌルデ、3が不明である。

(2) 曲柄鍬

曲柄鍬は、着柄軸の軸部全体の形状により着柄軸棒状鍬と着柄軸ナスビ形鍬に分類される。着柄軸棒状鍬はさらに、身の形状により平鍬（4～7）と又鍬（8）に分類される。着柄軸ナスビ形鍬はさらに平鍬（9・10）と又鍬（11～15）に分類される。また、平鍬は板状のもの（9）と中央に透かしを持つもの（10）とに分けられる。この他に細分ができないものがある（16～18）。

なお、曲柄鍬に装着する柄には、膝柄と反柄があるが本遺跡においては農具の柄は単品として出土しており、身部との装着関係を対応できるものはない。

曲柄着柄軸棒状平鍬（4・5・6・7）

4点出土した。4は身部のみで、着柄軸の軸部側から刃部側にかけて肩部が両側から直角に折れ曲がるため、はっきりとした区分がなされる形態である。刃部は肩両端より刃縁にかけて広がり、刃縁部両端隅でやや丸くなる。使用時の摩滅であるかはわからない。着柄軸の軸頭にはやや丸みを持たせ、段を設けている。身部はほぼ完全な形状を留めているものと思われる。6は身部の内、刃部のみで、軸部は全体的に欠損しており不明である。ただ、刃部の遺存状態より、着柄軸の軸部の接続する付け根と着柄軸から刃部側にかけて肩部が両側から直角に折れ曲がるため、4に類似するものと思われる。軸部は欠損する。5は着柄軸が欠損しており、軸頭の状況が不明のためその全容は明らかでない。刃部側の肩が、軸部と刃部の境から裾が広がり刃部本体に繋がる。刃縁は、一端隅が欠損するもののその形態は明らかである。7は身部のみの出土で、欠損部が大きく、破片を接合することで辛うじて刃部の形状が読み取れるが、軸部は欠損している。刃部側に残される肩は軸部と刃部の境から裾を広げており、5と同様の形態にある。この刃部は出土した着柄軸棒状平鍬の中では一番面積を持っている。

時期は、5が弥生時代後期～古墳時代前期、4・6が古墳時代前期、7が古墳時代中期～後期である。樹種は4がクリ、5がクヌギ、6がクヌギ節、7は不明である。

曲柄着柄軸棒状又鍬（8）

1点出土した。8は刃縁側の端部と二股に分かれる片側が接合部より欠損しているため、身部の半分以上は留めていないことになる。この欠損は軸部側にもおよぶものの、辛うじて着柄棒状型であることが理解できる。軸部と刃部の境は肩部の両端から直角に折れ曲がる。

時期は古墳時代前期～中期、樹種はアサダである。

曲柄着柄軸ナスビ形平鍬（9・10）

2点出土した。9は、着柄軸より縦に半分、刃縁側もまた欠落しており、その詳細は不明といわざるを得ない。しかし、ナスビ形の着柄軸が認められ、その遺存状態より透かしを持たない板状の着柄軸ナスビ形平鍬と思われる。10は、軸部の笠を残した上部と、その笠の一端側から刃部に掛けて、さらに刃縁の一部が欠損する遺存状態にある。刃部の内部を刳抜く透かしはその形状を留める着柄軸ナスビ形平鍬と認めた。この身部に装着する曲柄は出土していない。なお、本木製品の軸部については着柄軸から笠にかけて両端部に段を持つため上下に区分することが可能であり、着柄軸に限り見れば着柄軸棒状の鍬に該当する。しかし、身部を軸部と刃部に大別した場合、着柄軸から笠までは軸部にあたるためここでは「着柄軸ナスビ形平鍬」に属するものと解釈した。

時期は、どちらも古墳時代中期～後期で、樹種は10がクヌギ、9は不明である。

曲柄着柄軸ナスビ形又鍬（11～15）

5点出土した。11は、二股に分かれた刃部の一端が先端側から、軸部の着柄軸が笠状に広がり尖る一端部が欠損するものの、左右対称であるため身部全体の形態復元は充分に可能な状態にある。刃縁まで残存する刃部は、軸部境より刃縁にかけて削り込んでいる。着柄軸の軸頭は、上下の変化はないが、左右に若干の膨らみを持たせており区別は容易である。12は、軸部の笠状の広がる左右の裾の尖りは削られ、着柄軸はこの笠の途中から軸頭まで欠損している。また、刃部は二股に分かれた刃部の一端が付け根付近より、もう一端は刃縁の上部より欠損する。13は、二股に分かれる刃部の片側のみで、軸部以上は欠損しておりその詳細は明らかでない。刃縁はその先端より外側にかけて削られる。14は、遺存状態が極めて悪い。軸部は、着柄軸の笠状の一部を留めるのみで、刃部もまた二股に分かれる片側がなく、残存する片側

も刃縁含めた内部より欠損しておりその詳細は明らかでない。15の遺存状態は極めて悪い。軸部の笠より上部の着柄軸と縦に半分は残存せず、一端に残される刃部にしても刃縁は残存せず、残された刃部にしても幾つにも剝れていた。刃縁の形態は、13の先端より外側にかけて削るものと、11の様に軸部境より刃縁にかけて削り込んでいるものがある。

時期は、11・15が古墳時代前期、13・14が古墳時代中期～後期、12が古墳時代中期～平安時代である。樹種は、12・13・14がクヌギ、11・15はアサダである。

(3)　細分不可能なもの（16～19）

遺存状態により特定できる範囲が限られる木製品がある。18は曲柄鍬まで、16と17は着柄軸ナスビ形鍬までは特定できるが、それ以上の分類はかなわなかった。なお、19は農具の身部と推定されるがその詳細はわからない。

時期は、18が弥生時代後期～古墳時代前期、16・17・19が古墳時代中期～後期である。樹種は16・17がクヌギ（節）、19が不明である。

2　鋤（図版46）

「両手で柄を支え、刃先の付いた床を踏んで田畑を耕起するのが踏鋤」とする。「床」とは、刃部と柄の境から左右に広がる刃部上端のことで、この床があるものが「踏鋤」となる。

鋤は、一木鋤と組合せ鋤に分類されるが、組合せ鋤は出土していない。一木鋤は、把手から刃縁まで途切れることがなく、柄と刃部の部位に大別される。一木鋤はさらに平鋤と又鋤に分けられるが、又鋤は出土していない。「一木平鋤」は、床が左右水平の肩で刃部が長方形状であるA類（21・22）と、撫で肩のB類（23・24）がある。

(1)　一木平鋤A類（21・22）

2点出土した。21は、柄が途中から欠損している。先端の刃縁は丸みを持つ。身部には3箇所に穴があくが、鉄刃の装着との関係はわからない。22は、柄が刃部との境より欠損し、刃縁も欠損する。出土した当時の所見によれば、水平となる刃部の床の中央部には柄の折れた痕跡が認められているため、鋤と認定している。ただ、柄の付け根部分の厚みが他の鋤と比較してそれほどなく、若干の疑問が残される。

時期は、21が奈良時代～平安時代、22が古墳時代前期である。樹種は21がコナラ節、22がクヌギである。

(2)　一木平鋤B類（23・24）

2点出土した。23は柄が途中から欠損している。刃部は、柄との境から刃縁にかけて薄くなる。24は柄が欠損し、刃部は柄との境から刃縁にかけて薄くなる。

時期は、23が弥生時代後期、24が弥生時代後期～古墳時代前期である。樹種は、23がカエデ属、24がアサダである。

3　抉（柄振）（図版47－25・26）

抉は田面を平坦に均す道具である。本遺跡より出土した木製品が同形態であるからといって、同じ用途にあったかはわからない。抉を鍬の形態分類に照らせば、直柄横鍬に分類される。が、刃部は成（高さ）に対して幅が広く刃縁を鋸歯状とするため鍬とは用途が異なる農具といえる。26・25の2点が出土した。

26は刃部が欠損し、鋸歯状の刃が見られないが、遺存する成と比較した幅の広さと柄の装着する枘穴の周囲の隆起の形状より抉と断定した。柄と刃部との装着角度は、この隆起部側からその裏面に向い傾斜する。25の刃部（25ａ）には柄（25ｂ）が付属する。刃部は鋸歯状で、柄を装着する枘穴の隆起部は円形である。柄と刃部との装着角度は、平坦面より隆起部側に向い傾斜する。田面を平坦に均す用途に使用された道具とすれば、柄と刃部との装着角度は持ち手側に鈍角となる。このことを前提とし、25と26の刃部側に残る柄の装着角度を持つ枘穴を観察すると、26は刃部に柄を装着する枘穴周囲の隆起部は持ち手の外側に、25の刃部は内側に付くことになる。この木製農具が、鍬と同じく田畑を耕すあるいはそれに準ずる用途に使用された道具とすれば、柄は逆に付き刃部との装着角度は持ち手側に鋭角となる。が、双方の形態が異なることから見ても同じ用途とはいえない。

時期は、25が弥生時代後期～古墳時代前期、26は古墳時代後期である。樹種は25ａがクヌギ節、25ｂがヌルデ、26がクヌギである。

4　農具の柄（図版47・図版48－27～31・33）

27は一端部が丸みを持たせた加工がなされ、刃部との接合部は欠損する。全長は、60.4cmを測り、やや反りを持つ。鋤の柄であろうか。28は両端が欠損し、全長22.9cmを測る。29は両端が欠損し、全長14.7cmを測る。いずれも、反りはなく、曲柄鍬の装着柄には該当しない。30は一端部が丸みを持つ加工がなされる。刃部を付けるもう一端部は欠損しているが、刃部との境（付け根）かはわからない。全長は、48.0cmを測る。反りはない。31は両端が欠損し、全長39.8cmを測る。反りはなく、曲柄鍬の装着柄には該当しない。33は一端部が丸みを持つ加工がなされ、刃部を付けるもう一端部へ厚みを持ち、刃部との装着部分で段差を付ける特徴がある。幅は、元端部からほぼ同じ4.4cmを測り、変化が少ない。

鍬においては、直柄鍬は身部に柄を装着する枘穴を持ち通直性のある柄を貫通させる。が、曲柄鍬は枘穴を設けず、柄には自然木の幹から枝の分かれ目に当たる任意の角度を持つ材を選び出し加工し、身部に結縛するものである。また、この曲柄鍬の装着柄は、「膝柄」と「反柄」に分類されるが、いずれも曲柄の形態にあり、柄に通直性はない。これらより、全長が足りず判断できない28と29、曲柄鍬でないと断定されるものに、27・30・31・33がある。この内、27は鋤の柄の可能性があり、33は鍬や鋤でもない農具の可能性が持たれるのかもしれない。

時期は、33は弥生時代中期、31は弥生時代後期、28・30は古墳時代前期、27・29は古墳時代中期～後期である。樹種は27と29がケンポナシ属、28がチドリノキ、30がアサダ、31と33がクリである。

5　馬鍬（図版49・図版50－35～37・40）

35～37はＣ１地区の第４水田の下層（21層又は24層）より検近して出土したが、詳細な出土状況は不明である。曳綱により牛馬に繋ぎ止め曳かせる左右２本の引棒と馬鍬を操る把手とそれを結び付ける柄は出土していない。第４水田は８Ｃ前半には開始されており、馬鍬の時期は、古墳時代後期～８Ｃ前半と判断される。35は台木で、全長65.0cm、幅6.0cm、厚7.0cmを測り、端部が反る。歯の装着枘穴が５箇所に上下に貫通し、側面に３箇所（両端部の孔は台木先端部側が欠損する）の腕木状の部材を装着する枘穴が左右に貫通しさらに小孔が２箇所（１箇所は一部欠損する）にあく。両端部が欠損しておりその全容は明らかでないが、台木は長軸方向に左右対称の形態が一般的であることから推定すると、本材は一端が引棒の枘穴で、一端が馬鍬を操る人物が押さえつける機能を持つ部材の枘穴と思われ、両端ともその先を欠くことになる。この場合、台木両端は反り返り中央部が撓む舟形の形状を呈することになる。左右引棒の心々間の寸法は推定で47×２cm＝94cmを測り、一頭の牛馬が曳くために損傷のない幅といえる。また、台木の前

後に貫通する枘穴は、腕木状の部材を装着させるものと思われ、その間隔は枘穴の心々間で約26cmを測る。この枘穴の内側には小孔が2箇所にあき、これも左右対称に位置する。歯の装着枘穴の心々間で10.5～11.7cmを測る。なお、図版49には台木と歯の装着推定図を示した。36･37は馬鍬の歯と推定され、36は全長53.7cm、3.0cm、厚3.7cm、37は全長41.5cm、幅3.7cm、厚2.3cmを測る。この内、全長の短い37は状態が悪いため断定はできないが、両端が先細りし、一端側に枘穴らしき孔があるため馬鍬に係わる他の付属部材の可能性も残される。

40は、柾目の板材で、一端部は若干の欠損が見られる。また、片側の木端面より刳抜かれ鍵状に加工が施されている。その刳抜き先端部より先は木口まで片面にくぼみを持つ。端部の突起状の枘が欠損しているが、当地方の民具にこれと同型の馬鍬の引棒がある。

時期は35～37が古墳時代後期～奈良時代、40が近世である。樹種は35～37がクリ、40がブナ属である。

水田耕作に家畜を利用したことは、C1地区出土の馬鍬やC地区の8世紀末～9世紀初頭にあたる水田面の牛の足跡からも明らかとなった。この足跡が田起こし、砕土から代掻き、はたまた刈敷作業等のどの行程に該当させられるのかは特定できないが、牛馬に田を踏ませた事実は無視できないことになる。

なお、C1地区の平安面上からは、牛の足跡が認められているが、その下層の古墳時代後期の水田面からは認められていない。このため、馬鍬は出土したが、それに対応する牛馬耕跡は認められていない。

6　田下駄（大足）（図版51～53－41～58）

昭和初期頃の田下駄は、泥土に足を取られないために履く履物で、大足（オオアシ）は雪の中を沈まずに歩くカンジキの様に足に取り付けて使う道具とする。この時の大足の用途は、代掻き後に草や葉を肥料として泥土化した田に敷き込む刈敷（カリシキ：あるいは緑肥という）に使用したり、田面を平坦に均したりする道具で、単に履く田下駄とはその用途は異なり一般的には区別されている。本遺跡の出土品については、このような用途の違いは区別できず、「田下駄」の名称を用い、形態による以下の様な分類を便宜上行った。なお、図版はすべて形態の比較を考慮し長軸方向に組んでいる。

Ⅰ類…板の四隅が比較的に角張る。板上の中央の3孔を結び三角形となる。ほかに孔は認められない。(41)

Ⅱ類…板の四隅を丸める。板上の中央の3孔を結び三角形となり、板の両端木口沿いに2～4孔が設けられているもの。孔は42・43・45の四隅側と44の様に一対の孔とするものがある。(42～45)

Ⅲ類…板の中央の3孔を結び三角形となり、板の両端木口沿いに1孔が設けられるもの。板の形状によりAとBに大別する。

　A　板の木口部両端あるいは一端をやや尖らせる。(46～50)

　B　板の木口部両端に丸みを持たせる。(51・52)

Ⅳ類…一部欠損のためその詳細は明らかではないが、左右対称として想定する。全体的に楕円形の形状を示し中央に透かし部を設けるもの。(53)

Ⅴ類…その他。欠損等によりその詳細が掴めないもの。(54～58)

Ⅰ類の41は、ほかの部材との接合痕跡は認められない。Ⅲ類－Aの板の木口沿いの1孔は、ほかの孔にはない力が加わったことが読み取れる。ほかの部材との接合が想定されるならばこの材は大足の足板ということになる。Ⅲ類－Bにあくすべての孔はほかの田下駄の孔に比べ径が小さい。Ⅳ類の53では、孔は木口部両端2孔、木端部両側に2孔、楕円透かしの上側に1孔がある。

時期は、41が古墳時代中期～後期、45が古墳時代中期～平安時代、53・57が古墳時代後期、50・52・55・56が古墳時代後期～奈良時代、44・46～48が古墳時代後期～奈良時代、42・49・51・54が奈良時代～平安時代、43・58は不明である。樹種は41・51・54がサワラ、42・49がモミで、43・47・52・55・56がモミ属、44がトネリコ属、45が五葉松類、46・48・50がケンポナシ属、53がクヌギ、57がスギ、58がヒノキである。

7　横槌（図版54－59～61）

横槌は、敲打部を頭として重心を持ち付属する柄を使い手が握って、水平位置に置かれた対象物に対して振り降して叩く道具であり、敲打部と把手部とから成る。敲打部は円筒形が多く、中心部に凹みや括れがあれば敲打した痕跡といえる。

59は敲打部を摩滅したものと思われ、痩せている。敲打部と把手部との境は、敲打部側から緩やかに削り込むため肩部ははっきりとしない。60は、把手部側から敲打部にかけての一部分が遺存するのみである。敲打部側がほとんど欠損しているが、肩部が明瞭で、敲打部と把手部の境が明確に区分できる。61は、断面円形の柄が根元から欠損している。敲打部の把手側の端面は、先端部面とは異なり細かく削り込んでいる。敲打部は円筒形で、敲打面に残される敲打痕跡は四方に確認される。把手部側と敲打部の境が敲打部側から緩やかに削り込む59と、敲打部側に肩部をはっきりと持つ60と61に区分できる。

時期は、59が古墳時代前期、60・61が奈良時代～平安時代（？）である。樹種は59がクヌギ、60がイヌシデ節、61がカエデ属と一様ではない。

8　編具（編台の一部）（図版50－38）

藁などを束ね、糸を使い簾状に横方向から交互に編み込む編み方を「もじり編み」という。この編み方をする編具は、基本的には編台と木錘とで構成される。編台は、細長い板材と、その板を横に寝かせ両端を橋状に支える脚部とで構成される。

出土した板状の材は欠損部分が大きく、その全容は明らかでないが、端部は、両木端面側および一方の板面より角を欠き取られ、枘状に造り出されている。また、片方の端面は両側より山形に削り、その上を板目方向に直行する様に溝が切られている。この溝は、端部より3.4、3.3、3.7cmの間隔を隔てて4箇所に1～2mmほどの深さに切り込まれている。

溝を切る木端面を上に向け、枘の造り出しは脚部に設けられた枘穴に接合する「目盛板（コモゲタ）」と推定されるが、溝周辺には紐の類により擦れて摩耗した使用痕跡が認められない。

目盛板は全国的にもその出土例は乏しく、長野県内では古代のものは初見である[注3]。この目盛板と推定される板材は、特に奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿原始編』を参考として判断した。ここでは、大阪府西ノ辻遺跡より出土した13世紀の編台を例として取り上げており、目盛板の刻みの間隔は細かく、川田条里遺跡出土の38の様に等間隔を保つものではない。西ノ辻遺跡の編台は「もじり編み」の対象とする材料とその編み方により、間隔の調整は自由に設定されたとされる。

時期は、古墳時代後期～奈良時代で、樹種はモミである。

なお、当初本製品は110とともに容器の底板材と組合さる枠板と判断しており、写真図版は「容器」に含まれている。

9　用途不明木製品（図版48・50－32・34・39）

以下には農具に分類されるものの用途不明の木製品について記述する。

32は枘穴を持つ削り出しの棒状木製品。39は一端部が膨らみ先端を丸く削り、もう一方の端部は欠損している。竪杵の未製品であろうか。34は丸太材の両端部を把手状に加工した棒状の木製品。加工は横槌の把手部に類似するが、本製品は両端に施される。

時期は、39は弥生時代後期、34は古墳時代前期、32は古墳時代中期～後期である。樹種は32がモミ属、34がヤマグワ、39がクリである。

第3節　武具・祭祀具

武具では、弓3点、矢1点、盾（タテ）1点が出土し、祭祀具では斎串（イグシ）1点、馬形1点が出土した。

1　弓・矢・盾（図版55・56）

(1)　弓（62～64）

弓は、棒状の両端部の弓弭（ユハズ）に弦（ツル）などを掛け渡し、鳥打を持たず「く」の字に反らせ弾力性を持たせる。製材の性質を考慮して製作されるため、この時点で使用時の天地が決められる。このため、弓弭加工は上端部を末弭（ウラハズ）、下端部を本弭（モトハズ）とされる。末弭と本弭は、木材の末口側と元口側に相当しており、末口を上向きに元口を下向きの天地にして使用する。末口側と元口側は木材の直径に表われ、元口側を削り込んだり溝「樋（ヒ）」を切ることで上下端部の弾力を均等に配分させる調整を図る。

62は棒状で、片側に若干反り、両端部に弓弭が施されている。弓弭は、両端部とも先端から両側を削り込み板状に造り出している。弓弭と全体の反りから、弓手側の裏面に相当する面に一筋の溝が両端に渡って刻まれているが、これは上下端部を調整する樋ではない。また、両端部の上下関係は、弓弭を除いた先端部の直径の規模より結論付けるべきかは今後の研究に委ねたい。64は一端部が欠損するためその全容は明らかではないものの、一端部に弓弭の加工が施されており、弓の主体部の一部と判断された。弓弭は、弓状の反りと同方向に先端から両側を削り板状に造り出しており、一端面を一部で欠いている。樋は見られない。62・64はいずれも矢摺（ヤズリ）の痕跡は認められず、64は62より円弧を描く状態にある。63は一端部が杭状に尖らせる加工が施され、転用後の遺存状態にある。芯を有するが、幅に比べ厚さを持たず、弓なりの僅かな反りがある。端部に残された有頭状の加工が弓弭とすれば弓の主体部となる。しかし、上記62と64とは異なる形態を呈する。樋は見られない。

時期は、63が弥生時代後期、62・64が古墳時代中期～後期である。62・63・64の樹種は、いずれもイヌガヤである。なお、イヌガヤは、石川条里遺跡においても弓の主体部として使用されている。

(2)　矢（65）

65は内部が空洞となり、竹笹類の植物繊維（65b）を一端部に巻付ける。箆（矢柄）の元端部、すなわち筈（はず）と推定されている。矢の筈と思われる65の全容はわからない。

時期は古墳時代前期で、樹種は竹笹類である。

(3)　盾（66）

66は数点の破片の片面の所々に朱塗りされる状態から、片面全体に赤色塗彩が施されていたことがわか

る。このため、朱塗りの有無により表裏が判断される。周縁は、全体的に欠損しているため、その全容は明らかにはできないが、破片の接合によりやや曲線の断面を持つことが判明した。ただ、これだけでは盾と結論付けられない。時期は弥生時代後期で、樹種はサワグルミである。

2　祭祀具（図版56）

(1)　馬形・斎串（67・69）

人形、木簡などは出土していない。67は両端部の欠損が大きくその全容は不明となるが、鞍を備える飾り馬の形態に類似していることから馬形の胴部と判断した。鞍の下に位置する腹部には脚部に相当する材を串状に差し込む切込み痕は認められていない。なお、材は厚さをあまり持たない柾目板材である。

69は一端部が欠損しておりその全容は明らかではない。端部が山形の圭頭状に加工する斎串に形態類似していることからそれと判断した。材は、厚さをあまり持たない柾目板材で、乾燥の影響かやや歪みがある。

双方とも欠損が大きい遺存状態より、流れ込み遺物の可能性が持たれるが、その出土状況は記録されておらずわからない。ただ、この溝址からは墨書土器が数点の出土を見ておりその関連性が注目される。

時期は、どちらも奈良時代～平安時代であり、樹種はヒノキである。

(2)　その他（68・70）

以下は、この項にて分類することが必ずしも適当であるとはいい切れないが、あえて含める。

68は木の皮のみの出土であるが、空洞化した内側より棒状の製品に巻き付けた可能性がある。70は一部が欠損しその全容は明らかでない。赤色塗彩されていた痕跡がある木製品である。赤色塗彩は盾以外には見られないため、本項に分類した。

時期は、68が弥生時代中期～後期、70が弥生時代後期である。樹種は、68が不明、70がモミ属である。

第4節　服飾具

1　下駄（図版57－71～77）

下駄は、農具の田下駄（本報告書においては大足の足板を含める）とは形態もその用途も異なるために区分される。

足を載せる板の厚さと、その裏面側に歯を付けるか付けないかで区分した。この歯が足を載せる板とを一木で造りだしたものを「連歯下駄」とし、歯と板を別材にて造り、枘差しにより接合し組合せたものを「差歯下駄」とする。

(1)　差歯下駄（73・74）

73は、足を載せる台板のみ出土している。先端縁から欠損しているが、隅円から楕円形に近い平面形状を呈している。この板は、前後端部に反る。緒孔は前方に1孔、後方に2孔がある。この後方の孔の丁度裏面には横方向に溝を切り込む。この溝がここに装着する歯部の枘穴に相当するものと解釈し、差歯下駄と判断した。ただ、前面にはその痕跡がない。

74は、台が隅円で側面部縁を楕円形の曲線とし、断面逆三角形を呈する。前先端部の一部と上面左側が

欠損する。緒孔は前に1孔、後ろに2孔あく。この2対の孔は、側面に切られる。歯を装着させる枘穴は四角形にあけられる。この枘穴は、いずれも緒孔の下方に位置する。1枚残された歯は端部の一部分が欠損するものの、上部に台と接合させる枘があり、地面と接する方向に台形状に広がる撥形を呈する。この歯は、台板との接合角度が外側に開いている。もう一方の歯は残されていないが、穴より見た枘の接合角度よりこちらもやや外側に傾き、2枚の歯は側面より見ればハの字形に下方に開く状態であったとが推定される。この歯が装着された下駄は、本遺跡より出土した連歯下駄の成より比較的高いことがわかる。

時期は、74は近世、73は近世以降である。樹種は74がブナ属、73が不明である。

(2) 連歯下駄（71・72・75～77）

72は、前方の緒孔は周囲が欠損するものの場所の特定は可能であるが、後方の緒孔は両側縁から欠損している。D地区第1水田水口より出土した。76は縦に半分程が欠損しているが、緒孔の位置より前後関係が明らかである。なお、71および75の遺存状態は、72よりも悪いが、台に備わる歯部が残存しており、連歯下駄と判断できる。77は下駄の歯部で、欠損部が板部との接合面であろうか。

時期は、71・75が近世以降、72・76・77が近世である。樹種は72がヒノキ、76がサワラ、77がハリギリで、71と75は不明である。

2 櫛（図版57－78）

78は、その大半が欠損しておりその詳細は不明である。一端部の遺存状態より、横長の櫛と思われる。歯は、中心部に向かって深く切り込み山形となる。個々の歯部は根元付近から先端が欠損するものの、疎らな間隔にあることがわかる。

時期は中世で、この時期としては装飾性に乏しい櫛といえる。樹種はサクラ属である。

第5節 容 器

木製容器は、製作技法とその形態によって、刳物（クリモノ）・挽物（ヒキモノ）・曲物・指物（組物）・結物に大別される。本遺跡では、刳物・挽物・曲物が出土した。

1 刳物（図版58）

刳物は、製材の内部を手斧などの刃物により刳抜き、轆轤を使わずに外形を成形するため回転体とならない容器とする。周縁を残して刳抜き、口径（口縁長）に対して高さが小さい。重量が有り設置して使用する頻度が高い容器と、比較的軽量で皿状の容器とに大別した。

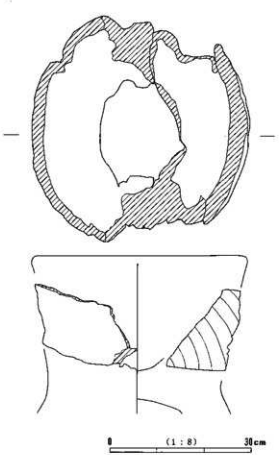
(1) 設置式の刳物（79・82）

79は、一端部が欠損するが、遺存する長軸方向に周縁部より刳抜く境界が復元可能で、裏面には低い脚を作り付ける。木取りから、欠損する片側片を含めても長軸方向は変わらないものと推定される。82は、刳物の隅の一部と思われ、周縁より刳抜き境が曲線を描いている。刳抜き面の裏面は欠損しており、田舟の一部との推定もなされているが、舟とすれば周縁部の刳抜き方が浅く、造り出した突起部には縄等により繋止める曳くための加工は施されておらず、むしろ把手として適当な形態といえるため、大型の刳物と判断した。この把手は、刳物の隅の一部に取り付くものと思われ、一端に2本が備わり、反対側も同様な

二対が備わっている形態として復元できる。

時期は、79が古墳時代～平安時代、82が平安時代である。樹種は、79がヒノキ、82がスギである。

この他に、D地区第6A水田（弥生時代後期前半）面より臼形木製品（第3図）が出土した。遺存状況が悪く、脚部を有する形状と推定されるが、脚部を欠損し、脚部も半分が欠損している。口径は45㎝、残存部の高さは21.2㎝である。横木取りであり、底が抜けた状態となっている。樹種はトチノキである。



第3図　臼形木製品略図

(2)　**皿状の刳物**（80・81）

80・81は、皿状の容器と思われ挽物の皿状容器に類似させられるが、轆轤を使う円形の回転体ではないため刳物に属する。いずれも、周縁部を隆起させているが、欠損が甚だしいためその全容は明らかではない。なお、81は2箇所に孔があけられており、蓋の可能性がある。いずれも木材を切断した製材の木口面に対する垂直面に口縁部を向けた方向に心去りで加工されている。82は木裏（心）側を刳抜いているが、そのほかは木表（樹皮）側を刳抜いていることがわかる。いずれも白木のままで仕上げられている。

時期は80が中世、81が古墳時代後期である。樹種は80がエノキ属で、81がクヌギ節である。

2　挽物（図版59）

挽物は、轆轤により回転加工され、回転体に整形された容器である。皿形容器（83・84・85）と、椀形容器（86・87・88・89）に分類した。椀形容器は轆轤にて加工仕上げの後、漆塗りされた漆器であり、これに対して皿形の容器は漆塗りをしない白木のままである。

(1)　**皿形容器**（83～85）

83は細かく欠けるものの接合は可能で、皿形の容器としての形態は明らかであるが、84と85は縁辺部の立ち上がりが確認され、皿形容器と判断されるが、大半が欠損しているためその全容は摑めない。

時期は、85が古墳時代後期～奈良時代、83・84が奈良時代～平安時代であり、樹種は、83と84がケヤキ、85がニレ科である。

(2)　**椀形容器**（86～89）

86～89は全て漆器である。88は、椀の口縁が欠損し底部のみの遺存状態にあり、漆塗りの表面は残存しておらず、その詳細はわからない。86・87・89は、外面が黒漆上に赤漆絵の植物紋の模様を描く。86・87は、同一模様の連続文を装飾模様としている。内面は、86と87が黒漆に赤漆、89はさらに底部中心部に黒の円模様を施すと思われるが、いずれもその遺存状態が悪くはっきりしない。なお、86・87・89の実測図

では、黒漆を除き赤漆絵のみ網掛けとした。

時期は、86・88・89が中世、87が中世以降である。樹種は87・88・89がブナ属、86が不明である。ブナあるいはトチなどを使用した漆器は、高級漆器に多用されたケヤキとは異なり、生活容器として広く浸透したとされる。

3 曲物（図版60～図版62）

曲物は、薄く割いた薄板を側板として、底に位置する円形や楕円形に加工した底板の形状に合わせて巻き、互いの合わせ目を桜あるいは樺皮等の樹皮を帯か紐状に編み込んだものや木釘にて接合したもので、蓋を有するものもある容器である。この上下に位置する蓋と底板の形状により、円筒形・楕円形・方形あるいは長方形の曲物に分類される。本遺跡において曲物は完形での出土例に乏しいため、単品としての分類に成らざるを得ない。この場合、側板・底板・蓋板に分割されるが、底板と蓋板との区分が明確に表わせるかは難しい。側板と組合さる段を周縁に持ち、樹皮あるいは編み込みの孔が残され、それにより開閉しない完全な「はめ殺し」状態を想定されるものは底板とされる。しかし、板の内側に孔があくからといって蓋と解釈するべきではない。最近は甑の板としたり、転用品とする説も出されているからである。このため、側板との接合部を一段低く削るカキゾコ板とそれ以外の板に区分した。

なお、楕円形や長方形の曲物は、使用用途が異なるとされるため区分した。また、底板が藤や竹等による網目を張る篩（フルイ）は農具であるが、それと特定できるものは出土していない。

(1) 円形（円筒形）曲物（90～93・95～100・102～108）

97は側板と底板が組合さって出土した唯一のものである。97ａが側板、97ｂは底板である。底板は、側板との接合部を一段低く加工したカキゾコであり、１箇所において樹皮により双方の編み込みが遺存しその様子は明瞭である。これ以外は全て底板のみが単独で出土した。底板はカキゾコ板とカキゾコでないものに分類される。

カキゾコ板（90～93・95・96・97ｂ）

90～92は、側板との接合部として一段低く整形するカキゾコで、この面を内面とし、側板との組合せを樹皮により編み込んだ板である。90と92の樹皮による編み込みは、正方形状の四隅に位置し、91は半分を欠損するものの２隅の位置に残存し、同様に４箇所の樺紐止めと推定される。この３点の樺紐止めの方法は、一様に一段欠き取る周縁部境に側板端を巻付け、樺紐を上段の底板内面に固定した後、側板を通して下段を貫通させて裏面にて板に巻き込み調整を行い端部を固定する。ただ、92は樺紐を底板の内面から下段に一周させるが、90は樺紐の内面巻始め止めを板に貫通させずに巻き込み止め、91は貫通させた裏面の樺紐端部をだま状に膨らませて固定する３点が三様であることがわかる。95と96は、大半が欠損しており全容は明らかでないが、周縁部の段の整形が見られる。ただ、95は裏面の周縁が反り返ることと、樹皮の編み込み痕が残存片のみでは窺い知ることができず、側板との接合部に斜面を設けることなど結論付られない不確定要素がある。なお、91には裏面に線状痕が無数残されている。また、90には内面のほぼ中央に楕円形の輪がダルマ状に連なる模様が認められる。これは、刃物により刻まれた線刻ではなく、焼鏝による烙印と思われ、奈良時代に属する木製品としては注目される。

カキゾコ以外の板（98～100・102～108）

99と102は、板の中央に大小の相違はあるが孔があく。102の側面の数カ所には、側板と組合せた差し挟み込みが残存する。99は中心部の孔の周囲に小孔があけられた痕跡がある。98は板面に炭化痕が残る。105と107は、側面の不規則な位置に木釘による孔があり、105には２箇所に木釘が埋木状となり留まる。

目釘孔と解釈される。なお、106は円形板の破片で、一端部に曲線を持つが側面は腐植しておりはっきりしない。また、板面には内部へ線上に孔が4箇所あけられ、この内一箇所には木釘が残される。これまでの材質とは異なるが容器の蓋として判断した。103は両面に巴文が墨書される。この巴文は、板の一端部が欠損しておりその全容は明らかでないが、その形状より裏表に一つ巴が印される。ちなみに、巴文には一つ巴、二つ巴、三つ巴文が一般的で、円頭の巻方により右巴、左巴となる。104と108は欠損が甚だしくその全容は明らかではないが、円形板材として復元される。また、108は一部で筋状に隆起する箇所がある。

時期は、91・97が古墳時代中期～後期、90・98・99・102が古墳時代後期～奈良時代、95が古墳時代～平安時代、92・93・96・104・105が奈良時代～平安時代、100・107が中世、106が近世、103が近世以降、108は不明である。なお、B地区より出土した古墳時代～平安時代のものは、出土層位より91・97→90・98・99・102→92・93・96の新旧関係にあることが確認された。

樹種は、91～93・96・97b・98・99・102・104～106がヒノキ、90がサワラ、95がケヤキ、97aがモミ属、103がアカマツ、108がカツラ、100・107が不明である。

(2)　楕円形および大型円形曲物（94・101・109）

楕円形や長方形の曲物の特に大型のものには、折敷（オシキ）や折櫃（オリウズ）が含まれる。この形態は底板と側板の接合関係より判断されるが、本遺跡より出土したこの種の曲物は底板のみである。

94は板厚2.0cmで、周縁に楕円形の一端曲線を残す大型の曲物である。カキゾコ板として周縁部の上下段に2対の孔が貫通しており、その内の1点には樺紐の破片が遺存している。また、他の箇所にも数点は樺紐止めの痕跡ある。なお、欠損端部側に見られる線刻は、整形時の基準線であろうか。また、内部に貫通する孔は、どの様な用途に利用されたものか、あるいは転用後の加工であるかの判断はできない。109は板材の2隅の曲線部を持つ。同等の板材を組合せれば楕円形が想定され、大型の曲物と判断した。101は周縁部に段を持つカキゾコ板であるが欠損部が多くその全容は明らかではない。遺存状態より、楕円形もしくは円形の大型曲物と推定される。この材の特徴は下段には突出する箇所があり、欠損する対縁部も恐らく造り出しが想定される。

時期は、いずれも奈良時代～平安時代で、樹種は94がサワラで、101と109がヒノキである。

4　その他の容器（図版63～65）

(1)　容器の枠板（110）

110は、板材に他材との接合を想定する加工が施されている。本材の両端側にあく四角い孔が垂直方向に組む枘穴を、底板材との接合に関係すると解釈すれば、角形容器の一辺部の枠板になる。しかし遺存状態に見られる類例がほかにないため、結論付けられない。

時期は、古墳時代後期～奈良時代に帰属し、樹種はモミである。

(2)　容器の破片（111～127）

ここに掲載した木製品は、容器の一部の部材と推定されるものである。この内、111と126は、遺存する2隅を斜めに欠き取る。117・124は板材の一端部に曲面加工を施している。121は一端部の両隅を欠いて別材との接合が想定される。

時期は、119が弥生時代中期～後期、120が弥生時代後期、124・125が古墳時代前期、127が古墳時代中期～後期、117が古墳時代中期～平安時代、113・115・123が古墳時代後期、122が古墳時代後期～奈良時

代、111・118・126が奈良時代～平安時代、112・114・116・121が近世である。

樹種は、111・114・121・122がヒノキ、112・116～119・123・127がサワラ、113がクヌギ節、115・125がケンポナシ属、120がスギ、124がモミ、126がヒノキ科である。

(3)　その他の容器（128～130）

128は角材の一面を材心まで刳抜く加工がなされている。129は丸木材の中心を刳抜き、途中から断面の1/3を削り取った溝状の形態になる。溝状になった端部が欠損しているため、全容は明らかではない。128・129は両木口面まで抜いているため刳物容器との結論には至れない。130は角材を逆台形状に削り込んで、その底面が薄くなり、欠損している。

時期は128・130が弥生時代後期、129が近世以降で、樹種は129がアカマツ、130がトチノキ、128は不明。

第6節　用途不明木製品および加工材

ここでは、使用目的がわからずその物の用途が不明のため上記木製品に該当しないが、今後の木製品および加工材における調査研究の上でも、特に重要と思われる木製品を対象とした。ここで取り上げた木製品は、有頭状木製品、弓状木製品、棒状木製品および加工材、板状木製品および加工材、有孔棒状・有孔板状木製品および加工材、その他に分類した。複数の材を組合せることで機能を果す木製品の一部（部材）あるいは建築部材と思われるものには、上記の分類に板状加工材や棒状加工材という「加工材」の名称を付加して区別した。

1　有頭状木製品（図版66・67）

両端あるいは一端部に頭状の加工を施した木製品を「有頭状木製品」としてまとめる。この有頭状の木製品は、織機の部材、天秤棒、建築部材の垂木などが想定されるが、垂木は規模も大きくなり、その形態も特徴的で特定し易いため、ここでは含めず、建築部材の項で取り上げた。板状木製品と棒状木製品に大別する。

(1)　有頭板状木製品（135～138）

135と136は、板目の板材で、両端部に有頭状の加工が施される。その有頭状の部分の形状は、撥状の136と先端側に若干の幅を持たせる135で、この内の135は括れ部に四角形の貫通する孔としない孔があけられている。いずれも紐による結び目の痕跡は認められていない。この両木製品の形態は、織機の部材と推定している報告書もある。138は一先端部の両木端より一段付けて円形上に曲線を持たせ、もう一端部は膨らみを持たせる有頭状の痕跡が残される。137は一端部の両木端側から欠き、先端を尖らせる有頭部を形成する。

時期は、135が古墳時代中期～後期、136・138が古墳時代後期、137が中世である。樹種は136がサワラ、135がスギで、137がニレ属、138がニレ属である。

(2)　有頭棒状木製品（131～134・139～142）

131・132・134・141は丸太材で、一端部に有頭状の加工が施されている。この内、132・134・141はその遺存状態が異なるが、ほぼ同型の有頭棒状木製品で、これらより一回り規模の大きな131がある。131の

一端部は有頭状に、もう一端部は杭状に加工されている。この杭状に尖らせる加工は後世の加工であろう。133の横断面は隅円の台形で、その一端部は欠損しているものの、一端部には先端部を丸く削り両側面の曲面部を欠き有頭状の頭を造り出すものである。横断面隅円の形状は、他には見られない。139は建築部材とすれば、腰掛け蟻継仕口を思わせる先端部の形状であるが、台形に切り出した木口は一端面より面を持つ。140の有頭は、天秤棒の一端部に見られる形態であるが、全長は短く、もう一端にはこれとは異なる加工が施される。142は角材で、有頭状の頭のみの出土である。先端部は山形に尖らせ、もう一端部は主体部との接合部より欠損している。

時期は、133が弥生時代中期以前、134が弥生時代中期、142が弥生時代後期、131・132・140が古墳時代中期～後期、139・141が古墳時代中期～平安時代である。樹種は131がカヤ、132がニワトコ、133がモミ属、134がサクラ属、139がアサダ、140がフジキ、141がカエデ属、142がヤマザクラである。

2　弓状木製品（図版68－143～149）

完形品でなくとも、端部に弦を掛ける弓弭が施されていれば弓の主体部と特定できる。それらは、前述の「武具・祭祀具」の項に記述した。ここでは、弓弭加工が施されていない弓状の木製品を対象とする。

143～145は弓形状に大きく反り、146～149は全長が短いためか反りが弱い。145は枝を落とす程度であるが、143と144は両先端部に加工が施され、なんらかの用途に使用されたことが窺えるが、それを弓の主体部とは断定できない。

時期は、145・148・149が弥生時代中期～後期、147が古墳時代前期、144が中世、143と146は出土地点が不明である。樹種は143・147～149がカヤ、144～146がイヌガヤである。

3　棒状木製品および加工材（図版69～71・80・81）

用途不明の棒状材について、単品にて機能するものを棒状木製品とし、大形のもので他材との接合が想定されるものを棒状加工材として大別した。

(1)　**棒状木製品**（150～161・232～235・238～241・243～248）

150と157は、農具等の柄部付きの柄部分の可能性もあるが、それを決定できる遺存状態にはない。151は一端部を片側のみ欠き取り、杭状に先端を尖らせ、もう一端部は不整形な形状に加工される。有頭状の加工を施す過程のものか。しかし遺存状態が不良のため詳細はわからない。152と155は棒状に多面に加工が成される。153は先細りする端部に差込みによると思われる圧迫痕が見られる。もう一端部は欠損しておりその全容は明らかではない。枘穴等に差し込む太枘（ダボ）材であろうか。154は一端部に仕口用加工が施されている。このため、なんらかの組合せ部材と推定されるが、その用途はわからない。156は枝落を認め、一端部を片面より杭状に尖らせる。158は両端部が欠損しておりその全容は明らかではない。一先端部は膨らみをもたせ枘を造り出す痕跡が認められる。もう一端部側には把手ほどの幅を持たせその両側に厚みを出して変化を付けているがその先端部は欠損しており明らかではない。この部分が製品として材の中央に位置するのか一端部に片寄っているのかは現状からは読み取れない。159は一端部を欠損するが、一端部は鬢太（ビンタ）状の欠き枘を持つがその先端は杭状に尖らせる。161は両端が欠損しておりその全容は明らかではない。ただ、柄と櫂状の変化を持たせている。233と234は先端部を杭状に尖らせる加工が施される。

時期は、151・233・234・243が弥生時代中期、238が弥生時代中期～後期、157・239が弥生時代後期、241弥生時代後期～古墳時代前期、159・240・245～248が古墳時代前期、244が古墳時代中期～後期、235

古墳時代中期～平安時代、150・152・153・155・156・158・161が古墳時代後期～奈良時代、160が奈良時代～平安時代、232が中世、154が不明である。

樹種は151がアサダ、152～155・158がヒノキ、156はイヌガヤ、157がクヌギ節、159・235がカエデ属、160・243がケヤキ、161がモミ、232がモミ属、233・234がムラサキシキブ属、238がエノキ属、239・240がカヤ、241・244・246～248がクリ、245がコナラ節、150は不明である。

(2)　棒状加工材（162～168）

162はL字形の断面形を持つ。仕口加工は施されていない。163は角材で二方向隅に面を取る特徴がある。164は角材で、一端部に仕口加工がある。165は欠損部が多くその全容は不明である。166は全長175.8cmの角材で、一端部を杭状に尖らせ、一端部は欠損状態にある。杭状の加工は角材の表面加工とは異なることから後世のものと思われる。167は角材で、一端部に仕口加工が施されているが、欠損によりその詳細は明らかではない。168は板材で、一端部が両端より先を細めている。

時期は、165が弥生時代後期、162～164・166が古墳時代前期、167が古墳時代中期～後期、168が奈良時代～平安時代である。樹種は162がタラノキ、163がコナラ節、164がケンポナシ属、166がフジキ、167がクリ、168がモミ属、165が不明である。

4　板状木製品（含む加工材）（図版72・73・80―169～186・231・237・242）

170は片側の木端面より両木口面にかけ隅円に成形される。169もまた若干その傾向にある板材である。171は不整形で内側に仕口加工と思われる削り込みがある。172～177・231・242は、一端部を杭状に尖らせる加工が施されている。この内、176・177・242は杭状の加工と板材としての加工形状が異なる。杭状加工は後世の転用と推定される。178・179・181・182は下記の板状木製品よりも小型のものである。この内、179は当初容器と思われたが、その様な加工にないことが判明した。180は一端部に枘穴加工の痕跡を留めるが、欠損のためその詳細はわからない。183～186は、やや幅を持ち板状加工材に含めたものである。186は板目材で、一端部の両木端面を欠いており、他材との接合のための仕口加工の可能性が持たれる。また、184は一端部を矢板状に加工している。この加工が後世のものかは明らかではない。

時期は、169～177・242が弥生時代中期、179・181が弥生時代中期～後期、237が弥生時代後期、183が古墳時代前期、231が古墳時代中期～後期、178・180・182・185・186が古墳時代後期、184が中世（？）である。

樹種は169～172・174～177・184・242がケヤキ、173がクリ、178・180・182・185・231がケンポナシ属、179がクヌギ節、183がイヌシデ節、186がヒノキ、237がエノキ属、181は不明である。

5　有孔棒状・有孔板状木製品（含む加工材）（図版74～77・80）

(1)　有孔棒状木製品（187～191・236）

189は断面四角形で、一端部は2方向より山形に尖らせている。孔は、この山形の先端を持つ1面に2本の平行した溝状に刻まれる。187・188・236は丸太材の芯部分を刳抜いている。190・191は断面四角形の角材で、複数の孔が貫通する。紡織具の糸巻の部材の可能性があるが、残存状況が不良のため断定できない。

時期は、187・191が弥生時代中期、190が弥生時代後期、188が古墳時代中期～後期、189が奈良時代～平安時代、236が中世である。樹種は187がタラノキ、188がケンポナシ属、189がヒノキ、190・191がケヤキ、236がムラサキシキブ属である。

(2)　有孔板状木製品（192～213）

192は一部で欠損するものの、両端部に四角形の孔の貫通が読み取れる。別材との組合せが想定される部材と思われる。193は木口側の一端部に二対の孔が、一端部やや木端面側に１孔があく。木口側の二対の孔からして、欠損する対木端側にも小孔が設けられていた可能性がある。また、194は両先端部を、203は片側先端部を山形に尖らせる板材である。195は板目材、196は柾目の一端部に四角形の孔が貫通する。198は、小型の孔が２箇所あけられる。199は四隅を隅円に成形し、両木端面沿いに六対の小孔が貫通する。この内、一対の孔２点はやや内側に位置する。200は長方形の板目材で2.0cmほどの厚さを持つ。板材の片側の木端面より両木口面にかけて隅円に成形し、隅に２孔が、そのほかの２孔は不規則な位置にある。いずれも貫通する。板目材の201および柾目材の202は薄い板材で、板面に複数の孔が貫通する。201は規則性を持つ円形の孔が５箇所に位置する。203・204はセギ状の遺構に矢板として用いられていたものである。204は板目材に小孔が貫通する。この小孔は目の表面の口が裏面より広くなる。205は板面幅と片木端面の厚さともに窄めており、欠損側に小孔が貫通する。206と210は柾目材に長方形の孔が貫通する。この孔は、他材との仕口用の枘穴と思われる。遺存する規模よりなんらかの部材の一部と思われるが、その用途は不明である。212と213は、幅の広い板面の１箇所に孔が貫通する。この孔は212が小型円形で、213は角形となる。212は後世に一端部を矢板状に尖らせる加工が施された。板幅から見てなんらかの部材の可能性が持たれる。この他、遺存状態が不良な207～209・211は有孔板状加工材に含められる。

時期は、203～205が弥生時代中期、194が弥生時代後期、201が弥生時代後期～古墳時代前期、207・210・212・213が古墳時代前期、208が古墳時代前期～中期、192・199が古墳時代中期～後期、202が古墳時代中期～平安時代、206が古墳時代後期、193・195・211が古墳時代後期～奈良時代、197・200・209が奈良時代～平安時代、198が近世、196は不明である。

樹種は192・195・196・207がモミ属、193・194・197～200がヒノキ、201がフジキ、202～205・210・213がケヤキ、206がクリ、208がケンポナシ属、209・212がエノキ属、211は不明である。

6　その他（図版77～79－214～230）

ここでは、上記の木製品および加工材に該当させられない、主に角材について掲載する。

214は一部で欠損する。遺存状態からは、両木端へ両板面の中央より勾配を減じ、一端部は両隅から削り取られる櫂形に加工された材であることが読み取れる。舟の櫂にしては規模が大きすぎ、柄状の部分は他材との装着痕跡は認められず接合仕口に施された枘とはいい難い。215～217は、木端面一部に曲線状に削り込む。222は曲材に特異な板面を加工している。221・223は一端部に杭状の加工が施されているが、杭加工に認められる加工形態と異なるためこの項に含めた加工材である。224・225は、一端部の両木端面を矢板状に窄める加工が施されている。その対面の木口側は欠損により明らかでなない。230は一端部が大きく欠損している思われその全容は不明である。もう一端部は幅厚を減じており二面から挟み込む様な削り込みがある。他材との組合せ仕口かはわからない。ここに含まれる加工材は他に218～220・226～229がある。

時期は、218～220・224・225・228が弥生時代中期、215が弥生時代中期～後期、230が弥生時代後期、214が弥生時代後期～古墳時代前期、216・217・221・223が古墳時代前期、222が古墳時代前期～中期、229が古墳時代中期～後期、227が中世（？）、226は不明である。

樹種は214がクヌギ節、215がサワラ、217・226・229がクリ、218～225がケヤキ、227がモミ属、228がフジキ、230がエノキ属、216は不明である。

第7節　建築部材

1　建築部材の分類

川田条里遺跡から出土した建築部材もまた、大方の水田遺跡の状況と同様に、建物が倒壊した構造体のままの姿では出土していない。このため、当初の建築物の姿を復元するためには、出土建築部材から必要な情報を把握する以外に方法がない。しかし、出土建築部材は欠損部の占める割合が高いものや、杭に転用され先端部を尖らせるなど、構造材として当初の形状を留めたものはほとんどない。特に、転用加工が施された箇所は先端部のため、枘や枘穴加工部分を失っていることが多い。また、仕口・継手加工部が欠落する部材は、それを単独で建築部材と認定することは極めて難しくなる。ここでは、遺存状態から建築当初の形態が推測される出土建築部材について取り上げることとした。特に、構造体の接合部に当たる継手や仕口を形成した枘と枘穴を遺存させる部材が重要な判断材料となった。

出土建築部材の分類にあたっては、構造体のどの部位に該当させられるか、その手掛かりを得るための方策が求められる。建築物は、建築部材を組合せた構造体であるため、出土建築部材の組合せを想定しながらの分類が不可欠である。これにより建物の構造形式までもが推測できる可能性が持てるからである。それには建物の構造形式を理解し、その構成要素となる各構造材の役割を把握する必要がある。

構造体の区分

建物は、基礎・軸組・小屋組・屋根によって構成されている。その構成内容を以下に記す。

基礎……掘立柱の下部、礎石。基檀。

軸組……柱と梁あるいは桁により構成。

小屋組……軸組より上部で屋根を支持する。

屋根……屋根板、茸材に垂木を含める。

基礎部は、上部の軸組を地表下に固定させる。柱の遺存状態により掘立柱か礎石であるかの判断ができる場合がある。それは掘立柱では元口側を地中に埋めるため、地表側とは異なる遺存状態が読み取れるはずである。痩せた状態が地中側と判断できれば、軸組と基礎部の分離は可能である。本遺跡の場合は柱の木口面等の状態より掘立柱以外の形態は想定されていない。

軸組は「軸部」とも称し、基礎部より上部に、小屋組の下部に位置付く。梁や桁といった横架材とそれを支持する柱などの縦材（竪材）により形成される。なお、「軸部」は、農耕具の特に鍬の着柄軸の部分の名称として使用するなどしているため、建築部材の項ではこの名称は避けた。

小屋組は、古代には扠首組と重ね梁組に和小屋などの構造形式がある。

屋根には、草屋根や板屋根がある。江戸時代の民家などによく使われた茅や葦などは、夏期には雑草のごとく良く繁り、手に入り易く、板材より加工がし易く軽いため屋根葺材となりやすい。

この様に建物は基礎と架構構造を形成する軸組、それに屋根を形造る小屋組により成り立つ。

建築部材の分類

構造体は、基礎・軸組・小屋組・屋根によって構成されるが、そこに使用される構造材は縦材（竪材）・横架材・屋根材・付属材・その他へとさらに細分化される。以下にその構成材の内容を記す。

部　位	川田条里遺跡出土部材	出土していない部材
縦材（竪材）	柱・小屋組の垂直材	小屋組の束柱・方立
横架材	梁・桁・台輪・壁板・床板・榻 蹴放（閾）・小屋組の水平材	棟木・胴差
屋根材	垂木	萱や草などの屋根葺材および板材・ 扠首・屋根木鼻・破風板・
付属材	梯子・限柱	屋根飾り扉・鼠返・限棒
その他	用途不明材	

以下、現状より特定できる建築部材について上記の分類表にしたがい分類し、各材における構造形態について記述する。特に重要と思われる木製品および加工材については、出土遺構（遺物等により特定された時期）や樹種の分析結果等の詳細を記す。これらの記述がない出土木製品および加工材については、巻末の観察表を参照されたい。

2　縦材（竪材）（図版82～85）

(1) 柱・方立・小屋組の垂直材（249～264）

柱とする縦材は、接合部を除けば丸太材や角材に係わらず通直性の高いものが構造上要求される。このため、直径が柱としての許容範囲内にあっても、仕口用の加工がなく通直性が劣るものはその可能性が低くなる。また、方立に代用する部材は出土している。榻・蹴放材にその仕口と推定される枘穴が認められており、その存在が裏付けられている。

小屋組の垂直材は、屋根の荷重を支持する構造形式によりその形態が決まるが、いずれも、軸組の部材よりも軽量化が図られていると見るべき要素がある。

柱

川田条里遺跡の柱材は、仕口加工により二種に分類される。249・250のごとく柱頭に餐太（ピンタ）を大きく残すものと、251・253のごとく柱頭に細長い枘を持つ部材に区分され、いずれも梁や桁の横架材との接合が想定される仕口加工となる。柱頭に餐太を遺存させる250は、胴部に四角形の貫穴が2箇所にあけられる。全長184cm、直径約15.2cmで、末口側を柱頭として仕口加工が施され、元口側は欠損する柱材である。この柱材は仕口加工にて曲がっているが、これは解体以後の環境下の影響と解釈している。貫穴は7×6cmと10×6cmの縦長で、上下の貫穴の間隔は心々間で、56cmを測る。また、249は全長239.2cmで、直径17.2cmを測る、下端部は欠損するものの通直性の高い部材である。250の様な胴部に貫穴は設けられておらず、柱頭は仕口加工が施されるが曲がりは見られない。249と250の仕口加工は、横架材との接合が想定される。この場合、隅柱と隅柱の支点間距離内に架かる横架材を支持する柱ということになる。

柱頭に枘を持つ251は、一端部に断面円形の枘を造り出すものの、その先端部は欠損する。また、253は、長い枘で断面を削り角を持つが、円形に近い加工がなされている。251と253の双方は、この長い枘に対応した枘穴を持つ横架材と接合する。

この他、転用加工や欠損のため仕口加工が遺存していないが柱として想定される部材がある。254・255・256・257・258・262は、一端が杭状に加工され、もう一端が欠損しているためその詳細は明らかでないが、断面円形の胴部面に成形した加工痕跡があり、また長い枘を持つ253ともこの成形で類似するた

め、柱と判断した。

なお、貫通しない枘穴が3箇所に残される252は、「通し枘差」により別材と接合するもので、250の貫穴ではなく通し枘穴ということになるため、柱材の闕部面の整形加工の痕跡が見られず、小屋組の横架材にも想定されようが、断面円形で、元口と末口側が明瞭なため、柱材と判断した。また、259～261は、縦材に含めるが上記の範疇にはなく、柱材か否かは他遺跡から出土する類似部材との比較検討が必要と思われる。

時期は、253が弥生時代後期、255が弥生時代後期～古墳時代前期、249・254・256・257・259～262が古墳時代前期、250・252・264が古墳時代中期～後期、251が古墳時代後期～奈良時代、258が平安時代、263は不明である。樹種は249がカヤ（？）、250～254・261・263がカヤ、255～258がクリ、259がヤマウルシ、260がニレ属、262がフジキ、264がイヌガヤである。

3　横架材（図版86～108）

梁・桁・台輪・壁板・床板・楣・蹴放（閾）・小屋組の水平材（屋根には含めない）などが該当させられる。以下では、形態上比較することで分類可能な出土建築部材も取り上げることにした。しかし、それらはあくまでも推定の域を出ないものである。

(1)　梁・桁・小屋組の水平材

梁・桁（265・301・302・310～312）

265は全長300cmで、11.4cmの直径を測る。元端部は材の外面を削り込み、末口部との形態を均等になるように成形することがわかる。両端部の木口面は斜めに欠き取る加工が施されている。2箇所の仕口加工は、「渡り腮」仕口の上木に施されるものである。本材は桁木の上にのる梁材に該当する。301・302・310・311は一端部に「片嗣付き」枘を残す。いずれも一端部は欠損する。312は四角形の枘穴を両端部に持つ板目の板材である。この貫通する枘穴は、8.0×6.0cmを平均値とし、双方の枘穴の心々間の距離は256cmを測る。この枘穴の心々間の距離は一部の柱間間隔に相当することになる。

時期は、312が弥生時代後期、265が古墳時代前期、301が古墳時代中期～後期、302・310・311が古墳時代中期～平安時代である。樹種は265がモミ属、301がクリ、302・310・311がエノキ属、312がケンポナシ属である。

小屋組の水平材（309・315～317）

小屋組の水平材は、桁や梁等と比べて規模が小さい。309は一端部に貫通する円形の枘穴を持ち一端部は欠損しておりその全容は不明である。316は、枘穴が3箇所に施されているが、断面形状が小型で、梁材としては強度に乏しい。317は小型で梁材には該当させられない。

315は全長約158cmを測る。一端部には貫通する四角形の枘穴があり、それより約100cm内側に貫通しない四角形の枘穴が施される。この部材は一端部を欠損するが、その遺存状態により内部に施された枘穴を束柱との仕口として中央に位置させ、両端には貫穴を持ち柱頭に長い枘を持つ柱との組合せが想定される。小屋組材として注目する。

時期は、309・315・317が古墳時代中期～後期、316が古墳時代後期（？）である。樹種は309がケンポナシ属、315がモミ属、316がクリ、317がサクラ属である。

(2)　台輪（266～274・276～278・282～284・289）

高床式建物における台輪とは、根太の補助を受けて床板を支持する基礎的な部材となる。これに対し

て、平地に土間を持つ掘立柱建物は軸組の構造が異なり、台輪を待たない。このため、台輪材は高床式建物の存在を示すものといえる。高床式建物において開口部の足元には、蹴放材が位置付けられる。開口部（出入口）を除く蹴放材が配置される高さには、台輪によって取り巻かれることになる。このことから、台輪材は用途の異なる蹴放材の形態とは全く同一のものではないものの、基本的な形状はある程度類似する。すなわち、幅が広い板材で、柱に接合させる枘穴等の仕口加工が施され、床板や壁板を支持する部材となる。これら、仕口用の加工が施されていれば台輪材の可能性が高い。しかし、出土部材からは台輪と断定できるものは少なく、推定の域を出ないのが実状である。

272・273は、欠損があるものの一端部に四角形の枘穴が貫通することが推定復元される部材である。この内の272は、それより内側3箇所に四角形の枘穴が貫通する特異な部材で、273の板厚は2.4cmと薄い柾目材で、台輪として機能するかやや疑わしい。これに対し、274は幅が19.7cm、厚さ8.7cmと台輪とすれば充分な部材といえる。

上記以外に、横架材とは認められるものの、台輪とは断定できかねる部材に、266～271・276～278・282～284・289がある。この内、267～269・271は、両側に貫通する枘穴が施された痕跡がある。また、282～284は、その大半が欠損しているが、いずれも貫通する枘穴とすれば三通りの形状を呈する。

時期は、271・278・283が弥生時代後期、266・276・282が弥生時代後期～古墳時代前期、267・269・272・274・289が古墳時代前期、273・284が古墳時代中期～後期、277が古墳時代後期、268・270は不明である。樹種は267・269・271・276・283がクリ、266がケンポナシ属、268がコナラ属、273がオニグルミ、274・277がエノキ属、278がハリギリ、282がカツラ、289がニレ属、270・272・284は不明である。

(3)　壁板・床板・屋根板

板材は榎田遺跡出土例のように、壁板・床板・屋根板材に分類されることがある。しかし、本遺跡では板状に加工された材が出土したものの、これらのように使用部位を特定できるものは確認できなかった。

(4)　楣と蹴放（閾）

建物の開口部（出入口）を構成する楣材は、柱や辺付、方立などの縦材の上部に載せられ支点間を繋ぎ渡す横架材で、対する内法（ウチノリ）の下部側は蹴放材（閾）が水平に渡され、柱などの縦材を受けて連絡し、開口部を強固に形成する。この開口部に納まる扉材は、軸吊棒を回転範囲の中心軸として回転させるもので、それを楣材と蹴放材が上下から挟み込み、双方の材に施された軸吊孔が扉に付属する軸吊棒を受けることになる。このため、開き扉の開閉の中心軸となる軸吊棒の断面は、上下横架材と接する部分で円形となる。軸吊棒を受ける軸吊孔は、一回り口径を広げる必要がある。つまり、双方の関係は充塞することはなく、隙間が生じる「遊び」を持つことになる。楣と蹴放の一材に軸吊孔が一つならば片扉となり、二対ならば観音開きの両扉が納まる。また、凸断面材と方立材により扉板の回転半径の範囲は、おおよそ四半径（回転角90°）に制限される。凸断面材を使用していなければ前後に開き半径（180°）となる。構造上、楣や蹴放は梁桁や台輪と同じ構造材を兼ねるため、内法の扉板は上下から挟まれ構造物の一部として組合され一体化する。

楣および蹴放の分類は、まず断面形状により凸断面材と平板状断面材に大別される。凸断面材は丸太を半裁した曲面側を上に向け、さらに「凸断面の加工を施さない先端部に枘穴付き」と「枘穴なし」に細分される。軸吊孔は凸断面部に施されている。また、欠損等により判別不可能なものは、その他に含めた。

凸断面材　先端部枘穴なし（327・330～332・338・341）

327は、凸断面部には円形の孔が1箇所に在り、他の3箇所の孔は隆起部沿いに並ぶ。いずれも貫通し

ており、隆起部沿いのものは軸吊り棒の回転による摩滅や使用時の欠損をともなうものと思われ、不整形な遺存状態にある。このため、軸吊孔あるいは扉止めを補足する孔と認める。この隆起部沿いに並ぶ3孔の内、両端部の孔の心々間で約136cmを測り、両扉として扉板幅一枚約68cmとなる。また、凸断面の加工を施さない側に接する孔と中央の孔との間隔は、心々間で76cmを測り、両扉として扉板幅一枚約38cmとなる。この距離にある隆起部は凹レンズ状に削り込まれてその延長上にある隆起部とは変化を持たせている。ちなみに、榎田遺跡出土の扉板（図版番号328：全長175.8cm、幅32.2cm、板厚3.5cm）にその値が近くなる。330は両先端部が反り返る。これは後世の変化と考えられる。軸吊孔に相当する孔は、隆起部沿いに3箇所と端部に2箇所認められる。いずれも貫通し、欠損により円形の当初形状は留めない。また、隆起部から若干離れた2孔は隣接しており、ともに円形で貫通するが摩滅の痕跡は隆起部沿いのものとは異なる。331は貫通する孔の一部分は残されるものの、隆起部に沿う様な軸吊孔は欠損しており認められない。332は凸断面側が欠損によりほとんど不明であるが、最大幅は39.1cmを測り、凸断面材の中でも特に幅広く、先端先細りの特徴を持つ。338は欠損しており、軸吊孔等の孔は認められない。341は凸断面形状の一部分を残すため、それとわかる程度の材である。その両端部は欠損によりほとんど不明である。

時期は、331が弥生時代後期～古墳時代前期、327・330・332・338・341が古墳時代前期である。樹種は327・330～332・338がクリ、341がコナラ節である。

凸断面材　先端部枘穴付き（328・329・335・337）

328は比較的良好な遺存状態にある。枘穴は、凸断面境側にわりと近接する位置にあり、正四角形で貫通する。隆起部は、凸断面境から徐々に成を持ち高くなる。また、隆起部の端部は、平坦面より突出する特徴がある。凸断面部の凹孔は、隆起部上に設けられたものと、隆起沿いに揃う2箇所、その反対側沿いに1箇所の計4個になる。隆起沿いに並ぶ2孔は、軸吊孔と思われる。この軸吊孔は心々間で81cmを測り、ここに両扉が納まるとすると、扉板幅一枚あたり約40cmとなる。隆起部上に施された孔は、辺付や方立に該当する枘穴であろうか。329は軸吊孔が想定される箇所より欠損が広がるものと思われる。凸断面加工を施さない枘穴は、凸断面境よりやや離れて位置し、四角形で上下に貫通する。335はほとんどが欠損しており、軸吊孔等は不明である。凸断面にない先端部の枘穴は、正四角形で上下に貫通する。337は軸吊孔が想定される部分が欠損し、凸断面にない先端部の枘穴は四角形と推定され、上下に貫通する。

時期は、328が弥生時代後期～古墳時代前期、329・335・337が古墳時代前期である。樹種は328がエノキ属、329・337がクリ、335がコナラ節である。

平板状断面材（336）

川田条里遺跡より出土した平板状断面材は、336の一材のみである。板面上に施された枘穴により、扉板は一枚の片扉式で、その内側の材中央部を溝状に方立の枘穴が左右彫り込まれる。その一端部は辺付あるいは柱枘穴が該当させられる。

時期は、古墳時代中期～後期で、凸断面材とは異なる時期に属することになる。樹種はケンポナシ属である。

その他（333・334・339・340・342・343）

凸断面材の中で、欠損等により先端部枘穴の有無が確認できないもの、その形態に類例がないものを以下に掲載する。

333・334・339・340は、凸断面部の一部を遺存させる。334と340からは、隆起部沿いに1孔があくが軸吊孔とは認められない。342は縦方向に割れる欠損により明瞭に分類されない部材である。343は上記の凸断面材にも平板状断面材にも該当し難い形態にある。「渡り腰」仕口として組合さる様な上木を受ける下木の角決り加工が二対に施される特徴がある。しかし、角決り加工の二対が極めて近接しているところか

ら用途が特定できず、「渡り腰」仕口とは断定するものではない。

時期は、333・334・339・340・343が古墳時代前期、342が近世以降である。樹種は333がヤマザクラ、334・339・がクリ、340がケンポナシ属、342がアカマツ、343がニレ属とされる。

(5) その他の横架材

枘穴を持つ加工材（266～271・275・280・285・288・296～299・305・313・314）

ここでは、貫通する方形の枘穴を持つ板材を対象とする。267～271は枘穴が2箇所に施さていることが確認される。この内、枘穴と枘穴が対となる構成材について以下に記す。

267の枘穴は、8×8㎝で、枘穴と枘穴との間隔は心々間で163㎝を測る。柾目材。268は両端部が欠損しておりその詳細はわからないが、枘穴は8×5㎝で、枘穴と枘穴の間隔は心々間で115㎝を測る。柾目材。271の枘穴は、10×8㎝あり、枘穴と枘穴との間隔は心々間で120㎝を測る。板目材。269の枘穴は、残存状況から推定して7×4㎝で、枘穴と枘穴の間隔は心々間で149㎝を測る。板目材。以下は、枘穴を持つが対とならない材を取り上げる。270は、一辺の木端側に仕口と思われる加工が施されるが、その詳細は不明である。板目材。296は、一端部を片扇付きとし、鬘太の接合部中央に枘穴を持つ。板目材。266は、一端部に枘穴を持つ材と思われるが、欠損のためその詳細は明らかではない。板目材。270と296は、欠損部に残存する枘穴が対となる可能性が持たれる。なお、266～271は台輪と推定される。

時期は、299が弥生時代中期、271・313・314が弥生時代後期、266・267・269・275・296・297・306が古墳時代前期、280・288が古墳時代中期～後期、285・298が古墳時代後期、268・270が不明である。樹種は、267・269・271・280・296・297・305がクリ、266・285・298がケンポナシ属、268がコナラ属、313がコナラ節、275がカヤ、288がカエデ属、299がニレ属、314がケヤキ、270は不明である。

枘穴を持たない加工材（279・281・286・287・290～295・300・303・304・306～308・318～326）

281は通直性に欠け、弓なりに反る。反る側の木端（コバ）面側に仕口と思われる加工が4箇所で施されている。横架材と推定したのはこの仕口からで、ここに直行する横架材が平行して渡され架けられるものと推定されるが、その構造材としての用途は明らかではない。291は一辺の木端面側に仕口と思われる加工が1箇所に施される。両先端部は杭状の加工や欠損によりその詳細は明らかではない。柾目材。

時期は、303・304・319が弥生時代中期、279・320が弥生時代中期～後期、286・307が弥生時代後期、323・324が弥生時代後期～古墳時代前期、287・290・293・295・308・325・326が古墳時代前期、281が古墳時代中期～後期、291が古墳時代後期、300・306・318が古墳時代後期～奈良時代、292・294が奈良・平安時代、321・322が近世以降である。

樹種は279・318・324がモミ属、281・291・293・295・300がクリ、286・308がサワラ、287がニレ属、290・325がカツラ、292・294がコナラ節、303・304・319・326がケヤキ、306がサクラ属、307がヤマザクラ、320がヒノキ、321・322がアカマツ、323が不明である。

4　屋根材（図版109・110）

(1) 垂木

垂木材は、元口側と末口側を同等の直径となるように加工しておらず、丸太材「掻き（枝落しを施す）」を使用する。また、柱ほどの通直性を要求したものではない。本遺跡では、大半が杭などに転用されており、当初の全長を保ったままの材はまれである。屋根材を支持する垂木材は、棟木から拝む形で2方向に2材が分かれ、それぞれが身舎梁に架けて外桁へと渡し軒先へ延びるため直径が細く全長が長い材を必要とする。出土した垂木材で仕口加工が遺存するものは、元口端部に欠き込み加工が施されている。この欠

き込み仕口の形状は、棟木に掛け接合させるために有効である。ここでは、込栓により2つの垂木材が棟木上で交差して接合させる構法ではないのは結い縄により仕口部が固定できるからである。この垂木材の元口端部に施された特徴的な仕口加工は、出土する他の建築部材には見られないもので、転用などにより切断され中途半端な全長を持つものであっても、この加工が遺存しているものであれば垂木として捉えることができる。また、元口端部とは対照的に直径をすぼめる末口端部の仕口加工は、これまで明らかにされていなかった。それは、建築当初の全長を留めた垂木材が出土していなかったからである。しかし、川田条里遺跡においては、両端部に加工が施された垂木材が認められている。一般的に垂木材の末口側では、材に直角に先端部を切り落とす真矩（マガネ）木口と地面に対しほぼ垂直線方向に切る竪水（タテミズ）木口がある。この斜めの木口面を切り出す末口端部が残存する材は、3本認められた。

「有頭棒状木製品」は、織具の部材としている事例が多い。織具の部材やあるいは運搬具の天秤棒など身体に接するものは、垂木材程の全長は必要としない。出土したもので欠損により短形のものでも、端部に仕口用加工が施された垂木材との形状や枝落しの仕方などが類似すること、さらに建築部材が多量に出土する中においてはむしろ垂木材に該当すると判断されるものがある。

なお、垂木の実測図に関しては、その性格を考慮し、元口を天に末口を地に配置した。しかし、仕口用加工が残存する材に関してはその加工を天にして、元口末口を無視している。仕口用・有頭棒状のもの・その他の詳細不明に大別する。

仕口用加工を持つ垂木（345・346・348～350）

345は全長408.8cmで最大径9.6cmを測り、346は全長416cmで最大径9.4cmを測る。345・346は、ともに通直性が高く、全長が400cmを越え直径もそれぞれに近似した寸法を持つ。さらに、両端部に施された元口側の仕口加工と、末口側の竪水木口加工の形態が極めて類似しているため、転用加工されていない建築当初の形態を残す垂木材として判断される。また、双方はC地区のSC52より出土していることより、同一建物に使用された可能性も持たれる好例として特筆される。348は、一端部が欠損しておりその全容は明らかではなく、遺存状態からも通直性には劣る材である。元口端部に片面より欠き込み加工が施されており垂木材とし判断している。ただ、その先端部は他の加工痕跡とは異なり杭状に尖らせており、転用加工の性格も合せ持つ。349は、先口部のみでその全容は不明である。しかし、元口端部に片面より欠き込み加工が施されており垂木材として判断している。350は一端部を欠損し、所々に虫喰い状に炭化欠損が見られる。しかし、元口部の仕口加工は遺存状態が良好で、片面の欠き込みの裏面にも欠き込み加工の痕跡が認められる。

時期は、345・346・348が古墳時代中期～後期、349・350が古墳時代中期～平安時代である。樹種は348がコナラ節、349がカエデ属、350がカヤ、345・346は不明である。

有頭棒状加工を持つ垂木（347）

347は、末口側が杭状に削られておりその全容は明らかではない。特に元口側の通直性に劣るものの、それより末口側は比較的に安定した状態にある。元口側の有頭棒状の加工下の片面より欠き込み加工が施されている。本遺跡における有頭棒状加工を持つ垂木材はこの1点のみ。

時期は、古墳時代中期～後期（？）で、樹種はモミ属である。

(2)　その他の不明材（344）

344は全長348.8cm、直径8.8cmを測る。元口側に施された仕口用の加工は欠損しており、詳細は不明である。

時期は、古墳時代中期～後期で、樹種はコナラ節である。

5　付属材（図版111～113）

(1)　梯子（351～353）

今日一般的に使用される梯子は、左右の縦桟の側木に横桟を付け組合せる複数の部品からなるが、川田条里遺跡からその様な梯子は出土していない。出土した梯子は、丸太材からの一木造りとするもので、板状の本体に踏み込み面を作り出す形式である。この形式は、東南アジアや近年まで韓国の農家にも見られた。なお、丸太材の外面をほぼ残して踏み込み面を欠き込んで仕上げる形式のものは認められない。

出土した梯子の大きな特徴は、踏み面を設けるため、上段の踏み面から下段の踏み面にかけて深く削り込み、足を掛け易くするため、決して刳り貫くことはしない。これは、その使用法が、やや傾斜を付けて建物に立て掛けることを当初から想定したためである。その使用形態からはむしろ階段の性格に近いといえる。この様な形態から、出土した梯子についても、階段で表現される各部名称に当てはめると、踏み込み面を「踏面（フミヅラ）」、その踏面と踏面の間を蹴上げ面とし、その距離（高さ）を「蹴上げ高」として表現する。

351は、全長256cmで幅20.7cmで、踏面が最長7cm厚の一木造りである。踏面裏面側の勾配に傾斜角度を付け、緩く欠き取る形状は352と類似する。最上段の踏面より延びる板状部は長く、下端の板状部は欠損している。その両側の板状部には、8×6cmを測る方形の孔が貫通している。この孔は、建物との接合を想定した枘穴であるか、あるいは梯子が常時建物に設置されていなければ、収納時の掛け止めのものであろうか。この板状の梯子の存在が軽量化を図ったものであれば後者が妥当であろう。352は、全長181cmで幅14.4cmを測る一木造りである。踏面を5段造り出すが、その奥行きは浅く、欠損箇所が多く遺存状態は不良である。上段の踏面と下段の踏面との間を緩く欠き刻ぐ。353は、全長180cmで幅23.6cmを測る一木造りである。踏面は5段造り出すものの、両端部は欠損しておりその全長は明らかではない。踏面裏面の勾配を本体に対して垂直に近付けるほどにきつく付け欠き落とす加工をする。このため、蹴放面は平坦となる範囲が広くなる。なお、階段状の加工面の裏面側の両端部は曲面に加工されている。

時期は、352が弥生時代後期～古墳時代前期、353が古墳時代前期、351が古墳時代中期～後期である。樹種は351がコナラ属、352がキハダ、353がクリである。

(2)　限柱（マセ柱）（354）

元来「限柱」という名称はない。出土した354は、厩の出入口を仕切る丸太材「限棒（厩栓棒）」を掛ける穴を持つ柱に類するためと、他に適当な名称がないので、形態を分類する上で「限柱」とした。出土した部材は、柾目の板材で幅15.6cmの厚さ6cmの断面楕円形を示し、一端部は欠損しており全長99.2cmである。その上下の2箇所には、側面より中央付近まで斜めに刳抜いて、奥に僅かながらの窪みを造り出している。この刳抜きを施す加工は、もう1箇所に置いて推定できるため、合計3箇所ということになる。この部材は一対となり、この加工に限棒を架けることで、取り外し可能な横木（限棒）を渡した棚となると推定される。類似材の出土例に乏しく今後の資料の増加をまって再検討を要する。

時期は、弥生時代後期～古墳時代前期で、樹種はクリである。

6　その他の加工材（図版96・113～115―293～295・355～368）

若干の加工痕が見られるが、上記の建築部材の分類には該当しない用途不明の大型部材をまとめた。

時期は、355・359・366が弥生時代後期～古墳時代前期、293・295・358・360・363・364が古墳時代前期、357・362・368が古墳時代中期～後期、367が古墳時代後期、294が奈良時代～平安時代、356・361・

365不明である。樹種は293・295・357・359・361・364～368がクリ、294・362がコナラ節、355がエノキ属、356がモミ属、363がカツラである。

第8節　小　結

1　農具について

農事暦については、中世までは史料により断片的にしろ読み取られている[註4]。しかし、農作業と農具との関係がいかなるものであったのか、享保2年（1717）の土屋又三郎による『農業図絵』[註5]などの絵図を端緒として江戸時代まで遡れるが、それ以前は推察するに足る資料に乏しい現状がある。これら、江戸時代の絵図を頼るにしても、山手や里では地域性があるはずで、民俗事例を見ても形態が同じではない[註6]。また、描き手側の癖が一様でないことを考慮しなくてはならず、これらもまた鵜呑みにはできない要因である。すなわち、史料より古代における農業形態を農具の用途と絡めて把握することは現時点では難しい。

しかし、出土した古代の農具がどの様な用途に利用されたか、これまでの発掘成果を手掛かりに、今日伝わる農作業形態をあくまでも参考材料とする以外に糸口すら摑めない。このため、本遺跡報告書においてもこれまでの研究方法と成果を先蹤とし、それらを基に形態分類をした。

実際、田植に入るまでの行程作業を見ても、田起こし、砕土、代掻（シロカ）きといった段階を経る。それから刈敷（カリシキ）を行い代田として田植に入る。水田となる土壌は、常に刈敷を必要としたことは使用頻度からも重要な問題と思われるが、当時も同じ様な作業形態として繰り返されていたかを本遺跡の水田址からは窺知ることはできなかった。

第4表　農具の時期別出土点数

時期	直柄横鍬	直柄平鍬	曲柄着柄軸ナスビ形平鍬	曲柄着柄軸ナスビ形又鍬	曲柄着柄軸ナスビ形鍬（細分不可）	曲柄着柄軸撥状又鍬	曲柄着柄軸撥状平鍬	曲柄鍬（細分不可）	抉（柄振）	一木平鋤（なで屑）	一木平鋤（木平屑）	横槌	綱台目盛板	田下駄	馬鍬	その他	合計
近世															1		1
奈良・平安											1	2		4			7
古墳後期～奈良	1	1		1									1	9	3		16
古墳中期～後期	2		2	2	2		1	1	1					3	1	2	17
古墳前期				2		1	3				1	1				2	10
弥生後期～古墳前期								1	1	1							3
弥生中期～後期										1						2	3
不明														2			2
合計	3	1	2	5	2	1	4	2	2	2	2	3	1	18	5	6	59

本遺跡から出土した木製農具は、鍬・鋤・抉（柄振）・馬鍬・横槌そして繧台（目盛板）と田下駄（大足）で、各々をさらに形態別に分類した。ここでは、杵・犂（カラスキ）・田舟などは出土していない。出土品の内、鋤・鍬などの農耕具は、欠損部の占める割合が高いものを含めて22点出土したが、木製品および自然木総数に比しても極めて少ない。さらに出土農耕具を器種ごとに細分化すると、多いものでも3～4点以内に留まる。このため、細分化した器種分類に対し、該当させられないものもある。川田条里遺跡内においては実に比較資料に乏しい状態といえる。その中で、鍬の類が比較的にまとまって出土した。また、時期別に出土点数を見ると、農耕具を中心として、古墳時代中期～奈良時代にかけて集中しており、中世には出土例が無い（第4表）。

2　建築部材について

出土した木製品の内、弥生時代後期～古墳時代の建築部材と認められるものは比較的多い。以下、川田条里遺跡に近隣する長野市所在の石川条里遺跡（以下、石川とし、木製品番号は報告書図版番号とする。）と榎田遺跡（以下、榎田とし、木製品番号は報告書図版番号とする。）の出土木製品を中心とした他遺跡の出土品との比較をまじえ、本遺跡より出土した建築部材の位置付けを行うものである。

木材は製材作業を経て製品あるいは家具や建築物の部材となる。この製材作業とは、一般的には各種製品や部材となる素材を木取りにしたがい切断するものである。また、製材とは広義には伐木から木取りまでを指す。これを当初の（一次的な）製材とすれば、転用材を製材として使用した場合には二次的な製材となる。川田条里遺跡（以下、川田）より出土した建築部材は、生産域から出土したものであるから、建築物の役目を終えた廃材で、それらは転用後の（二次的な）使用を見たことになる。

川田出土の建築部材には、当初からの加工上に杭や矢板状に先を尖らせた転用加工を施すものも少なくなかった。この転用と当初からの加工形状（削り方）は、次元が異なる加工のため、容易に区分することも可能であった。

出土建築部材は、縦材（竪材）・横架材・屋根材・付属材・その他に大別した。この分類方法は、以後の建築物復元を試みる場合に有効な手段と考えたからである。なお、ここでは当初からの杭や矢板材は建築部材と見なせないため含めない。

縦材に該当する柱は、桁・梁と組合さることで軸組を形成する重要な部材である。柱頭には、横架材との接合を示す仕口加工が施される。川田より出土した柱には細長い枘を持つものと、縦に半截し鬢太を大きく残すものがある（第4図）。細長い枘を持つ形態は、静岡県浜松市入野町所在角江遺跡より出土した柱（弥生時代中期）では「出枘」としている。この様な細長い枘を造り出す柱については、組合さる部材により「ヒキモン構造」を構成する「コキ柱」の性格がある[注7]。この部材により梁行方向と桁行方向にある横架材に施す枘穴を重ね合せ、下方から柱頭の細長い枘により「枘差」し、支える工法が推測される。細長い枘の断面が四角形であることからも、強固に一体化するため軸組構造には適する。特に石川599の仕口加工は川田の細長い枘を持つ251・253とは異なり、ヒキモン構造の形態を良く表わし注目すべき部材である。この工法は、一部の地域に江戸時代末期ころ盛んに使われたとされる[注8]。また、県内北安曇郡美麻村所在の重要文化財旧中村家住宅（元禄11年棟上の記録あり）の通し柱数本にそれを認めている[注9]。

川田249・250や榎田384は、鬢太を残す。この形態の仕口加工が施された柱は、隅柱と隅柱の支点間距離内に架けられる横架材を支持させる配置といえる。頭貫仕口加工は、榎田の383があり、石川では597と598があるが、川田からは出土していない。

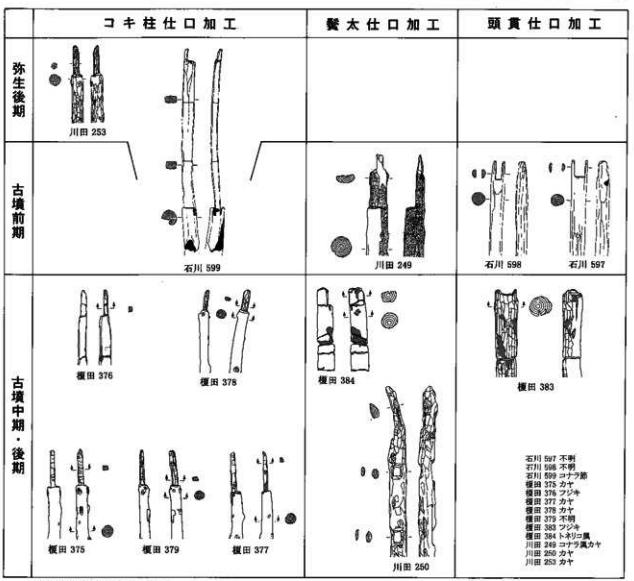
榻・蹴放を除く横架材の仕口加工の内には、「渡り腮」「片腮欠き」が認められた。渡り腮仕口は、265

の上木の端部加工によりその仕口加工の存在が明らかになった。この上木材は、古墳時代前期に属するものとしては初見である。建物遺構としては、奈良時代の校倉の隅壁の構成材が知られており、出土部材としては富山県小矢部市桜町遺跡の縄文時代に属する上木と下木が揃いで出土し、渡り腮仕口加工材が特定されている（『桜町遺跡　縄文の森に吹く風を感じて』1998　小矢部市・小矢部市教育委員会）。なお、榾・蹴放材の項に分類した343は「渡り腮」仕口組の下木材に相当する様な加工が施されるが断定はしていない。片嗣欠きは、301・302などに見られる。

桁とともに建築物の規模を物語る棟木は、その形態がゆえに完形品にて出土する可能性は極めて少ない。榎田の様に全長が明らかであれば建築物の規模が推測できる。また、垂木との接合関係がわかれば屋根の形態復元にまで踏み込める。本遺跡では棟木と思われる部材が出土しているが、全長は不明である。

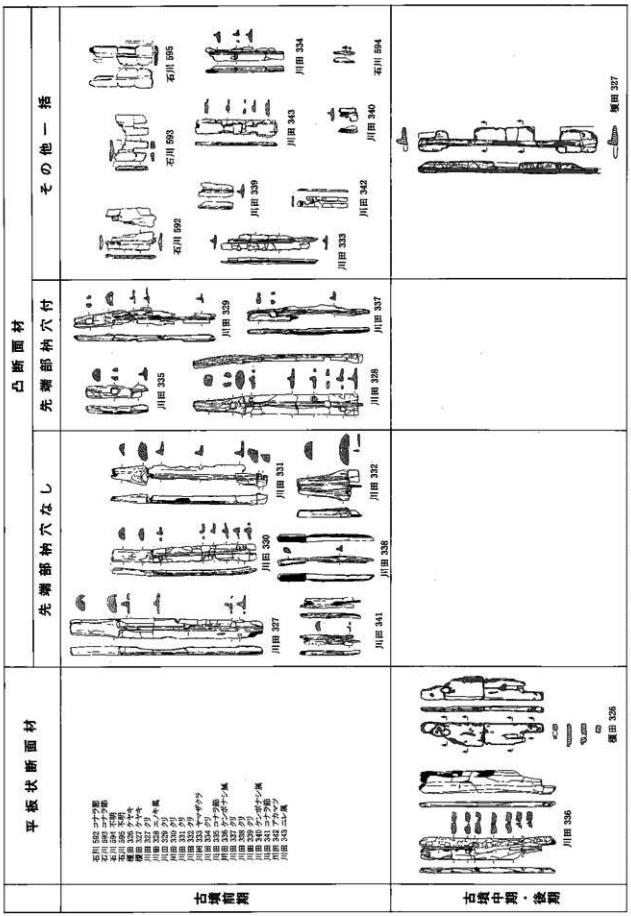
台輪は桁・梁と比較して厚さに対する幅を広く取る傾向にある。しかし、このことが鼠返しを兼ねたものなのかは不明である。なお、長野市内から鼠返しに類するものの出土例は今のところない。

横架材の榾と蹴放は開口部に納まる部材である（第5図）。建築用語に照らせば、榾材は内法の上部に、蹴放材は下部に組まれる部材である。ただ、開口部を形成する部材が揃って出土しないため、本報告書内においても凸断面材と平板断面材の上下関係を断定することは難しい。古墳時代の建物の開口部がどの様



数字は報告書の図版中の番号

第4図　柱仕口加工部の比較



川田328・331、石川592・593・595は弥生後期から古墳前期のいずれかの時期。数字は報告書の図版中の番号。

第5図　梱・蹴放材の比較

な納まりであったのか。他の遺跡内においても実際に楣や蹴放等の部材が組まれた状態で出土しておらず、推測の域は脱し得ない実状がある。また、開口部が組まれた状態で発見されたとしても、それを持って全国的な代表とすることはできない。このため、単品として出土した凸断面材を蹴放材とするか楣材に当てはめるかは、隆起する部分が戸当として機能するだけなら判断には至れないことになる。この様な現状から、凸断面材を意識する「蹴放」は、「閾」あるいは「敷居」という名称に置き換えるべきかもしれない。

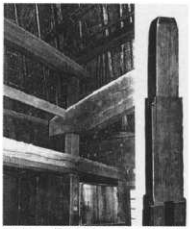


写真1　「徳島県旧下木家住宅」『旧下木家住宅の移築工事記録』より転載

川田から出土した楣と蹴放は、16点（形態の異なる343を含める）を数える。この内、一個体分として判断される13点を抽出すると、凸断面材は12点で、平板状断面材の1点に大別される。ここで、凸断面材がその大半を占めることは、平板状断面材が他の製品に加工し易い転用板材としても、不自然である。このことは、石川や榎田の出土部材と比較することでもその異常さがわかる（第5図）。楣・蹴放材は、その総数から複数の建物が転用元とされる。凸断面材一本が1棟分とすれば12棟にあたり、C地区からは7棟分の転用材となる。このため、凸断面材が上下に組まれた可能性もあり、凸断面材だから下に位置するとは限らないことになる。

写真2　「美麻村中村家住宅」『中村家住宅修理工事報告書』より転載

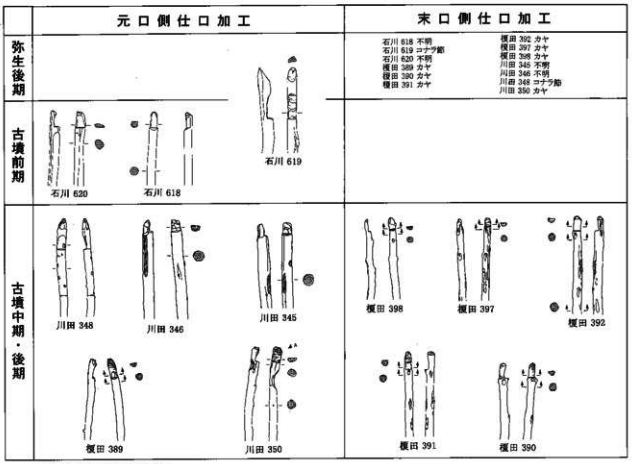
壁板について榎田の場合、厚さ1～2㎝位を保ち、柾目材の利用を見る傾向にあった。壁板と壁板との継手仕口は、「せぎり継手」と推定される加工が認められている。また、床板は壁板よりも厚く、板目材の利用が多い傾向にある。

屋根材には垂木を含める。垂木の仕口加工については、静岡市所在の川合遺跡および角江遺跡出土の垂木（弥生時代中期・後期）に類似する。垂木は、元口（モトクチ）と末口（スエクチ）の加工状態により、材そのものが使用される方向や屋根の形状などがわかる場合がある。このため端部には特に注意が必要である。なお、扠首は、扠首組として小屋組を復元可能な状態でないとそれと認め難い部材である。

垂木元口端部は、棟木との接合部に当たる。川田出土材は縦に半截する有頭状の加工が施されたものだけである。これらは、半截された部分を棟木に合せ、補助的に結い縄で固定したものであろうか。枘穴付きのものは石川出土の垂木材807が上げられる。この枘穴付きのものは、太枘（ダボ）を差込み拝み部分

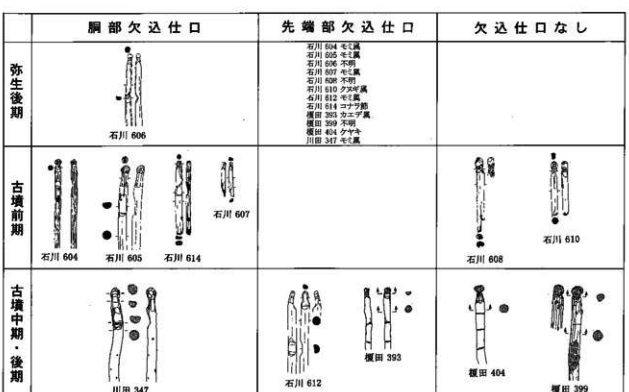
写真3　「榎田遺跡出土　垂木」

写真4　「榎田遺跡出土　柱」



数字は報告書の図版中の番号

第6図　垂木仕口加工部の比較



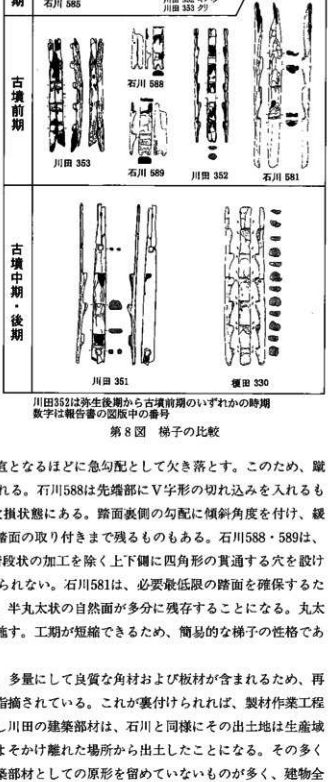
数字は報告書の図版中の番号

第7図　垂木仕口加工部の比較（有頭状）

を固定する。垂木末口端部は、木口加工により竪水木口や真炬木口などに分類される。木舞・広木舞などとの接合は、先端部より若干上る位置に想定される。垂木の元口側に施された仕口加工は、榎田出土木製品と同様の形態を示している（写真３：「榎田遺跡出土垂木」）。また、榎田出土の垂木には曲材が認められた。このため、ここでの屋根葺材は、垂木の曲材の使用に対して、壁板や床板以外の板材が認められず、茅や葦などの草葺材の使用が推定された。

垂木材345と346は、転用を免れ当初の全長に元口と末口端部を保つ。完形の垂木材は、長野県内においては初めての出土例で、全国的にも希な存在となる。垂木は、古墳時代においては屋根に直接作用する構造形態のため、この地域における屋根の形態復元には重要な資料といえる（第６・７図）。

付属材としての梯子は、すべて一木造りとするものである。川田・榎田・石川の出土総点数はそれほど多くはないが、その形態は、板状のものや半丸太状～丸太状のものがあり、その階段状の加工も多種多様な形態が認められる。川田353および石川588は、踏面の裏側の勾配が、垂直となるほどに急勾配として欠き落とす。このため、蹴上面と踏面およびその裏面との境は明瞭に分けられる。石川588は先端部にＶ字形の切れ込みを入れるもので、石川589と類似する。なお、上部の大半は欠損状態にある。踏面裏側の勾配に傾斜角度を付け、緩やかに欠き刺ぐ。ものによっては、蹴上面が下段踏面の取り付きまで残るものもある。石川588・589は、先端部にＵ字形の切れ込みを入れる。川田351は階段状の加工を除く上下側に四角形の貫通する穴を設けている。川田352と榎田330は、この様な穴が認められない。石川581は、必要最低限の踏面を確保するために加工され、踏面裏側が認めらない。このため、半丸太状の自然面が多分に残存することになる。丸太材を縦方向に楔割りし、曲面側に階段状の加工を施す。工期が短縮できるため、簡易的な梯子の性格であろうか（第８図）。



川田352は弥生後期から古墳前期のいずれかの時期
数字は報告書の図版中の番号
第８図　梯子の比較

榎田の自然流路ＳＧ３より出土した建築部材は、多量にして良質な角材および板材が含まれるため、再利用を待つ第二の製材として保管された可能性が指摘されている。これが裏付けられれば、製材作業工程に対して重要な意味を持つ遺構となる。これに対し川田の建築部材は、石川と同様にその出土地は生産域であり、農耕具と比較すれば当初の用途からはおよそかけ離れた場所から出土したことになる。その多くは畦畔の芯材に転用されたもので、そのため、建築部材としての原形を留めていないものが多く、建物全体の構造に言及することができなかった。川田では、弥生時代から古墳時代の建築部材が多く出土しており、今回報告できなかった大型の加工材の中には、建築部材も多く含まれると考えられる。これらの加工材は断片であったり、用途を特定できる特徴的な加工が認められず、建築部材と認定されていない。本章で報告できなかった木製遺物については、第３分冊12章で木製遺物の全容に触れているので、参照してい

ただきたい。

註

1　川用条里遺跡より出土した木製品の器種は、〔(財) 長野県埋蔵文化財センター　1997　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15　石川条里遺跡』第3分冊〕および〔長野県埋蔵文化財センター　1999　『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12　桜田遺跡』第2分冊〕を基に分類した。

2　清水隆久　1983　日本農書全集　第26巻『農業図絵　土屋又三郎』　社団法人農山漁村文化協会

3　臼居直之氏によれば、実物を観察した限りでは静岡県川合遺跡の第5遺構面より出土した木製品からも編台の目盛板と思われるもの（図版組番号5－225、用途不明品の内の棒状木製品とする）が出土していると指摘する。報告書に掲載されるこの木製品の展開図および写真を観察すると、全長55.6cmの内一辺を約15cmの間に材に直行する溝が13切られ、それ以上に広げられた形跡はない。また、板材ではない。編台の目盛板と同じ性格ならばこれをどう解釈すればよいか。この様に、これまでの出土木製品に編台が含まれていたとしても、その特殊性からそれと判断されていない場合があるという。
なお、この川合遺跡出土品については、以下の参考文献を参照されたい。
・『川合遺跡』遺物編3（木製品図版組編）　1994　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
・『川合遺跡　八反田地区II』（本文編・図版編）　1995　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
・『川合遺跡』遺物編3（木製品本文編）　1996　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

4　木村茂光　1993　「中世農民の四季」『中世の生活空間』　有斐閣

5　『農業図絵』は、〔清水隆久（校注）　1983　日本農書全集26　『農業図絵』　社団法人農山漁村文化協会〕を参考としている。

6　『たがやす』『日本生活図引』　1989　弘文堂）と〔第六編　生産・生業『長野県史』民俗編　第四巻（二）北信地方　仕事と行事〕を参考し、『日本生活図引』による昭和初期に見る農事暦より一般的な形態を大別すると、以下の様になる。

農作業の行程　……　鋤用農具、蓄耕
田植に入るまで
田起こし　……　犂、牛耕
砕土（田起こしの土塊を砕く）
代掻き（土塊を細かく砕き、均す）……　抉、馬鍬
刈敷（草や葉などを肥料として田に敷込む）……　大足、馬押し
田面を平坦に均す　……　大足、抉
代田とする
（田植え以下農作業行程は省略する。）

7　コキ柱およびヒキモン構造については、〔宮澤智士　1977　『四国の民家と集落一・一宇村』（財）四国民家博物館刊行）と〔『旧下木家住宅の移築工事記録・四国の民家と集落二』　1980　（財）四国民家博物館）および〔『鹿児島県の民家』　1975　鹿児島県教育委員会）を参照した。

8　宮澤智士　1994　「琉球と日本文化の接点」『月刊文化財』9　第一法規出版

9　美麻村中村家住宅については、〔『中村家住宅修理工事報告書』　1997　長野県美麻村教育委員会）を参照としている。

参考文献

飯沼二郎・堀尾尚志　1976　ものと人間の文化史19『農具』（財）法政大学出版局

宮本長二郎　1981「高床建築の出土部材」『月刊文化財』12　No.219　第一法規出版

奈良国立文化財研究所　1985　『木器集成図録　近畿古代編』

櫃上　昇　1989　「木製農耕具の地域色とその変遷」『（財）愛知県埋蔵文化財センター　年報』（財）愛知県埋蔵文化財センター

南　博史　1991　「曲物研究と課題　形態と機能について」『考古学ジャーナル』335

奈良国立文化財研究所　1993　『木器集成図録　近畿原始編』

臼居直之・鈴木　信　1994　「狩猟のための道具」『季刊考古学』第47号　雄山閣出版

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994　『川合遺跡』遺物編3（木製品図版編）

岩井宏實　1994　ものと人間の文化史75『曲物』（財）法政大学出版局

宮島義和　1995　「更埴市屋代遺跡群の祭祀遺物」『長野県考古学会誌』第76号　長野県考古学会

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　1995　『川合遺跡　八反田地区II』（本文編・図版編）

斎宮歴史博物館　1995　『日本の櫂』

奈良国立文化財研究所　1995　『山田寺出土建築部材集成』

黒崎　直　1996　「古代の農具」『日本の美術2』No.357　至文堂

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996　『川合遺跡』遺物編3（木製品本文編）

埋蔵文化財研究会　1996 『古代の木製食器』第39回埋蔵文化財研究実行委員会

静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996 『角江遺跡II』遺物編2（木製品）

四柳嘉章　1997 「北陸の中世陶器」『中・近世の北陸』 北陸中世土器研究会

長野県埋蔵文化財センター　1997 『川田条里遺跡』『長野県埋蔵文化財センター年報14』

臼居直之　1997 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15　石川条里遺跡』第3分冊　（財）長野県埋蔵文化財センター

金出ミチル　1998 『打ち割り法：古代からの製材方法の再現』『文化庁月報』357　ぎょうせい

増田一眞　1998 『数式のない構造力学』 眞木塾

伊藤友久　1999 「建築部材」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12　榎田遺跡』 長野県埋蔵文化財センター

土 器 観 察 表

・出土位置は報告書で記述した名称を示しており、遺物の注記と異なる場合がある。
・残存状況の数値は、残存部位で全周を１とした時の残存率である。

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版1-1	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	深鉢	破片	外面無文、ナデ。内面1本の沈線。	D114
図版1-2	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	口縁外面無文、内面並行沈線。	D100
図版1-3	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	外面摸文、口唇部に小突起。	D108
図版1-4	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	LRの単節縄文。内面並行沈線。	D97
図版1-5	D3	SD11	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	外面摸文、内面並行沈線。	D68
図版1-6	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	外面摸文、内面並行沈線。内外面に傷かに赤彩が確認される。	D102
図版1-7	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	口唇部小突起。口縁外面無節縄文？。	D110
図版1-8	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	外面縄密な縄文？、赤彩。口縁内面2本の並行沈線。	D91
図版1-9	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	外面単節縄文、内面沈線。	D116
図版1-10	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	外面無節の縄文。内面並行沈線。	D112
図版1-11	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	棒状工具端部による刺突列。図版1-14と同一個体。	D98
図版1-12	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	図版1-14と同一個体か。	D113
図版1-13	D3	SD11・13	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	肩部に刺突列。図版1-14と胎土が類似する。	D69
図版1-14	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	口縁部無節の縄文。沈線間棒状工具端部の刺突列。口縁内面並行沈線。	D99
図版1-15	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	外面に赤彩。細密な縄文。	D117
図版1-16	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	外面赤彩。	D96
図版1-17	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	外面摸文？、内面並行沈線。内外面に赤彩が見られる。	D104
図版1-18	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	底部	底部ナデ。	D85
図版1-19	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	底部	底部網代痕。	D89
図版1-20	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	1/3	底部網代痕。	D87
図版1-21	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	底部	底部網代痕。	D86
図版1-22	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	底部	無文土器。底部ナデ。	D84
図版1-23	D3	SD11	縄文晩期Ⅰ期	深鉢	2/3	無文土器。	D62
図版1-24	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	底部	底部ナデ。	D90
図版1-25	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期	鉢	破片	底部網代痕。	D88
図版1-26	D3	SD11	縄文晩期Ⅰ期	深鉢	口縁1/4	無文土器。口縁内面に１本ないし２本の沈線。口縁に小突起。胴部外面にパウダー状の白色付着物(灰？)。	D61
図版1-27	D3	27-1層	縄文晩期Ⅰ期？	壺？	1/3	ナデ。	D93
図版1-28	D2	SQ01	縄文晩期	甕	1/6	肩部が張を成し有段となる。胴部内面横ミガキ、外面ナデ又はミガキ。	D38
図版2-29	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	破片	口縁部太い沈線。	A1031
図版2-30	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	破片	外面ミガキ。口縁部太い沈線。	A1033
図版2-31	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	?	破片	3条の微隆起線。	A1034
図版2-32	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕?	破片	口唇部面取り。口縁部板状工具？による刻み列。	A1036
図版2-33	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	?	破片	口縁部断面方形の棒状工具による2列の刺突列。	A1054
図版2-34	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	?	破片	断面方形の棒状工具による刺突列。外面ミガキ、内面ナデ。	A1043
図版2-35	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	?	破片	口唇部面取り。断面方形の棒状工具による刺突列。	A1039
図版2-36	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	?	破片	至行沈線。内外面ナデ。	A1035
図版2-37	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	鉢	破片	外面ミガキ、内面ナデ。外面の下半分にタール状の黒色付着物。	A1052
図版2-38	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	壺	破片	浅いハケメ(細密な条痕)が僅かに見られる。	A1032
図版2-39	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	1/8	内外面ナデ。口唇部面取り。	A1029
図版2-40	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	破片	内外面に浅く細密なハケメ(細密な条痕)が見られる。	A1041
図版2-41	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	1/8	ハケメ(細密な条痕)。	A1030
図版2-42	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	破片	ハケメ(条痕)。	A1055
図版2-43	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	破片	外面ハケメ(細密な条痕)、内面ナデ。	A1038
図版2-44	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	破片	胴部粗い条痕。	A1044
図版2-45	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	破片	胴部に4本の沈線。胴部には粗いハケメ？が見られる。	A1042
図版2-46	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	壺	破片	縦の貫通孔がある縦状の突起。赤彩が部分的に残る。	A1045
図版2-47	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	壺	1/8	只疵条痕文？	A1046
図版2-48	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	壺	1/6	縄文？元煤部に赤彩。表面に黒色付着物。	A1028
図版2-49	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	1/6	口縁部ナデ、胴部浅いハケメ。	A1027
図版2-50	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	壺	1/3	口縁部ナデ、胴部ハケメ調整後ナデ。口縁部小突起は5単位。	A1047
図版2-51	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	鉢	底部1/1	底部ナデ。	A1024
図版2-52	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	1/4	内外面ナデ、口唇部にM字状の小突起。	A1023
図版2-53	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	?	底部破片	底面網代痕。	A1040
図版2-54	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	1/6	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ(細密な条痕)。	A1025
図版2-55	A4	SQ01	縄文晩期Ⅱ期	甕	1/8	口縁部に小突起。同版番号54と同一個体か？。	A1026
図版3-56	E2	9b層・10b層	弥生Ⅱ期	壺	破片	頸部縄文施文の後巻と押引状の刺突列。胴部上部太い沈線による区画内を押引状の刺突を充填する。下半部は横位の帯状区画内は縄文施文後擦状工具による刺突を施す。押引状の刺突を光沢した三角文が配置される。	E161
図版3-57	A3西	SD111	弥生Ⅱ期	壺	1/2	口唇部刻み又は縄文。頸部に沈線がめぐる。器面全面ミガキであるが、部分的にハケメが残る。	A1093
図版3-58	D3	SD10	弥生Ⅱ期	壺	1/5	口唇部縄文施文。	D60
図版3-59	D2	27-1層	弥生Ⅰ期・Ⅱ期	壺	破片	口唇部に縄文？が施文され、円部に赤色顔料が付着。	D169
図版3-60	B2	SD106	弥生Ⅱ期	壺	頸部1/2	沈線間縄文施文。	B119

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版3-61	B2	SD106	弥生II期	壺	頸部1/3	沈線間に縄文と棒状工具による刺突列。縄文部分は低隆帯となる。	B121
図版3-62	B2	SD105	弥生II期	壺	頸部1/1	頸部沈線間縄文施文。胴部外面縦ミガキ、内面ナデ。	B115
図版3-63	D3	SC06	弥生II期・III期前半	壺	破片	内外面ナデ。	D164
図版3-64	D3	25・1層	弥生II期・III期前半	壺	1/3	内外面ナデ。黒褐色を呈する。	D154
図版3-65	D1	第6A水田	弥生II期後半・III期前半	壺	1/3	内面赤彩、外面ナデ。口唇部は円形棒状工具の腹面による刻み。	D8
図版3-66	D3	第6C水田(23層十溝)	弥生II期	壺	1/6	口唇部に刻み。器面の摩耗が著しい。	D149
図版3-67	E2	SQ102	弥生III期	壺	口縁のみ欠損	頸部2条の櫛描簾状文(5本1単位)。簾状文の下に短沈線で充填される無蓋文。胴部は赤彩・ミガキ。	E130
図版3-68	E1	第2水田面	弥生III期	壺	3/4	頸部櫛描簾状文の下に櫛描直線文。外面ナデ、内面指頭圧痕。外面に僅かに赤彩の痕跡が見られる。	E136
図版3-69	E1	SD14	弥生III期	壺	ほぼ完形	外面は口縁部ナデ、胴部ミガキ？口縁部内面から外面にタール状の黒色付着物。口縁部僅かに欠損。	E32
図版3-70	E2	SK03	弥生III期	壺	胴部1/1	口縁のみ欠損。外面赤彩・ミガキ、胴下半部にハケメが残る。内面は口縁赤彩・ミガキ、胴下半部ハケメ。	E52
図版3-71	E2	SK03	弥生III期	壺	胴部1/1	外面は頸部櫛描直線文、胴部上半赤彩・ミガキ、胴下半部ミガキ。内面は口縁部赤彩。胴下半部の孔は焼成後の人為的な穿孔と考えられる。外面にタール状の黒色付着物。	E63
図版3-72	E1	SK02	弥生III期	壺	完形	外面と口縁内面赤彩・ミガキ。頸部下半文は4本1単位の横位櫛描文の後、2本1単位の縦位櫛描文で構成される。縦位直線文は9ヵ所。赤彩部が駆虫下半文部まで及んでいるが、ミガキは及んでいない。	E3
図版3-73	E2	SK02	弥生III期・IV期	壺	1/6	外面は頸部櫛状描直線文、胴部赤彩・ミガキ。内面はナデ。図版番号72と同一個体の可能性有り。	E64
図版3-74	E2	SK03	弥生III期	壺	胴部1/1	外面はハケメ→頸部櫛描直線文→口縁部と胴部ミガキ。頸部はハケメが残る。内面は胴部下半がハケメ、胴部上半から口縁ミガキ。外面に黒色付着物。	E61
図版3-75	D2	SC107	?	壺?	1/5	外面ヨコナデ。	D25
図版3-76	D2	23・2層	弥生II期・III期？	壺	1/3	ナデ。	D43
図版3-77	E2	SK02	弥生III期・IV期	壺	1/8	口縁内外面赤彩・ミガキ。頸部櫛描直線文。	E65
図版3-78	E2	SK01	弥生III期	壺	3/4	口縁内面と外面口縁上端部に赤彩・ミガキ。他はミガキのみ。頸部に櫛状直線文が僅かに確認される。	E45
図版3-79	E2	SK01	弥生III期・IV期	壺	1/6	口縁部内外面赤彩・ミガキ。	E55
図版3-80	E2	SK01	弥生III期	壺	1/4	口縁部内面赤彩・ミガキ。外面ミガキ。口縁端部ナデ。	E58
図版3-81	C2	第6水田面	弥生III期後半・IV期	壺	破片	内外面赤彩・ミガキ。	C53
図版4-82	E2	SQ103	弥生III期	壺	1/3	頸部に2条の櫛描簾状文。簾状文下には櫛描波状文。内外面にハケメが観察に残る。	E151
図版4-83	D3	SD07	弥生III期・IV期	壺	1/12	口縁内外面ミガキ。	D77
図版4-84	B2	SD105・106	弥生III期	壺	口縁1/2	外面ハケメ調整後頸部に横位の沈線で区画を成し、区画内を沈線で充填。内面赤彩・ミガキ。	B137
図版4-85	E2	SK01	弥生III期	壺	口縁1/6～1/4	口縁内面と外面口縁上端部に赤彩・ミガキ。外面口縁から垂状に伸びる赤彩部が確認される。頸部櫛描直線文に施文工具による縦位の沈線。	E46
図版4-86	E2	SK02	弥生III期後半	壺	1/8	口縁の内面赤彩・ミガキ、外面はハケメ後ミガキで口縁端部のみ赤彩。外面にハケメが観察に残る。	E66
図版4-87	D3	SC03	弥生III期	壺	1/8	口縁部内面赤彩、外面ミガキ。頸部櫛描下字文。胎土が白っぽく(図版4-88)に類似。	D160
図版4-88	D3	SC03	弥生III期	壺	1/8	口縁部内面赤彩、外面ミガキ。白っぽい胎土。	D159
図版4-89	E2	8a層	弥生III期	壺	1/2	口縁内面赤彩・ミガキ、外面ナデ又はミガキ。	E145
図版4-90	E2	SK01	弥生III期	壺	1/2	口縁内面と外面口縁上端部に赤彩。頸部櫛描下字文は横位の櫛状直線文と縦位の2本・対の斜線を2箇ずつで4本の条線としたもので構成される。縦位の条線は5ヵ所。	E43
図版4-91	E2	7b層	弥生III期	壺	1/4	口縁内面赤彩・ミガキ、外面ナデ。	E156
図版4-92	B2	SD106	弥生II期・III期	壺	口縁1/4	口縁部外面波状文、内面のみ赤彩・ミガキ。	B123
図版4-93	E1	SD12	弥生III期	壺	1/12	口縁内面赤彩。	E135
図版4-94	E2	SK01	弥生III期	壺	1/6	口縁部内面赤彩・内面ミガキ、外面ナデ。	E57
図版4-95	E1	SK01	弥生III期	壺	1/3	口縁部内面赤彩・ミガキ、外面ミガキ。頸部上段は簾状文。下段は櫛描直線文(8本単位)。	E2
図版4-96	E2	SQ04	弥生III期後半・IV期	壺	1/4	胴上半部と下半部は接合しないが、出土状況と胎土が類似していることから、同一個体と判断される。胴上半部には櫛描直線文が観察される。同一個体と思われる1片の胴部破片に赤彩有り。	E89
図版5-97	E2	SQ16	弥生III期・IV期	壺	口縁1/1 胴下半1/2	口縁部内外面ハケメ後ミガキ。頸部櫛描下字文。胴部外面はミガキ、内面はハケメ後ナデ。櫛描文は11本1単位。	E87
図版5-98	E2	SQ20	弥生III期後半	壺	1/2	口縁部内面ハケメ後ミガキ。外面は浅いハケメの後ミガキ。内面は浅い横方向のハケメ。赤彩は見られず、頸部から胴部下部にタール状の黒色付着物が見られる。	E96
図版5-99	E2	SQ06	弥生III期	壺	ほぼ完形	胴部に3条の櫛描直線文。口縁内外面と胴部外面はハケメ後ミガキ。ハケメが部分的に残る。口縁を欠く。	E77
図版6-100	E2	SQ11	弥生III期後半	壺	1/2 (胴下半1/1)	口縁内面赤彩・ミガキ。口縁外面と胴部はミガキ。頸部櫛描直線文と2条の垂下する沈線により下字文を構成する。	E83
図版6-101	E2	SQ14	弥生III期後半	壺	1/8～1/4	頸部櫛描下字文。櫛歯状工具は8本1単位。胴部上半は赤彩・ミガキで、赤彩部上端縦金状になると推定される。	E85
図版6-102	E2	SK01	弥生III期	壺	頸部1/1	頸部櫛描直線文。口縁部内面と櫛描直線文の下に幅2.5cmほどの垂状の赤彩・ミガキ。外面口縁部と胴部の太赤彩部分はミガキ。	E42

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版6-103	E2	SK01	弥生III期後半	壺	1/2	外面は胴部横描直線文→荒状工具による2本1対の縦位の沈線。胴部赤彩・ミガキ。内面はヘケメ後ナデ。	E41A
図版6-104	E2	SQ02	弥生III期後半・IV期	壺	4/5	口縁部内外強赤彩・ミガキ。頸部横描下字文。下字文は6ヵ所で1周。垂直状工具は7本1単位。胴部外面赤彩。	E74
図版7-105	E2	SQ18	弥生III期	壺	ほぼ完形	頸部横描直線文。口縁部内外面と胴部上半部外面赤彩・ミガキ。赤彩が横描直線文にかかる。	E89
図版7-106	E2	SK01	弥生III期	壺	胴部5/6	外面ミガキ。胴部外面にタール状の黒色付着物。明赤褐色を呈し、表面が剥落している所が見られ、二次焼成か？	E41B
図版7-107	E2	SK01	弥生III期	壺	1/8	外面ミガキ、内面ハケメ及びナデ。	E49
図版7-108	E2	SQ15（8層）	弥生III期	壺	胴下部3/4	胴部外面の上半は赤彩・ミガキ、下半はミガキ。内面はハケメ。	E173
図版8-109	E2	SQ05	弥生III期	壺	3/5 以上は1/4	口縁部内面赤彩。頸部横描下字文。下字文は6ヵ所と推定される。櫛歯状工具は7本1単位。胴下半部に被熱あり。	E76
図版8-110	E2	SQ10	弥生III期後半・IV期	壺	1/2	口縁部外面赤彩。胴部上半部赤彩・ミガキ。胴下半部はミガキ。頸部横描下字文。胴部に煤を持つ。	E82
図版8-111	E2	SQ08	弥生IV期	壺	1/4－1/3	口縁部内外面と胴部外面が赤彩・ミガキ。胴部は横位の6段の櫛状文と、縦位の2条1対の櫛描文により構成された下字文。横位の最上段は櫛描簾状文。他は直線文である。胴部内面はハケメ。底部とは縁部を欠く。	E79
図版9-112	E2	SQ07	弥生IV期	壺	3/5	頸部櫛描下字文と円形刺突があるボタン状貼付文（5ヵ所）。口縁部内外面と胴部赤彩。胴部にタール状の黒色付着物が帯状に付着。黒色付着物は割れ筋に沿っており、割れ前にも付着物が見られることから接着剤的な効果をねらったものであろう。土器破片が細かく、割れ面の摩耗が著しいことから、復元の段階で歪みが出た可能性が高い。胴下半部に明瞭な縦は見られない。	E78
図版9-113	E1	SD14	弥生III期・IV期	壺	1/6	内外面赤彩・ミガキ。外面にタール状の付着物。	E23
図版9-114	D2	SC109	弥生III期後半・IV期	壺	1/3	口縁内外面赤彩・ミガキ。	D24
図版9-115	B 2	SC123	弥生III期	壺	1/6	口縁部内外面赤彩・ミガキ。頸部下字文の縦の線は荒状工具による可能性有り。下字文の後部赤彩・ミガキ。	B162
図版9-116	E1	第2調査区	弥生III期後半・IV期	壺	2/3	口縁内外面赤彩・ミガキ。胴部櫛描直線文。	E113
図版9-117	D2	20 1層	弥生III期後半・IV期	壺	1/6	口縁内外面赤彩・ミガキ。胴部櫛描直線文が僅かに確認される。	D39
図版9-118	E1	SD14	弥生III期？	壺	1/6	櫛描簾状文。胴部ハケメ後ミガキ。胴部なハケメが僅かに残る。	E134
図版9-119	E1	SD14	弥生III期・IV期	壺	1/3	外面は胴部上半部赤彩・ミガキ、下半部ミガキ。内面ナデ。	E31
図版9-120	E1	SD12	弥生III期後半・IV期	壺	1/5	胴下半部の縦が見られる。内外面ハケメ後ミガキ。内面にハケメが顕著に残る。外面にタール状の黒色付着物。割れ口に部分的に付着物が確認される。	E125
図版10-121	C2	SA01	古墳I期	壺	1/2	外面ケズリ後敲状工具によるハケメ状のナデ。内面ナデ。器厚5mm－6mmと薄い。	C40
図版10-122	C2	第6水田	古墳I期	壺		外面ハケメ後ミガキ。内面ナデ？。	C28
図版10-123	C1	SA01	古墳I期	壺	1/8	口縁内外面赤彩。肩部に下字文。	C11
図版10-124	D2	SC112	弥生III期後半～古墳I期	壺	1/12	外面ミガキ。胴部に縦が認められる。	D30
図版10-125	D2	SM01	弥生IV期・古墳I期	壺	1/3	口縁内外面赤彩・ミガキ。	D32
図版10-126	D2	SM01	弥生後期～古墳前半期	壺	1/3	外面赤彩・ミガキ。図版10-125と同一個体。	D32
図版10-127	D2	SM01	弥生IV期・古墳I期	壺		口縁部内外面ミガキ。頸部横描下字文。胴部ミガキ。	D37
図版10-128	D2	SC112	古墳I期	壺	ほぼ完形	口縁部内外面ミガキ。胴部外面はナデ又はミガキ、内面は上半部がナデ又はミガキで、下半部はハケメが観察される。	D36
図版10-129	D2	SM01	古墳I期	壺	1/2	胴上半部のみ赤彩。胴下半部はミガキ。口縁外面ミガキ、頸部付近に僅かに赤彩が確認される。器厚が5mm以下と薄手である。現在上に載って出土。	D35
図版10-130	C	SD3002	弥生IV期・古墳I期	壺	1/2	内面口縁部と外面赤彩・ミガキ。外面底部付近は赤彩がない可能性有り。月部2列の刺突列。	C39
図版10-131	D2	SD2005	弥生II期・III期？	壺	1/4	外面赤彩と縦間な櫛描波状文。内面ナデ。	D44
図版10-132	E1	SD12（覆土上層）	弥生III期・IV期？	壺	1/8	口縁端部を欠くが、口縁部鋸歯状を呈し3本の沈線が確認される。口縁内外面赤彩、胴部外面赤彩・ミガキ。北陸系か？	E122
図版11-133	E2	第3調査区	弥生II期	広口短頸壺	1/6	頸部に2個1対の円孔。	E114
図版11-134	D3	25-1層	弥生II期後半・III期前半	広口短頸壺	1/8	口縁内外面赤彩。頸部に直径1mmほどの円孔（2孔1対）。	D156
図版11-135	D3	第6C水田	弥生II期後半・III期前半	広口短頸壺	1/3	内外面赤彩。口縁部に直径3mmの円孔。円孔は2孔1対。	D151
図版11-136	D3	SC04	弥生II期後半・III期前半	広口短頸壺	1/8	内外面赤彩。	D161
図版11-137	E1	SQ01	弥生III期	広口短頸壺	1/8	頸部簾状文。胴部外面赤彩。内面ミガキ。	E6
図版11-138	A3	第6水田	弥生II期・III期	広口短頸壺	1/10	頸部に簾状文	A1091
図版11-139	A3	SC07	弥生II期・III期	広口短頸壺	1/6	頸部に沈線。	A1061
図版11-140	E1	第2水田	弥生III期・IV期	広口短頸壺	1/4	口縁部内外面、胴部外面赤彩。頸部に2個1対の円孔。	E110
図版11-141	E1	SD14	弥生III期・IV期	広口短頸壺	ほぼ完形	外面と、内面は縁から胴部上半赤彩・ミガキ。器周にハケメの僅かな痕跡が認められる。2個1対の円孔が2ヵ所。内部口縁部と外面にタール状の黒色付着物。口縁部を僅かに欠き、割れ口にもタール状の付着物が見られる。	E30
図版11-142	E1	SD14	弥生III期後半・IV期	広口短頸壺	1/8	内外面赤彩・ミガキ。頸部櫛描簾状文。	E28
図版11-143	E1	第2調査区	弥生III期・IV期	広口短頸壺	底部1/1	外面ミガキ、部分的に赤彩が見られる。	E112
図版11-144	E2	SK01	弥生III期・IV期	広口短頸壺	底部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ハケメ。	E52

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版11-145	E2	SQ01	弥生III期・IV期	広口短頸壺又は鉢	1/4	内外面赤彩。底面も赤彩。内面は刷毛しており僅かに赤彩が確認される。	E73
図版11-146	A3	第6水田	弥生II期・III期	広口短頸壺	1/2	外面赤彩・ミガキ、内面ナデ。	A1089
図版11-147	D3	第7B調査面	弥生III期	鉢	底部1/1	内面赤彩、外面ハケ後ナデ。外周に僅かに赤色顔料が見られる。	D135
図版11-148	D3	第7B調査面	弥生III期・IV期	広口短頸壺	1/2	外面赤彩、内面ハケ後ナデ。	D136
図版11-149	D2	SD107	弥生III期・IV期	高坏	坏部1/1	内外面赤彩・ミガキ。	D18
図版11-150	B2	SD105	弥生II期	高坏	坏部1/1	内外部赤彩・ミガキ。	B114
図版11-151	B2	SC117	弥生III期・IV期	高坏	脚部1/1	脚部外面、坏部内外面赤彩・ミガキ。	B159
図版11-152	D3	第6C水田(23層)	弥生III期・IV期	高坏	1/2	外面赤彩・ミガキ。脚部内面ナデ。	D152
図版11-153	E1	SD14	弥生III期	高坏	1/12	内外面赤彩。	E108
図版11-154	E2	8層内	弥生III期・IV期	高坏	1/8	内外面赤彩。外面は縦部に赤彩が確認されない。	E149
図版11-155	E2	8層内	弥生III期・IV期	高坏	1/12	内外面赤彩。外面タール状の黒色付着物。	E148
図版11-156	D3	SD07	弥生III期・IV期	高坏	破片	内外面赤彩。	D78
図版11-157	E2	7b層	弥生III期・IV期	高坏	1/12	内外面赤彩・ミガキ。	E152
図版11-158	C	SD3002	弥生III期後半・IV期	高坏	1/2	内外面赤彩・ミガキ。	C33
図版11-159	D2	第6調査面	弥生III期後半・IV期	高坏	2/3	内外面赤彩・ミガキ。坏部に稜を持つ。	D46
図版11-160	C2	第6水田	弥生III期・IV期	高坏	1/2	内外面赤彩・ミガキ。	C51
図版11-161	E1	SC01	弥生III期後半・IV期	高坏	1/8	坏部内外面赤彩。坏部の縁は不明瞭。	E119
図版11-162	D1	第6A水田	弥生III期後半	高坏	坏部1/2	坏部内面赤彩、外面ハケメ後ナデ。坏部の縁は不明瞭。	D12
図版11-163	E1	SA05	弥生III期・IV期	高坏	1/8	内外面赤彩・ミガキ。	E117
図版11-164	E1	SA02	弥生IV期・古墳I期	高坏	1/10	内外面赤彩。	E116
図版11-165	E1	SD14	弥生III期・IV期	高坏	1/5	内外面赤彩・ミガキ。	E26
図版11-166	E2	SQ12	弥生III期・IV期	高坏	1/6	内外面赤彩・ミガキ。	E84
図版11-167	C1	SA01	弥生III期・IV期	高坏	坏部1/1	内外面赤彩・ミガキ。脚部4単位の三角形透かし。	C19
図版12-168	R2	SQ20	弥生III期・IV期	高坏	1/4	口縁部に小突起が確認されるが、欠損しているため単位は不明。内外面赤彩。	E98
図版12-169	E2	SK01	弥生III期後半・IV期	高坏	1/4	内外面赤彩・ミガキ。	E54
図版12-170	D3	SD12	弥生II期	高坏	脚部1/1	外面赤彩。脚部に低段帯。	D70
図版12-171	B 2	SD105・106	弥生II期	高坏	脚部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	B136
図版12-172	E1	SD14	弥生III期後半・IV期	高坏	脚部1/4	4単位の三角透かし孔。外面赤彩・ミガキ。内面ハケメ後ナデ。	E22
図版12-173	E1	SQ01	弥生III期後半・IV期	高坏	脚部1/2	赤彩・ミガキ。	E7
図版12-174	E2	SK02	弥生III期・IV期	高坏	脚部1/2	脚部外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。黒色を呈する。	E67
図版12-175	D3	第7B調査面	弥生III期・IV期	高坏	脚部1/1	脚部は外面赤彩、内面ナデ。	D137
図版12-176	E2	SK01	弥生III期・IV期	高坏	脚部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ハケメ後ナデ。	E53
図版12-177	E2	SQ19	弥生III期・IV期	高坏	脚部1/4	脚部外面赤彩、内面黒色を呈する。	E91
図版12-178	E1	SQ01	弥生III期後半・IV期	高坏	脚部1/2	脚部外面赤彩・ミガキ、内面ナデ。	E9
図版12-179	E1	SD14(既出)	弥生III期・IV期	高坏	脚部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ハケメ。	E17
図版12-180	D3	SD07	弥生III期後半・IV期	高坏	脚部1/12	脚部外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	D82
図版12-181	B2	SC117	弥生III期・IV期	高坏	脚部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	B160
図版12-182	C	SD3002	弥生III期・IV期	高坏	脚部1/1	脚部外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	C35
図版12-183	C1	SA01	弥生III期・IV期	高坏	脚部1/1	外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。	C13
図版12-184	E1	SD04?	弥生III期後半・IV期	高坏	1/3	外面赤彩・ミガキ。内面ナデ。三角透かしは4単位。	E142
図版12-185	E2	SD03	弥生IV期・古墳I期	高坏	1/3	脚部外面赤彩、内面にも部分的に赤色顔料が付く。3単位の円形透かし。	E168
図版12-186	D3	SD10・11	弥生II期・III期前半	鉢	底部3/4	内外面赤彩・ミガキ。底面ケズリ後ナデ。	D55
図版12-187	E2	SQ01	弥生III期・IV期	高坏	坏部1/1	内外面赤彩・ミガキ。	E70
図版12-188	D1	SC1001	弥生III期?	鉢	3/4	内外面赤彩。遺物番号102・103・104・105・118・123。	D2
図版12-189	E2	SQ15	弥生III期・IV期	鉢	1/4	内外面赤彩・ミガキ。底面はナデ。	E86
図版12-190	B 2	SD106	弥生II期・III期	鉢	ほぼ完形	内外面赤彩・ミガキ。	B134
図版12-191	E2	SK02	弥生III期・IV期	鉢	ほぼ完形	口縁部を僅かに欠損。内外面赤彩・ミガキ。	E69
図版12-192	E1	試掘15層	弥生	壺	3/4	内外面ハケメ後ナデ。	E139
図版12-193	E1	第2水田	弥生III期・IV期?	壺	1/3	内外面ミガキ。	E111
図版13-194	A4	SA02	弥生II期	甕	1/3～2/3	口縁部に刻み。口縁部横ミガキ。頸部は3～4本の波状沈線、胴部はハケメ後斜状沈線。3状沈線は右から左へ展開。	A1049
図版13-195	D3	SD10	弥生II期・III期前半	甕	1/8	筆沈線?による波状文。	D58
図版13-196	B 2	SC124	弥生II期	甕	1/4	胴部上半部は櫛歯状工具による条線と板状工具による刺突列。口唇部神状工具取部による刻みと縄文。外面に黒色付着物。	B166
図版13-197	D2	27-7層	弥生II期	甕	1/3	口唇部円形棒状工具痕部による刻み。胴部は櫛描羽状文。	D168
図版13-198	E2	第4水田	弥生II期後半・III期前半	甕	1/5	口縁部ナデ。頸部櫛描波状文、胴部櫛描の羽状文か?	E158
図版13-199	D2	23-2層	弥生III期?	甕	1/10	ヨコナデ。	D42
図版13-200	E1	SD14	弥生III期	甕	1/6	整種T字文。縦位の櫛描文は5本1単位の櫛歯状工具で2条単位とする。T字文→櫛描波状文。	E27
図版13-201	D3	18層	弥生III期?	甕	破片	外面櫛描波状文→擬凝線状文。口縁内面赤色。	D146
図版13-202	E1	SD14	弥生III期	甕	1/4	外面ハケメ調整後、櫛描擬凝状文→櫛描波状文。内面口縁部ナデ、胴部ハケメ。	E25

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版13-203	E1	SD14	弥生Ⅲ期	壺	1/6	外周は櫛描簾状文・櫛描波状文。内周は口縁部ナデ、胴部ハケメ(ハケメは箆肉状工具)。	E29
図版13-204	E2	SK01	弥生Ⅲ期	壺	1/4	櫛描簾状文→櫛描波状文→ボタン状貼付文(口縁部と胴部波状文の下端部)。内面はミガキ。	E44
図版13-205	E1	SD14	弥生Ⅲ期後半	壺	1/4	ハケメ調整後、櫛描簾状文→櫛描波状文。胴部にハケメが眼密に残る。	E21
図版13-206	E2	SQ01	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	底部1/1	櫛描波状文→櫛描簾状文。胴下半部内外面ミガキ。	E71
図版13-207	E2	SA01	弥生Ⅲ期	壺	1/2	櫛描簾状文。櫛描波状文。	E164
図版13-208	E1	SK01	弥生Ⅲ期	壺	ほぼ完形	頸部縦位の櫛描直線文→波状文→縦位の櫛描直線文。胴下半部ミガキ。胴部外面に黒色付着物。	E1
図版14-209	D3	SC06	弥生？	壺？	破片	無文？。器面摩耗が著しい。	D163
図版14-210	E2	SQ03	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	壺	3/4	櫛描波状文。口縁端部が僅かに受け口状を呈する。	E75
図版14-211	D3	第6調査面(撹乱地)	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	1/2	櫛描波状文→櫛描簾状文。	D138
図版14-212	E2	SQ01	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	壺	1/3	櫛描波状文。内面ミガキ。	E72
図版14-213	E1	SD14	弥生Ⅲ期後半	壺	1/4	外面櫛描波状文。内周ミガキ。外周に黒色付着物。	E100
図版14-214	D3	SD07	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	1/2	櫛描簾状文。櫛描波状文。口縁端部や中受け口状を呈す。無文部は内外面ミガキ。	D79
図版14-215	E2	SQ20	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	壺	1/2	櫛描簾状文、櫛描波状文。器面が著しく摩耗する。	E97
図版14-216	E2	SQ09	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	1/2	胴部櫛描簾状文→櫛描波状文。胴下半部ミガキ。口縁部内面はハケメ後ミガキ。	E81
図版14-217	E2	SQ17	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	壺	底部のみ欠損	櫛描簾状文・櫛描波状文。口縁内面、胴下半部外面ミガキ。	E88
図版14-218	E1	SQ01	弥生Ⅲ期後半？	壺	1/4	外面ハケメ後、簾状文→波状文。外面胴下半部ミガキ、黒色付着物。	E8
図版14-219	E1	SD14	弥生Ⅲ期後半	壺	2/3	2段の櫛描簾状文と櫛描波状文。6本1単位の箆肉状工具。口縁部端部ナデ。	E14
図版14-220	E1	SD14	弥生Ⅲ期後半	壺	2/3	外面櫛描波状文と櫛描簾状文。胴下半部ミガキ。胴部外面黒色付着物。	E16
図版14-221	E1	SD14	弥生Ⅲ期後半	壺	5/6	ハケメ後ナデ調整を行った後、櫛描簾状文→櫛描波状文。頸部と胴上半部に黒色付着物。内周口縁から胴部上半はミガキが認められる。	E13
図版15-222	E1	SQ04	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	1/2	ハケメ後、櫛描波状文→櫛描簾状文。外周黒色付着物。口付部抛取り。	E10
図版15-223	C2	SC41	弥生Ⅳ期	壺	ほぼ完形	折返し口縁、簾状文→波状文。胴下半部はミガキ、ハケメ痕像かこと見られる。胴部外面黒色付着物。	C10
図版15-224	D3	第5水田	弥生Ⅲ期・古墳Ⅰ期	壺	2/3	粗雑な櫛描波状文。胴下半部ナデ。	D83
図版15-225	D2	SC110	弥生Ⅳ期	壺	1/2	櫛描波状文→頸部櫛描直線文。器面は摩耗・剥落が著しい。	D26
図版15-226	D2	SC109	弥生Ⅳ期	壺	底部1/1 胴部1/2	頸部付近のみ櫛描波状文。器面が摩滅している。	D22
図版15-227	E2	SK02	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	胴部1/1	櫛描簾状文→櫛描波状文。外面胴部に黒色付着物。	E60
図版15-228	D3	SD07	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	壺	1/5	櫛描簾状文→櫛描波状文。外周に黒色付着物。	D81
図版15-229	C2	39層	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	壺	1/3	簾状文→波状文。胴下半部ミガキ。	C21
図版16-230	E1	SQ03-04	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	壺	2/3	胴上半部浅い櫛描波状文、同下半部ミガキ。表面の剥落が著しい。	E11
図版16-231	C2	SA01	弥生Ⅳ期・古墳Ⅰ期	壺	底部1/1	綾密なハケメ後ミガキ。残存部上端に波状文が僅かに確認される。内面に顕著な黒色付着物(スクリーントーン部)器厚4mm～6mmと薄い。	C39
図版16-232	E2	SQ19	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	壺	3/4	胴下半内外面ミガキ。	E90
図版16-233	E1	SD12 (撹上上面)	弥生Ⅲ期？	甕？	1/2	外面粗いミガキ、内面板状工具による粗いナデ。底部周辺に指頭圧痕。	E123
図版16-234	E1	SQ05	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	甕？	底部1/1	外面ミガキ、内面ミガキ。	E12
図版16-235	E1	第2調査面	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	甕又は壺	底部1/1	内外面ミガキ。外面に暗褐色の赤彩？。外面にタール状の黒色付着物。付着密は預れ口にもあり、内面にも微かに観察される。	E129
図版16-236	C	SD3002	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	台付甕	脚部のみ欠損	簾状文→波状文。外面胴下半部ミガキ、内面ミガキ。	C37
図版16-237	E1	SD01	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	台付甕	口縁1/12	脚部と壺部の接合部が明瞭に観察される。櫛描簾状文・櫛描波状文。	E120
図版16-238	D2	SC110	弥生Ⅲ期後半・Ⅳ期	台付甕	ほぼ完形	櫛描簾状文、櫛描波状文。胴下半はミガキ。口付部周取り、櫛歯状工具による沈線。	D20
図版16-239	C2	第6水田	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	台付甕	脚部1/1	脚部ナデ。胴部内面ミガキ。	C52
図版16-240	D2	SC103	弥生Ⅲ期・Ⅳ期	台付甕又は高杯		外面ハケメ後ミガキ。	D21
図版16-241	B2	SD106	弥生Ⅱ期？	壺？	破片	胴部刺突列。	B131
図版16-242	D3	SC06	弥生Ⅱ巻	壺？	破片	沈線間に赤色顔料が付着。	D166
図版16-243	D3	25-1層	弥生Ⅱ期	壺	破片	沈線間に縄文、板状工具による刺突列。	D157
図版16-244	B2	SD106	弥生Ⅱ期	壺	破片	沈線間ハケメ？、縄面文内状文。外面赤彩。	B128
図版16-245	C1	SA01	弥生Ⅱ期・Ⅳ期？	壺	破片	細い棒状工具による沈線。	C14
図版16-246	B2	SD106・SC110	弥生	壺	破片	細沈線による格子目文。	B135
図版16-247	B2	SD106	弥生Ⅱ期	壺	破片	沈線。	B132
図版16-248	D3	SD11	弥生Ⅱ期	壺	破片	押し引き状の刺突列、櫛描直線文、縄文、ボタン状貼付文。図版16-249と同一個体か。	D63

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版16-249	D3	SD10	弥生II期・III期前半	壺	破片	押し引き状の刺突列、横描直線文、縄文。	D57
図版16-250	D3	25-1層	弥生II期	壺	破片	並行直線、沈線内に赤色顔料が残る。	D153
図版16-251	D3	SD11	弥生II期	壺	破片	頸部並行沈線。	D65
図版16-252	B2	SD106	弥生II期	壺	破片	沈線間に縄文と棒状工具による刺突列。	B118
図版16-253	D3	SD13	弥生II期	壺	破片	磨り消し縄文。	D73
図版16-254	B2	SD105-106	弥生III期	壺	破片	頸部横描直線文に直交する2本1対の沈線、赤彩無し。	B140
図版16-255	D3	SC08	弥生II期・III期前半	壺？	破片	櫛描波状文と沈線。	D134
図版16-256	E1	SD12	弥生III期	壺	破片	櫛描簾状文の下側に櫛描波状文。図版3-68に類似。	E127
図版16-257	E1	SD14	弥生III期終末・IV期	壺	破片	櫛描下向文。	E133
図版16-258	E1	SD12	弥生III期終末・IV期	壺	破片	頸部櫛描下向文。幅広は3本1単位の櫛描文。	E126
図版16-259	C1	SA001	弥生III期～古墳I期	壺	破片	櫛歯状工具による下向文。外面黒色付着物。	C12
図版16-260	C	SD3002	弥生III期	壺	破片	頸部櫛状文。鋸沈線による充填的な三角文。赤彩無し。	C34
図版16-261	E1	第2水田	弥生III期・IV期	広口短頸壺	破片	外面赤彩。底部に棒状工具による刺突。	E137
図版17-262	A4	第10調査面？	弥生I期	甕	破片	外面条痕、口唇部面取り。表面剥落。	A1051
図版17-263	A4	第10調査面？	弥生I期	甕	破片	条痕？	A1050
図版17-264	D3	SD10	弥生II期	甕	破片	口唇部縄文施文。口縁部ナデ。頸部に並行直線文が僅かに確認される。図版17-165と同一個体か。	D59
図版17-265	D3	SD10	弥生II期	甕	破片	ハケメ後斜行直線文。	D59
図版17-266	E1	第2水田	弥生II期	甕	破片	斜行直線文。口唇部に縄文は刻みの痕跡。	E138
図版17-267	A3	SC01	弥生II期	甕	破片	口台部に刻み、頸部に沈線。	A1088
図版17-268	D3	第6C水田（23層）	弥生II期	甕	破片	口唇部刻み。胴部櫛描斜行直線文。	D158
図版17-269	A3西	SD111	弥生II期	甕	破片	口唇部縄文。頸部波状文。	A1066
図版17-270	D3	第6C水田（23層）	弥生II期	甕	破片	口台部に刻み。胴部櫛描の縦羽状文。外面黒色付着物	D150
図版17-271	B2	SD106	弥生II期	壺	破片	口唇部刻み、頸部波状文。	B125
図版17-272	D1	第6A水田	弥生II期	甕	破片	コの字型わ文。円形刺突があるボタン状貼付文。	D11
図版17-273	B2	SD106	弥生II期	壺	破片	コの字重ね文。ボタン状貼付け。	B133
図版17-274	D1	SC1001	弥生III期	甕	破片	櫛描波状文？	D6
図版17-275	B2	SD106	弥生II期	壺	破片	櫛描波状文。	B130
図版17-276	D3	SC06	不明	不明	破片	荒状工具による並行沈線。	D187
図版17-277	D3	SD11	弥生II期・III期前半	壺	破片	太い櫛描波状文。図版13-195と同一器形。	D67
図版17-278	D3	SD13	弥生？	甕？	破片	内面ハケメ、外面はハケメ後ナデ。	D72
図版17-279	D3	SD12	弥生II期・III期前半	壺	破片	ハケメ後斜行直線文。	D71
図版17-280	E2	第4水田	弥生II期	甕	破片	櫛曲状工具による羽状文（後期の櫛描文に比べ条線が細い）。円形刺突があるボタン状貼付文。	E159
図版17-281	D1	第6A水田	弥生II期後半・III期前半	甕	破片	櫛描波状文、櫛描斜行直線文。	D10
図版17-282	E2	第4水田	弥生II期・III期前半	甕	破片	斜行直線文（羽状文か？）。	E162
図版17-283	E2	第4水田	弥生II期・III期前半	甕	破片	斜行直線文（羽状文か？）。	E160
図版17-284	B2	SD106	弥生II期	壺	破片	波状文と板状工具による刺突列。	B120
図版17-285	D2	SD2005	弥生II期	甕	破片	櫛描斜行直線文。	D13
図版17-286	D3	SC06	弥生III期	壺	破片	櫛描波状文、櫛描簾状文。	D165
図版17-287	E2	7b層	弥生III期	甕	破片	櫛描波状文、櫛描簾状文。図版13-204に類似。	E157
図版17-288	B2	SD106	弥生II期	壺	破片	頸部に直線文後波状文。口台部縄文？。	B122
図版17-289	B2	SD106	弥生II期	甕	破片	口縁部波状の刻み。櫛曲状工具による斜行直線文と頸部の横位直線文。	B117
図版17-290	E1	SQ01	弥生III期	壺	破片	波状文のみ。	E5
図版17-291	E1	SD12	弥生III期・IV期	甕	破片	櫛描波状文。	E172
図版17-292	D2	20-1層上	弥生III期	壺	1/6	櫛描波状文、櫛描波状文。内面ミガキ。	D40
図版17-293	E1	SD14	弥生III期	甕	破片	頸部横位の櫛描直線文に縦位の櫛描直線文を垂下する。胴部に櫛描波状文。	E163
図版17-294	D3	22層	弥生III期	壺	破片	頸部は横位の櫛描直線文後垂下する2本1対の櫛描文、口縁と胴部は櫛描波状文。	D148
図版17-295	E1	SD14	弥生III期	壺	破片	2条の櫛描簾状文。櫛描波状文。櫛描波状文間にハケメが残る。	E141
図版17-296	E1	SD14	弥生III期後半	壺	1/4	外面櫛描波状文、内面ハケメ後ミガキ。外面に黒色付着物。	E99
図版17-297	E1	SD11	弥生III期？	甕	1/5	櫛描波状文。外面黒色付着物。	E171
図版17-298	E1	SD14	弥生III期・IV期	壺	1/4	櫛描波状文。	E19
図版18-299	E2	8層	弥生III期・IV期	壺	破片	櫛描波状文。	E147
図版18-300	D1	SC112	弥生III期	甕	破片	櫛描波状文。	D4
図版18-301	E1	SD11	弥生III期？	壺	破片	櫛描波状文。	E170
図版18-302	E2	7b層	弥生III期・IV期	甕	破片	櫛描波状文、櫛描簾状文。	E153
図版18-303	B2	SD105	弥生III期・IV期	甕	破片	波状文。	B116
図版18-304	B2	SC124	弥生III期・IV期	甕	破片	頸部簾状文？、波状文。	B165
図版18-305	E1	SD14	弥生III期後半	甕	破片	頸部櫛描直線文？と口縁部櫛描波状文。	E102
図版18-306	E1	第2調査面	弥生III期・IV期	壺	破片	櫛描波状文。	E122
図版18-307	E2	7b層	弥生III期・IV期	甕	破片	櫛描波状文。	E146
図版18-308	E2	7b層	弥生III期・IV期	甕	破片	櫛描簾状文、櫛描波状文。	E146
図版18-309	D2	23-2層	弥生III期・IV期	甕	破片	櫛描波状文。外面に黒色付着物。縦口縁にも黒色付着物がみられる。ただし、縦口縁と判断した部分が口縁であるか可能性が有り、端部に櫛曲状工具による刺突が見られる。	D41
図版18-310	A3	第6水田	弥生III期・IV期	甕	破片	簾状文、波状文。	A1092

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版18-311	D3	SC04	弥生II期・IV期	甕	破片	櫛描波状文。外面に黒斑あり。	D162
図版18-312	B2	SD106	弥生II期	甕	破片	波状文、ボタン状粘付け。	B129
図版18-313	E1	SA05	弥生III期・IV期	甕	破片	櫛描波状文、櫛描簾状文が僅かに確認される。	E118
図版18-314	A3	第5水出	弥生III期・IV期	甕	破片	簾状文、波状文。	A1085
図版18-315	A3	SC02	弥生III期・IV期	甕	破片	波状文。	A1087
図版18-316	B2	SD105	弥生III期・IV期	甕	破片	簾状文後波状文。	B116
図版18-317	D2	SD107	弥生III期・IV期	甕	破片	櫛描波状文	D17
図版18-318	E1	SD12	弥生III期・IV期	壺	破片	櫛描波状文。	E124
図版18-319	B2	SD105-106	弥生II期？	壺	破片	櫛描波状文。粘土が他の壺と異なり、焼成が硬質。	B139
図版18-320	E1	SD14	弥生III期？	甕	破片	櫛描波状文。胴部にハケメ残る。	E104
図版18-321	E1	SQ01	弥生III期・IV期	甕	破片	ハケメ後簾状文→波状文。	E4
図版18-322	B2	SC123	弥生III期・IV期	甕	破片	張部簾状文？後波状文。	B163
図版18-323	B2	SD106	弥生II期・III期	甕	破片	頸部簾状文、後胴部波状文。ハケメ痕を残す。	B127
図版18-324	E2	SA01	弥生III期？	甕	破片	櫛描簾状文、櫛描波状文。内面ハケメ後ナデ？でハケメが残る。	E165
図版18-325	C	SD3002	弥生III期・IV期	甕	破片	波状文→簾状文。	C32
図版18-326	D1	SC1001	弥生III期・IV期	甕	破片	櫛描簾状文、櫛描波状文。	D5
図版18-327	D1	第6水出	弥生III期？	甕	破片	櫛描簾状文、櫛描波状文。	D9
図版18-328	E1	第2調査面	弥生III期後半・IV期	甕	破片	外面櫛描波状文、内面ミガキ。外面に黒色付着物。	E131
図版18-329	E1	SD14	弥生III期？	甕	破片	頸部櫛描簾状文？、胴上半部櫛描波状文、胴下半部ミガキ。胴上半部にハケメが顕著に残る。	E140
図版18-330	E1	SD14	弥生III期後半・IV期	甕	破片	外面頸部櫛描簾状文と櫛描波状文。外面に黒色付着物。内面にタール状の黒色付着物。	E101
図版18-331	A3	SC04	弥生III期・IV期	甕	破片	櫛描波状文。黒色付着物。	A1063
図版19-332	E2	SK01	集落III期・古墳I期	鉢？	1/12	外面ハケメ後ミガキ。内面ハケメ後ミガキ。	E47
図版19-333	D3	SK07	集落III期～古墳I期	鉢	3/4	手ずくね。内外面ミガキ又はナデ。	D129
図版19-334	D3	SK07	集落III期～古墳I期	鉢	5/6	内面ミガキ、外面ハケメ後ミガキ。	D130
図版19-335	C	SD3002	集落IV期～古墳I期	鉢	1/2	外面ハケメ後粗いミガキ。内面ハケメ後ナデ。内面黒色を呈する。底部3.6cm。	C31
図版19 336	D1	SC1001	弥生III期？	鉢	1/2	内外面ナデ。	D1
図版19-337	B2	SD103	古墳III期・IV期	上師器坏	1/8	外面ミガキ、内面ミガキ。	B11
図版19-338	C1	SC51	古墳III期・IV期	土師器鉢	完形	内外面ミガキ。	C6
図版19-339	C2	SC02	古墳III期～古代I期	土師器鉢	1/3	内外面ミガキ。表面摩耗。	C3
図版19 340	C1	SC52	古墳III期・IV期？	土師器鉢	1/3	外面胴部ミガキ、口縁ヨコナデ。口縁面取り。外面金面に黒色付着物。	C7
図版19-341	C1	SC52	古墳III期・IV期	土師器鉢	1/6	内面ミガキ。外面上半部なで、下半部から底部ケズリ。	C8
図版19-342	C1	SC52	古墳III期・IV期	土師器鉢	1/6	内外面ミガキ。	C9
図版19-343	B2	SC104	古墳III期～古代I期	土師器坏	1/5	内面黒色処理、外面胴部ケズリ、底部ナデ。	B161
図版19-344	B2	SC110	古墳III期～古代I期	土師器坏	1/6	内面黒色処理、ミガキ。外面ミガキ。	B157
図版19-345	B2	SC108	古墳III期～古代I期	土師器坏	1/4	内面黒色処理、ミガキ。外面胴下半ケズリ、上半部ミガキ。	B155
図版19 346	B2	SC140	古墳III期～古代I期	土師器坏	1/6	内面黒色処理、ミガキ。外面ミガキ。	B168
図版19-347	B2	第3水出	古墳III期～古代I期	土師器坏	口縁1/6	内面黒色処理、ミガキ。外面ケズリ。	B152
図版19-348	A3	SC102	古墳III期・IV期	土師器坏	1/6	内面黒色処理。外面胴部はナデ、底部は工具によるヘラケズリのナデ。	A1067
図版19-349	B2	SD103	古墳III期・IV期	土師器坏	1/12	内面黒色処理、ミガキ。外面調整不明。	B39
図版19-350	C2	SC02	古墳IV期	土師器坏	1/4	内面黒色処理、ミガキ。外面ミガキ。	C1
図版19-351	A4	第3水出 NR2	古墳IV期	土師器坏	1/8	内面黒色処理、外面ケズリ。	A1047
図版19-352	B2	第4水出	古墳IV期	土師器坏	1/4	内面黒色処理、ミガキ。内面ミガキ。	B143
図版19-353	C2	SC05	古墳IV期	土師器坏	1/6	内面黒色処理、ミガキ。外面ミガキ。	C5
図版19-354	A4	第3水出	古墳IV期	土師器坏	1/4	内面黒色処理。	A1022
図版19-355	B2	SC110	古墳III期～古代I期	土師器坏？	ほぼ完形	内面黒色処理、ミガキ。	B156
図版19-356	B2	SC1005	古墳IV期・古代I期	土師器鉢	ほぼ完形	内面黒色処理、ミガキ。外面ミガキ、胴下半部はケズリ後ミガキ。	B170
図版19 357	B2	SD103	古墳I期・II期前半	土師器器台	1/8	器面調整不明。	B33
図版19-358	C1	SA01	古墳I期・II期	土師器器台	坏部1/1	内外面ナデ。胎土に鉱物粒が多く含まれる。	C17
図版19-359	B2	SD103	古墳III期・IV期	土師器高坏	1/6	坏部海面に青彩認。内外面ミガキ。	B12
図版19-360	B2	SD103	古墳I期・II期	土師器器台	1/2	脚部3単位の円孔。外面ミガキ	B16
図版19-361	B2	SD103	古墳I期・II期	土師器器台	脚部1/1	脚部3単位の円孔。	B13
図版19-362	B2	SD103	古墳I期・II期前半	土師器高坏	脚部1/1	表面磨耗するが、脚部外面ハケメ残る。3単位の円孔。	B17
図版19-363	D2	SC112	古墳I期・II期前半	土師器高坏	坏部1/2	円形の透かし。	D34
図版19-364	A3	第3水出 自然流路	古墳III期	土師器高坏	3/4	外面ナデ。	A1008
図版19-365	D2	SC107	古墳II期後半・III期	土師器高坏	脚部1/1	器面摩滅。	D19
図版19-366	B2	SD103	古墳II期・III期	土師器高坏	1/4	脚部に段部有り。器面調整不明。	B8
図版19-367	A3	第3水出	古墳III期・IV期前半	土師器高坏	脚部1/1	外面ミガキ。	A1075
図版19-368	C2	SC02	古墳III期・IV期	土師器高坏	3/4	外面ミガキ。	C2
図版19-369	A3	第3水出 自然流路	古墳III期・IV期	土師器高坏	脚部1/1	外面ミガキ。口縁部太い沈線。	A1003
図版19-370	A3	第3水出	古墳III期後半・IV期	土師器高坏	1/3	外面ミガキ。内面粘土帯の接合痕が明瞭。	A1073
図版19-371	B2	SD103	古墳II期・III期	土師器高坏	脚部1/1	外面ミガキ、内面ハケメ後ナデ。	B18
図版19-372	A2	SD108	古墳III期	土師器高坏	脚部1/4	脚部のみ、外面ミガキ。	A140
図版19-373	B2	SC1006	古墳II期後半・III期	土師器高坏	脚部1/1	外面ミガキ。	B171
図版19-374	B2	第4水出	古墳III期後半・III期	土師器高坏	脚部1/1	内面に輪積み痕が明瞭に残る。	B141
図版19-375	A3	第3水出	古墳II期後半・III期	土師器高坏	1/2	外面ミガキ、内面ナデ。	A1072

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版19-376	B2	SD103	古墳II期後半・III期	土師器高坏	脚部1/1	表面摩耗。	B20
図版19-377	B2	SD103	古墳II期後半・III期	土師器高坏	脚部1/1	表面摩耗。器面ナデヌはミガキ。	B22
図版19-378	B2	SD103	古墳II期後半・III期	土師器高坏	脚部1/1	表面摩耗。	B21
図版19-379	B2	SD103	古墳IV期	土師器高坏	脚部1/1	内面黒色処理。	B15
図版19-380	B2	SD103	古墳IV期	土師器高坏	脚部1/1	内面黒色処理。	B14
図版20-381	B2	第1水田	古墳I期・II期	土師器甑	1/2	底部円孔直径1.3cm。	B147
図版20-382	E1	第2調査面	弥生II期・III期	壺	底部1/1	内外面ナデ。	E169
図版20-383	B2	SD103	古墳III期	土師器壺	口縁部欠損	器面軟いナデ。	B10
図版20-384	B2	SD103	古墳III期	土師器壺	1/6	内面に絞り込み痕。	B26
図版20-385	C2	SA01	古墳I期・II期	土師器壺	1/8	小形壺。内外面ミガキ。	C24
図版20-386	B2	SC1007	古墳III期	土師器壺	3/4	精製小形壺	B172
図版20-387	B2	SC123	古墳I期・II期	土師器壺	1/4	内外面ミガキ。	B164
図版20-388	A3	第3水田	古墳II期後半・III期	土師器小型壺	1/2	口縁部ナデ、胴部外面ミガキ。	A1074
図版20-389	B2	SC140	古墳II期・III期	土師器壺	1/2	外面ミガキ。内面黒色を呈する。	B187
図版20-390	A3	SC102	古墳III期・IV期	土師器碗	1/6	外面ミガキ。内面は口縁部ミガキ、胴部ナデ。	A1068
図版20-391	B2	SC114	古墳III期・IV期	土師器壺	口縁部1/1	外面ミガキ。内面輪積み痕。外面に黒色付着物。	B158
図版20-392	A3	第4水田?	古墳III期	土師器碗	1/5	外面ミガキ。内面ハケメ後ナデ。	A1082
図版20-393	C2	SA01	古墳I期・II期前半	土師器鉢	1/6	内面ハケメ。外面ハケメ。口縁部黒色付着物(漆?)。	C23
図版20-394	B2	SD103	古墳I期	土師器壺	1/6	表面摩耗するが、外面張部に内メガが残る。	B1
図版20-395	B2	SD103	古墳III期・IV期	土師器鉢	頸部1/4	表面摩耗。	B25
図版20-396	C2	SA01	古墳I期・II期前半	土師器壺?	1/2	外面ハケメ後ナデヌはミガキ。内面ナデ。外面黒色付着物。薄手。	C38
図版20-397	A3	第5水田	古墳II期	土師器鉢	破片	ハケメ後部分的にミガキ。	A1086
図版20-398	C1	SC42	古墳I期・II期	土師器壺?	1/6	内外面ナデ。器厚薄手。外面黒色処理。	C20
図版20-399	C2	SA01	古墳I期・II期	土師器壺	ほぼ完形	外面ミガキ。内面黒色を呈する。胴部上半から口縁にかけて器面が剥落しており、二次焼成を受けた可能性がある。	C41
図版21-400	D2	SC112	古墳I期・II期前半	土師器甕	1/3	口縁外面ヨコナデ、内面ハケメ。胴張外面ハケメで下部はケズリ、内面ナデ。	D29
図版21-401	D1	SC112	古墳I期・II期	土師器甕	1/12	口縁部ヨコナデ、外面にタール状の黒色付着物。	D3
図版21-402	E2	SK01	弥生IV期・古墳I期	甕	1/6	内外面ナデ。	E50
図版21-403	B2	SC1007	古墳II期・III期	甕	口縁1/4	内外面ナデ。	B173
図版21-404	B2	SD103	古墳III期・IV期	土師器甕	口縁1/8	口縁外面縦ミガキ、内面横ミガキ。	B3
図版21-405	B2	SD103	古墳II期・III期	土師器甕	口縁1/8	粗いハケメまたはナデヌケ。	B4
図版21-406	B2	SD103	古墳I期・II期	土師器甕	口縁1/8	頸部ハケメ、口縁部ヨコナデ。	B7
図版21-407	A3	SD03	古墳I期	甕	1/8	内外面ハケメ。外面タール状の黒色付着物。	A1060
図版21-408	C1	SA01	古墳I期・II期	土師器甕	1/8	外面ハケメ。内面軟いハケメ。	C18
図版21-409	B2	SC1005	古墳II期	甕	口縁1/3	外面ナデ。	B169
図版21-410	A3	SQ1001	古墳II期	土師器甕	1/12	内面ナデ。外面細かいハケメ後ナデ。	A1080
図版21-411	A3	第3水田	古墳III期・IV期	土師器甕	1/2	口縁部内外面ミガキ。	A1071
図版21-412	B2	SD103	古墳III期・IV期	土師器甕	1/6	口縁部ヨコナデ。	B2
図版21-413	B2	SD103	古墳	土師器甕	口縁1/8	外面ハケメ後ナデ。	B24
図版21-414	A3	第3次調 自然流路	古墳II期・III期	土師器甕	1/5	内外面ナデ。	A1006
図版21-415	D2	SC109	古墳II期・III期	土師器甕	1/20	外面ナデ。胴部内面ケズリ。外面に黒色付着物。	D23
図版21-416	E1	第1水田	古墳II期・IV期	甕	1/6	外面黒色付着物。	E144
図版21-417	A3	SD03	古墳II期	甕	1/6	外面ハケメ、内面ナデ。	A1058
図版21-418	A3	第4水田	古墳I期・III期	土師器甕	1/4	外面ケズリ。内面に黒色付着物。	A1084
図版21-419	D2	SC203	古墳I期	土師器甕	完形	外面ナデ。	D28
図版21-420	A3	SQ1001	古墳II期・III期前半	土師器甕	1/8	口縁部ハケメ後ナデ。胴部外面ハケメ、胴部内面ナデツケ。底部ハケメ。	A1081
図版21-421	A3	第4水田	古墳II期	土師器甕	1/3	外面は口縁部ハケメ後ナデ、胴部上半ハケメ、胴部下半から底部ケズリ。内面は口縁部ナデ、胴部ハケメで、胴下半はナデ。器厚4mm以下と薄い。	A1083
図版21-422	E1	SA02	古墳II期・III期	土師器甕	口縁1/1	胴部外面ミガキ。外面に黒色付着物。	E115
図版22-423	C	SD3002	古墳I期・II期前半	土師器甕	底部1/1 口縁1/4	内外面ハケメ。底部外面もハケメ。	C29
図版22-424	C	SD3002	古墳I期・II期前半	土師器甕	口縁4/4	口縁部ナデ。外面胴上半部ハケメ、下半部ケズリ。内面胴部ハケメ後ナデ。頸部外面補強粘土帯の接合痕跡残す。底部外面ケズリ。底部径5～6cm。	C36
図版22-425	D3	第6調査面(農高地)	古墳I期・II期前半	土師器甕	3/4～1/2	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ後ナデ又はミガキであるが、ハケメが顕著に見られる。	D139
図版22-426	C1	SC52	古墳II期後半・III期	土師器甕	1/2	外面細密なハケメ後ナデ。底部不明瞭な半底。底部付近ケズリ。外面黒色付着物。	C54
図版22-427	C2	SC02	古墳III期～古代I期	土師器壺?	1/6	口縁部内外面ミガキ。胴下半部ナデ?	C4
図版22-428	D2	SD103	古墳III期・IV期	須恵器杯	1/3	底部に焼成前ヘラ記号。焼成良好。	D16
図版22-429	D3	15X14区	古墳III期	須恵器鉢	1/2	突帯部の下に櫛状波状文。胎土は骨灰色で焼成良好。	D147
図版22-430	A3	第3水田	古墳IV期	須恵器年表	1/3	端反種色。焼成が軟質で土師質である。	A1077
図版22-431	A3	第3水田 自然流路	古墳IV期	須恵器鉢		頸部の老行沈線の上に刺突文。自然釉がかかる。	A1007
図版22-432	A2	SD101	古墳IV期	須恵器杯	1/12	底部ケズリ。	A139

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	現存状況	土器説明	整理番号
図版23-433	C2	第4水田NR1	古代II期	須恵器壺	破片	色調灰白色。筆書「大」。	C50
図版23-434	A3	第3水田自然流路	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/2	底部糸きり。底部外面墨書、内面墨痕。	A1048
図版23-435	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏A	底部1/2	底部回転糸切り。墨書「？？」	B101
図版23-436	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏	破片	墨書「大」か	B108
図版23-437	D3	SD03	古代II期・III期	須恵器坏	破片	口縁部のみ。墨書「大？」	D120
図版23-438	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏	口縁3/4	墨書「？」	B103
図版23-439	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏	破片	墨書「中」	B106
図版23-440	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏	1/4	墨書「？」	B102
図版23-441	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏蓋	破片	墨書「ル」	B112
図版23-442	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏	1/8	墨書「丁」	B105
図版23-443	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏	1/6	墨書かどうか不明確。	B104
図版23-444	B2	SD103	古代II期	須恵器坏A	1/2	墨書「大」	B97
図版23-445	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏	1/12	墨書かどうか不明確。	B96
図版23-446	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏	破片	内面黒色付着物(墨痕？)。	B94
図版23-447	B2	SD103	古代III期	須恵器坏A	口縁3/4	底部回転糸切り。内面黒痕。	B100
図版23-448	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏A	底部1/1	灰白色の焼成軟質。底部回転糸切り。内面墨痕。	B99
図版23-449	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏A	底部2/3	赤褐色の焼成軟質。底部回転糸切り。内面墨痕。	B93
図版24-450	A3	第3水田	古代II期	須恵器坏A	底部1/1	底部切離し後ナデ。ヘラ切りか？	A1078
図版24-451	B2	SD103	古代II期前半	須恵器坏A	1/8	底部ヘラ切り後、静止ヘラケズリ。	B71
図版24-452	B2	SD103	古代II期前半	須恵器坏A	1/6	底部ヘラ切り。	B74
図版24-453	C	SC01	古代II期前半	須恵器坏A	1/2	底部ヘラ切り。	C49
図版24-454	D2	SD102	古代II期後半～IV期	須恵器坏A	1/4	灰白色。軟質須恵器。底部回転糸切り。	D15
図版24-455	B2	第1水田	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/4	底部回転糸切り。	B146
図版24-456	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/3	底部回転糸切り。胎土に白色粒を多く含む。	B68
図版24-457	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/4	底部回転糸切り。	B70
図版24-458	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/6	底部回転糸切り。灰白色。	B76
図版24-459	D1	第3水田	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/2	底部回転糸切り。	D124
図版24-460	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/4	底部回転糸切り。	B73
図版24-461	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/4	底部回転糸切り。底部に黒痕。	B77
図版24-462	A3	第3水田自然流路	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/3	底部糸切り。灰色、焼成良好。	A1009
図版24-463	B2	SD103	古代II期	須恵器坏A	1/2	底部回転糸切り。	B72
図版24-464	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/4	底部回転糸切り。赤褐色。	B75
図版24-465	D3	SD03	古代II期・III期	須恵器坏A	1/4	灰色。底部糸切り？。	D54
図版24-466	A3	第3水田自然流路	古代III期	須恵器坏A	1/4	底部糸切り。	A1014
図版24-467	A3	第3水田自然流路	古代III期	須恵器坏A	1/4	黒灰色の軟質須恵器。	A1001
図版24-468	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏A	1/4	底部回転糸切り。	B69
図版24-469	B2	第2水田	古代II期後半・III期	須恵器坏B	底部2/3	底部回転糸切り後外周部回転ヘラケズリ。	B130
図版24-470	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏B	1/4	底部静止ヘラケズリ。	B87
図版24-471	B2	SD103	古代II期後半・III期	須恵器坏B	1/2	底部回転糸切り後、高台内回転ヘラケズリ。	B85
図版24-472	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏B	1/2	底部回転ヘラケズリ。	B86
図版24-473	A3	第3水田自然流路	古代II期・III期	須恵器坏B	1/4	高台部底面墨痕。	A1010
図版24-474	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏B	1/3	暗赤褐色、焼成良好。	B89
図版24-475	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏B	1/8		B88
図版24-476	B2	SD103	古代II期	須恵器坏B	1/4	底部ヘラ切り？後、回転ヘラケズり。	B82
図版24-477	B2	第3水田	古代II期前半	須恵器坏B	2/3	底部ヘラ切り後回転ヘラケズり。	B133
図版24-478	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏B	1/6	高台部剥落。	B84
図版24-479	B2	SD103	古代II期	須恵器坏	1/8	口縁端部外面に浅い沈線。	B51
図版24-480	B2	SD103	古代II期	須恵器坏B	1/10	口縁端部外面に浅い沈線。	B83
図版24-481	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏蓋	1/4		B79
図版24-482	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器坏蓋	1/8		B78
図版24-483	B2	SD103	古代II期	須恵器壺蓋	1/12		B80
図版24-484	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器短頸壺	1/3		B62
図版24-485	B2	SD103	古代II期	須恵器長頸壺	破片	肩部に凸帯が巡る。	B64
図版24-486	B2	SD103	古代II期	須恵器碗	1/12	肩部に凸帯が巡る。	B65
図版24-487	B2	SD103	古代II期？	須恵器長頸壺？	頸部1/1	二条の沈線が巡る。	B67
図版24-488	B2	SD103	古代II期前半	須恵器長頸壺	頸部1/1	頸部沈線。	B154
図版24-489	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器長頸壺	1/3		B59
図版24-490	A4	第3水田NR2	古代II期・III期	須恵器長頸壺	1/3	幅0.7mmの細い沈線が巡る。	A1015
図版24-491	B2	SD103	古代？	須恵器瓶	1/3		B61
図版24-492	B2	SD103	古代II期	須恵器鉢A	脚部1/1	坏部との接合部に渦巻き文。	B57
図版24-493	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器短頸壺	1/12		B63

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残イ/状況	土器説明	整理番号
図版24-494	A3	第3水田自然流路	古代II期・III期	須恵器横瓶	1/3		A1012
図版25-495	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器甕	1/12		B47
図版25-496	B2	SD103	古代I期～III期	須恵器甕	1/6		B45
図版25-497	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器甕	1/8	胴部タタキ目。焼成良好、明赤褐色。	B52
図版25-498	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器甕	1/4	内面当て具痕。	B48
図版25-499	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器四耳壺		焼成良好。	B44
図版25-500	B2	SD103	古代I期・II期	須恵器壺	破片	外面タタキ目、内面青海波紋。焼成不良、橙褐色。	B55
図版25-501	B2	SD103	古代I期・II期	須恵器壺	破片	外周タタキ目、内面青海波紋。	B56
図版25-502	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器壺	破片	沈線と波状文。口縁端部内面に沈線。	B50
図版25-503	B2	SD103	古代II期・III期	須恵器壺	破片	沈線後に波状文。口縁端部内面に沈線。	B49
図版25-504	B2	SD103	古代？	土師器坏	1/3 (底部1/1)	内面黒色処理、ミガキ。底部丁寧なヘラケズリ。	B43
図版25 505	B2	SD103	古代	土師器坏	口縁1/6	内面黒色処理、ミガキ。口縁部浅い沈線。	B42
図版25-506	B2	SD103	古代II期・III期	土師器坏	1/6	内面黒色処理、ミガキ。底部静止ヘラケズリ。	B37
図版25-507	A3	第3水田	古代II期・III期	土師器坏	1/3	内面黒色処理。底部糸切り後底部周辺静止ヘラケズリ。	A1076
図版25-508	B2	SD103	古墳III期～古代	土師器坏	口縁1/4	内面黒色処理、ミガキ。外面調整不明。	B41
図版25-509	A4	第3水田NR2	古代II期・III期	土師器坏	1/12	内面黒色処理、ミガキ。	A1018
図版25 510	D1	第3水田	古墳III期～古代I期	土師器鉢	3/4	内面黒色処理、ミガキ。	D123
図版25-511	B2	SD103	古代II期・III期	土師器坏	底部1/4	内面黒色処理、ミガキ。底部静止ヘラケズリ。	B38
図版25-512	B2	SD103	古代II期後半～IV期前半	土師器坏	破片	内面黒色処理。底部回転糸切り、底部に墨書「×」	B90
図版25-513	B2	SD103	古代II期・III期	土師器坏	破片	内面黒色処理。底部静止ヘラケズリ、墨書「×」	B92
図版25-514	B2	SD103	古代II期・III期	土師器坏	破片	内面黒色処理。底部静止ヘラケズリ、墨書「×」	B91
図版25-515	B2	SD103	古代II期・III期	土師器坏	1/3	内面黒色処理。底部静止ヘラケズリ、墨書「－」	B98
図版25-516	A3	第3水田	古代II期・III期	土師器坏	1/2	内面黒色処理。底部糸切り後底部周辺静止ヘラケズリ。	A1079
図版25 517	A4	第3水田NR2	古代IV期	土師器坏	1/2	底部糸切り。	A1020
図版25-518	A4	第3水田NR2	古代IV期	土師器椀	底部1/1	内面ロクロナデ。	A1021
図版25-519	A4	第3水田自然流路	古代III期後半・IV期	土師器椀	底部1/1 口縁1/3	内面ミガキで薄い黒色を呈する。	A1069
図版25-520	A3	第3水田自然流路	古墳III期・IV期	土師器坩	破片	把手。	A1002
図版25 521	B 2	SD103	古代II期後半～IV期	土師器甕	口縁1/8	胴部外面カキメ後ナデ、外面カキメ。	B23
図版25-522	E1	第1水田(大畑界検出中出土)	古代III期	灰釉陶器碗	1/6		E143
図版26-523	A2	SD101	中世	カワラケ	1/2		A102
図版26-524	A2	SD101	中世	カワラケ	1/8		A101
図版26-525	A2	SD101	中世	カワラケ	1/3	胎土が灰白色で他のカワラケより白い。	A100
図版26 526	A2	SD101	中世	カワラケ	1/5		A99
図版26-527	A2	SH01	中世	カワラケ	口縁1/4		A2
図版26 528	A2	SH01	中世	カワラケ	口縁3/24	内面に焼成後の穿孔痕跡あり。灯明皿？	A1
図版26-529	A2	SH02	中世	カワラケ	口縁4/24		A5
図版26 530	A2	SH02	中世	カワラケ	底部3/4		A8
図版26-531	A2	SH02	中世	カワラケ	1/4	焼成前穿孔。	A92
図版26-532	A2	SH02	中世	カワラケ	1/2		A9
図版26-533	A2	SH02	中世	カワラケ	1/3		A6
図版26-534	A2	SH02	中世	カワラケ	口縁4/24		A3
図版26 535	A2	SH02	中世	カワラケ	2/3		A7
図版26-536	A2	SH02	中世	カワラケ	口縁5/24		A4
図版26-537	A2	SH03	中世	カワラケ	底部1/1	内外面に黒色付着物。灯明皿？	A13
図版26-538	A2	SH03	中世	カワラケ	口縁1/3	外面に黒色付着物。灯明皿？	A11
図版26-539	A2	SH03	中世	カワラケ	2/3	外周と外面底面に黒色付着物。	A12
図版26-540	A2	SH06	中世	カワラケ	口縁5/24 底部1/3		A14
図版26-541	A2	SH09	中世	カワラケ	口縁3/24 底部1/8		A15
図版26-542	A2	SH09	中世	カワラケ	口縁5/24 底部5/24	外面に黒色付着物。灯明皿？	A16
図版26-543	A2	SH11	中世	カワラケ	1/4	口縁部付近焼成後外面から穿孔か？。	A93
図版26-544	A2	SH11	中世	カワラケ	口縁1/24 底部9/24		A17
図版26 545	A2	SH11	中世	カワラケ	口縁7/24 底部7/24		A18
図版26-546	A2	SH11	中世	カワラケ	底部1/3	焼成前の乾燥後又は焼成後内面から穿孔。	A94
図版26-547	A2	SH11	中世	カワラケ	1/3	焼成後内面から穿孔。	A95
図版26 548	A2	SH11	中世	カワラケ	口縁2/24 底部1/3	底部内外面黒色に変色。灯明皿？	A20
図版26-549	A2	SH11	中世	カワラケ	口縁3/24 底部1/6		A19
図版26-550	A2	SH12	中世	カワラケ	底部3/4		A21

図版番号	地区名	出土位置	土器の時期	器種	残存状況	土器説明	整理番号
図版26-551	A2	SH14	中世	カワラケ	口縁18/24 底部1/1		A22
図版26-552	A2	SH18	中世	カワラケ	口縁6/24 底部6/24		A23
図版26-553	A2	SH18	中世	カワラケ	口縁2/24 底部1/8	内面に黒色付着物。灯明皿？	A24
図版26-554	A2	SH20	中世	カワラケ	完形		A27
図版26-555	A2	SH20	中世	カワラケ	完形		A26
図版26-556	A2	SH20	中世	カワラケ	底部3/4	内面に薄かに黒色付着物。灯明皿？	A28
図版26-557	A2	SH20	中世	カワラケ	1/4		A29
図版26-558	A2	SH20-21	中世	カワラケ	底部3/4		A30
図版26-559	A2	SH18-20	中世	カワラケ	底部1/1		A31
図版26-560	A2	SH21	中世	カワラケ	底部1/1		A33
図版26 561	A2	SH21	中世	カワラケ	1/4	胎土が灰白色で他のカワラケに比べ白い。	A32
図版26-562	A2	SH21	中世	カワラケ	底部1/1		A35
図版26-563	A2	SH21	中世	カワラケ	4/5	胎土が灰白色で他のカワラケに比べ白い。底部外面に糸縫状の圧痕。	A34
図版26-564	A2	SK02	中世	カワラケ	破片	口縁部内外面に黒色付着物。灯明皿？底部に穿孔底紋あり。	A137
図版26-565	A2	SK03	中世	カワラケ	1/3	焼成前穿孔者り。	A138
図版26-566	A2	整地V	中世	カワラケ	底部1/1		A70
図版26-567	A2	整地IV	中世	カワラケ	底部1/1		A58
図版26-568	A2	整地IV	中世	カワラケ	3/4		A59
図版26-569	A2	整地II	中世	カワラケ	1/3		A47
図版26-570	A2	整地I	中世	カワラケ	底部1/1		A44
図版26 571	A2	整地下	中世	カワラケ	底部1/6	胎土が他のカワラケよりやや白い。	A89
図版26-572	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/2		A80
図版26-573	A2	整地V	中世	カワラケ	底部3/4		A65
図版26-574	A2	I a面	中世	カワラケ	1/2	胎土が灰白色で他のカワラケに比べ白い。	A36
図版26-575	A2	整地III	中世	カワラケ	1/3	胎土が他のカワラケよりやや白い。	A87
図版26-576	A2	整地ト	中世	カワラケ	1/3	胎土が他のカワラケよりやや白い。	A88
図版26-577	A2	整地下	中世	カワラケ	1/6	底部並べラケズり。	A90
図版26 578	A2	整地I	中世	カワラケ	3/4		A43
図版26-579	A2	I a面	中世	カワラケ	底部1/1	底部糸切り後ナデ。	A39
図版26 580	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/2		A79
図版26-581	A2	整地上	中世	カワラケ	1/8		A50
図版26-582	A2	整地I	中世	カワラケ	1/1	底部糸切り後ナデ。	A46
図版26-583	A2	整地	中世	カワラケ	底部1/2		A54
図版26-584	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/4	内周部分的に黒色付着物。全体に暗褐色に変色。灯明皿？	A82
図版26-585	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/8		A84
図版26-586	A2	整地V	中世	カワラケ	3/4		A71
図版26-587	A2	整地V	中世	カワラケ	3/4	内外面黒色付着物。割れ口にも黒色付着物が見られ、欠損後灯明皿として使用？。	A72
図版26 588	A2	整地V	中世	カワラケ	2/5		A74
図版26-589	A2	整地V	中世	カワラケ	1/4	内面黒色付着物。灯明皿？	A64
図版26-590	A2	整地V	中世	カワラケ	1/4	焼成後底部外面からの穿孔。	A97
図版26-591	A2	整地I	中世	カワラケ	1/4	胎土が灰白色で他のカワラケと比べ白い。	A42
図版26-592	A2	I a面	中世	カワラケ	1/4		A37
図版26-593	A2	整地IV	中世	カワラケ	1/4		A56
図版26-594	A2	整地V	中世	カワラケ	1/3		A67
図版26-595	A2	整地V	中世	カワラケ	底部3/4	内外面黒色付着物。割れ口にも黒色付着物が見られ、欠損後灯明皿として使用？。	A66
図版26-596	A2	整地V	中世	カワラケ	1/1		A69
図版26-597	A2	整地I	中世	カワラケ	3/4		A45
図版27-598	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/8	胎土が灰白色で、他のカワラケより白い。	A85
図版27-599	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/8		A83
図版27-600	A2	整地VI	中世	カワラケ	底部1/1		A77
図版27 601	A2	整地VI	中世	カワラケ	1/4		A81
図版27-602	A2	整地VI	中世	カワラケ	底部1/3		A78
図版27-603	A2	整地IV	中世	カワラケ	底部1/4		A91
図版27-604	A2	整地IV	中世	カワラケ	1/2		A63
図版27-605	A2	整地I	中世	カワラケ	1/4		A49
図版27-606	A2	整地V	中世	カワラケ	底部1/2	内周黒色に変色。灯明皿？	A75
図版27-607	A2	整地V	中世	カワラケ	3/4		A76
図版27-608	A2	整地V	中世	カワラケ	底部1/1		A68
図版27 609	A2	整地V	中世	カワラケ	1/2		A73
図版27-610	A2	整地IV	中世	カワラケ	底部1/3		A55
図版27 611	A2	整地IV	中世	カワラケ	1/4		A57
図版27-612	A2	整地IV	中世	カワラケ	底部1/1	底部外面黒色付着物。	A60
図版27-613	A2	整地IV	中世	カワラケ	底部1/4		A61
図版27-614	A2	整地IV	中世	カワラケ	1/4		A62
図版27-615	A2	整地上	中世	カワラケ	1/4		A49
図版27-616	A2	整地II	中世	カワラケ	3/5		A48
図版27-617	A2	ES20 グリッド	中世	カワラケ	1/3	焼成前乾燥後？の内面からの穿孔。	A96

図版番号	地区名	出土位置	上器の時期	器種	残存状況	上器説明	整理番号
図版27-618	A2	Ⅰa面	中世	カワラケ	2/3		A38
図版27-619	A2	整地Ⅲ下層	中世	カワラケ	底部1/2	内面部分的に黒色に変色。灯明皿？	A53
図版27-620	A2	整地Ⅰ	中世	カワラケ	1/4		A41
図版27-621	A2	Ⅲ面	中世	カワラケ	1/4	胎土が灰白色で他のカワラケより白い。整理番号A51に類似。	A52
図版27-622	A2	SH02	12世紀	白磁碗類	破片		A219
図版27-623	A2	整地Ⅳ	15世紀	白磁皿	底部1/1		A210
図版27-624	A2	SK80	14世紀後～15世紀前半	青磁碗	破片	玉線。	A220
図版27-625	A2	SD101	15世紀末～16世紀前半	青磁碗	1/8	線彫蓮弁文碗。	A178
図版27-626	A2	不明	15世紀～16世紀	青磁碗	底部1/1		A262
図版27-627	A2	SD101	15世紀末～16世紀前半	青磁碗	1/10	線彫蓮弁文碗。	A181
図版27-628	A2	整地Ⅳ	15世紀末	古瀬戸腰折皿	1/12		A209
図版27-629	A2	整地Ⅰ	16世紀前半	瀬戸美濃大窯丸皿？	1/10		A208
図版27-630	A2	SD101	16世紀後半	瀬戸美濃大窯丸ノミ折縁皿	1/4		A182
図版27 631	A2	SH02	16世紀末	瀬戸美濃大窯丸ノミ折縁皿	1/3		A218
図版27 632	A2	SD101	近世	瀬戸美濃本業焼香炉	1/4		A184
図版27-633	A2	ST02		瀬戸美濃系	底部1/1		A221
図版27-634	A2	SD101	1480年～16世紀前半	瀬戸美濃大窯丸皿	1/8		A187
図版27-635	A2	SD101	16世紀中	瀬戸美濃大窯天目茶碗	底部1/1		A186
図版27-636	A2	整地Ⅰ	17世紀前半	唐津すり鉢	1/16		A207
図版27-637	A2	整地Ⅰ	17世紀後	唐津すり鉢	1/16		A206
図版27-638	A2	SD101	16世紀末	唐津皿	1/8		A179
図版27-639	A2	整地Ⅰ	16世紀末	唐津皿	1/4		A199
図版27 640	A2	SD101	16世紀末	唐津皿	底部1/1		A180
図版28-641	A2	整地Ⅴ	中世	内耳鍋	1/4		A130
図版28-642	A2	整地Ⅴ～Ⅵ	中世	内耳鍋	1/8		A132
図版28-643	A2	SH02	中世	内耳鍋	1/4		A121
図版28-644	A2	SH18	中世	内耳鍋	1/6		A124
図版28-645	A2	整地Ⅲ下層	中世	内耳鍋	1/6		A134
図版28-646	A2	SH21	中世	内耳鍋	1/6		A131
図版28-647	A2	SH23	中世	内耳鍋	1/8		A126
図版28-648	A2	整地Ⅰ	中世	内耳鍋	1/4		A128
図版29-649	C	SD03	中世	カワラケ	1/4	底部回転糸切り。	C47
図版29-650	C	SD03	中世	カワラケ	破片		C45
図版29-651	C	13-1層	13世紀後半～14世紀前半	龍泉窯系蓮弁文碗	破片		C55
図版29-652	D3	8-1層	13世紀	龍泉窯系蓮弁文碗	1/6		D140
図版29-653	D2	7層	15世紀後半	古瀬戸皿	1/6		D128
図版29-654	C	SD03	16世紀	瀬戸美濃天目茶碗	破片		C44
図版29 655	C	SD03	17世紀前半	志野	破片		C42
図版29-656	D3	SD01	古代Ⅳ期	灰釉陶器段皿	1/2	底部外面に墨痕か墨かに線引きされる。	D47
図版29-657	D3	8-1層	16世紀前半	瀬戸美濃大窯皿	底部1/1		D143
図版29-658	D2	第２水田	16世紀	瀬戸美濃大窯丸皿	底部1/1		D126
図版29-659	A3	第３水田 自然流路	17世紀初頭	瀬戸美濃輪禿皿？	1/6		A1013
図版29-660	D2	第２水田	17世紀後半	肥前系陶器(碗)	底部1/1		D127
図版29-661	E2	SD01	18世紀	備前系悪利	1/3		E167
図版29 662	D1	第１水田	18世紀前半	伊万里	1/6		D121
図版29-663	A4	2層	近世以降？	瀬戸美濃？	1/6		A1070
図版29-664	D3	8-1層	近世末	陶器鉢	破片		D142
図版29-665	C	13-1層	13世紀後半	山茶碗系こね鉢	破片	外面ケズリ。	C56
図版29-666	D3	SD02	中世以降	珠洲焼すり鉢	1/6	８本１単位の条線。内面は摩耗している。外面は11線部ヨコナデ、胴部ケズリ後ナデ。	D48
図版29-667	C	SD01	17世紀後半～18世紀前半	唐津すり鉢	破片		C88
図版29-668	D2	9-2層	14世紀	珠洲焼すり鉢	1/2		D125
図版29-669	A2	整地Ⅰ	中世	内耳鍋	1/8		A127
図版29 670	A2	SH03-21	中世	内耳鍋	1/6		A122
図版29-671	A2	SH11	中世	内耳鍋	1/6		A123

石 器 観 察 表

図版番号	地区名	出土位置	器種	石材	欠損状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	整理番号	備考
図版30-1	D3	27-1層	石鏃(有茎)	珪質頁岩	欠損	−	1.26	0.35	−	34	
図版30-2	A2	SD101	石鏃(無茎)	黒曜石	欠損	1.94	1.22	0.41	−	144	
図版30-3	D3	SD10	石鏃(無茎)	黒曜石	完形	2.39	0.15	0.28	0.63	154	
図版30-4	D2	27-1層	石鏃(無茎)	安山岩	ほぼ完形	3.47	1.47	0.48	1.85	151	D2②地区出土。
図版30-5	D3	25-1層	石鏃(有茎)	不明	茎部欠損	2.16	1.48	0.57	−	160	地トレンチ出土。
図版30-6	A4	SQ01	石鏃(有茎)	黒曜石	完形	1.44	1.15	0.37	0.53	146	
図版30-7	A4	SA01	石鏃(有茎)	チャート	完形	2.14	1.49	0.33	1.13	147	
図版30-8	A3	第3水田自然流路	石鏃(有茎)	チャート	完形	2.02	1.52	0.41	1.03	145	
図版30-9	D3	27-1層	石鏃(有茎)	珪質頁岩	欠損	2.12	1.33	0.47	0.93	35	
図版30-10	D3	SD11(検出面)	石鏃(有茎)	珪質頁岩	茎部欠損	2.02	1.55	0.44	(1.09)	156	
図版30-11	D3	SD10	石鏃(有茎)	黒曜石	完形	1.88	1.27	0.42	0.89	155	
図版30-12	D3	SD11(覆土上層)	石鏃(有茎)	黒曜石	ほぼ完形	1.88	1.36	0.51	0.88	158	
図版30-13	D1	23下層	石鏃(有茎)	珪質頁岩	完形	2.28	1.46	0.27	0.73	150	
図版30-14	D3	27-1層	石鏃(有茎)	チャート	茎部欠損	2.51	1.71	0.25	(0.89)	162	
図版30-15	D3	27-1層	石鏃(有茎)	珪質頁岩	欠損	−	1.56	0.32	−	38	
図版30-16	D3	25-3層	石鏃(有茎)	珪質頁岩	ほぼ完形	2.09	1.97	0.47	(1.37)	161	
図版30-17	D3	SD10	石鏃(有茎)	チャート	茎部欠損	2.23	2.05	0.44	1.88	153	
図版30-18	D3	SD11(覆土上層)	石鏃(有茎)	不明	ほぼ完形	2.54	1.7	0.42	1.65	157	
図版30-19	D3	27-1層	石鏃(有茎)	不明	欠損	−	2.17	0.65	−	37	
図版30-20	C2	第6水田	石鏃(有茎)	黒曜石	完形	2.23	1.06	0.73	1.69	149	
図版30-21	A4	不明	石鏃(有茎)	黒曜石	欠損	−	1.22	0.52	−	148	
図版30-22	A1	テラス1整地土中	石鏃(有茎)	珪質頁岩	欠損	2.8	1.48	0.34	−	143	
図版30-23	D2	27-1層	石鏃(有茎)	珪質頁岩	茎部欠損	3.12	1.63	0.49	(2.06)	152	D2②地区出土。
図版30-24	D3	27-1層	石鏃(有茎)	珪質頁岩	茎部欠損	3.66	1.42	0.43	(2.27)	163	
図版30-25	C2	第3水田	石鏃(無茎)	チャート	欠損	−	0.62	0.42	−	103	未製品か。
図版30-26	D3	27-1層	石鏃(有茎)	珪質頁岩	完形	3.8	2.26	0.75	6.7	159	未製品か。
図版30-27	D3	27-1層	石錐	不明	完形	3.45	0.57	0.56	3.68	39	
図版30-28	D3	27-1層	石錐	珪質頁岩	つまみ部欠損	2.93	0.67	0.41	1.08	40	
図版31-29	D3	SD10	re. F1	珪質頁岩	欠損	−	−	−	−	52	
図版31-30	A4	SQ01	re. F1	黒曜石	欠損	1.71	2.26	0.83	3.47	5	
図版31-31	D3	27-1層	re. F1	不明	欠損	2.58	2.17	1.02		45	
図版31-32	D3	27-1層	re. F1	チャート	欠損	3.5	3.1	1.11		42	
図版31-33	D3	27-1層	re. F1	珪質頁岩	完形	6.02	3.22	1.42	24.1	49	
図版31-34	A4	SQ01	re. F1	チャート	完形	2.02	1.48	0.48		8	一側辺切断面？
図版31-35	A4	SQ01	re. F1	黒曜石	欠損	2.27	3.48	0.54	4.75	3	
図版31-36	D3	27-1層	削器	珪質頁岩	完形	3.1	3.62	0.84	13.39	51	
図版31-37	D3	25-1層	石核	珪質頁岩	−	3.68	4.42	1.72	22.57	50	
図版31-38	D3	SD11	石核	黒曜石	−	3.44	2.02	1.4	7.83	47	
図版31-39	D3	27-1層	石核	黒曜石	−	2.93	2.11	1.2	9.63	43	
図版31-40	D3	27-1層	石核	黒曜石	−	3.73	1.9	1.24	8.26	44	
図版31-41	A4	SQ01	−	石英	完形	3.32	1.37	1.11	8.28	1	上下両端部に敲打痕跡。
図版32-42	B2	出土地不明	刃器Ⅰ類	安山岩	完形	7.6	10.4	2.56	170.89	58	腹面に研磨痕。角礫の自然面を残す。刃部に板めて微細な剥離痕。
図版32-43	B2	出土地不明	刃器Ⅱ類	輝石安山岩	基部欠損	6.31	6.54	1.52	90.68	19	二箇所に擦製加工。
図版32-44	D2	27-1層	刃器	安山岩	完形	10.39	8.56	2.58	281.19	31	刃部に微細な剥離痕。円礫の自然面を残す。D2③地区出土。
図版32-45	D3	SD10	刃器Ⅰ類	輝石安山岩	欠損	6.49	7.5	1.06	75.83	57	刃部に微細な剥離痕。
図版32-46	D2	第6B水田(23-1層)	刃器Ⅰ類	輝石安山岩	完形	9.04	8.78	1.71	160.76	28	二側縁に抉り。D2①地区出土。
図版32-47	D3	SD10	刃器Ⅱ類	輝石安山岩	完形？	10.2	5.3	2.65	242.69	60	側縁が切断。刃部の対辺に調整加工。刃部に微細な剥離。
図版32-48	D3	SD10	刃器Ⅰ類	輝石安山岩	完形	10.6	17.9	3.16	479.03	62	刃部に光沢痕と微細な剥離痕。
図版33-49	E2	第4水田	刃器Ⅰ類	輝石安山岩	完形	10.1	13.9	3.16	332.01	107	刃部に光沢痕。側縁部に微細な剥離が見られ、二辺の刃部が想定される。
図版33-50	D2	第6B水田(23-2層)	刃器Ⅰ類	輝石安山岩	欠損	12	14.2	1.64	278.74	33	刃部に光沢痕。片面に比較的大剥。刃部の対辺に敲打痕。D2③地区出土。
図版33-51	B2	出土地不明	刃器Ⅰ類	輝石安山岩	完形	15.5	19.6	1.72	601.36	20	側縁部調整加工。
図版33-52	D3	SD10	刃器Ⅰ類	輝石安山岩	完形	11.4	17.2	4.56	800.69	63	刃部微細な剥離痕と光沢痕。表面に敲打痕が見られる。
図版34-53	D3	SD12	刃器Ⅰ類	輝石安山岩	刃部一部欠損	10.9	15.2	2.75	365.29	61	刃部に光沢痕。
図版34-54	D2	SD2005	刃器Ⅰ類	輝石安山岩	完形	7.51	17	1.14	355.89	32	刃部に光沢痕。刃部の対辺に敲打痕。D2③地区出土。
図版34-55	A4	SA01	刃器Ⅱ類	輝石安山岩	ほぼ完形	15.1	15.7	2.9	553.85	10	刃部に光沢痕。
図版34-56	B2	SD105	刃器Ⅰ類	輝石安山岩	ほぼ完形	11	19.9	3.48	709.37	21	刃部以外の側縁に敲打痕。

図版番号	地区名	出土位置	器種	石材	欠損状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	整理番号	備考
図版35-57	D2	27-1層	打製石斧	頁岩	破片	－	－	－	－	29	D②③地区出土。
図版35-58	D2	27-1層	打製石斧	頁岩	欠損	7.75	3.75	1.33	42.5	30	D②③地区出土。
図版35-59	A4	SQ01	打製石斧	頁岩	基部欠損	－	5.1	1.93	－	9	
図版35-60	A4	SQ01	打製石斧	頁岩	完形	9.98	4.45	1.93	94.54	4	側縁に自然面を残す。
図版35-61	A4	SQ01	打製石斧	頁岩	完形	11.15	5.65	2.2	171.65	6	偏平な楕円礫を素材とする。
図版35-62	D2	27-1層直上	打製石斧	頁岩	基部欠損	－	6.57	1.31	－	27	D②③地区出土。
図版35-63	A3	第3木田自然流路	磨製石包丁	安山岩	欠損	－	－	－	－	134	両面からの穿孔。
図版35-64	D2	27-1層上面	磨製石包丁	安山岩	欠損	6.47	5.46	0.91	60.14	135	両面からの穿孔。D②①地区出土。
図版35-65	D3	SD10	磨製石包丁	頁岩	完形	14.43	5.88	0.74	107.97	136	二つに割れて出土。両面からの穿孔。
図版35-66	D3	25-1層	磨製石包丁	頁岩	完形	15.21	5.42	0.87	141.2	137	両面からの穿孔。
図版36-67	D1	SC1001	偏平片刃磨製石斧	輝緑岩	完形	7.83	4.19	1.56	109.51	139	赤色顔料が強かに残存しており、全面に赤彩されていた可能性がある。
図版36-68	D3	SD11	太形蛤刃磨製石斧	輝緑岩	欠損	－	5.27	3.28	－	141	
図版36-69	D2	SC112	太形蛤刃磨製石斧	輝緑岩	欠損	－	5.71	4.17	－	25	敲打痕を多く残す。D②①地区出土。
図版36-70	A2	ST02	太形蛤刃磨製石斧	輝緑岩	欠損	－	6.9	3.17	－	138	ほぼ全面に研磨が及ぶ。
図版36-71	D3	SD13	太形蛤刃磨製石斧	輝緑岩	欠損	－	6.83	3.73	－	142	赤色顔料が強かに残存しており、全面に赤彩されていた可能性がある。刃部の刺殺部には赤色顔料は認められない。
図版36-72	D3	SD11	太形蛤刃磨製石斧	輝緑岩	欠損	－	7.25	3.34	－	140	
図版36-73	D2	第6B木田(23-1層)	太形蛤刃磨製石斧	輝緑岩	刃部欠損	－	6.05	5.36	－	77	全面敲打痕
図版36-74	E2	第3水田(7b層)	研磨痕ある礫	チャート？	完形	7	2.76	1.44	52.25	164	
図版36-75	E1	第2調査面	軽石		完形	6.48	6.37	4.75	60.13	121	
図版36-76	D2	17層直上	軽石		完形	5.75	5.29	3.18	29.59	71	D②①地区出土。
図版36-77	D2	SC201	軽石		完形	4.72	3.9	3.43	18.84	73	
図版36-78	D2	17層直上	軽石		完形	5.58	3.65	2.57	15.18	70	D②①地区出土。
図版36-79	E2	第1水田	軽石		完形	3.94	2.89	2.35	6.93	123	
図版37-80	E2	第4水田	敲石	安山岩	完形	16.8	6.25	4.16	661.49	128	両端部に敲打痕。
図版37-81	E2	第4水田	敲石	安山岩	完形	17.8	8.25	5.77	1266.54	129	端部と側縁と表裏面に敲打痕。
図版37-82	D2	SD102	敲石	安山岩？	完形	15.5	4.95	3.88	515.29	78	両端部と側面に特に顕著な敲打痕。
図版37-83	E2	8層	敲石	安山岩	完形	14.04	4.88	2.44	313.05	172	両端部と側縁に面を成した敲打痕。
図版37-84	D3	第7調査面	敲石	安山岩？	完形	14.31	7.47	3.18	396.77	88	
図版37-85	D3	SD11	敲石	安山岩	完形	11.8	10.7	2.46	435.92	87	円盤状の両区縁の側縁部に敲打痕もしくは刺殺痕。
図版37-86	D2	第6B木田(23-1層)	敲石	不明	完形	10.07	6.28	1.9	179.16	75	
図版37-87	D3	SD12	敲石	チャート	完形	6.5	5.32	5.03	280.22	85	表面積の1/2に敲打痕が見られる。
図版37-88	D1	第6調査面	凹石	安山岩	完形	8.13	5.65	5.43	358.25	76	
図版37-89	C	SD03	凹石	不明	完形	8.34	7.11	4.78	388.54	101	
図版37-90	D3	SD10	凹石	花崗岩	完形	10.92	8.21	5.81	764.36	89	
図版37-91	D3	不明	凹石	安山岩	完形	9.89	7.34	5.34	537.71	86	
図版37-92	A2	SH02	石鉢	安山岩	欠損	－	(30.0)	14	－	178	黒色付着物が内外面と割れ口に付着。
図版37-93	A2	SH03	石鉢	安山岩	欠損	(17.1)	(16.5)	12.9	－	177	片口部以外は口縁部が欠損している。
図版37-94	C2	SD03	石鉢	安山岩	欠損	23.8	－	12.3	－	133	
図版37-95	C2	SD03	石鉢	安山岩	欠損	18.6	－	11.5	－	132	
図版37-96	C2	SD03	石鉢	安山岩	完形	18.3	17.9	11.1	－	131	底が抜けている。
図版38-97	A2	不明	粉挽臼(上臼)	安山岩	欠損	－	－	9.8	－	194	上面の縁に刻み目がある。
図版38-98	A2	SH03	粉挽臼(上臼)	安山岩	欠損	－	－	－	－	180	
図版38-99	A2	SH03	粉挽臼(上臼)	安山岩	欠損	－	－	－	－	188	
図版38-100	A2	SH03	粉挽臼(上臼)	安山岩	欠損	－	－	－	－	190	
図版38-101	A2	SH21	粉挽臼(下臼)	安山岩	欠損	－	－	12.2	－	187	割れ口が摩耗する。
図版38-102	A2	整地V	粉挽臼(上臼)	安山岩	欠損	28.6	－	－	－	189	
図版38-103	A2	SH03	粉挽臼(上臼)	安山岩	欠損	31.2	－	－	－	192	
図版38-104	A2	出土地不明	粉挽臼(下臼)	安山岩	ほぼ完形	31.4	31.9	9.4	－	197	挽り面の目は摩耗し不明瞭である。
図版38-105	A2	出土地不明	粉挽臼(下臼)	安山岩	欠損	34	32	－	－	174	
図版38-106	A2	出土地不明	粉挽臼(下臼)	安山岩	欠損	－	－	－	－	186	
図版38-107	A2	SH03	粉挽臼(下臼)	安山岩	欠損	33.3	－	－	－	183	
図版38-108	A2	出土地不明	茶臼(上臼)	安山岩	欠損	－	－	－	－	195	
図版38-109	A2	出土地不明	茶臼(下臼)	安山岩	欠損	－	－	13	－	173	受け部に黒色付着物。

木製品観察表

図版番号	地区名	遺構名	取上番号	部種分類	手法	樹種	長さ・厚(cm)	幅(cm)	厚さ・径・高さ(cm)	整理番号	備考
図版42－1a	C2	SC05	W22	直柄横鍬	板材(柾目)	クリ	30.3	12.9	3.5	0024-1	
図版42－1b	C2	SC05	W22	直柄横鍬の柄	丸太材 芯もち	スイカズラ科 ニシウツギ属	14.2		3.1	0024-2	
図版42－2a	C2	SC05	W21	直柄横鍬	板材(柾目)	クヌギ節	33.6	9.9	1.4	0025-1	
図版42－2b	C2	SC05	W21	直柄横鍬の柄	丸太材 芯もち	ヌルデ	64.7		3.5	0025-2	
図版42－3	B2	SD104	不明 144－拓	直柄横鍬	板材(柾目)	不明	24.3	9.2	0.8	0023	
図版43－4	C	SA01	C39	曲柄斧柄軸挿状平鍬	板材(柾目)	クリ	51.7	10.0	1.8	0005	
図版43－5	C	SD5002	1001	曲柄斧柄軸挿状平鍬	板材(柾目)	クヌギ	41.9	9.7	1.9	0015	
図版43－6	C2	SC31	3	曲柄斧柄軸挿状平鍬	板材(柾目)	クヌギ節	45.9	10.5	1.4	0012	
図版43－7	B2	SC140	4	曲柄斧柄軸挿状平鍬	板材(柾目)	不明	45.8	14.8	1.2	0033	
図版44－8	A3	SC07	26	曲柄斧柄軸挿状又鍬	板材(柾目)	アサダ	32.8	6.5	1.9	0013	
図版44－9	C2	SC05	414	曲柄斧柄軸ナスビ形平鍬(鋤)	板材(柾目)	不明	35.9	7.4	1.4	0022	
図版44－10	C1	SC3024	1	曲柄斧柄軸ナスビ形平鍬(スカシ)	板材(板目)	クヌギ	50.9	14.6	1.6	0002	
図版44－11	C2	SC31		曲柄斧柄軸ナスビ形又鍬(二叉)	板材(柾目)	アサダ	65.6	15.2	1.6	0004	
図版45－12	A3	SC09	42	曲柄斧柄軸ナスビ形又鍬(二叉)	板材(柾目)	クヌギ	47.6	11.3	1.8	0008	
図版45－13	C2	SC05付近	1002	曲柄斧柄軸ナスビ形又鍬(二叉)	板材(柾目)	クヌギ	33.6	8.0	1.4	0003	
図版45－14	C2	SC05付近	1001	曲柄斧柄軸ナスビ形又鍬(二叉)	板材(柾目)	クヌギ	42.5	8.7	1.2	0001	
図版45－15	C	SA01	C163	曲柄斧柄軸ナスビ形又鍬(二叉)	板材(柾目)	アサダ	50.8	7.0	1.2	0011	
図版45－16	C2	SC05	W18	曲柄斧柄軸ナスビ形鍬(不明)	板材(柾目)	クヌギ	34.4	8.5	1.3	0020	
図版45－17	C1	SC52	18-2-2	曲柄斧柄軸ナスビ形鍬(不明)	板材(柾目)	クヌギ節	24.1	13.2	1.2	0050	
図版45－18	A3	SC02	1008	曲柄鍬(二叉)	板材(柾目)	クヌギ	33.6	4.5	0.8	0016	
図版45－19	B2	SC114	1	鍬	板材(柾目)	不明	37.9	5.7	0.7	0030	
図版45－20	B2	SC103	11	直柄平鍬	板材(柾目)	ケヤキ	26.1	9.0	2.0	0018	
図版46－21	C	SC01	26	一本平鍬(水平鍬)	板材(柾目)	コナラ節	45.0	16.0	3.0	0006	
図版46－22	C	SA01	D44	一本平鍬(水平鍬)	板材(柾目)	クヌギ	37.9	17.8	1.6	0009	
図版46－23	E2	SK02	1	一本平鍬(なでぼ)	板材(斜目)	カエデ属	42.5	8.7	1.6	0007	覆土中層。
図版46－24	C2	SC41・42	33	一本平鍬(なで鍬)	板材(柾目)	アサダ	69.4	15.5	3.2	0010	
図版47－25a	A3	第5水田		エブリ	板材(柾目)	クヌギ節	52.0	12.4	3.6	0021-1	
図版47 25b	A3	第5水田		エブリの柄	丸太材 芯もち	ヌルデ	28.4		2.9	0021-2	
図版47－26	C2	SC02	71	エブリ	板材(柾目)	クヌギ	33.1	8.8	2.4	0019	
図版47－27	C2	SC05	W20	柄	丸太材	ケンポナシ属	60.4	4.7	3.1	0017	
図版47－28	C	SA01	D39 b	柄	丸太材	オドリノキ	22.9		2.7	0031	
図版47－29	C2	SC05	E10	柄	丸太材	ケンポナシ属	14.7		3.2	0032	
図版48 30	C	SA01	E115	柄	丸太材 芯ふり	アサダ	48.0	3.3	2.5	0051	カヤの可能性あり。
図版48－31	D3	SC04	95-1	柄	丸太材 芯ふり	クリ	39.8		2.5	0052	
図版48－32	B2	SC108	19	鳥獣の歯?	角材	モミ属	25.7	3.0	3.3	0026	
図版48－33	D3	SD10	101	柄	角材	クリ	81.2	7.8	4.4	0053	ケヤキの可能性あり。
図版48－34	E2	SA01	27	棒状木製品	丸太材 芯もち	ヤマグワ	80.0		9.8	0055	
図版49－35	C1	21層又は24層	平安面下層1	鳥獣の角木	角材	クリ	65.0	6.0	7.0	0027	第4水田を掘り下げたときに出土。
図版49－36	C1	21層又は24層	平安面下層2	鳥獣の歯	角材	クリ	53.7	3.0	3.7	0028	第4水田を掘り下げたときに出土。
図版49－37	C1	21層又は24層	平安面下層2	鳥獣の歯	角材	クリ	45.1	3.7	2.3	0029	第4水田を掘り下げたときに出土。
図版50 38	B2	SC103	14	編台目織板	板材(板目)	モミ	36.7	6.4	1.5	0013	
図版50－39	E1	SA06	15	製作未製品?	角材 芯もち	クリ	70.3	12.1	12.0	0054	
図版50－40	C2	SD03	30	鳥獣の引棒	板材(柾目)	ブナ属	27.4	7.3	2.7	0014	
図版51－41	C	第5水田	遺構検出時	田下駄	板材(斜目)	サワラ	41.5	13.0	2.4	0101	
図版51－42	B2	SC101	18	田下駄	板材(板目)	モミ	42.8	10.5	2.3	0105	
図版51－43	C2	外周トレンチ		田下駄	板材(板目)	モミ属	31.3	11.4	1.7	0102	
図版51－44	B2	SC103	1	田下駄	板材(柾目)	トネリコ属	36.8	10.1	1.5	0103	
図版51－45	A3	SC09	8	田下駄	板材(柾目)	五葉松類	38.0	7.9	1.5	0109	
図版52－46	B2	SC103	2	田下駄	板材(板目)	ケンポナシ属	36.0	9.5	1.2	0108	
図版52－47	B2	第3水田	5	田下駄	板材(斜目)	モミ属	39.7	9.1	1.6	0114	
図版52－48	B2	SC103	10	田下駄	板材(柾目)	ケンポナシ属	43.3	11.0	1.1	0116	
図版52－49	B2	SC101	17	田下駄	板材(板目)	モミ	42.7	9.5	2.4	0106	
図版52－50	B2	第3水田	4	田下駄	板材(柾目)	ケンポナシ属	31.9	9.5	1.3	0115	
図版53 51	B2	SC101	12	田下駄	板材(板目)	サワラ	32.4	12.2	1.9	0104	
図版53－52	B2	第3水田	3	田下駄	板材(斜目)	モミ属	32.0	11.8	2.4	0111	小央大畦と先行トレンチの交点出土。
図版53－53	C2	SC02	54	田下駄	板材(柾目)	クヌギ	30.5	11.1	1.0	0110	
図版53－54	C	SC01	44	田下駄	板材(板目)	サワラ	38.3	8.8	2.4	0107	
図版53－55	B2	第3水田	1(復)	田下駄	板材(板目)	モミ属	36.6	6.6	0.8	0112	

図版番号	地区名	遺構名	取上番号	器種分類	手法	樹種	残さ・口径(cm)	幅(cm)	厚さ・径・角さ(cm)	整理番号	備考
図版53－56	B2	第3水田	2(仮)	田下駄	板材(板目)	モミ属	23.9	8.2	1.5	0113	
図版53－57	C2	SC02	30	田下駄	板材(板目)	スギ	29.8	7.5	1.0	0160	
図版53－58	D3	不明	19	田下駄	板材(板目)	ヒノキ	33.6	7.4	0.9	0161	
図版54－59	C	SA01	G88	横槌	角材	クヌギ	58.9	11.3	5.0	0151	
図版54－60	C	第4水田下自然流路		横槌	丸太材 芯抜き	イヌシデ節	20.9	7.6	4.1	0152	
図版54－61	C	SC01	35	棍棒	丸太材 芯もち	カエデ属	36.5		14.4	0153	
図版55－62	B2	SD106	Y1Y2	弓	丸太材 芯もち	イヌガヤ	172.6		3.0	0302	
図版55－63	D3	SC04	1	弓	丸太材 1/2 芯もち	イヌガヤ	58.7	2.7	1.8	0320	
図版55－64	B2	第4水田		弓	丸太材	イヌガヤ	60.8		2.2	0307	水田より下位層。
図版55－65	B2	SC123	193の東	矢		竹笹類	6.8	0.9	0.6	0306	単子葉植物。
図版56－66	E2	第4水田	1	鍬	板材(斜目)	サワグルミ	28.6	19.4	1.2	0301	
図版56－67	B2	SD103		馬形	板材(柾目)	ヒノキ	12.4	2.5	0.2	0303	
図版56－68	B2	SD105	Naなし 9	木皮		不明	11.0	4.9	3.4	0305	
図版56－69	B2	SD103		倉車	板材(柾目)	ヒノキ	9.2	2.2	0.3	0304	
図版56－70	E1	SD12	Naなし 1 1/2	板状木製品 赤色漆容器	板材(板目)	モミ属	27.6	2.7	1.1	0308	
図版57－71	A2	SD101		連歯下駄	板材(板目)	不明	17.6	11.5	6.8	0433	
図版57－72	D1	第1水田水口	水口 NO1	連歯下駄	板材(板目)	ヒノキ	20.9	8.2	3.0	0429	
図版57－73	A2	SD101		差歯下駄	板材(板目)	不明	22.1	9.0	1.8	0431	
図版57－74	C2	SD03		差歯下駄	板材(板目,尾根)	ブナ属	20.3	6.4	2.6	0408	
図版57－75	A2	SD101		連歯下駄	板材(板目)	不明	16.5	6.1	2.9	0432	
図版57－76	C2	SD03	75	連歯下駄	板材(板材)	サワラ	19.6	4.5	2.6	0457	
図版57－77	C2	SD03	22	芯抜下駄の歯	角材	ハリギリ	7.2	5.6	3.7	0458	
図版57－78	C	第3水田		櫛	板材(柾目)	サクラ属	5.1	2.8	1.1	0501	14層上面。
図版58－79	A3	第3水田自然流路		刺物	板材(板目)	ヒノキ	29.9	9.6	3.5	0402	
図版58－80	A2	SK02	2	刺物 鼠	板材(板目)	エノキ属	9.8	6.2	3.1	0438	
図版58－81	C2	SC02	23	刺物 鼠	板材(板目)	クヌギ節	14.2	5.3	2.1	0472	
図版58－82	A3	SC101	83	刺物	板材(板目)	スギ	27.8	20.0	6.4	0404	
図版59－83	C	SC01	33	挽物 皿	板材(板目)	ケヤキ	20.0		0.7	0419	
図版59－84	C	SC01	45	挽物 皿	板材(柾目)	ケヤキ	14.8	5.5	1.3	0417	
図版59－85	B2	SD104		挽物 皿	板材(柾目)	ニレ科	7.6		0.7	0424	
図版59－86	A2	整地層下		挽物 椀		不明	14.0		4.9	0441	
図版59－87	A2	E15グリッド		挽物 椀		ブナ属	13.3		7.7	0442	
図版59－88	A2	SH18		挽物 椀		ブナ属	7.9		3.0	0436	
図版59－89	A2	整地層下	ES12	挽物 椀		ブナ属	11.4		3.9	0440	
図版60－90	B2	第3水田	3(仮)	円形曲物	板材(柾目)	サワラ	21.9	19.1	1.2	0411	
図版60－91	B2	SC106	P1	円形曲物	板材(柾目)	ヒノキ	20.0		1.1	0415	
図版60－92	B2	SD103		円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	19.8		1.1	0405	
図版60－93	B2	SD101	35	円形曲物	板材(柾目)	ヒノキ	19.3	7.4	1.1	0439	
図版60－94	C	SC01	39	楕円形曲物	板材(板目)	サワラ	37.9	12.0	2.0	0418	
図版60－95	A3	第3水田全切る自然流路		円形曲物	削材	ケヤキ	9.4	5.7	1.5	0403	
図版60－96	B2	第2水田畦畔		曲物	板材(柾目)	ヒノキ	15.7	5.7	1.0	0427	
図版61－97	B2	第4水田面	1	円形曲物		底板ヒノキ 側板モミ属	20.0		4.6	0443	
図版61－98	B2	SD104	不明 144	円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	19.6	10.5	0.8	0430	
図版61－99	B2	第3水田	4	円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	14.2	5.6	1.6	0423	水田面上の砂層。
図版61－100	A2	整地層下		円形曲物	板材(板目)	不明	8.6	3.3	0.6	0435	
図版61－101	C	SC01	40-47	大型曲物	板材(板目)	ヒノキ	44.7	9.5	2.1	0445	
図版61－102	B2	第3水田		円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	16.2		1.2	0420	直上ピート。
図版61－103	C	第1水田	水穴2	円形曲物	板材(斜目)	アカマツ	13.1		1.3	0407	
図版62－104	B2	第1水田		円形曲物	板材(柾目)	ヒノキ	30.8		1.1	0426	
図版62－105	C1	拡張区A 下層水田	水1	円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	23.5	7.7	1.4	0406	
図版62－106	C2	SD03	48	円形曲物	板材(板目)	ヒノキ タケ	19.1		1.2	0436	
図版62－107	A2	SK02	1	円形曲物	板材(板目)	不明	14.3	3.9	0.7	0434	
図版62－108	C2	外壁トレンチ		円形曲物	板材(板目)	カツラ	9.0	7.0	2.0	0470	北端検出中。
図版62－109	C	SC01	21	楕円形曲物	板材(板目)	ヒノキ	42.2	15.2	0.8	0437	
図版63－110	B2	SC102	7-8	容器の枠材	板材(板目)	モミ	42.5	4.2	1.5	0422	
図版63－111	C	SC01	16	容器の破片	板材(板目)	ヒノキ	12.1	3.4	0.8	0446	
図版63－112	C2	SD03	74	容器の破片	板材(斜目)	サワラ	12.8	4.0	1.1	0464	
図版63－113	C2	SC02	72	容器の破片	板材(板目)	クヌギ節	16.2	4.6	0.7	0460	
図版63－114	C2	SD03	32	容器の破片	板材(斜目)	ヒノキ	12.1	5.4	0.7	0463	
図版63－115	C2	SC02	13	容器の破片	板材(板目)	ケンポナシ属	9.8	4.8	1.3	0471	
図版63－116	C2	SD03	78	容器の破片	板材(板目)	サワラ	6.7	1.8	0.5	0451	
図版63－117	A3	SC09	1001	容器の破片	板材(板目)	サワラ	17.9	4.0	1.1	0409	
図版63－118	C	SC01	14	容器の破片	板材(板目)	サワラ	20.1	6.5	0.6	0448	図版番号126と同一個体の可能性あり。
図版63－119	B2	SD106	Naなし 25	容器の破片	板材(板目)	サワラ	23.4	5.2	1.1	0461	
図版63－120	E1	SD12	Naなし 1-2/2	容器の破片	板材(板目)	スギ	23.5	1.6	0.3	0459	
図版63－121	C2	SD03	44	容器の枠材	板材(板目)	ヒノキ	22.2	5.2	0.6	0450	
図版63－122	B2	SD104	水の流他の1/4	容器の破片	板材(板目)	ヒノキ	20.5	6.3	1.3	0456	
図版63－123	C2	SC02	82	容器の破片	板材(板目)	サワラ	19.3	4.1	0.8	0423	
図版64－124	B2	SC123	104	容器の破片	板材(板目)	モミ	31.0	3.6	0.9	0414	

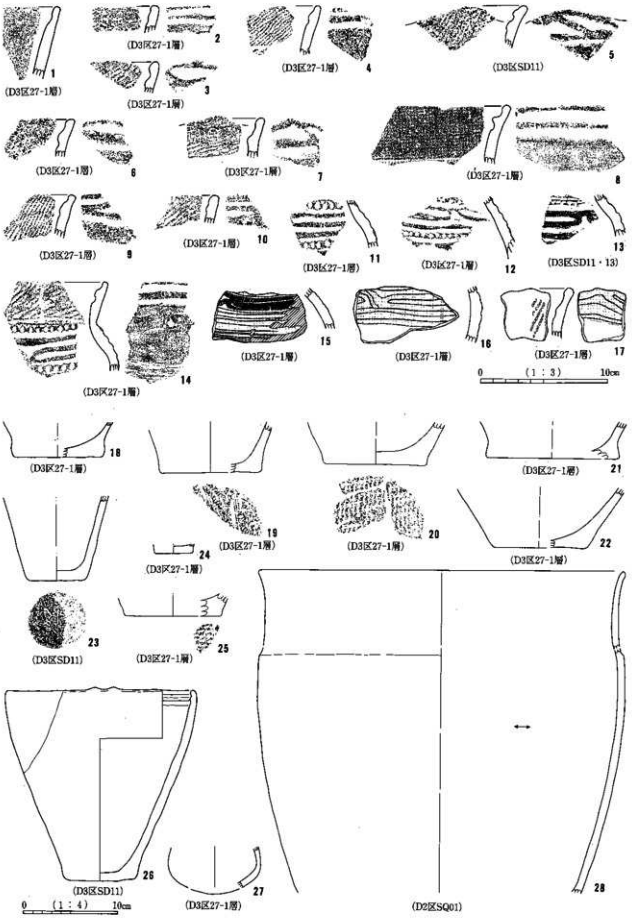
図版番号	地区名	遺構名	取上番号	器種分類	手法	樹種	長さ・口径(cm)	幅(cm)	厚さ・底径・高(cm)	顕微鏡番号	備考
図版64－125	E1	SD03	2	容器の破片	板材(柾目)	ケンポナシ属	20.3	5.4	1.4	0428	
図版64－126	C	SC01	14	容器の破片	板材(板目)	ヒノキ科	16.0	4.5	0.6	0447	図版番号118と同一個体の可能性あり。
図版64－127	B2	第4水田		容器の破片	板材(柾目)	サワラ	15.4	4.9	0.8	0416	
図版64－128	E1	SA07	14	その他の容器	丸太材 芯もち	不明	47.9	21.5	21.7	0444	
図版65－129	A2	SD101		容器	丸太材 芯出り	アカマツ	64.4		12.0	0662	
図版65－130	E1	SA07	17	容器	割材	トチノキ	85.2	21.3	11.0	0648	
図版65－131	B2	SC1004	11	有頭棒状木製品	丸太材	カヤ	142.0		5.6	0275	
図版65－132	D2	SC107	58	有頭棒状木製品	丸太材 芯もち	ニワトコ	54.8		3.5	0260	ケヤキの可能性あり。
図版65－133	A2	砂礫層		有頭棒状木製品	角材	モミ属	71.4		3.3	0213	
図版65－134	D3	SD10	179	有頭棒状木製品	丸太材	サクラ属	56.6		3.3	0246	
図版67－135	B2	SC1004	21	有頭板状木製品	板材(板目)	スギ	33.9	5.8	1.4	0296	
図版67－136	C2	SC02	34	有頭板状木製品	板材(板目)	サワラ	43.2	5.2	1.7	0201	
図版67－137	D3	SD03	6	有頭板状木製品	板材(柾目)	ニレ属	38.0	3.5	1.5	0257	ニワトコの可能性あり。
図版67－138	C2	SC02	33	有頭板状木製品	板材(板目)	ニレ属	27.7	6.2	1.1	0241	コナラ属の可能性あり。
図版67－139	A3	SA101	杭11	有頭棒状木製品	丸太材	アサダ	14.3	5.5	4.5	0248	
図版67－140	D2	SC101	14	有頭棒状木製品	角材	フジキ	19.4	3.0	2.6	0258	
図版67－141	A3	SA101	杭36	有頭棒状木製品	丸太材 芯もち	カエデ属	13.1	4.0	4.0	0202	
図版67－142	E1	SA07	9 2/3	有頭棒状木製品	角材	ヤマザクラ	7.6	8.9	5.8	0256	
図版68－143	B2	小溝	Naなし 10	弓状木製品	丸太材	カヤ	69.5		2.0	0220	
図版68－144	D3	SD03	30	弓状木製品	丸太材 芯もち	イヌガヤ	62.5		1.5	0259	
図版68－145	B2	SD106	Naなし 43-1/7	弓状木製品	丸太材 芯もち	イヌガヤ	72.7		2.0	0221	図版番号149と同一個体の可能性あり。
図版68 146	B2	不明	不明27	弓状木製品	丸太材 芯もち	イヌガヤ	46.2		2.2	0217	
図版68－147	C	SA01	E46	弓状木製品	丸太材 芯もち	カヤ	47.8		2.6	0219	
図版68－148	B2	SD106	Naなし 13-1/4	弓状木製品	丸太材	カヤ	43.0		2.2	0224	
図版68－149	B2	SD106	Naなし 43-1/7	弓状木製品	丸太材 芯もち	カヤ	39.0		1.5	0223	
図版69－150	B2	SC103	7	棒状木製品	丸太材 芯出り	不明	70.9	2.4	1.9	0216	
図版69－151	D3	SD10	197	棒状木製品	丸太材	アサダ	32.8		3.0	0243	
図版69－152	B2	SD104	不明 144	棒状木製品	角材	ヒノキ	27.0	2.1	1.6	0211	
図版69 153	B2	SD104	一括遺物(6)	棒状木製品	丸太材	ヒノキ	12.6		1.2	0225	
図版69－154	C2	E12グリット		棒状木製品	板材(板目)	ヒノキ	21.8	2.3	1.7	0462	
図版69－155	B2	SD104	不明 144	棒状木製品	角材	ヒノキ	13.9	1.7	1.2	0212	
図版69－156	B2	SD104	一括遺物(7)	棒状木製品	丸太材	イヌガヤ	12.7		0.7	0226	
図版69－157	B2	SD105	46	棒状木製品	丸太材 芯出り	クヌギ節	23.1		3.0	0215	
図版69－158	B2	SC102	木製品 1	棒状木製品	丸太材 芯出り	ヒノキ	39.5		2.5	0412	
図版69－159	E1	杭列群	Naなし 8	棒状木製品	丸太材 芯もち	カエデ属	41.5		7.8	0214	
図版69 160	C	SC01	3	棒状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	41.0	6.8	1.7	0449	
図版69－161	B2	SC1001	1	棒状木製品	板目(板材)	モミ	32.6	6.7	3.0	0401	
図版70－162	C	SA01	C102	棒状加工材	角材	タラノキ	115.1	16.5	12.8	0626	
図版70－163	C	SA01	D27 2/3	棒状加工材	角材	コナラ節	68.5	9.3	8.2	0669	
図版70－164	E2	SA01	38	棒状加工材	割材 1/8	ケンポナシ属	85.3	8.0	6.6	0682	
図版70 165	D1	SC1001	樹木Y118	棒状加工材	板材(板目)	不明	88.9	4.3	2.0	0639	
図版71－166	C	SA01	C33	棒状加工材	角材	フジキ	175.8	10.5	7.5	0684	
図版71－167	C2	SC05	218	棒状加工材	角材	クリ	138.8	5.8	5.6	1615	
図版71－168	B2	SC101	13	棒状加工材	板材(板目)	モミ属	96.1	6.7	2.1	0665	
図版72－169	D3	SD10	118	板状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	62.0	16.8	4.0	0254	
図版72－170	D3	SD10	119	板状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	71.1	16.4	3.6	0255	
図版72－171	D3	SD10	117	板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	39.6	9.0	3.1	0251	
図版72－172	D3	SD10	2	板状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	48.8	10.6	2.9	0266	
図版72－173	D3	SD10	107の2	板状木製品	板材(柾目)	クリ	49.8	5.6	1.3	0259	
図版72－174	D3	SD10	71	板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	100.6	16.0	4.1	0262	
図版72 175	D3	SD10	77	板状木製品	板材(柾目??)	ケヤキ	116.0	11.4	4.1	0261	
図版73－176	D3	SD10	70	板状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	103.3	13.3	3.4	0267	
図版73－177	D3	SD10	102	板状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	89.4	11.7	3.6	0272	
図版73－178	C2	SC02	17	板状木製品	板材(柾目)	ケンポナシ属	24.0	5.0	1.5	0222	
図版73－179	B2	SC125	7	板状木製品	板材(柾目)	クヌギ節	22.4	10.9	1.9	0210	
図版73－180	C2	SC02	47	板状木製品	板材(柾目)	ケンポナシ属	43.9	6.4	1.8	0242	
図版73－181	B2	SC124	101	板状木製品	板材(板目)	不明	20.0	5.8	1.1	0209	
図版73－182	C2	SC02	88	板状木製品	板材(柾目)	ケンポナシ属	9.8	5.3	1.1	0240	
図版73－183	B2	SC1011	18	板状加工材	板材(板目)	イヌシデ節	46.5	9.1	2.8	0603	
図版73－184	A2	9層堅地真下	木3	板状加工材	板材(柾目)	ケヤキ	33.2	17.3	2.6	0619	
図版73－185	C2	SC02	53	板状加工材	板材(柾目)	ケンポナシ属	30.0	8.5	2.2	0612	
図版73－186	C2	SC02	201	板状加工材	板材(板目)	ヒノキ	24.3	9.9	1.3	0602	
図版74－187	D3	SD10	163	有孔棒状木製品	丸太材	タラノキ	20.8		4.9	0245	
図版74－188	B2	SC140	25	有孔棒状木製品	丸太材	ケンポナシ属	10.5		5.5	0218	
図版74－189	B2	SD103		有孔棒状木製品	角材	ヒノキ	19.6	2.8	2.6	0203	
図版74－190	D3	SC04	8	有孔棒状木製品	角材	ケヤキ	20.9	3.3	3.4	0263	ブナ属の可能性あり。
図版74－191	D3	SD10	50	有孔棒状木製品	角材	ケヤキ	38.3	4.0	4.5	0244	
図版74－192	B2	SC106	1	有孔板状木製品	板材(板目)	モミ属	30.9	2.7	0.9	0207	
図版74 193	B2	SD104		有孔板状木製品	板材(柾目)	ヒノキ	21.1	10.4	1.5	0204	
図版74－194	A3	第6水田		有孔板状木製品	板材(板目)	ヒノキ	27.4	6.2	1.4	0205	
図版74－195	B2	SC103	平堂(下)水田	有孔板状木製品	板材(板目)	モミ属	20.8	3.0	1.4	0208	
図版74－196	B2			有孔板状木製品	板材(斜目)	モミ属	7.8	3.5	1.9	0227	

図版番号	地区名	遺構名	取上番号	器種分類	手法	樹種	長さ・口径(cm)	幅(cm)	厚さ・器・底径(cm)	資料番号	備考
図版74－197	C	SC01	4	有孔板状木製品	板材(板目)	ヒノキ	28.1	3.5	1.0	0463	
図版74－198	C2	SD03	77	有孔板状木製品	板材(斜目)	ヒノキ	17.8	5.3	0.7	0452	
図版74－199	B2	SC105	4	有孔板状木製品	板材(板目)	ヒノキ	41.1	9.4	1.4	0410	
図版74－200	C	SC01	43	有孔板状木製品	板材(板目)	ヒノキ	32.8	8.7	2.0	0421	
図版75－201	C2	SC41-42	66	有孔板状木製品	板材(板目)	フジキ	247.0	12.8	3.2	0276	
図版75－202	A3	SC08	9-2	有孔板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	157.3	18.9	2.4	0278	
図版75－203	D3	SD10	セギ 1-501	有孔板状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	57.5	19.0	2.1	0264	
図版74－204	D3	SD10	108	有孔板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	65.9	8.4	3.2	0253	
図版75－205	D3	SD10	138	有孔板状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	61.9	15.2	4.4	0252	
図版75－206	C2	SC02	103	有孔板状木製品	板材(柾目)	クリ	57.8	9.5	3.0	0249	
図版76－207	B2	SC113	9	有孔板状加工材	板材(斜目)	モミ属	56.8	12.3	2.1	0605	ニレ属の可能性あり。
図版76－208	E1	SA01	7	有孔板状加工材	板材(柾目)	ケンポナシ属	27.6	8.8	1.7	0607	
図版75－209	B2	SC113	19	有孔板状加工材	板材(柾目)	エノキ属	32.9	10.0	1.3	0606	
図版76－210	C	SA01		有孔板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	41.7	10.7	3.5	0265	
図版76－211	B2	SC102	2	有孔板状加工材	板材(板目)	不明	43.1	11.5	2.4	0622	
図版77－212	B2	SC123	142	有孔板状加工材	板材(板目)	エノキ属	39.5	26.7	3.3	0680	
図版77－213	E1	SD03	1	有孔板状加工材	板材(柾目)	ケヤキ	37.2	18.4	1.9	0604	
図版77－214	C	SD3002		板状加工材	板材(柾目)	クヌギ節	81.8	13.2	4.6	0656	
図版77－215	B2	SD106	S－1	板状加工材	板材(板目)	サワラ	69.5	8.2	3.1	0666	
図版77－216	B2	SC123	212	板状加工材	板材(柾目)	不明	50.3	10.3	4.7	0664	
図版77－217	B2	SC1009	10	板状加工材	板材(板目)	クリ	34.9	8.4	3.1	0668	
図版78－218	D3	SD10	セギ 2-15	棒状木製品	角材(板目)	ケヤキ	65.8	7.5	4.3	0270	
図版78－219	D3	SD10	セギ 2-23-1	板状木製品	板材(斜目)	ケヤキ	78.1	7.6	4.4	0269	
図版78－220	D3	SD10	セギ 2(1)	板状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	76.0	10.0	3.3	0271	
図版78－221	E2	SA01	36	棒状木製品	角材	ケヤキ	87.1	9.9	6.3	0277	
図版78－222	A3	SC07	13	棒状木製品	割材	ケヤキ	97.9	10.3	7.6	0280	
図版78－223	E2	SA01	5	棒状木製品	丸太材	ケヤキ	77.5	8.0	7.2	0274	
図版78－224	D3	SD10	セギ 2-20-2	板状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	17.8	9.5	3.5	0273	
図版78－225	D3	SD10	セギ 2-20-1	板状木製品	板材(柾目)	ケヤキ	24.2	10.4	3.9	0268	
図版79－226	A3	下層	不明 1	板状加工材	角材	クリ	29.6	11.9	10.4	0619	
図版79－227	A2	9 層整地面下	木製品No.8	棒状加工材	角材	モミ属	32.5	7.4	7.9	0617	
図版79－228	D3	SD10	139	板状木製品	角材	フジキ	35.0	9.5	5.0	0247	
図版79－229	C2	SC05	E35	棒状木製品	角材	クリ	34.8	7.3	4.7	0279	
図版79－230	E1	SA06	6	棒状加工材	割材	エノキ属	82.2	24.2	12.8	0642	
図版80－231	C2	SC05	411	板状木製品	板材(斜目)	ケンポナシ属	22.1	5.2	1.7	0720	
図版80－232	D3	SD03	20	棒状木製品	角材	モミ属	24.4		3.3	0727	
図版80－233	D3	SD10	192	棒状木製品	丸太材 芯もち	ムラサキシキブ属	12.7	2.1	2.3	0722	
図版80－234	D3	SD10	190	棒状木製品	丸太材 芯もち	ムラサキシキブ属	11.9		2.1	0721	イスガヤの可能性あり。
図版80－235	A3	SA101	棋22	棒状木製品	丸太材 芯もち	カエデ属	20.9		7.3	0725	
図版80－236	D3	SD03	24	有孔棒状木製品	丸太材	ムラサキシキブ属	14.4		3.9	0728	
図版80－237	E1	SD14	26	板状木製品	割材 1/8以下	エノキ属	48.5	8.1	3.5	0724	
図版80－238	B2	SC124	46	棒状木製品	丸太材 芯もち	エノキ属	33.9		7.6	0703	
図版80－239	D3	SC03	15	棒状木製品	板材(柾目)	カヤ	32.7	5.6	3.7	0730	
図版80－240	C	SA01	H70	棒状木製品	丸太材 芯もち	カヤ	65.3		9.7	0702	
図版80－241	E2	SA01	4	棒状木製品	丸太材 芯もち	クリ	77.3		8.4	0736	
図版80－242	D3	SD10	76	板状木製品	板材(板目)	ケヤキ	93.2	11.6	3.3	0729	
図版80－243	D3	SD10	85	棒状木製品	角材	ケヤキ	106.0	6.4	4.9	0733	
図版80－244	C2	SC05	K76 1/2	棒状木製品	角材	クリ	132.2	7.9	5.2	0746	
図版81－245	C	SA01	G71	棒状木製品	丸材	コナラ節	130.5	7.5	7.8	0737	
図版81－246	C	SA01	E18	棒状木製品	丸太材 芯もち	クリ	129.5		10.6	0745	
図版81－247	C	SA01	G19	棒状木製品	割材	クリ	136.7	12.0	9.6	0739	
図版81－248	C	SA01	E2	棒状木製品	割材	クリ	142.2	11.2	10.3	0743	
図版82－249	C2	SC31	1	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	コナラ属・カヤ	239.2		17.2	0909	
図版82－250	C1	SC32	26	建築部材 縦材	角材	カヤ	184.0	15.8	15.2	0896	
図版83－251	B2	第3水田	1	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	カヤ	279.6		10.0	0921	
図版83－252	D2	SC101	17	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	カヤ	206.8		8.4	0926	
図版84－253	D1	SC1001	K124	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	カヤ	135.5	10.6	11.0	1617	
図版84－254	C	SA01	E38	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	カヤ	152.6		12.3	0698	
図版84－255	C2	SC41-42	63	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	クリ	161.5	9.9	11.0	1609	
図版84－256	C	SA01	C17	建築部材 縦材	丸太材	クリ	192.7		7.4	0687	
図版84－257	C	SA01	C50 2/2	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	クリ	97.4		10.5	0690	
図版84－258	A3	SC101	37-1	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	クリ	118.0		11.0	0695	
図版84－259	C	SA01	G97	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	ヤマウルシ	56.0	12.4	6.0	0613	
図版84－260	C	SA01	C30	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	ニレ属	119.9	11.6	11.2	0688	
図版84－261	C	SA01	E37	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	カヤ	126.8		10.7	1603	
図版84－262	C	SA01	H86	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	フジキ	117.1		11.1	0696	
図版85－263	C	外周トレンチ	23	建築部材 縦材	丸太材 芯もち	カヤ	237.2		11.6	0939	
図版85－264	C1	SC52	4	建築部材 横材	割材	イヌガヤ	233.2	10.0	8.0	0913	
図版86－265	B2	SC113	79	建築部材 横架材	丸太材 芯もち	モミ属	300.0		11.4	0903	
図版87－266	C2	SC41-42	65	建築部材 横架材	板材(板目)	ケンポナシ属	269.2	14.6	4.8	0925	
図版87－267	E2	SA01	34	建築部材 横架材	板材(柾目)	クリ	203.2	25.6	4.0	0927	
図版88－268	C	外周トレンチ		建築部材 横架材	板材(柾目)	コナラ属	213.6	26.4	4.2	0928	
図版88－269	C	SA01	N7	建築部材 横架材	板材(板目)	クリ	202.4	14.8	6.4	0971	
図版89－270	C1	外周トレンチ	9 本片 3-3	建築部材 横架材	板材(板目)	不明	156.0	19.6	4.7	0901	

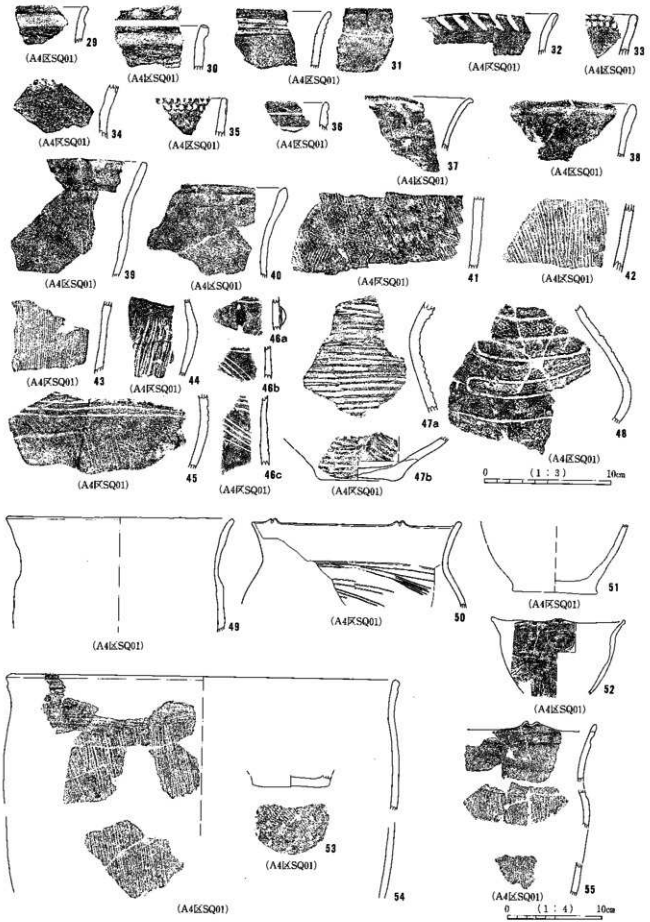
図版番号	地区名	遺構名	取上番号	器種分類	手法	樹種	長さ・口径(cm)	幅(cm)	厚さ・底径(cm)	報告書番号	備考
図版89－271	D3	SC03	21	建築部材 横架材	板材(板目)	クリ	141.6	24.8	6.4	0930	
図版89－272	B2	SC117	13	建築部材 横架材	板材(板目)	不明	192.3	25.1	6.2	0634	
図版89－273	B2	SC140	7	建築部材 横架材	板材(柾目)	オニグルミ	180.4	24.5	3.4	0649	
図版89－274	C	SA01	A8	建築部材 横架材	板材(板目)	エノキ属	160.8	19.7	8.7	1602	
図版91－275	C	SA01	N104	建築部材 横架材	割材	カヤ	198.2	16.2	8.3	1607	
図版91－276	C2	SC41-42	24	建築部材 横架材	板材(板目)	クリ	185.7	16.1	5.7	1618	
図版91 277	C2	SC02	1	建築部材 横架材	角材	エノキ属	154.9	14.8	6.2	0637	
図版91－278	E1	SA07	6	建築部材 横架材	板材(柾目)	ハリギリ	137.8	18.9	5.0	0658	
図版92－279	B2	SC124	53	建築部材 横架材	板材(柾目)	モミ属	144.4	16.0	3.6	0963	
図版92－280	C2	SC05	404	建築部材 横架材	板材(柾目)	クリ	146.0	21.3	4.2	0929	
図版92－281	B2	SC1008	9	建築部材 横架材	割材	クリ	152.4	12.4	5.6	0952	
図版93－282	C	SD3002		建築部材 横架材	板材(斜目)	カツラ	109.3	35.0	4.5	0651	
図版93－283	D1	SC1001	Y47 1/2	建築部材 横架材	板材(板目)	クリ	125.8	19.2	5.4	0635	
図版93－284	C2	SC05	407	建築部材 横架材	板材(斜目)	不明	85.7	18.1	3.8	0645	
図版93－285	C2	SC02	56	建築部材 横架材	板材(柾目)	ケンポナシ属	82.4	7.7	2.3	0601	
図版93－286	B2	SC128	3	建築部材 横架材	板材(板目)	サワラ	76.9	10.9	2.0	0638	
図版94－287	C	SA01	R45	建築部材 横架材	角材	ニレ属	187.0	21.7	7.1	0997	
図版94－288	C1	SC51	5	建築部材 横架材	割材 1/2	カエデ属	152.5	18.0	8.5	1610	
図版94－289	B2	SC123	157	建築部材 横架材	割材	ニレ属	163.8	15.7	9.1	0656	
図版94－290	C	SA01	E17	建築部材 横架材	板材(柾目)	カツラ	144.0	12.2	6.5	1606	
図版95－291	C2	SC05	K46	建築部材 横架材	板材(板目)	クリ	212.4	11.2	5.6	0922	
図版95－292	C	SC01	28	建築部材 横架材	角材	コナラ節	195.0	10.0	7.3	0902	
図版96－293	B2	SC1008	5	建築部材 横架材	板材(柾目)	クリ	155.6	14.4	6.0	0954	
図版96－294	C	SC01	34	建築部材 横架材	板材(柾目？)	コナラ節	159.6	12.4	4.4	0956	
図版96 295	B2	SC1008	5	建築部材 横架材	板材(柾目)	クリ	153.2	14.4	4.8	0953	
図版96－296	C	SA01	C102	建築部材 横架材	板材	クリ	151.2	16.8	6.4	0904	
図版96－297	B2	SC1009	46	建築部材 横架材	板材(板目)	クリ	57.9	20.3	3.0	0611	
図版96－298	C2	SC03	30	建築部材 横架材	板材(柾目)	ケンポナシ属	58.3	5.0	2.8	0609	
図版96－299	D3	SD10	セギ 1 314	建築部材 横架材	板材(柾目)	ニレ属	91.0	14.7	3.3	0696	
図版97－300	B2	SC139	12	建築部材 横架材	板材(板目)	クリ	256.8	22.4	8.4	0923	
図版97－301	D2	SC101	21	建築部材 横架材	割材	クリ	249.2	11.2	6.4	0914	
図版97－302	A3	SC09	9-1	建築部材 横架材	割材	エノキ属	249.4	10.5	6.5	1614	
図版98－303	D3	SD10	106	建築部材 横架材	板材(斜目)	ケヤキ	117.8	11.9	4.5	0681	
図版98－304	D3	SD10	103	建築部材 横架材	板材(柾目)	ケヤキ	117.8	12.6	5.6	0694	
図版98－305	E2	SA01	51	建築部材 横架材	板材(柾目)	クリ	127.7	13.7	5.7	0691	
図版98－306	B2	SC1002	6	建築部材 横架材	板材(柾目)	サクラ属	95.3	17.5	5.5	0647	
図版98－307	E1	SA07	10	建築部材 横架材	角材	ヤマザクラ	112.2	7.3	8.6	0653	
図版98－308	E1	SA02	12	建築部材 横架材	角材	サワラ	110.0	6.2	5.7	0659	
図版99－309	C1	SC52	21	建築部材 横架材	角材	ケンポナシ属	149.4	12.0	7.6	1601	
図版99－310	A3	SC09	3	建築部材 横架材	角材	エノキ属	195.0	13.5	10.0	1613	
図版99－311	A3	SC09	5	建築部材 横架材	割材 1/2	エノキ属	159.7	11.8	6.1	1608	
図版100－312	E1	SD14	102	建築部材 横架材	板材(板目)	ケンポナシ属	276.6	17.6	5.8	0624	
図版100－313	D1	SC1001	Y162	建築部材 横架材	割材	コナラ節	84.6	14.5	8.6	0646	
図版100 314	D1	SC1001	Y22	建築部材 横架材	板材(板目)	ケヤキ	67.5	13.2	4.2	0656	
図版101－315	B2	SC1004	23	建築部材 横架材(小屋組材)	角材	モミ属	158.0	9.5	7.1	1612	古墳人吐の上 北側層遺より。
図版101－316	B2	SC114	31	建築部材 横架材	板材(板目)	クリ	165.6	8.6	5.5	0641	
図版101－317	B2	SC140	2	建築部材 横架材	割材	サクラ属	174.9	10.0	7.2	0652	
図版102－318	B2	SC139	4	建築部材 横架材	板材(柾目)	モミ属	100.1	26.5	5.7	0689	
図版102－319	D3	SD10	セギ 1-342-1	建築部材 横架材	板材(板目)	ケヤキ	93.3	17.9	5.1	0685	
図版102－320	B2	SD105	S103	建築部材 横架材	板材(板目)	ヒノキ	65.8	15.6	3.1	0654	
図版102 321	A2	SD101	木棒 1-c	建築部材 横架材	板材(板目)	アカマツ	31.5	9.5	2.2	0655	
図版102－322	A2	SD101	木杭 1-a	建築部材 横架材	板材(板目)	アカマツ	46.5	12.7	2.3	0661	
図版102－323	A3	SC03	36	建築部材 横架材	板材(柾目)	不明	53.9	11.4	3.3	0620	
図版102－324	C2	SC41-42	83	建築部材 横架材	板材(板目)	モミ属	63.9	22.5	3.0	0644	
図版102－325	E1	SC01	1	建築部材 横架材	板材(斜目)	カツラ	72.8	18.3	3.1	0657	
図版102 326	C	SA01	P 平町	建築部材 横架材	板材(斜目)	ケヤキ	64.1	12.9	3.2	0640	
図版103－327	C	SA01	G201	建築部材 梁・桁取材	割材	クリ	244.5	25.5	11.1	0614	
図版104－328	C2	SC41-42	56	建築部材 梁・桁取材	割材	エノキ属	215.0	26.8	11.4	0616	
図版104－329	B2	SC1009	19	建築部材 梁・桁取材	割材	クリ	180.0	21.9	8.8	0615	
図版105－330	C	SA01	G202	建築部材 梁・桁取材	割材	クリ	183.4	21.6	8.4	0625	
図版105－331	A3	SC02	1010	建築部材 梁・桁取材	割材	クリ	199.2	28.0	14.4	0618	
図版106－332	B2	SC123	127	建築部材 梁・桁取材	割材	クリ	82.3	39.1	11.8	0633	
図版106－333	C	SA01	G76	建築部材 梁・桁取材	板材	ヤマザクラ	122.6	20.7	6.7	0627	
図版106－334	C	SA01	E144	建築部材 梁・桁取材	割材	クリ	99.4	17.2	8.5	0623	
図版106－335	C	SA01	E148-2	建築部材 梁・桁取材	割材	コナラ節	78.4	16.2	10.1	0628	
図版107－336	B2	SC140	8	建築部材 梁・桁取材	板材(板目)	ケンポナシ属	173.2	27.4	6.6	0621	
図版107－337	C	SA01	A11	建築部材 梁・桁取材	板材(板目)	クリ	154.0	18.1	8.4	0622	
図版107－338	B2	SC123	7	建築部材 梁・桁取材	角材	クリ	121.0	7.4	9.8	0630	
図版108－339	C	SA01	G202	建築部材 梁・桁取材	板材(板目)	クリ	44.6	17.9	8.9	0631	
図版108－340	C	SA01	G202	建築部材 梁・桁取材	板材(斜目)	ケンポナシ属	24.4	16.5	8.0	0629	
図版108－341	B2	SC113	35	建築部材 梁・桁取材	割材	コナラ節	76.8	13.3	6.2	0632	
図版108－342	A2	SD101	木杭 1-b	建築部材 梁・桁取材	板材(板目)	アカマツ	63.9	13.2	3.0	0663	
図版108－343	C	SA01	E104	建築部材 梁・桁取材	板材(斜目)	ニレ属	105.1	22.2	4.7	0693	

図版番号	地区名	遺構名	取上番号	器種分類	手法	樹種	長さ・円径 (cm)	幅 (cm)	厚さ・高さ (cm)	整理番号	備考
図版109-344	B2	SC1004	6	建築部材 屋根材(垂木?)	丸太材 芯もち	コナラ節	348.8		8.8	0962	
図版109-345	C1	SC82	1	建築部材 屋根材(垂木)	丸太材 芯もち	不明	408.8		9.6	0907	
図版109-346	C1	SC82	2	建築部材 屋根材(垂木)	丸太材 芯もち	不明	416.0		9.4	0908	
図版110-347	B2	SC1003	48	建築部材 屋根材(垂木)	丸太材 芯もち	モミ属	282.0		8.4	1604	
図版110-348	B2	SC1003	16	建築部材 屋根材(垂木)	丸太材 芯もち	コナラ節	127.8		7.3	0683	
図版110-349	A3	SC09	30	建築部材 屋根材(垂木)	丸太材 芯もち	カエデ属	41.0	6.5	5.1	1611	
図版110-350	A3	SC09	6	建築部材 屋根材(垂木)	丸太材 芯もち	カヤ	167.4		7.3	0699	
図版111-351	C2	SC05	W5	建築部材 付属材(格子)	割材	コナラ属	256.0	20.7	14.5	0906	
図版112-352	A3	SC04	28	建築部材 付属材(格子)	角材	キハダ	181.0	14.4	10.0	0643	
図版112-353	C2	SC31	20	建築部材 付属材(格子)	角材	クリ	180.9	23.6	15.4	1616	
図版113-354	C2	SC41・42	41	建築部材 付属材(マキ杭)	角材	クリ	99.2	15.6	6.0	1605	
図版113-355	E2	SA01	19	建築部材 加工材	割材	エノキ属	110.0	10.8	5.6	0950	
図版113-356	C1	外周トレンチ	17	建築部材 加工材	板材(板目)	モミ属	152.4	11.6	5.2	0951	
図版113-357	B2	SC135	4	建築部材 加工材	割材	クリ	173.6	9.6	8.5	0911	
図版114-358	B2	SC1010	2	建築部材 加工材	丸太材 芯もち	カヤ	332.4		13.6	0961	
図版114-359	E2	SA01	58	建築部材 加工材	丸太材 芯もち	クリ	244.5		15.2	0919	
図版114-360	B2	SC113	6	建築部材 加工材	丸太材 芯もち	カヤ	266.0		11.2	0920	
図版114-361	C	外周トレンチ	13	建築部材 加工材	丸太材 芯もち	クリ	196.0		10.0	0976	
図版115-362	C1	SC52	25	建築部材 加工材	柄材	コナラ節	247.8	16.8	10.4	0917	
図版115-363	C	SA01	A6	建築部材 加工材	柄材	カツラ	226.4	20.0	11.2	0955	
図版115-364	B2	SC1010	4	建築部材 加工材	割材	クリ	136.4	6.0	3.6	0975	
図版115-365	C	外周トレンチ		建築部材 加工材	柄材	クリ	155.2	10.0	12.0	0957	
図版115-366	C2	SC41・42	64	建築部材 加工材	割材	クリ	166.8	14.4	8.0	0918	
図版115-367	C2	SC03	5	建築部材 加工材	柄材	クリ	204.8	7.2	6.8	0915	
図版115-368	C2	SC05	K19	建築部材 加工材	板材(柾目)	クリ	200.4	11.2	7.2	0916	
図版116-369	D1	SC1001	K109	杭	丸太材 芯もち	カヤ	104.2		10.9	0701	
図版116-370	C	SA01	B57	杭	丸太材 芯もち	カヤ	119.4		12.4	0740	
図版116-371	C	SA01	G77	杭	丸太材 芯もち	カヤ	151.6		13.2	0972	
図版116-372	D1	SC1001	K102	杭	丸太材 芯もち	カヤ	176.0		9.6	0924	
図版116-373	C	SA01	D3	杭	丸太材 芯もち	コナラ節	194.8		14.0	0968	
図版116-374	C2	SC05	K21	杭	丸太材 芯もち	モミ属	188.5		5.8	0744	
図版116-375	C2	SC05	K18	杭	丸太材 芯もち	モミ属	181.0		6.0	0750	
図版116-376	C2	SC05	K22	杭	丸太材 芯もち	モミ属	166.0		7.5	0742	
図版116-377	C2	SC05	K23	杭	丸太材 芯もち	モミ属	146.0		6.3	0748	
図版116-378	E2	SA01	18	杭	丸太材 芯もち	エノキ属	104.8		11.6	0965	
図版116-379	C	SA01	E14	杭	丸太材 芯もち	カヤ	90.9		10.2	0705	モミ属の可能性あり。
図版117-380	B2	SD168	杭1	杭	丸太材 芯もち	カヤ	79.0	7.3	9.0	0704	
図版117-381	A3	SA101	杭33	杭	丸太材 芯もち	アワブキ	19.6		4.2	0734	
図版117-382	B2	中世杭列	2	杭	丸太材 芯もち	スギ	92.0		10.0	0966	
図版117-383	D3	SC04	13	杭	柄材	カヤ	154.4	12.4	5.8	0932	
図版117-384	D3	SC04	11	杭	柄材	カヤ	155.5	15.0	9.6	0931	
図版117-385	C	SA01	C56	杭	角材	クリ	177.6	12.4	7.6	0969	
図版117-386	C2	SC43	H65	杭	柄材 1/2	カヤ	167.5	8.2	4.7	0749	
図版117-387	C	SA01	H3	杭	割材	クリ	173.6	23.6	14.4	0960	
図版117-388	C	SA01	C47 1/3	杭	柄材 1/2	クリ	88.5	22.0	11.8	0741	
図版117-389	C2	SC05	K302	杭	柄材	モミ属	149.2	8.0	4.8	0967	
図版117-390	C2	SC05	K73	杭	割材	モミ属	173.5	8.8	4.8	0933	
図版118-391	E2	SA01	16	杭	丸太材 芯太り	エノキ属	117.6		11.2	0958	
図版118-392	C	SA01	E57	杭	割材	クリ	139.6	13.6	10.4	0975	
図版118-393	C	SA01	C32	杭	柄材	クリ	171.6	12.0	10.0	0974	
図版118-394	C	SA01	E26	杭	割材	クリ	145.0	10.2	10.9	0747	
図版118-395	E2	SA01	23	杭	割材	フジキ	106.0	8.0	5.6	0970	
図版118-396	B2	SC1002	16	杭	丸太材 芯もち	モミ属	170.8		8.0	0964	
図版118-397	C1	SC51	5	建築部材 横架材	割材 1/2	カエデ属	270.0	17.5	9.4	1610	図版94-288と同一個体。

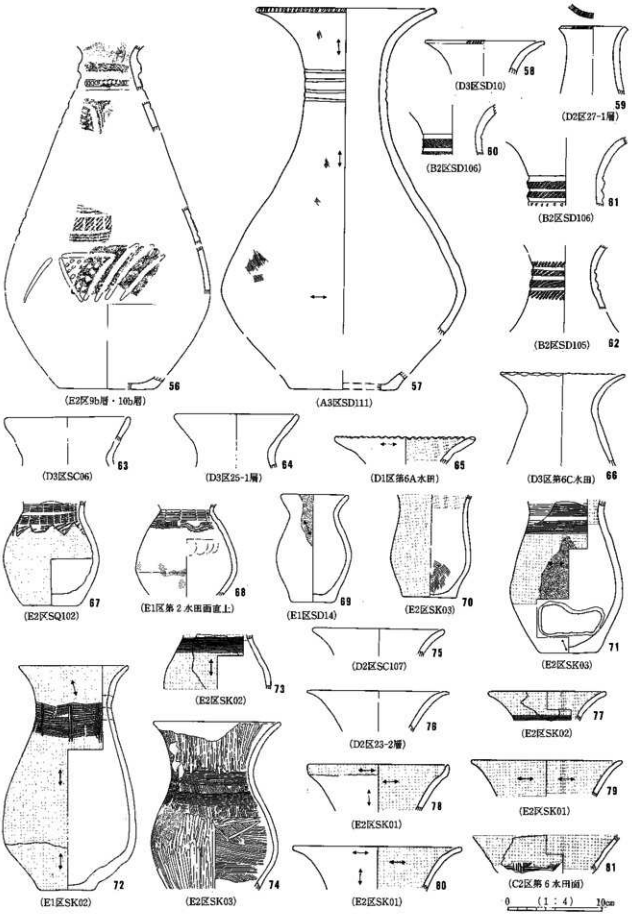
遺 物 図 版


(D3区27-1層) 1
(D3区27-1層) 2
(D3区27-1層) 3
(D3区27-1層) 4
(D3区SD11) 5
(D3区27-1層) 6
(D3区27-1層) 7
(D3区27-1層) 8
(D3区27-1層) 9
(D3区27-1層) 10
(D3区27-1層) 11
(D3区27-1層) 12
(D3区SD11・13) 13
(D3区27-1層) 14
(D3区27-1層) 15
(D3区27-1層) 16
(D3区27-1層) 17
0 (1：3) 10cm
(D3区27-1層) 18
(D3区27-1層) 21
(D3区27-1層) 19
(D3区27-1層) 20
(D3区27-1層) 22
(D3区27-1層) 24
(D3区SD11) 23
(D3区27-1層) 25
(D3区SD11) 26
0 (1：4) 10cm
(D3区27-1層) 27
(D2区SQ01) 28

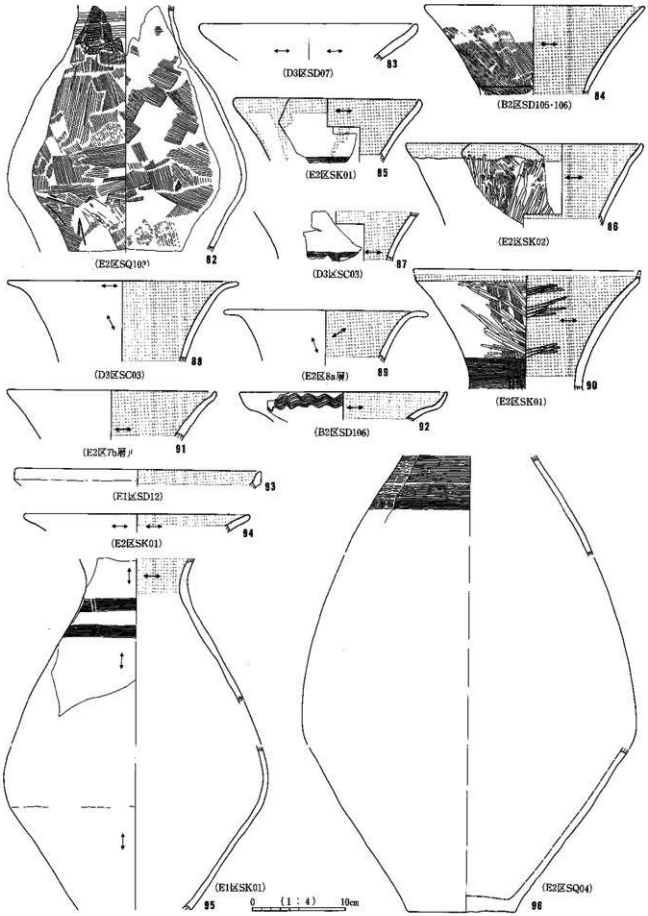
縄文時代晩期の土器（1）


29
(A4区SQ01)
30
(A4区SQ01)
31
(A4区SQ01)
32
(A4区SQ01)
33
(A4区SQ01)
34
(A4区SQ01)
35
(A4区SQ01)
36
(A4区SQ01)
37
(A4区SQ01)
38
(A4区SQ01)
39
(A4区SQ01)
40
(A4区SQ01)
41
(A4区SQ01)
42
(A4区SQ01)
43
(A4区SQ01)
44
(A4区SQ01)
46a
46b
46c
(A4区SQ01)
45
(A4区SQ01)
47a
47b
(A4区SQ01)
48
(A4区SQ01)
0 (1：3) 10cm
49
(A4区SQ01)
50
(A4区SQ01)
51
(A4区SQ01)
52
(A4区SQ01)
53
(A4区SQ01)
54
(A4区SQ01)
55
(A4区SQ01)
0 (1：4) 10cm

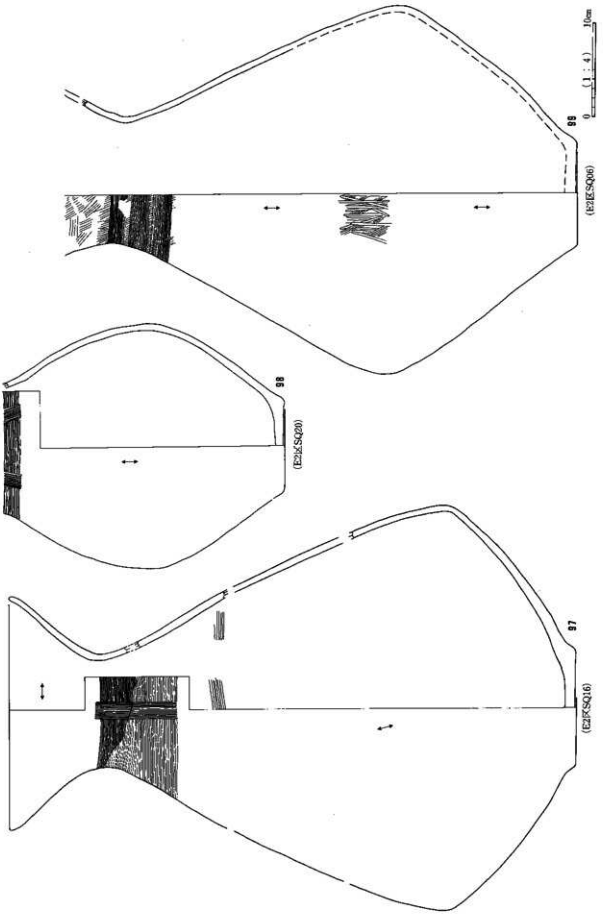
縄文時代晩期の土器（2）


56
(E2区9b層・10b層)
57
(A3区SD111)
58
(D3区SD10)
59
(D2区27-1層)
60
(B2区SD106)
61
(B2区SD106)
62
(B2区SD105)
63
(D3区SC06)
64
(D3区25-1層)
65
(D1区第6A水田)
66
(D3区第6C水田)
67
(E2区SQ102)
68
(E1区第2水田面直上)
69
(E1区SD14)
70
(E2区SK03)
71
(E2区SK03)
72
(E1区SK02)
73
(E2区SK02)
74
(E2区SK03)
75
(D2区SC107)
76
(D2区23-2層)
77
(E2区SK02)
78
(E2区SK01)
79
(E2区SK01)
80
(E2区SK01)
81
(C2区第6水田面)
0 (1:4) 10cm

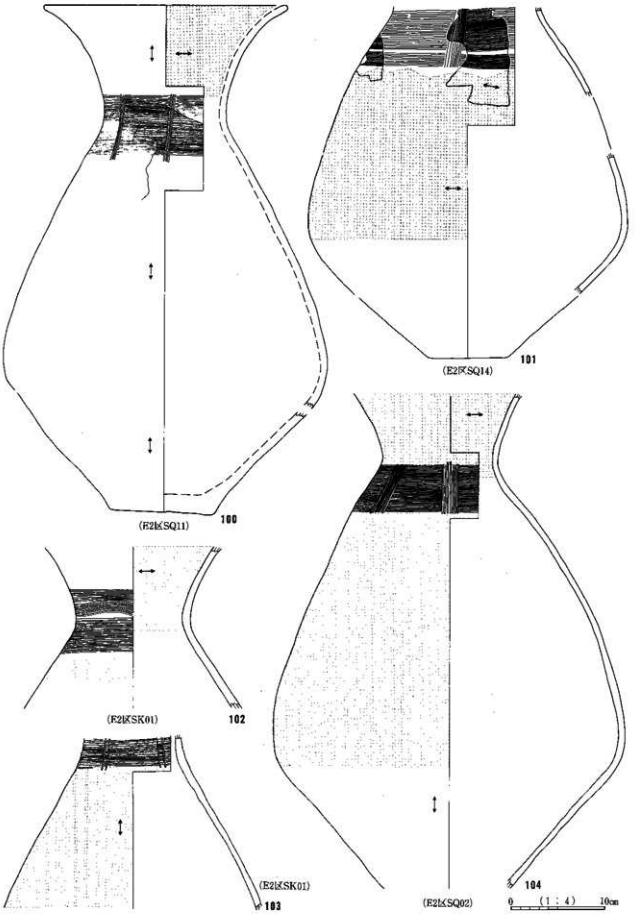
弥生時代の土器（1）


(E2区SQ102)
82
(D3区SD07)
83
(B2区SD105・106)
84
(E2区SK01)
85
(E2区SK02)
86
(D3区SC03)
87
(D3区SC03)
88
(E2区8a層)
89
(E2区SK01)
90
(E2区7b層)
91
(B2区SD106)
92
(E1区SD12)
93
(E2区SK01)
94
(E1区SK01)
95
(E2区SQ04)
96
0 (1：4) 10cm

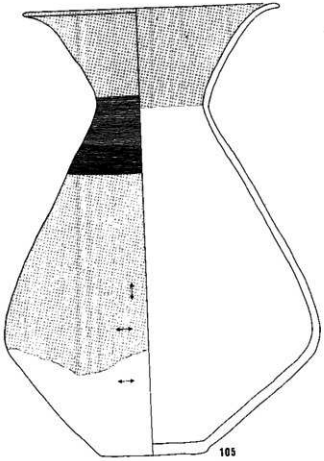
弥生時代の土器（2）



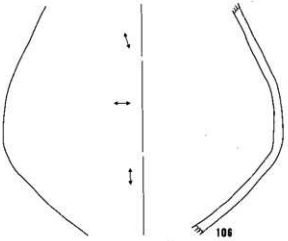
弥生時代の土器（3）


(E2kSQ11)
100
(E2kSQ14)
101
(E2kSK01)
102
(E2kSK01)
103
(E2kSQ02)
104
0 (1：4) 10cm

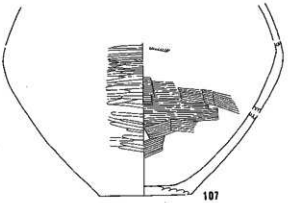
弥生時代の土器（4）



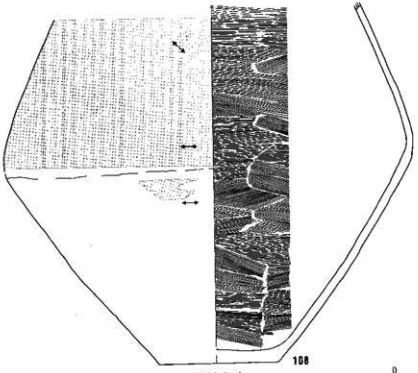
(E2区SQ18)



(E2区SK01)



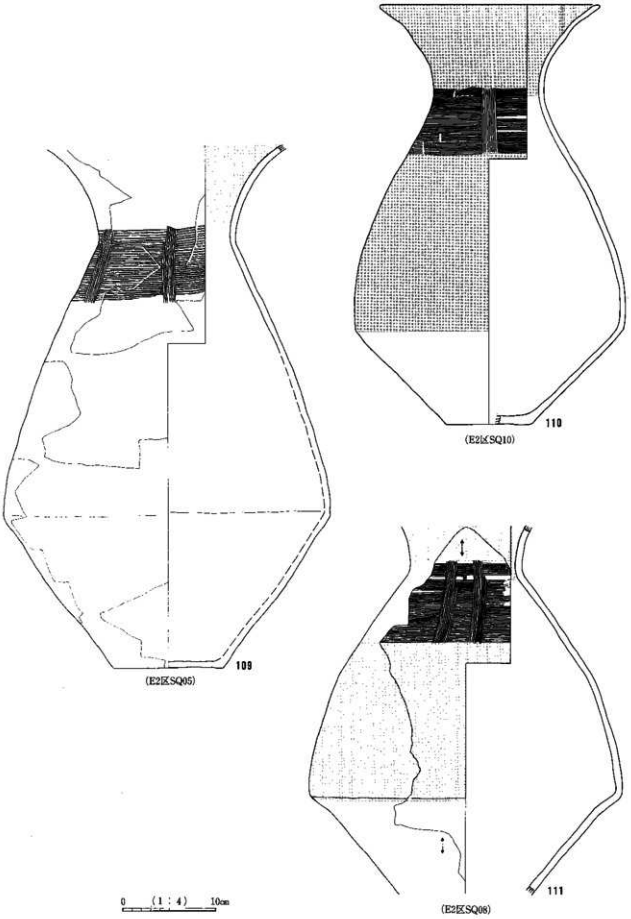
(E2区SK01)



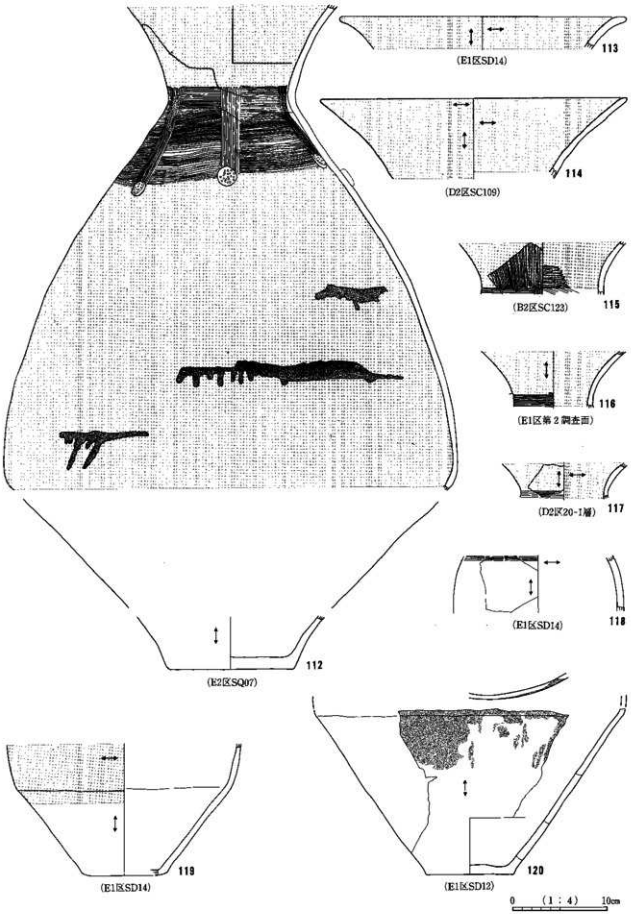
(E2区SQ15)

0 (1 : 4) 10cm

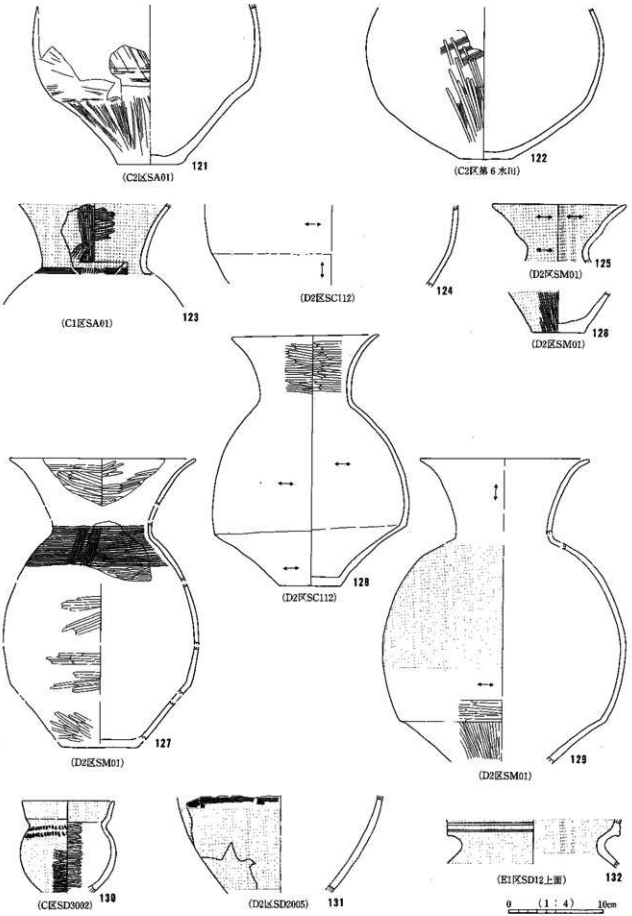
弥生時代の土器（5）



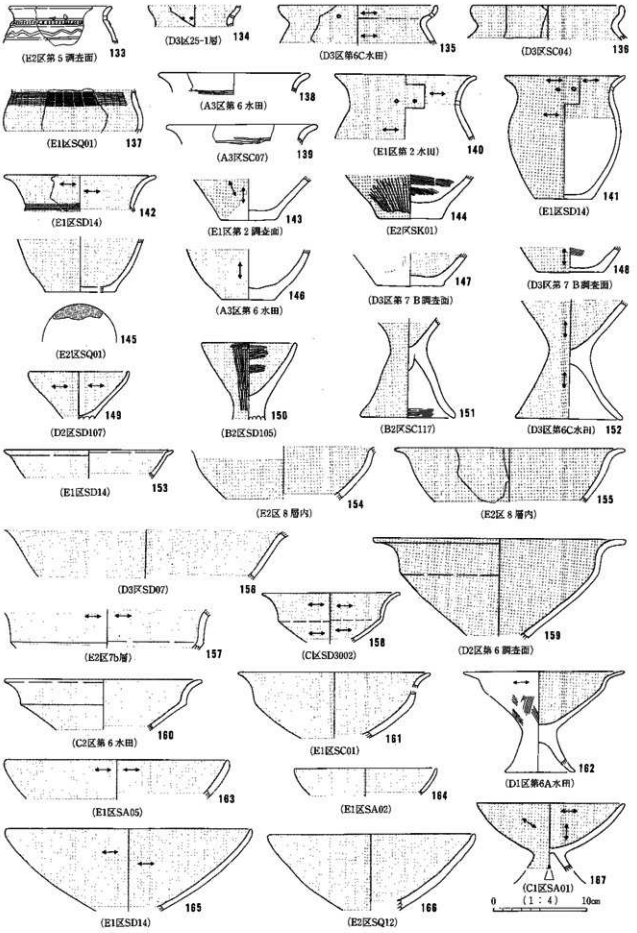
弥生時代の土器（6）


113
(E1区SD14)
114
(D2区SC109)
115
(B2区SC123)
116
(E1区第2調査面)
117
(D2区20-1層)
118
(E1区SD14)
112
(E2区SQ07)
119
(E1区SD14)
120
(E1区SD12)
0 (1：4) 10cm

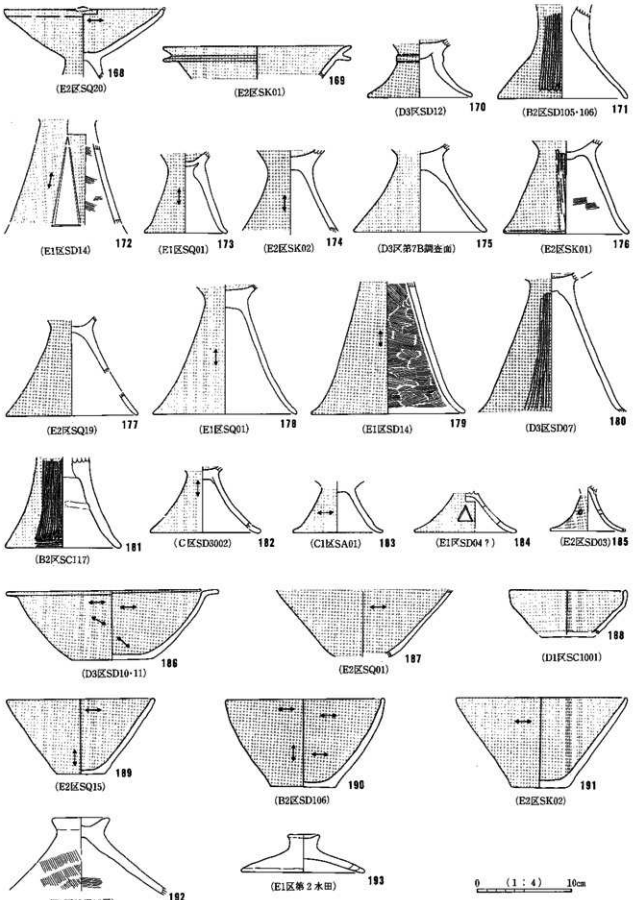
弥生時代の土器（7）


121
(C2区SA01)
122
(C2区第6水川)
123
(C1区SA01)
(D2区SC112)
124
125
(D2区SM01)
126
(D2区SM01)
128
(D2区SC112)
127
(D2区SM01)
129
(D2区SM01)
130
(C区SD30002)
(D2区SD2005)
131
(E1区SD12上面)
132
0 (1：4) 10cm

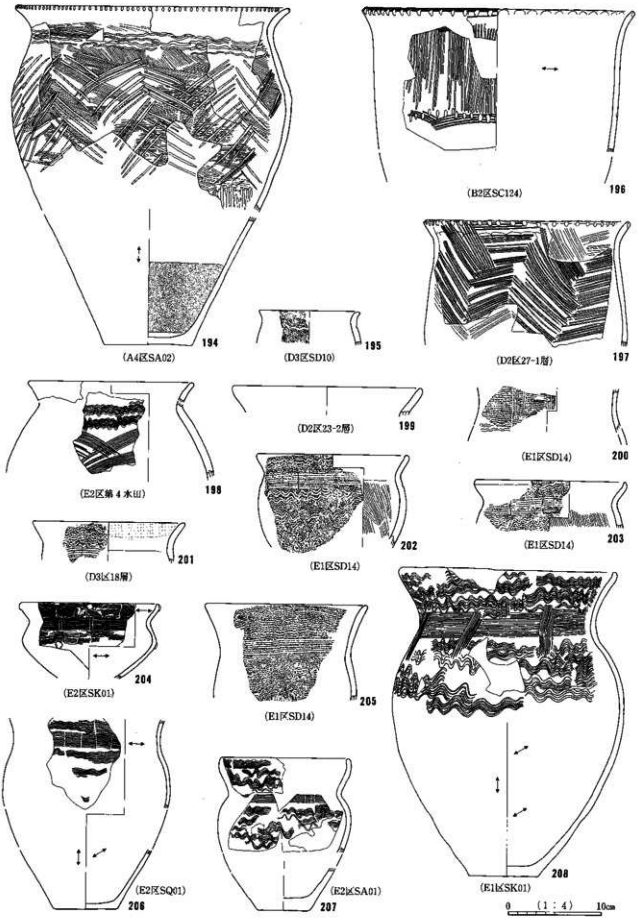
弥生時代の土器（8）


(E2区第5調査面) 133
(D3区25-1層) 134
(D3区第6C水田) 135
(D3区SC04) 136
(E1区SQ01) 137
(A3区第6水田) 138
(A3区SC07) 139
(E1区第2水田) 140
141
(E1区SD14)
(E1区SD14) 142
(E1区第2調査面) 143
(E2区SK01) 144
(E2区SQ01) 145
(A3区第6水田) 146
(D3区第7B調査面) 147
(D3区第7B調査面) 148
(D2区SD107) 149
(B2区SD105) 150
(B2区SC117) 151
(D3区第6C水田) 152
(E1区SD14) 153
(E2区8層内) 154
(E2区8層内) 155
(D3区SD07) 156
(E2区7b層) 157
(C1区SD3002) 158
(D2区第6調査面) 159
(C2区第6水田) 160
(E1区SC01) 161
(D1区第6A水田) 162
(E1区SA05) 163
(E1区SA02) 164
(C1区SA01) 167
(E1区SD14) 165
(E2区SQ12) 166
0 (1：4) 10cm

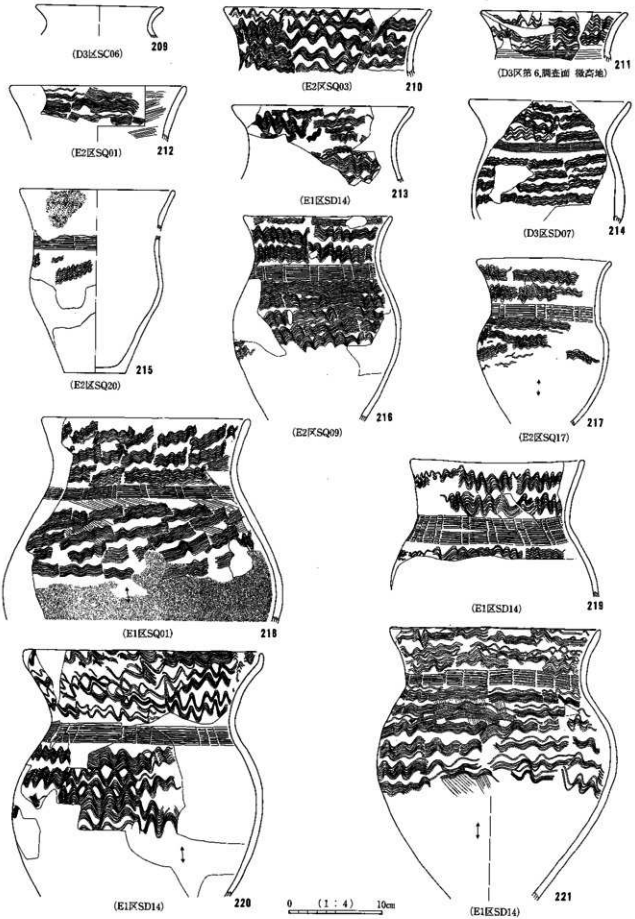
弥生時代の土器（9）


(E2区SQ20) 168
(E2区SK01) 169
(D3区SD12) 170
(B2区SD105・106) 171
(E1区SD14) 172
(E1区SQ01) 173
(E2区SK02) 174
(D3区第7B調査面) 175
(E2区SK01) 176
(E2区SQ19) 177
(E1区SQ01) 178
(E1区SD14) 179
(D3区SD07) 180
(B2区SC117) 181
(C区SD3002) 182
(C1区SA01) 183
(E1区SD64？) 184
(E2区SD03) 185
(D3区SD10・11) 186
(E2区SQ01) 187
(D1区SC1001) 188
(E2区SQ15) 189
(B2区SD106) 190
(E2区SK02) 191
(E1区試掘15層) 192
(E1区第2水田) 193
0 (1：4) 10cm

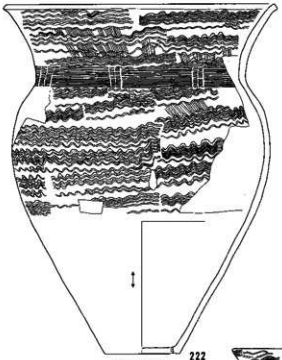
弥生時代の土器（10）


194
(A4区SA02)
195
(D3区SD10)
196
(B2区SC124)
197
(D2区27-1層)
198
(E2区第4水田)
199
(D2区23-2層)
200
(E1区SD14)
201
(D3区18層)
202
(E1区SD14)
203
(E1区SD14)
204
(E2区SK01)
205
(E1区SD14)
206
(E2区SQ01)
207
(E2区SA01)
208
(E1区SK01)
0 (1：4) 10cm

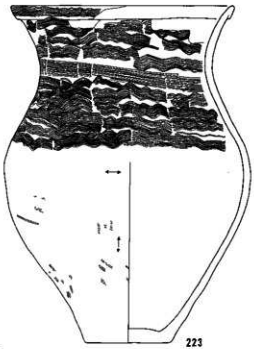
弥生時代の土器（11）


(D3区SC06)
209
(E2区SQ03)
210
(D3区第6調査面 微高地)
211
(E2区SQ01)
212
(E1区SD14)
213
(D3区SD07)
214
(E2区SQ20)
215
(E2区SQ09)
216
(E2区SQ17)
217
(E1区SQ01)
218
(E1区SD14)
219
(E1区SD14)
220
(E1区SD14)
221
0 (1：4) 10cm

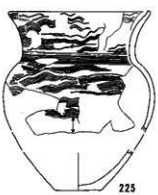
弥生時代の土器（12）



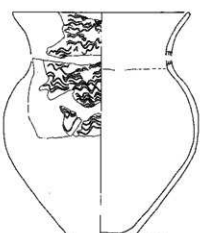
(E1区SQ04)



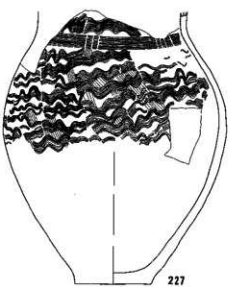
(C2区SC41)



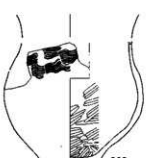
(D2区SC110)



(D3区第5水田)



(E2区SK02)



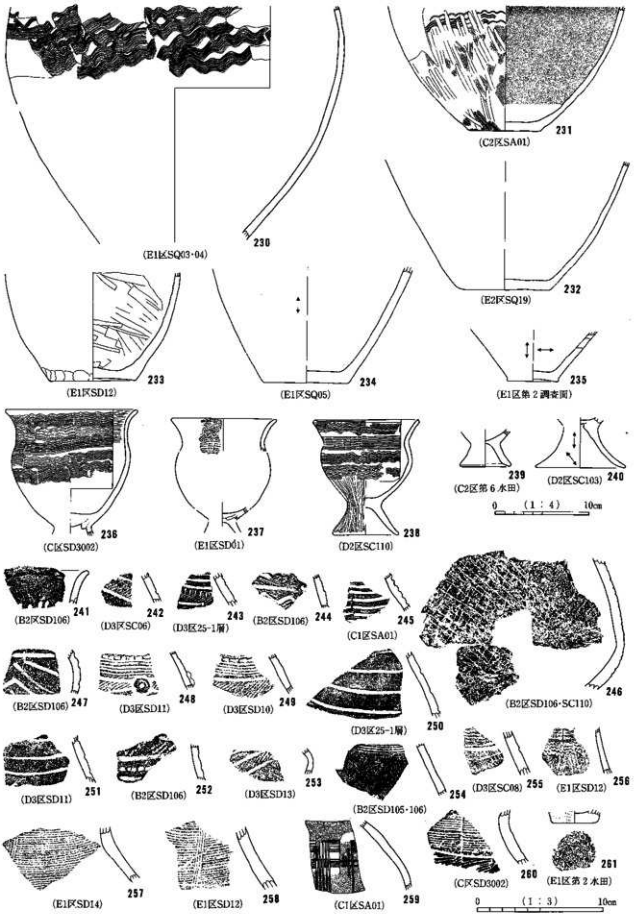
(D2区SC109)

(D3区SD07)

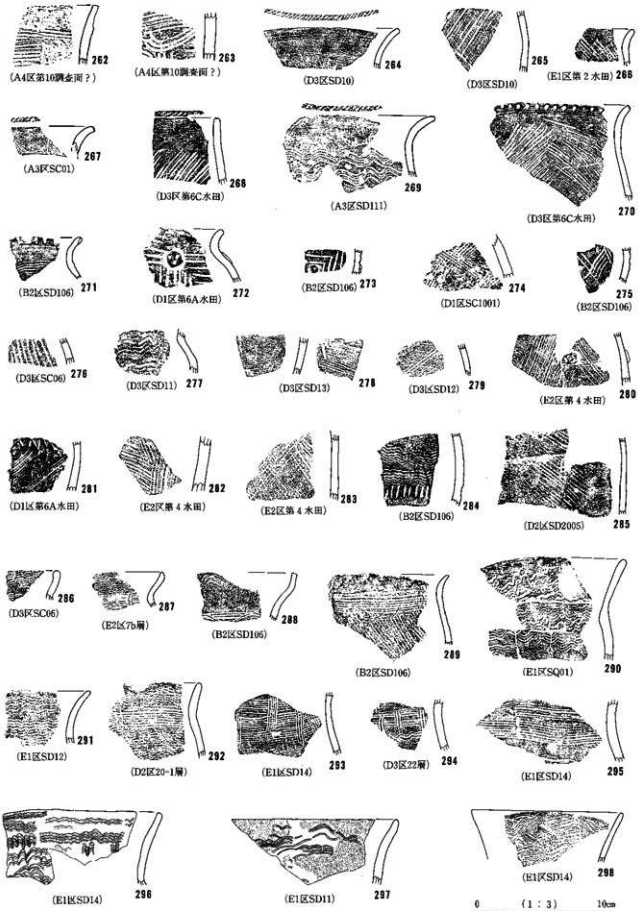
(C2区39号)

0 (1 : 4) 10cm

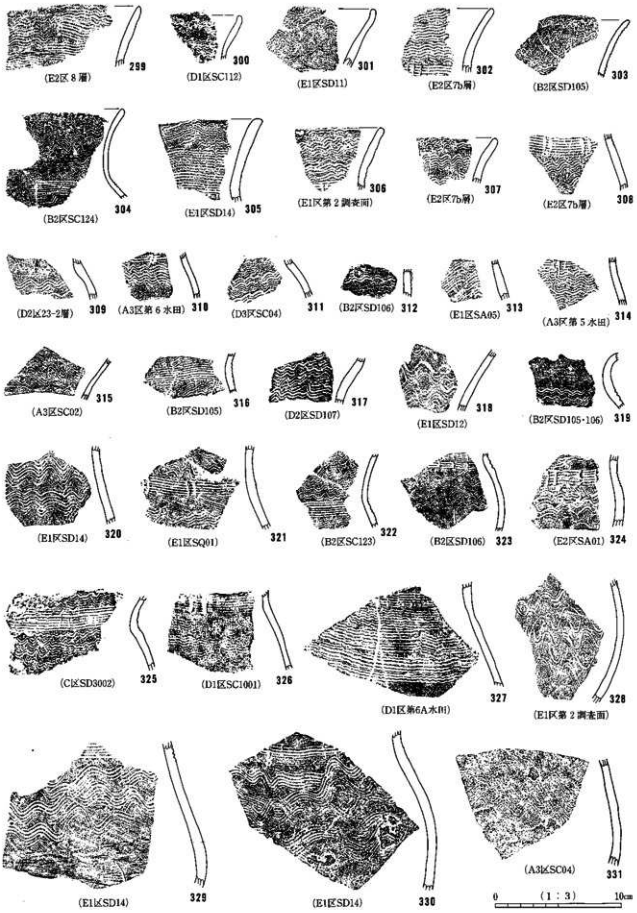
弥生時代の土器 (13)


(E1区SQ03・04)
230
(C2区SA01)
231
(E2区SQ19)
232
(E1区SD12)
233
(E1区SQ05)
234
(E1区第2調査区)
235
(C1区SD3002)
236
(E1区SD01)
237
(D2区SC110)
238
(C2区第6水田)
239
(D2区SC103)
240
0 (1：4) 10cm
(B2区SD106)
241
(D3区SC06)
242
(D3区25-1層)
243
(B2区SD106)
244
(C1区SA01)
245
(B2区SD106・SC110)
246
(B2区SD106)
247
(D3区SD11)
248
(D3区SD10)
249
(D3区25-1層)
250
(D3区SD11)
251
(B2区SD106)
252
(D3区SD13)
253
(B2区SD105・106)
254
(D3区SC08)
255
(E1区SD12)
256
(E1区SD14)
257
(E1区SD12)
258
(C1区SA01)
259
(C1区SD3002)
260
(E1区第2水田)
261
0 (1：3) 10cm

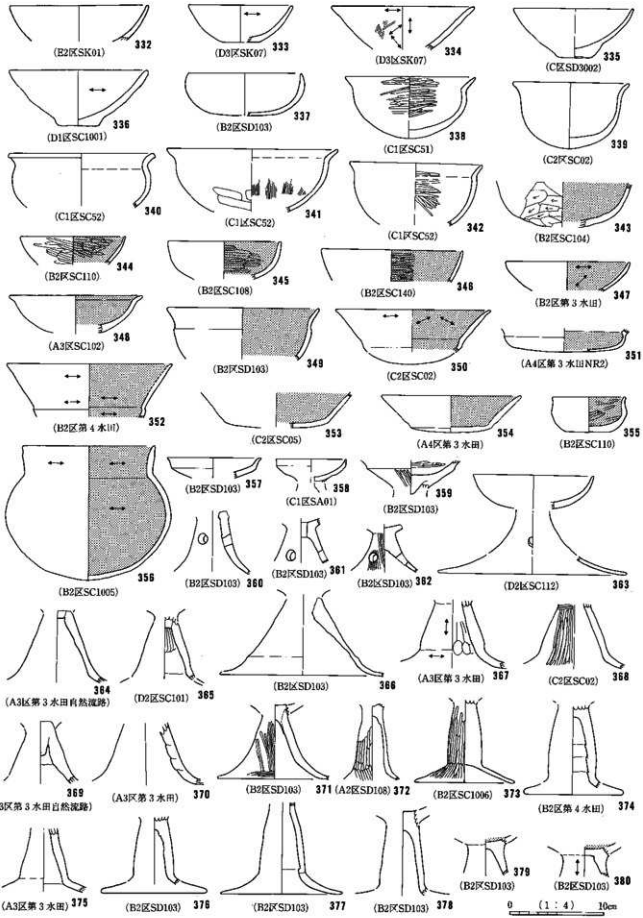
弥生時代の土器（14）


262
(A4区第10調査面？)
263
(A4区第10調査面？)
264
(D3区SD10)
265
(D3区SD10)
(E1区第2水田) 266
(A3区SC01) 267
(D3区第6C水田) 268
(A3区SD111) 269
(D3区第6C水田) 270
(B2区SD106) 271
(D1区第6A水田) 272
(B2区SD106) 273
(D1区SC1001) 274
275
(B2区SD106)
(D3区SC06) 276
(D3区SD11) 277
(D3区SD13) 278
(D3区SD12) 279
(E2区第4水田) 280
(D1区第6A水田) 281
(E2区第4水田) 282
(E2区第4水田) 283
(B2区SD106) 284
(D2区SD2005) 285
286
(D3区SC06)
(E2区7b層) 287
(B2区SD105) 288
(B2区SD106) 289
(E1区SQ01) 290
(E1区SD12) 291
(D2区20-1層) 292
(E1区SD14) 293
(D3区22層) 294
(E1区SD14) 295
(E1区SD14) 296
(E1区SD11) 297
(E1区SD14) 298
0 (1：3) 10cm

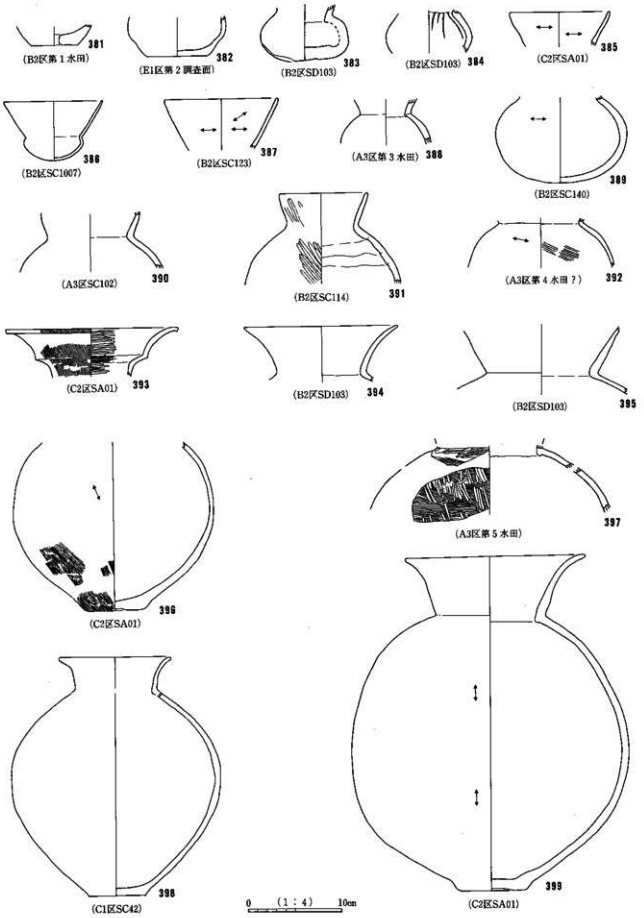
弥生時代の土器（15）


(E2区8層) 299
(D1区SC112) 300
(E1区SD11) 301
(E2区7b層) 302
(B2区SD105) 303
(B2区SC124) 304
(E1区SD14) 305
(E1区第2調査面) 306
(E2区7b層) 307
(E2区7b層) 308
(D2区23-2層) 309
(A3区第6水田) 310
(D3区SC04) 311
(B2区SD106) 312
(E1区SA05) 313
(A3区第5水田) 314
(A3区SC02) 315
(B2区SD105) 316
(D2区SD107) 317
(E1区SD12) 318
(B2区SD105-106) 319
(E1区SD14) 320
(E1区SQ01) 321
(B2区SC123) 322
(B2区SD106) 323
(E2区SA01) 324
(C1区SD3002) 325
(D1区SC1001) 326
(D1区第6A水田) 327
(E1区第2調査面) 328
(E1区SD14) 329
(E1区SD14) 330
(A3区SC04) 331
0 (1:3) 10cm

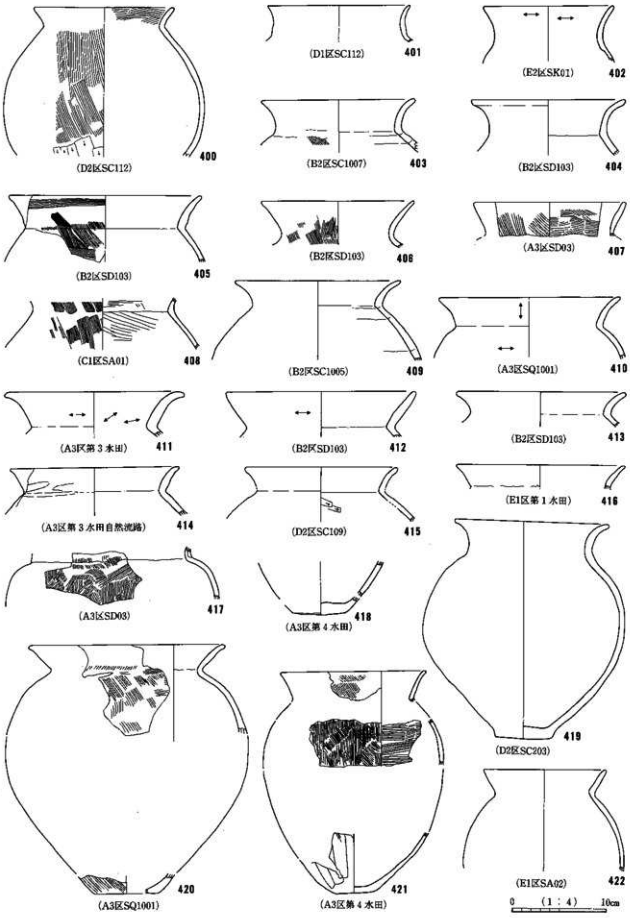
弥生時代の土器（16）


(B2区SK01) 332
(D3区SK07) 333
(D3区SK07) 334
(C区SD3002) 335
(D1区SC1001) 336
(B2区SD103) 337
(C1区SC51) 338
(C2区SC02) 339
(C1区SC52) 340
(C1区SC52) 341
(C1区SC52) 342
(B2区SC104) 343
(B2区SC110) 344
(B2区SC108) 345
(B2区SC140) 346
(B2区第3水田) 347
(A3区SC102) 348
(B2区SD103) 349
(C2区SC02) 350
(A4区第3水田NR2) 351
(B2区第4水田) 352
(C2区SC05) 353
(A4区第3水田) 354
(B2区SC110) 355
(B2区SC1005) 356
(B2区SD103) 357
(C1区SA01) 358
(B2区SD103) 359
(B2区SD103) 360
(B2区SD103) 361
(B2区SD103) 362
(D2区SC112) 363
(A3区第3水田自然流路) 364
(D2区SC101) 365
(B2区SD103) 366
(A3区第3水田) 367
(C2区SC02) 368
(A3区第3水田自然流路) 369
(A3区第3水田) 370
(B2区SD103) 371
(A2区SD108) 372
(B2区SC1096) 373
(B2区第4水田) 374
(A3区第3水田) 375
(B2区SD103) 376
(B2区SD103) 377
(B2区SD103) 378
(B2区SD103) 379
(B2区SD103) 380
0 (1:4) 10cm

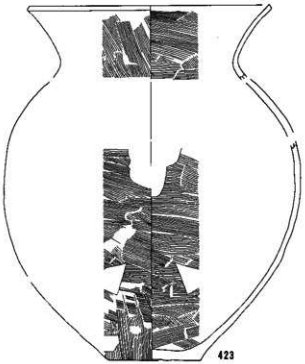
古墳時代の土器（1）


381
(B2区第1水田)
382
(E1区第2調査面)
383
(B2区SD103)
384
(B2区SD103)
385
(C2区SA01)
386
(B2区SC1007)
387
(B2区SC123)
388
(A3区第3水田)
389
(B2区SC140)
390
(A3区SC102)
391
(B2区SC114)
392
(A3区第4水田?)
393
(C2区SA01)
394
(B2区SD103)
395
(B2区SD103)
396
(C2区SA01)
397
(A3区第5水田)
398
(C1区SC42)
399
(C2区SA01)
0 (1:4) 10cm

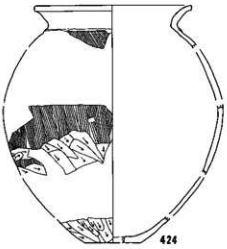
古墳時代の土器（2）


(D2区SC112) 400
(D1区SC112) 401
(E2区SK01) 402
(B2区SC1007) 403
(B2区SD103) 404
(B2区SD103) 405
(B2区SD103) 406
(A3区SD03) 407
(C1区SA01) 408
(B2区SC1005) 409
(A3区SQ1001) 410
(A3区第3水田) 411
(B2区SD103) 412
(B2区SD103) 413
(A3区第3水田自然流路) 414
(D2区SC109) 415
(E1区第1水田) 416
(A3区SD03) 417
(A3区第4水田) 418
(D2区SC203) 419
(A3区SQ1001) 420
(A3区第4水田) 421
(E1区SA02) 422
0 (1：4) 10cm

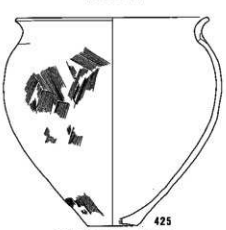
古墳時代の土器（3）



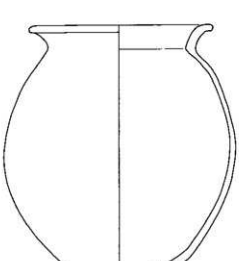
(C1区SD3002)



(C1区SD3002)

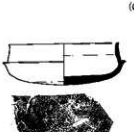


(D3区第6調査面　微高地)



(C1区SC52)

(C2区SC02)



(D2区SD103)

(D3区15～16層)

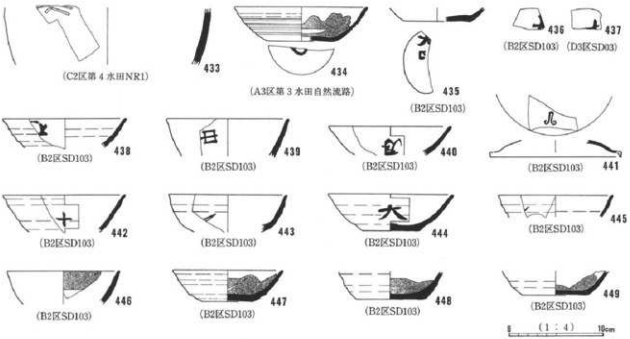
(A3区第3水田)

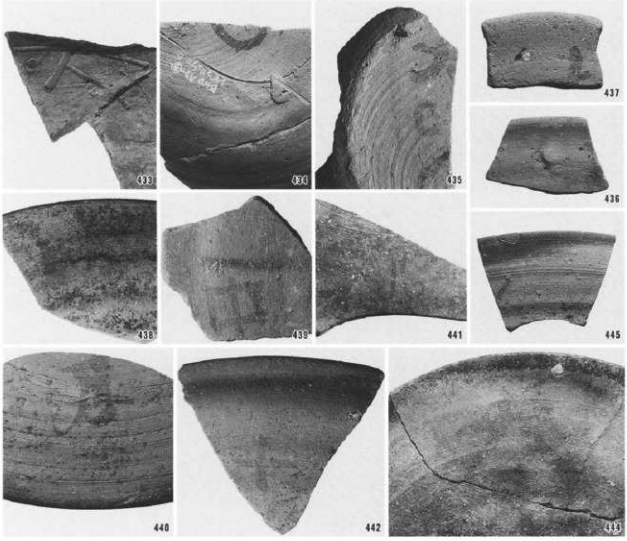
(A3区第3水田自然流路)

(A2区SD101)

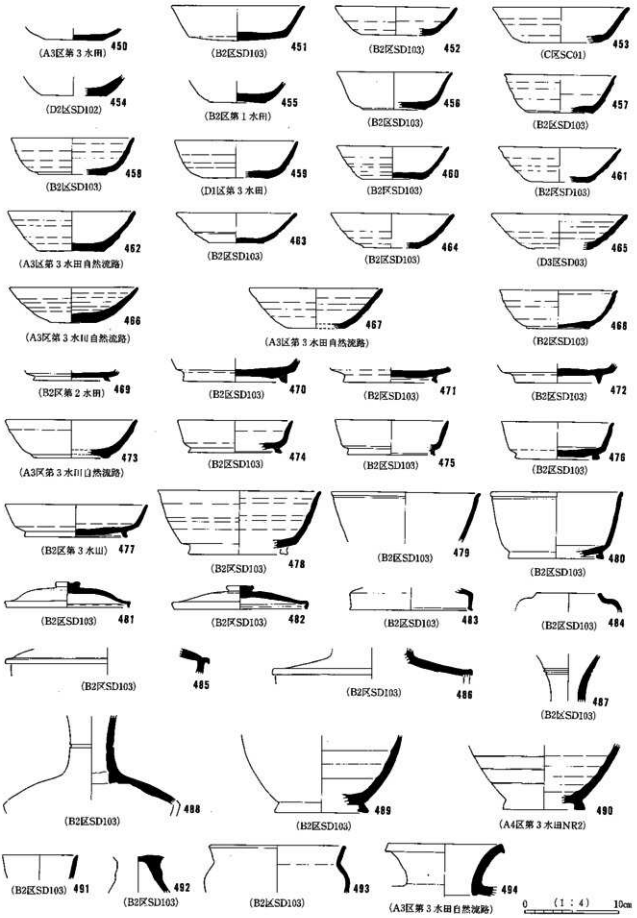
0　(1：4)　10cm

古墳時代の土器（4）

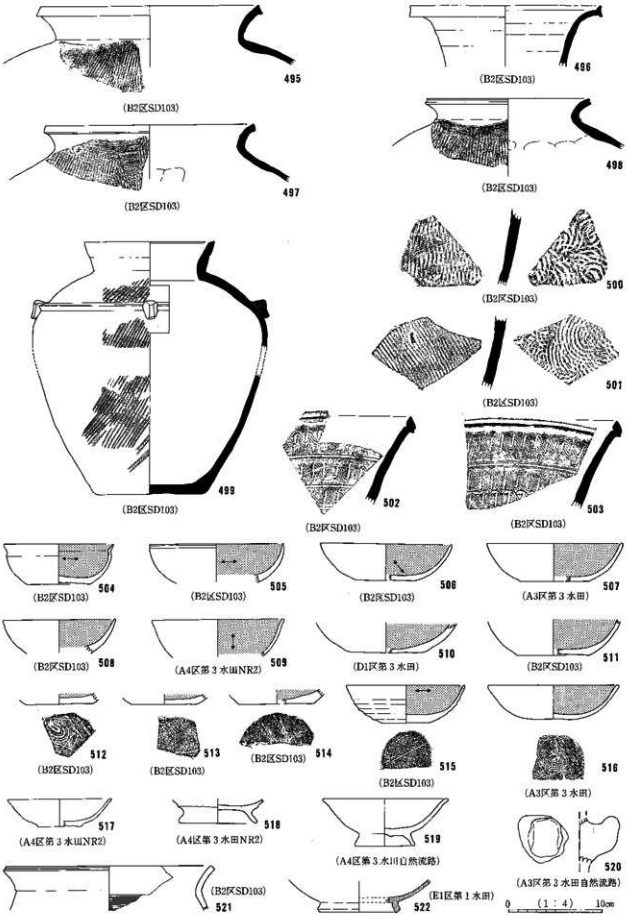

(C2区第4水田NR1)
433
434
(A3区第3水田自然流路)
435
(B2区SD103)
436
(B2区SD103)
437
(D3区SD003)
438
(B2区SD103)
439
(B2区SD103)
440
(B2区SD103)
441
(B2区SD103)
442
(B2区SD103)
443
(B2区SD103)
444
(B2区SD103)
445
(B2区SD103)
446
(B2区SD103)
447
(B2区SD103)
448
(B2区SD103)
449
(B2区SD103)
(1 : 4)
10cm


433
434
435
437
436
438
439
441
445
440
442
449

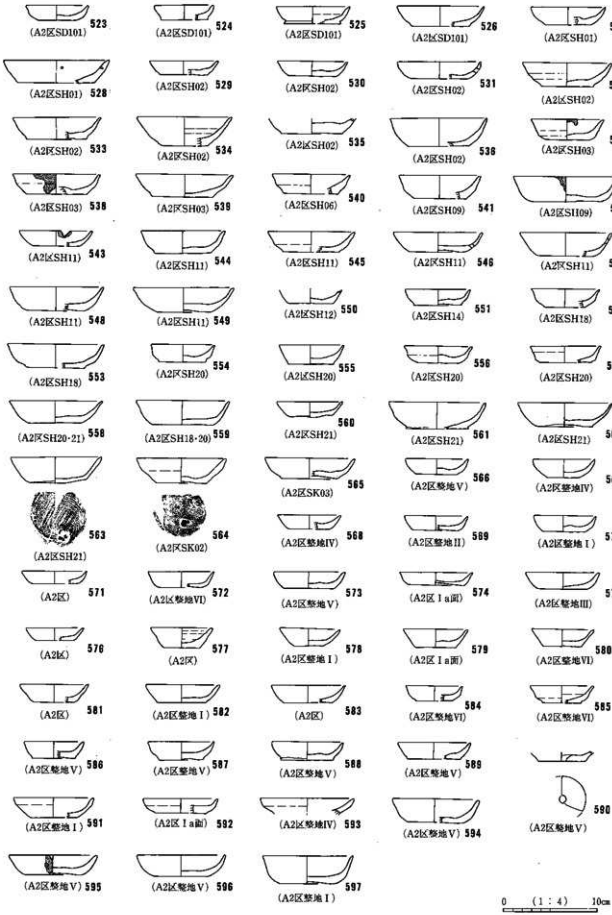
奈良・平安時代の土器（1）


450 (A3区第3水田)
451 (B2区SD103)
452 (B2区SD103)
453 (C区SC01)
454 (D2区SD102)
455 (B2区第1水田)
456 (B2区SD103)
457 (B2区SD103)
458 (B2区SD103)
459 (D1区第3水田)
460 (B2区SD103)
461 (B2区SD103)
462 (A3区第3水田自然流路)
463 (B2区SD103)
464 (B2区SD103)
465 (D3区SD03)
466 (A3区第3水田自然流路)
467 (A3区第3水田自然流路)
468 (B2区SD103)
469 (B2区第2水田)
470 (B2区SD103)
471 (B2区SD103)
472 (B2区SD103)
473 (A3区第3水田自然流路)
474 (B2区SD103)
475 (B2区SD103)
476 (B2区SD103)
477 (B2区第3水田)
478 (B2区SD103)
479 (B2区SD103)
480 (B2区SD103)
481 (B2区SD103)
482 (B2区SD103)
483 (B2区SD103)
484 (B2区SD103)
485 (B2区SD103)
486 (B2区SD103)
487 (B2区SD103)
488 (B2区SD103)
489 (B2区SD103)
490 (A4区第3水田NR2)
491 (B2区SD103)
492 (B2区SD103)
493 (B2区SD103)
494 (A3区第3水田自然流路)
0 (1:4) 10cm

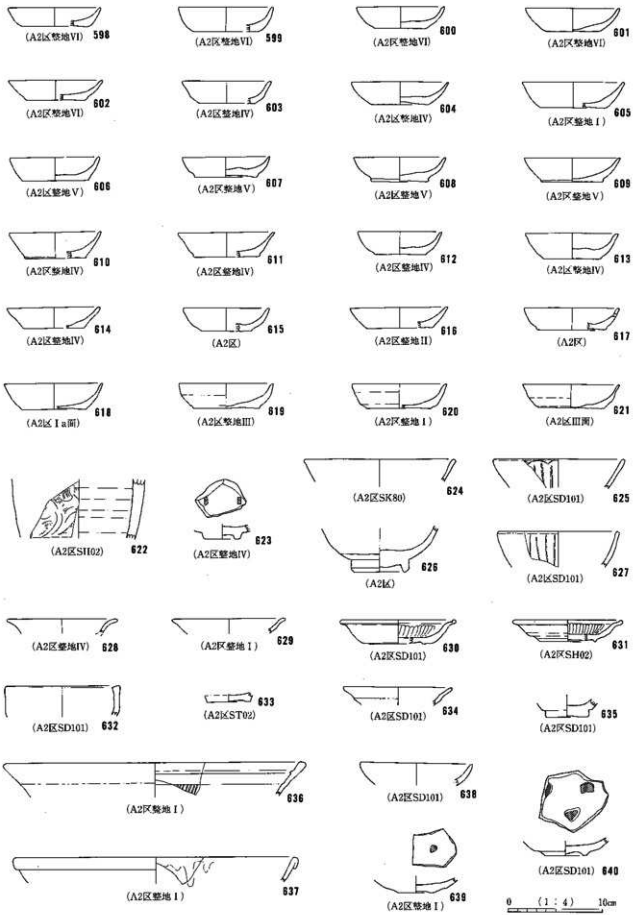
奈良・平安時代の土器（2）


495
(B2区SD103)
496
(B2区SD103)
497
(B2区SD103)
498
(B2区SD103)
499
(B2区SD103)
500
(B2区SD103)
501
(B2区SD103)
502
(B2区SD103)
503
(B2区SD103)
504
(B2区SD103)
505
(B2区SD103)
506
(B2区SD103)
507
(A3区第3水田)
508
(B2区SD103)
509
(A4区第3水田NR2)
510
(D1区第3水田)
511
(B2区SD103)
512
(B2区SD103)
513
(B2区SD103)
514
(B2区SD103)
515
(B2区SD103)
516
(A3区第3水田)
517
(A4区第3水田NR2)
518
(A4区第3水田NR2)
519
(A4区第3水川自然流路)
520
(A3区第3水田自然流路)
521
(B2区SD103)
522
(E1区第1水田)
0 (1：4) 10cm

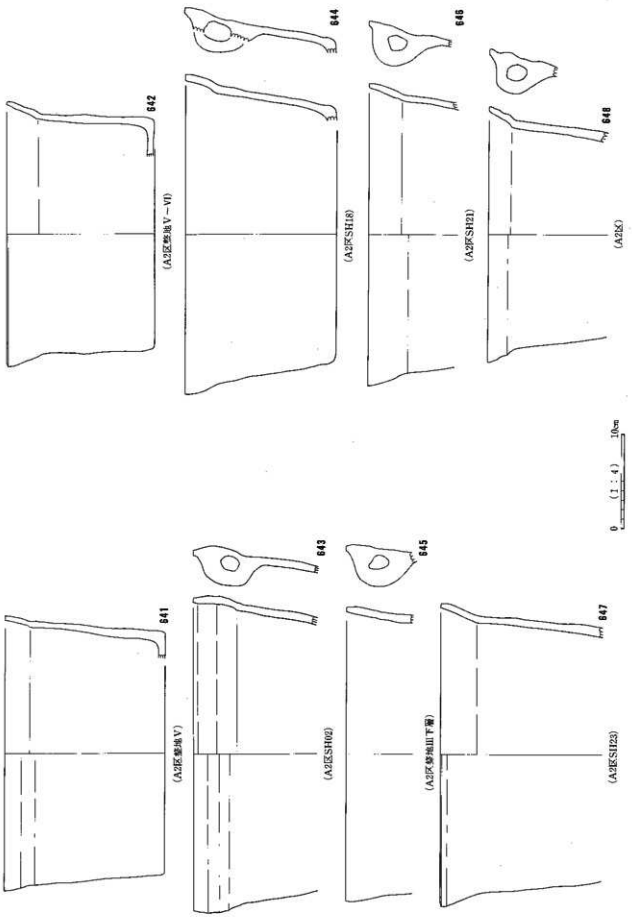
奈良・平安時代の土器（3）


(A2区SD101) 523
(A2区SD101) 524
(A2区SD101) 525
(A2区SD101) 526
(A2区SH01) 527
(A2区SH01) 528
(A2区SH02) 529
(A2区SH02) 530
(A2区SH02) 531
(A2区SH02) 532
(A2区SH02) 533
(A2区SH02) 534
(A2区SH02) 535
(A2区SH02) 536
(A2区SH03) 537
(A2区SH03) 538
(A2区SH03) 539
(A2区SH06) 540
(A2区SH09) 541
(A2区SH09) 542
(A2区SH11) 543
(A2区SH11) 544
(A2区SH11) 545
(A2区SH11) 546
(A2区SH11) 547
(A2区SH11) 548
(A2区SH11) 549
(A2区SH12) 550
(A2区SH14) 551
(A2区SH18) 552
(A2区SH18) 553
(A2区SH20) 554
(A2区SH20) 555
(A2区SH20) 556
(A2区SH20) 557
(A2区SH20·21) 558
(A2区SH18·20) 559
(A2区SH21) 560
(A2区SH21) 561
(A2区SH21) 562
(A2区SH21) 563
(A2区SK02) 564
(A2区SK03) 565
(A2区整地V) 566
(A2区整地IV) 567
(A2区整地IV) 568
(A2区整地II) 569
(A2区整地I) 570
(A2区) 571
(A2区整地VI) 572
(A2区整地V) 573
(A2区Ia面) 574
(A2区整地III) 575
(A2区) 576
(A2区) 577
(A2区整地I) 578
(A2区Ia面) 579
(A2区整地VI) 580
(A2区) 581
(A2区整地I) 582
(A2区) 583
(A2区整地VI) 584
(A2区整地VI) 585
(A2区整地V) 586
(A2区整地V) 587
(A2区整地V) 588
(A2区整地V) 589
(A2区整地V) 590
(A2区整地I) 591
(A2区Ia面) 592
(A2区整地IV) 593
(A2区整地V) 594
(A2区整地V) 595
(A2区整地V) 596
(A2区整地I) 597
0 (1:4) 10cm

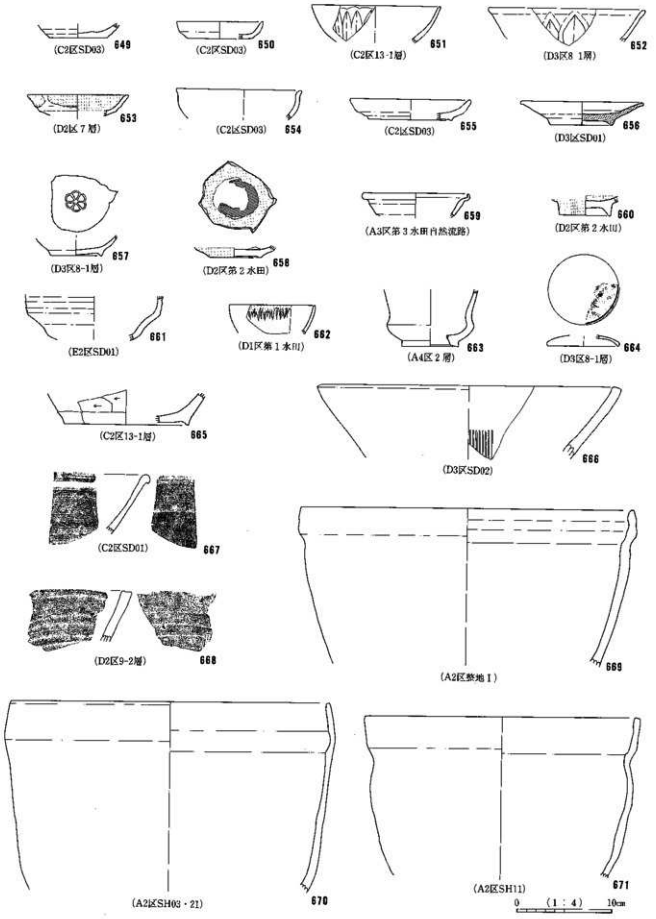
中世・近世の焼物（1）


(A2区整地VI) 598
(A2区整地VI) 599
(A2区整地VI) 600
(A2区整地VI) 601
(A2区整地VI) 602
(A2区整地IV) 603
(A2区整地IV) 604
(A2区整地Ⅰ) 605
(A2区整地V) 606
(A2区整地V) 607
(A2区整地V) 608
(A2区整地V) 609
(A2区整地IV) 610
(A2区整地IV) 611
(A2区整地IV) 612
(A2区整地IV) 613
(A2区整地IV) 614
(A2区) 615
(A2区整地II) 616
(A2区) 617
(A2区Ⅰa面) 618
(A2区整地III) 619
(A2区整地Ⅰ) 620
(A2区III面) 621
(A2区SI02) 622
(A2区整地IV) 623
(A2区SK80) 624
(A2区SD101) 625
(A2区) 626
(A2区SD101) 627
(A2区整地IV) 628
(A2区整地Ⅰ) 629
(A2区SD101) 630
(A2区SH02) 631
(A2区SD101) 632
(A2区ST02) 633
(A2区SD101) 634
(A2区SD101) 635
(A2区整地Ⅰ) 636
(A2区SD101) 638
(A2区SD101) 640
(A2区整地Ⅰ) 637
(A2区整地Ⅰ) 639
0 (1:4) 10cm

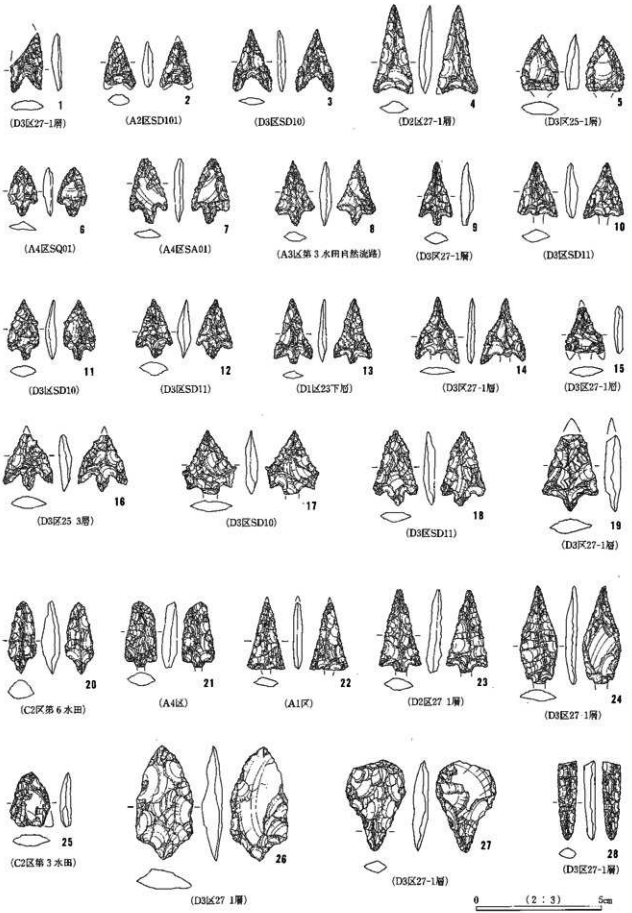
中世・近世の焼物（2）


642
(A2区整地Ⅴ－Ⅵ)
644
(A2区SH18)
646
(A2区SH21)
648
(A2区C)
0 (1：4) 10cm
641
(A2区整地Ⅴ)
643
(A2区SH02)
645
(A3区整地Ⅲ下層)
647
(A2区SH23)

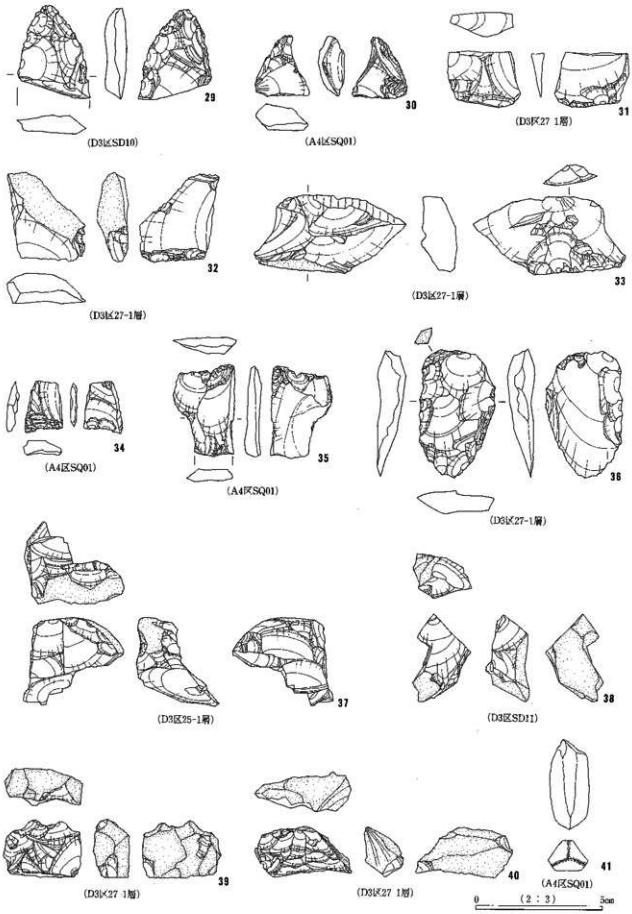
中世・近世の焼物（3）


649
(C2区SD03)
650
(C2区SD03)
651
(C2区13-1層)
652
(D3区8-1層)
653
(D2区7層)
654
(C2区SD03)
655
(C2区SD03)
656
(D3区SD01)
657
(D3区8-1層)
658
(D2区第2水田)
659
(A3区第3水田内熱流路)
660
(D2区第2水田)
661
(E2区SD01)
662
(D1区第1水田)
663
(A4区2層)
664
(D3区8-1層)
665
(C2区13-1層)
666
(D3区SD02)
667
(C2区SD01)
668
(D2区9-2層)
669
(A2区整地Ⅰ)
670
(A2区SH03・21)
671
(A2区SH11)
0 (1:4) 10cm

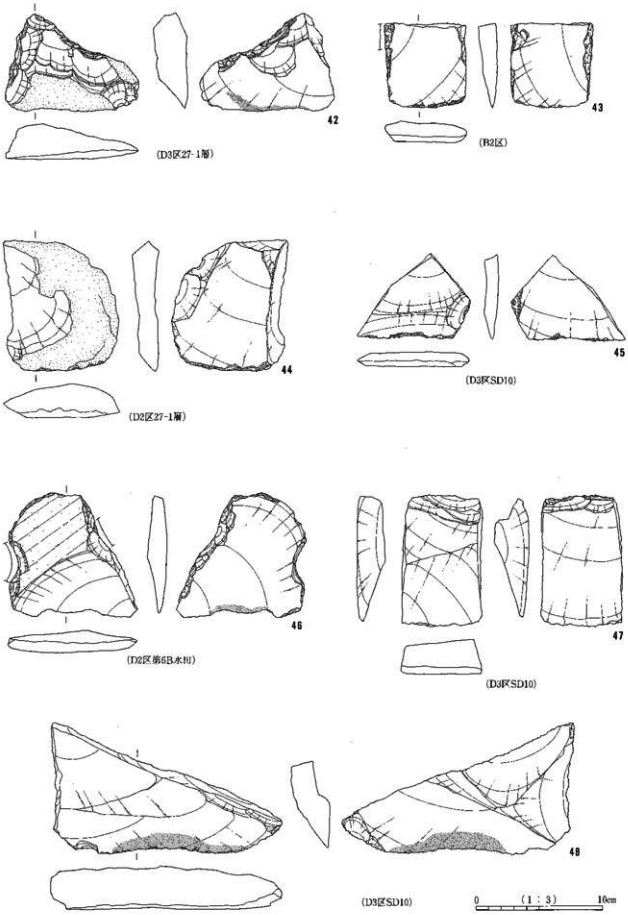
中世・近世の焼物（4）


1
(D3区27-1層)
2
(A2区SD101)
3
(D3区SD10)
4
(D2区27-1層)
5
(D3区25-1層)
6
(A4区SQ01)
7
(A4区SA01)
8
(A3区第3水田自然流路)
9
(D3区27-1層)
10
(D3区SD11)
11
(D3区SD10)
12
(D3区SD11)
13
(D1区23下層)
14
(D3区27-1層)
15
(D3区27-1層)
16
(D3区25-3層)
17
(D3区SD10)
18
(D3区SD11)
19
(D3区27-1層)
20
(C2区第6水田)
21
(A4区)
22
(A1区)
23
(D2区27-1層)
24
(D3区27-1層)
25
(C2区第3水田)
26
(D3区27-1層)
27
(D3区27-1層)
28
(D3区27-1層)
0
(2:3)
5cm

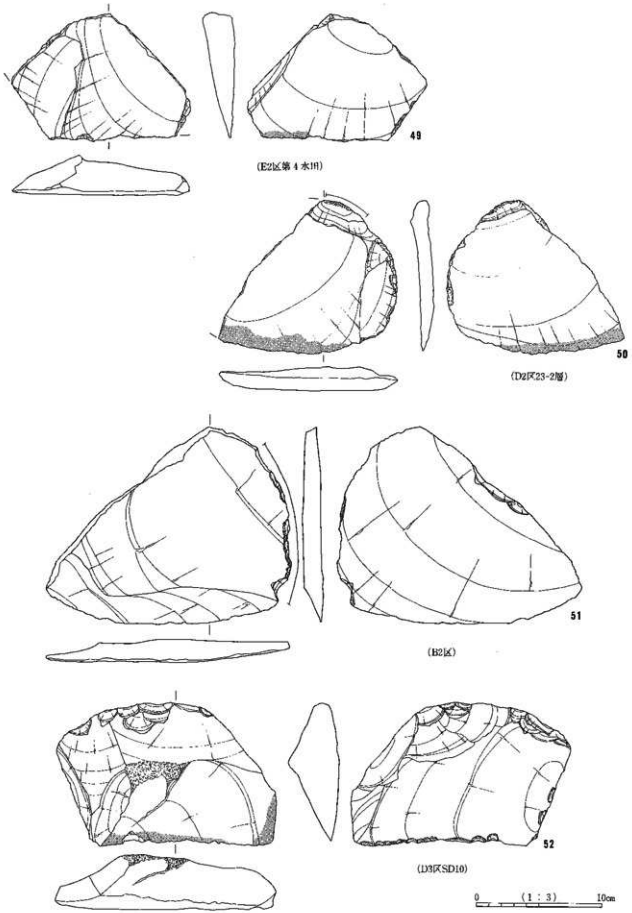
石器（1）


29
(D3区SD10)
30
(A4区SQ01)
31
(D3区27 1層)
32
(D3区27-1層)
33
(D3区27-1層)
34
(A4区SQ01)
35
(A4区SQ01)
36
(D3区27-1層)
37
(D3区25-1層)
38
(D3区SD11)
39
(D3区27 1層)
40
(D3区27 1層)
41
(A4区SQ01)
0
(2：3)
5cm

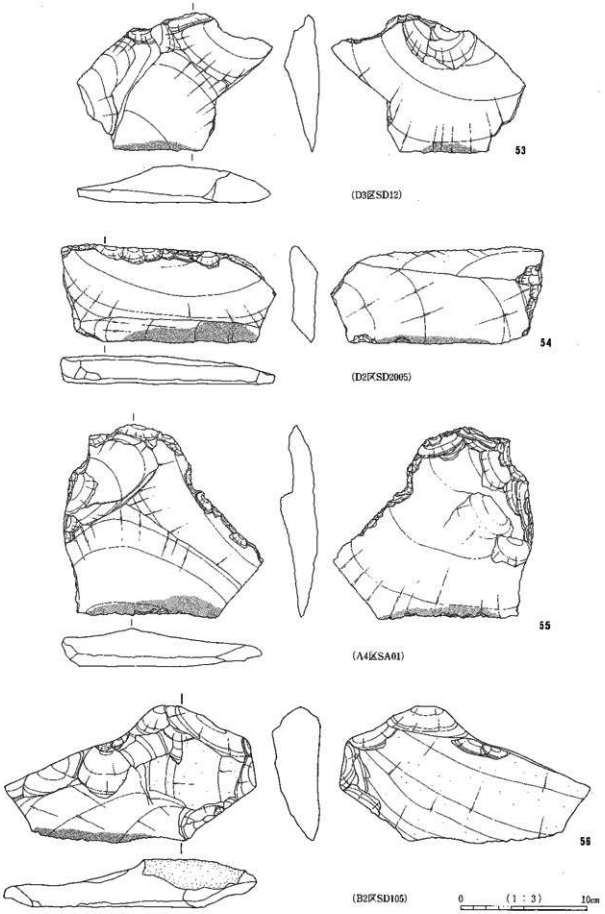
石器（2）


42
(D3区27-1層)
43
(R2区)
44
(D2区27-1層)
45
(D3区SD10)
46
(D2区第6B水田)
47
(D3区SD10)
48
(D3区SD10)
0 (1：3) 10cm

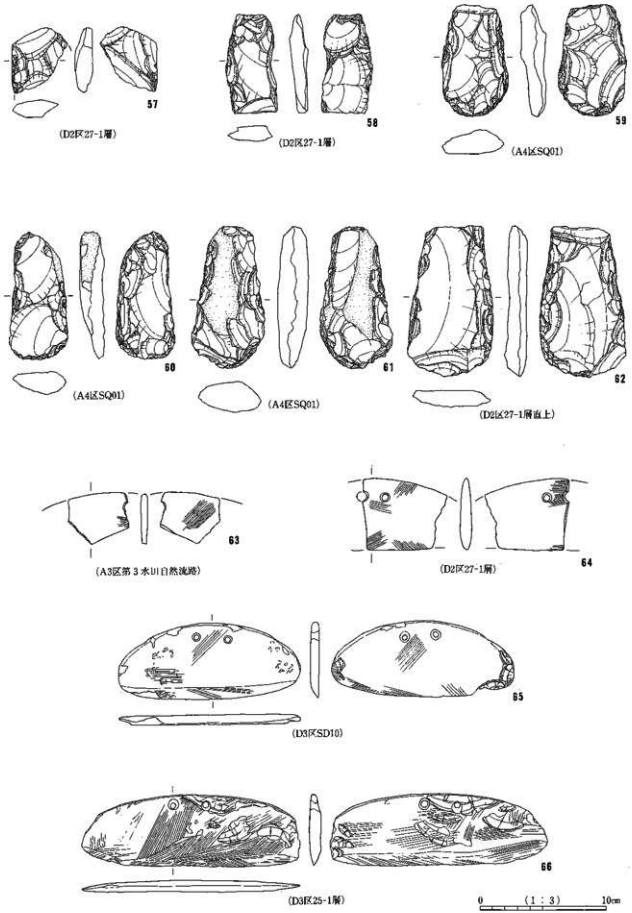
石器（3）



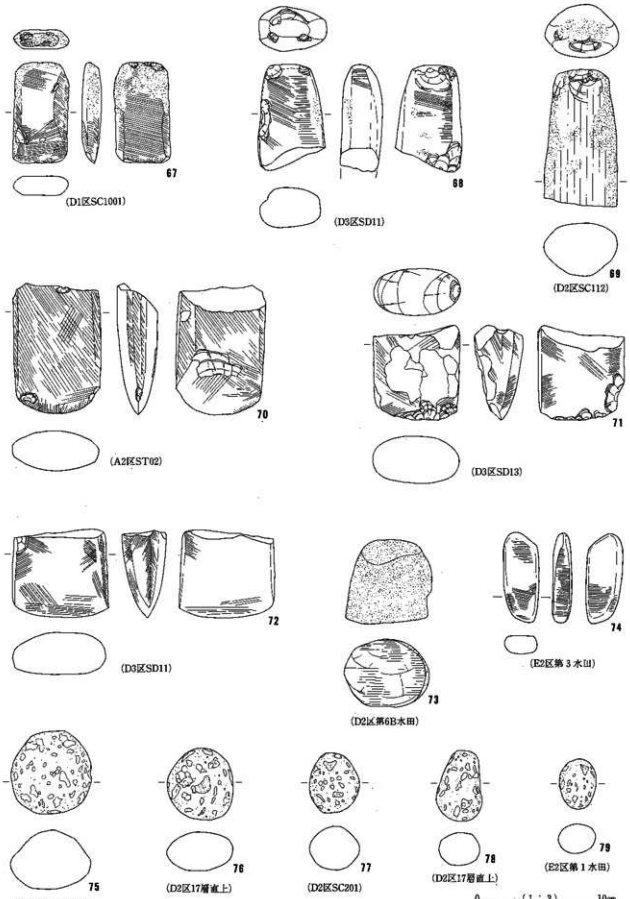
石器（4）



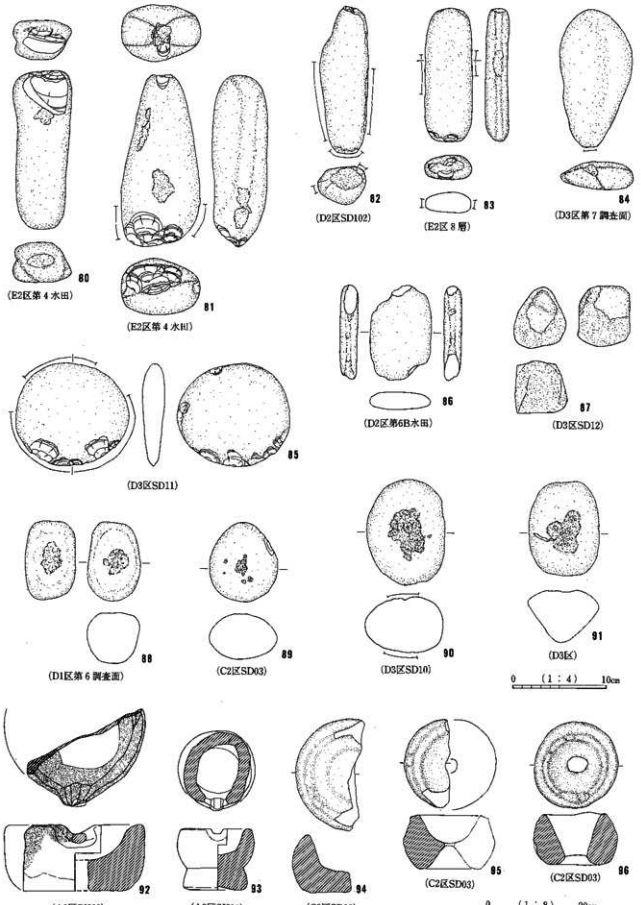
石器（5）


57
(D2区27-1層)
58
(D2区27-1層)
59
(A4区SQ01)
60
(A4区SQ01)
61
(A4区SQ01)
62
(D2区27-1層直上)
63
(A3区第3水田自然流路)
64
(D2区27-1層)
65
(D3区SD10)
66
(D3区25-1層)
0 (1:3) 10cm

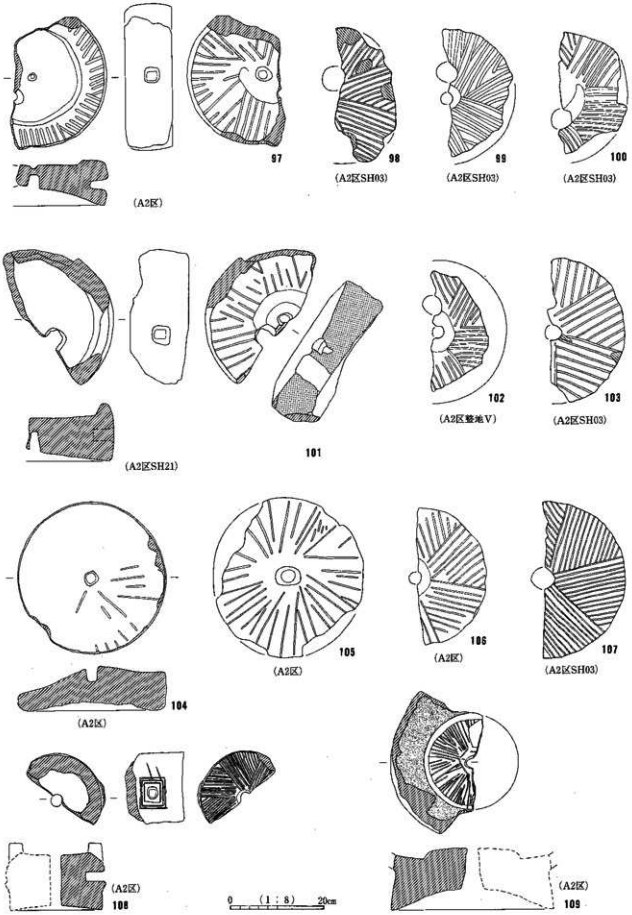
石器（6）


67
(D1区SC1001)
68
(D3区SD11)
69
(D2区SC112)
70
(A2区ST02)
71
(D3区SD13)
72
(D3区SD11)
73
(D2区第6B水田)
74
(E2区第3水田)
75
(E1区第2調査面)
76
(D2区17層直上)
77
(D2区SC201)
78
(D2区17層直上)
79
(E2区第1水田)
0 (1:3) 10cm

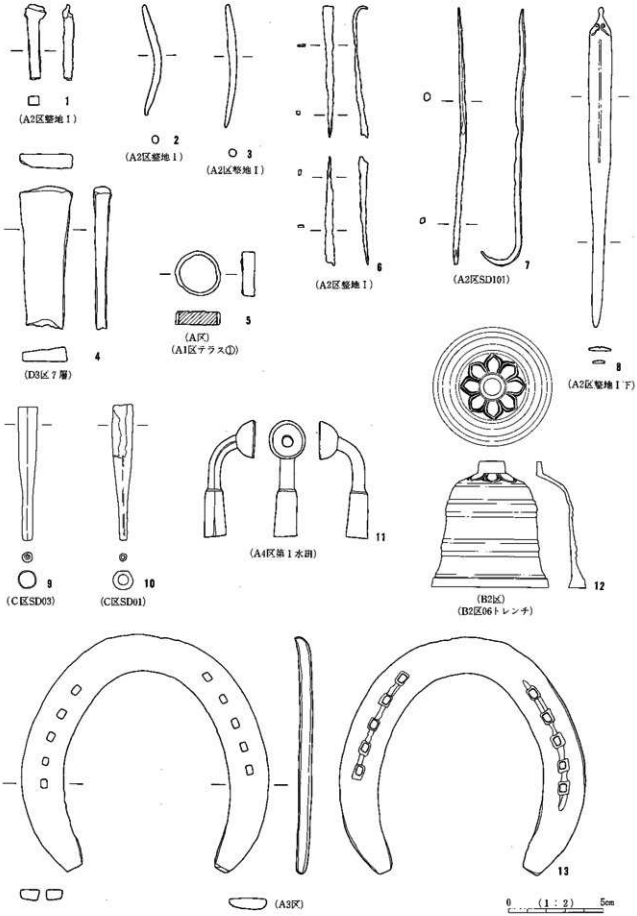
石器（7）


80
(E2区第4水田)
81
(E2区第4水田)
82
(D2区SD102)
83
(E2区8層)
84
(D3区第7調査面)
85
(D3区SD11)
86
(D2区第6B水田)
87
(D3区SD12)
88
(D1区第6調査面)
89
(C2区SD03)
90
(D3区SD10)
91
(D3区)
0 (1:4) 10cm
92
(A2区SH02)
93
(A2区SH03)
94
(C2区SD03)
95
(C2区SD03)
96
(C2区SD03)
0 (1:8) 20cm

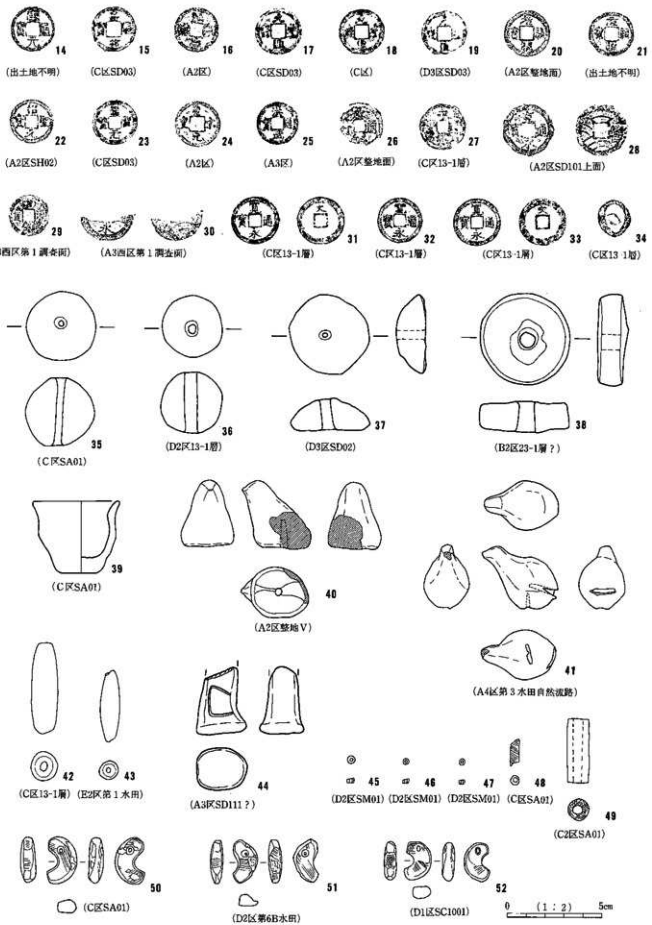
石器（8）


97
98
(A2区SH03)
99
(A2区SH03)
100
(A2区SH03)
(A2区)
(A2区SH21)
101
102
(A2区整地V)
103
(A2区SH03)
104
(A2区)
105
(A2区)
106
(A2区)
107
(A2区SH03)
(A2区)
108
0 (1:8) 20cm
(A2区)
109

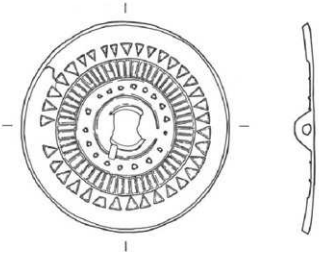
石器（9）


1
(A2区整地Ⅰ)
2
(A2区整地Ⅰ)
3
(A2区整地Ⅰ)
6
(A2区整地Ⅰ)
7
(A2区SD101)
8
(A2区整地Ⅰ下)
5
(A尺)
(A1区テラス①)
4
(D3区7層)
9
(C区SD03)
10
(C区SD01)
11
(A4区第1水田)
12
(B2区)
(B2区06トレンチ)
13
(A3区)
0 (1:2) 5cm

金属器（1）


14
(出土地不明)
15
(C区SD03)
16
(A2区)
17
(C区SD03)
18
(C区)
19
(D3区SD03)
20
(A2区整地面)
21
(出土地不明)
22
(A2区SH02)
23
(C区SD03)
24
(A2区)
25
(A3区)
26
(A2区整地面)
27
(C区13-1層)
28
(A2区SD101上面)
29
(A3西区第1調査面)
30
(A3西区第1調査面)
31
(C区13-1層)
32
(C区13-1層)
33
(C区13-1層)
34
(C区13-1層)
35
(C区SA01)
36
(D2区13-1層)
37
(D3区SD02)
38
(B2区23-1層?)
39
(C区SA01)
40
(A2区整地V)
41
(A4区第3水田自然流路)
42
43
(C区13-1層) (E2区第1水田)
44
(A3区SD111?)
45
46
47
48
(D2区SM01) (D2区SM01) (D2区SM01) (C区SA01)
49
(C2区SA01)
50
(C区SA01)
51
(D2区第6B水田)
52
(D1区SC1001)
0 (1:2) 5cm

金属器（2） 土製品・石製品



(E2区SC38)

53

0 (1：1) 5cm

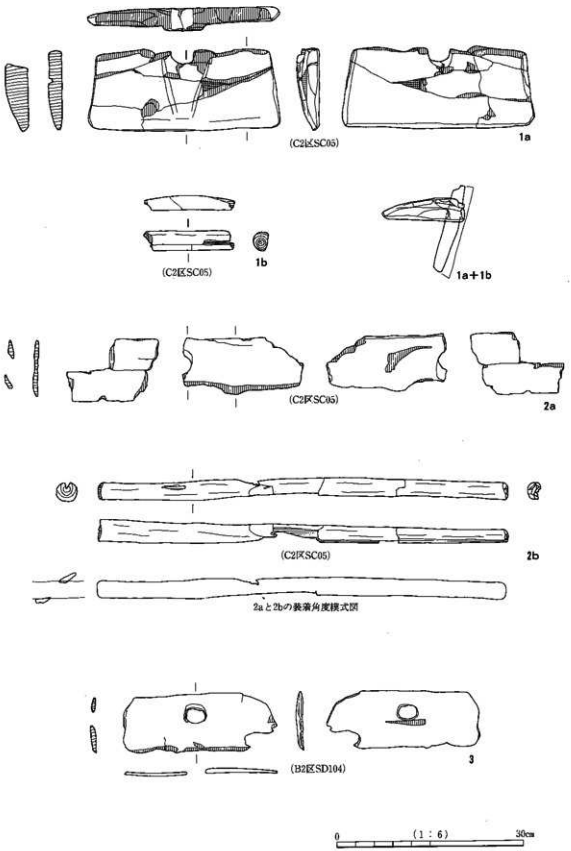
処理前

処理前(鏡面)

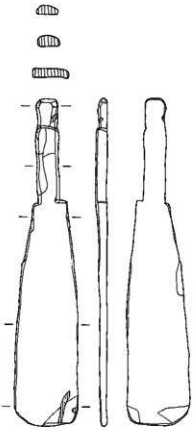
処理後

処理後(×2)

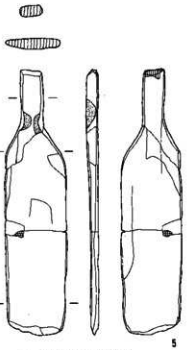
金属器（3）


(C2区SC05)
1a
(C2区SC05)
1b
1a+1b
(C2区SC05)
2a
(C2区SC05)
2b
2aと2bの装着角度模式図
(B2区SD104)
3
0
(1：6)
30cm

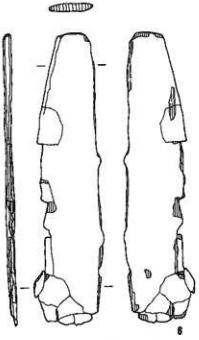
木製品1（農具）



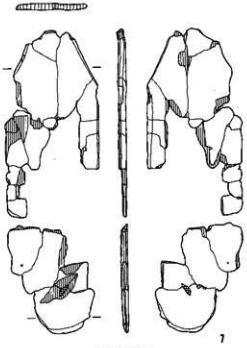
(C区SA01)



(C区SD3002)



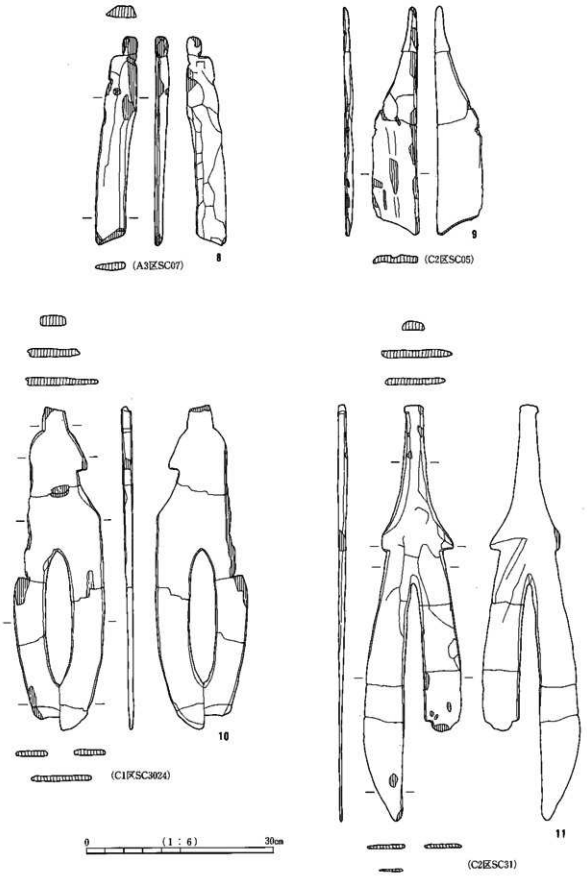
(C2区SC31)



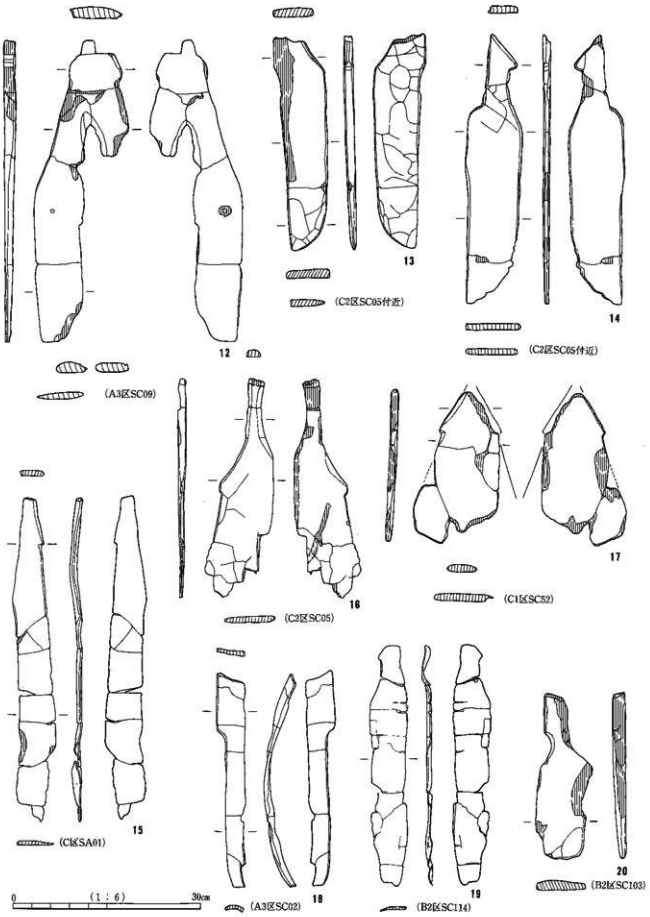
(B2区SC140)

0 (1：6) 30cm

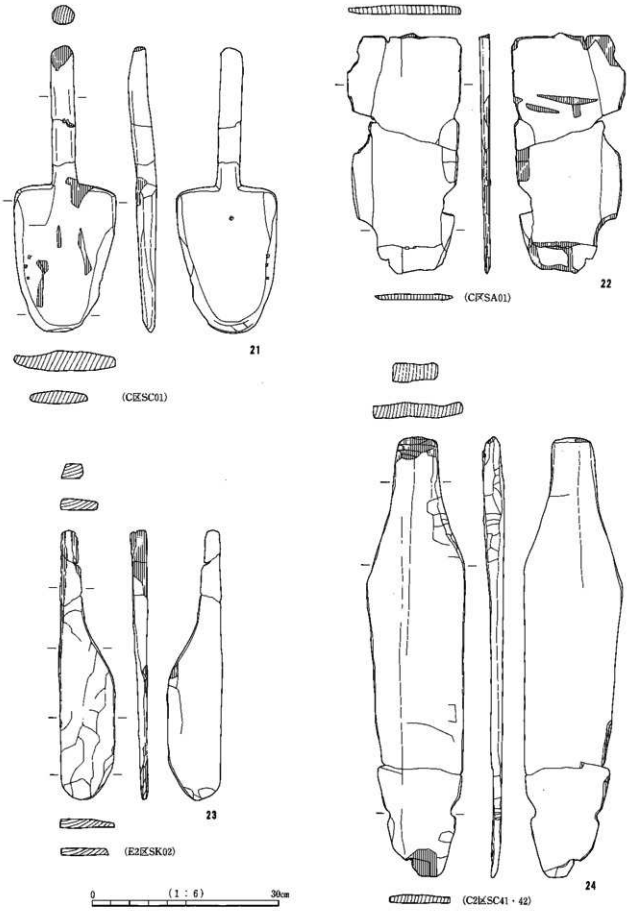
木製品2（農具）



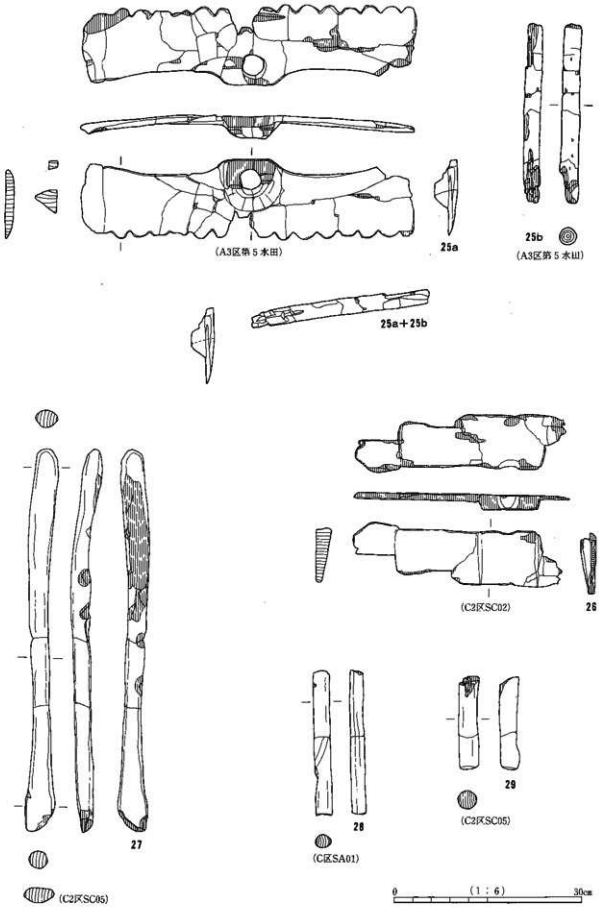
木製品3（農具）


12
(A3区SC09)
13
(C2区SC05付近)
14
(C2区SC05付近)
15
(C1区SA01)
16
(C2区SC05)
17
(C1区SC52)
18
(A3区SC02)
19
(B2区SC114)
20
(B2区SC103)
0
(1：6)
30cm

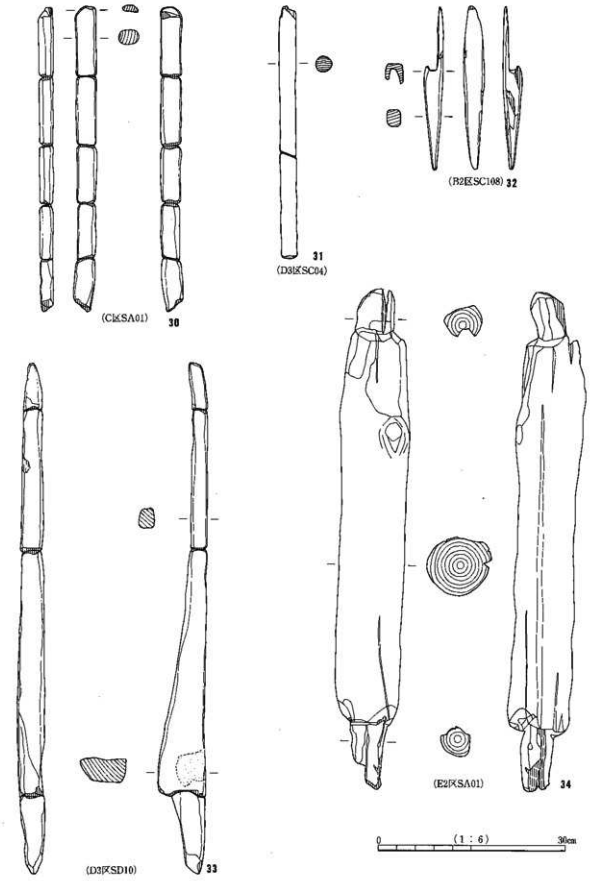
木製品４（農具）



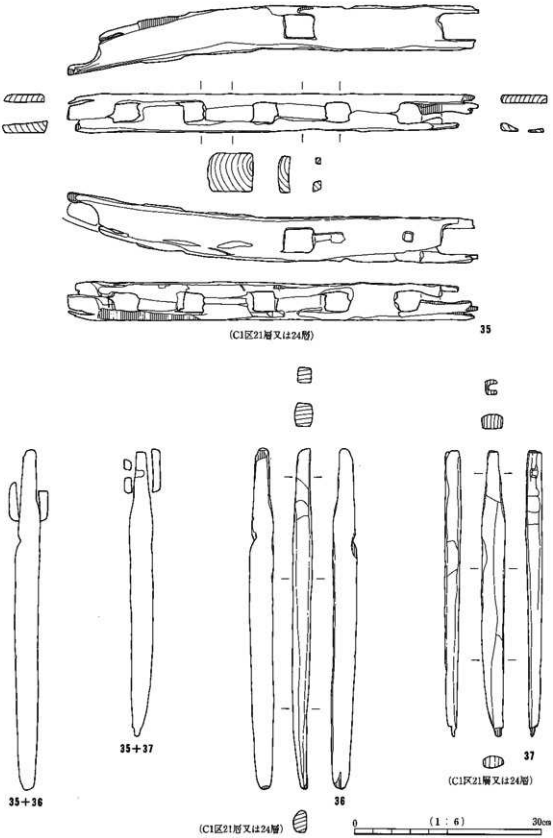
木製品5（農具）


(A3区第5水田)
25a
25b
(A3区第5水田)
25a+25b
(C2区SC02)
26
27
(C2区SC05)
28
(C区SA01)
29
(C2区SC05)
0
(1：6)
30cm

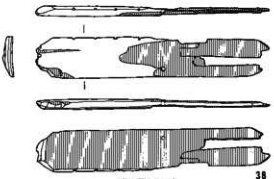
木製品6（農具）


(C1区SA01) 30
31
(D3区SC04)
(B2区SC108) 32
(D3区SD10) 33
(E2区SA01) 34
0
(1：6)
30cm

木製品7（農具）

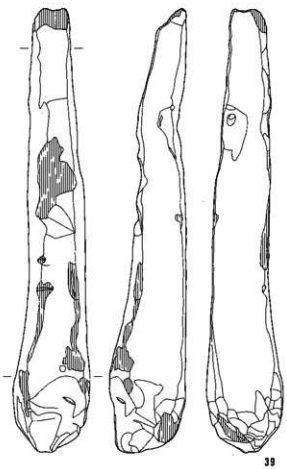

(C1区21層又は24層)
35
35+36
35+37
(C1区21層又は24層)
36
(C1区21層又は24層)
37
0
(1：6)
30cm

木製品8（農具）



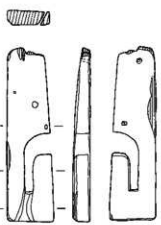
(B2区SC103)

38



39

(E1区SA06)

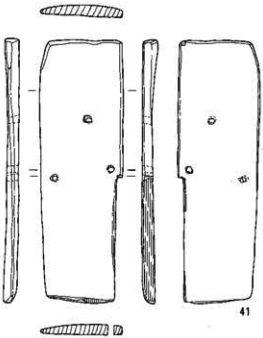


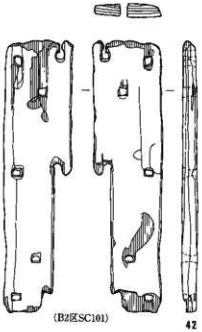
40

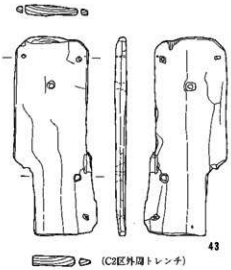
(C2区SD03)

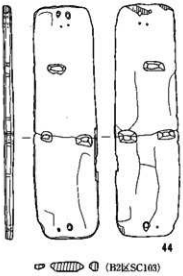
0 (1：6) 30cm

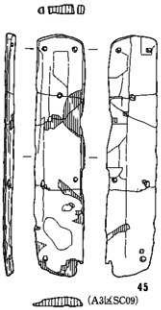
木製品9（農具）





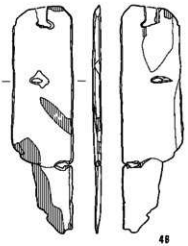






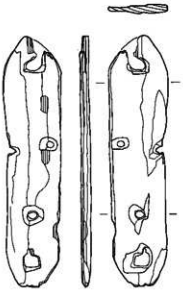
0 (1：6) 30cm

木製品10（農具）



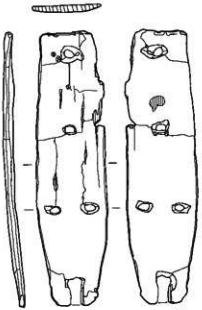
46

(B2区SC103)



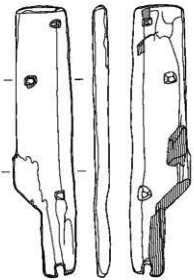
(B2区第3水田)

47



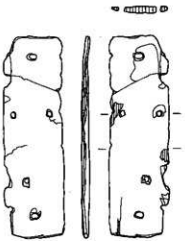
48

(B2区SC103)



49

(B2区SC101)

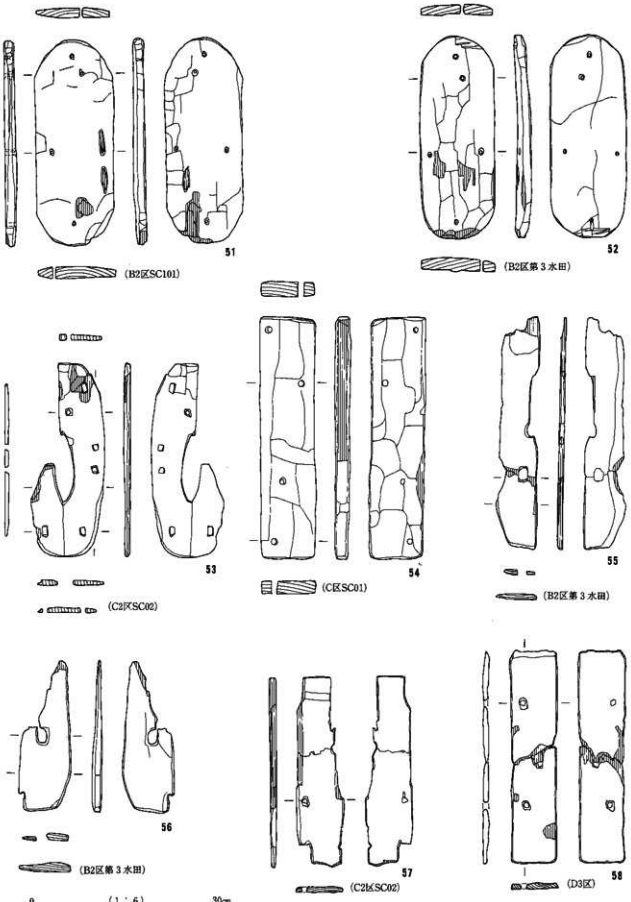


(B2区第3水田)

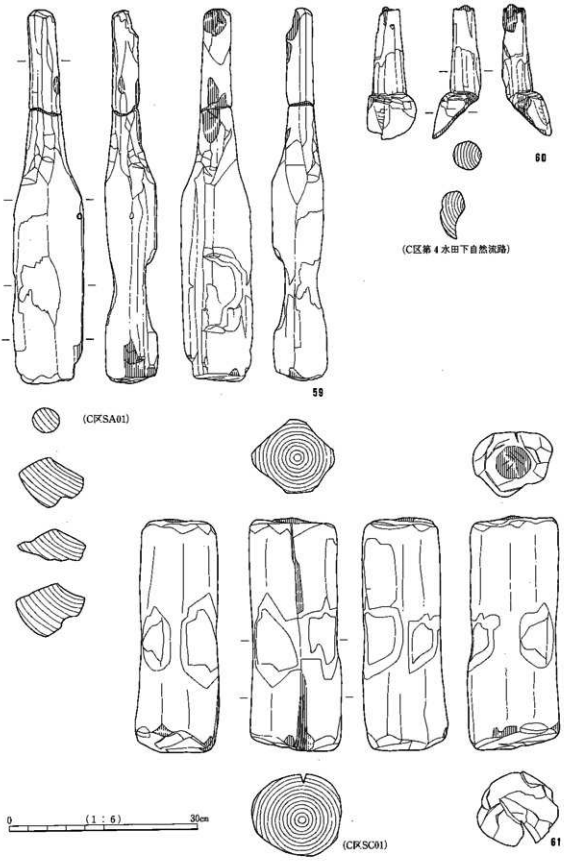
50

0 (1：6) 30cm

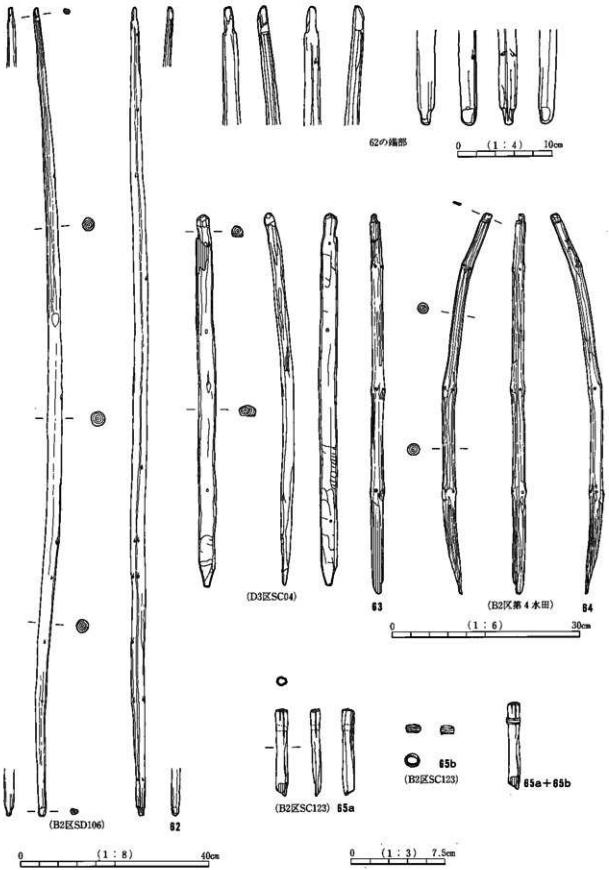
木製品11（農具）


51
(B2区SC101)
52
(B2区第3水田)
53
(C2区SC02)
54
(C区SC01)
55
(B2区第3水田)
56
(B2区第3水田)
57
(C2区SC02)
58
(D3区)
0
(1：6)
30cm

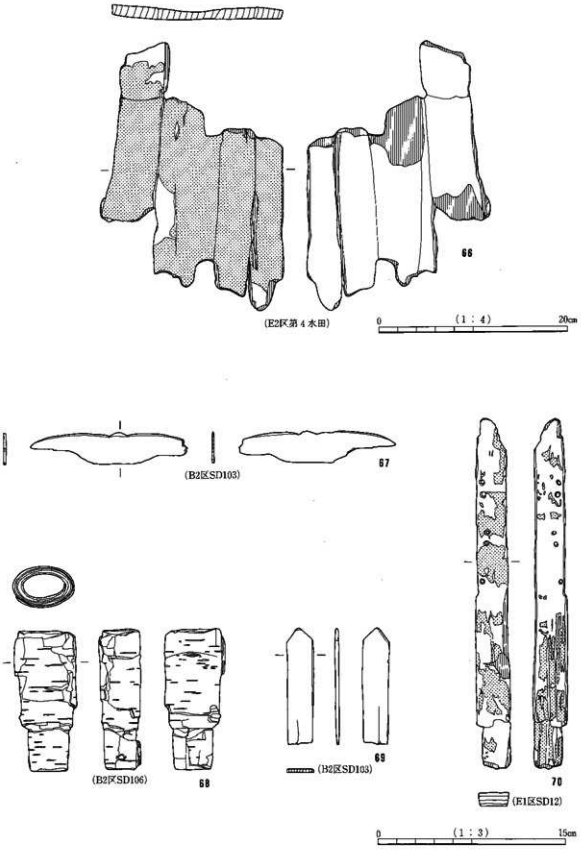
木製品12（農具）



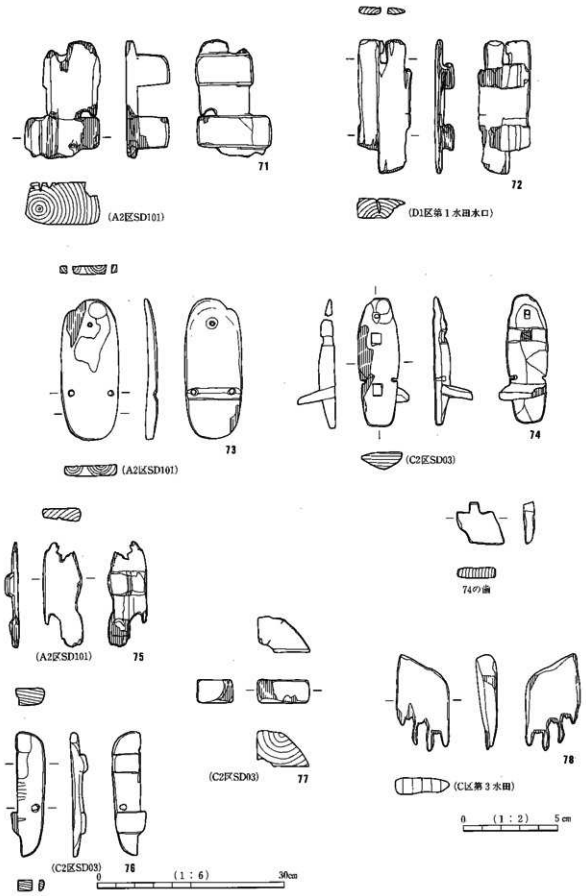
木製品13（農具）


62の端部
0 (1：4) 10cm
(D3区SC04)
63
(B2区第4水田)
64
0 (1：6) 30cm
(B2区SD106)
62
0 (1：8) 40cm
(B2区SC123) 65a
65b
(B2区SC123)
65a＋65b
0 (1：3) 7.5cm

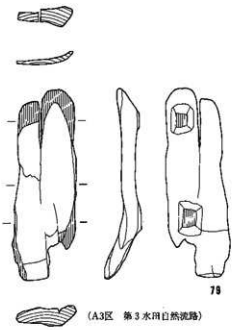
木製品14（武具・祭祀具）

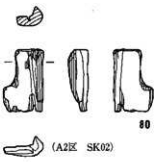

66
(E2区第4水田)
0
(1：4)
20cm
(B2区SD103)
67
(B2区SD106)
68
69
(B2区SD103)
70
(E1区SD12)
0
(1：3)
15cm

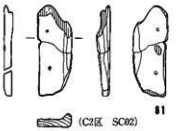
木製品15（武具・祭祀具）

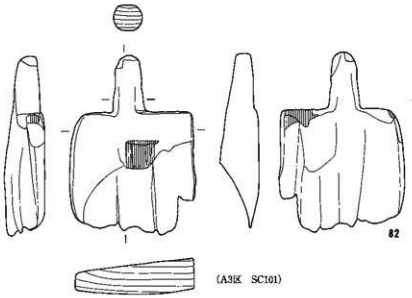

71
(A2区SD101)
72
(D1区第1水田水口)
73
(A2区SD101)
74
(C2区SD03)
74の歯
(A2区SD101)
75
(C2区SD03)
77
78
(C1区第3水田)
(C2区SD03)
76
0 (1：6) 30cm
0 (1：2) 5cm

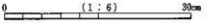
木製品16（服飾具）



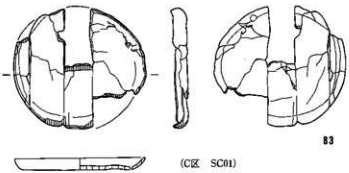






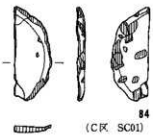


木製品17（容器）



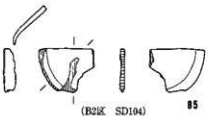
83

(C区　SC01)



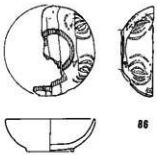
84

(C区　SC01)



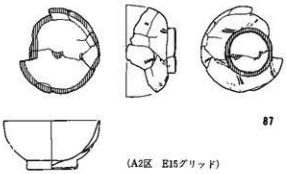
(B2区　SD104)

85



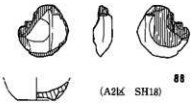
86

(A2区　整地層下)



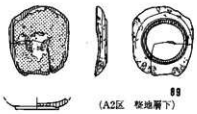
87

(A2区　E15グリッド)



88

(A2区　SH18)

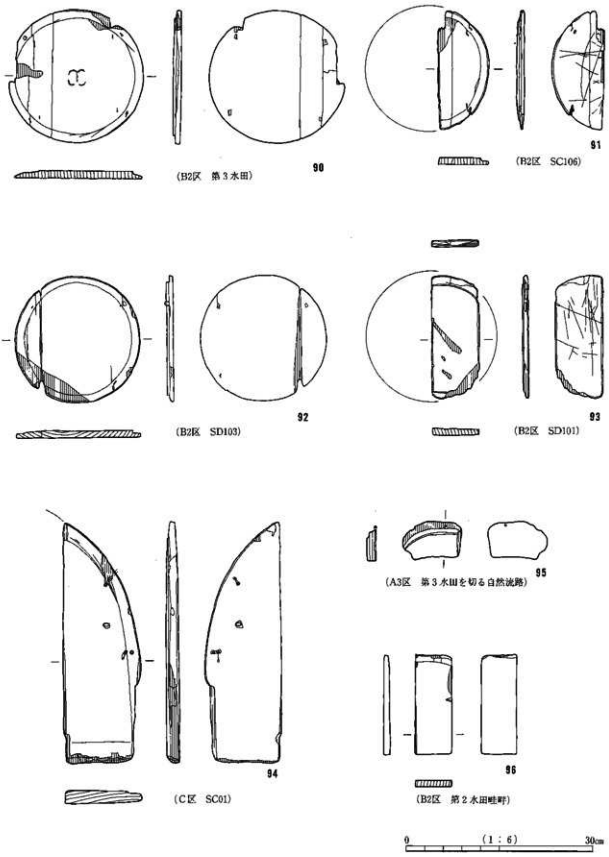


89

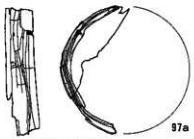
(A2区　整地層下)

0　(1：6)　30cm

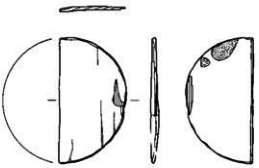
木製品18（容器）


90
(B2区　第3水田)
91
(B2区　SC106)
92
(B2区　SD103)
93
(B2区　SD101)
94
(C区　SC01)
95
(A3区　第3水田を切る自然流路)
96
(B2区　第2水田畦畔)
0
(1：6)
30cm

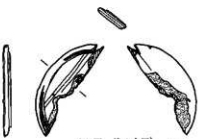
木製品19（容器）



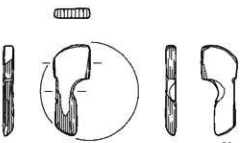
(B2区　第4水田)



(B2区　SD104)

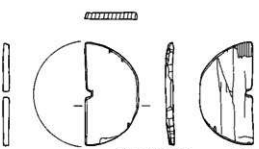


(B2区　第4水田)

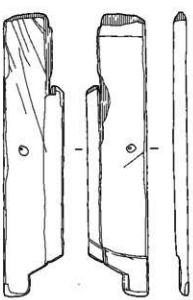


(B2区　第3水田)

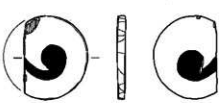
(A2区　整地層下)



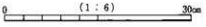
(B2区　第3水田)



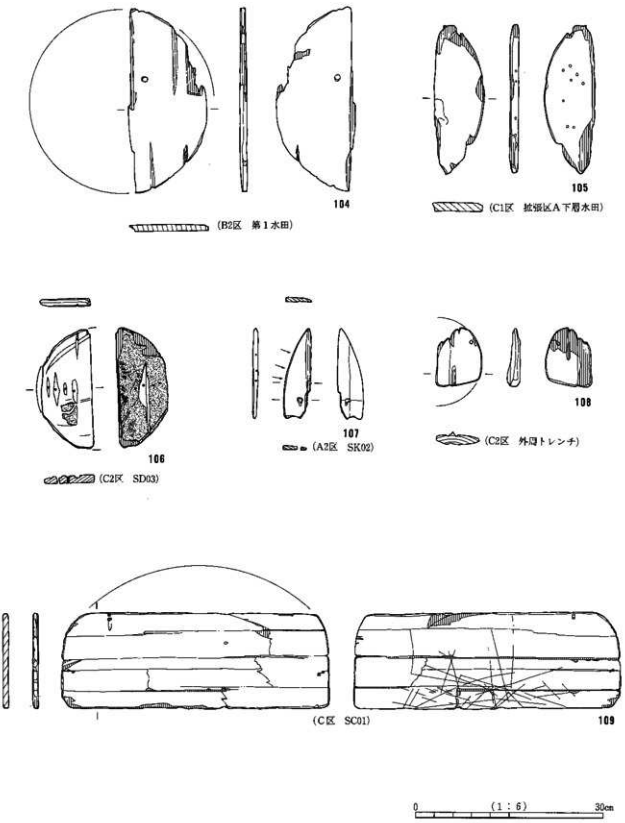
(C区　SC01)



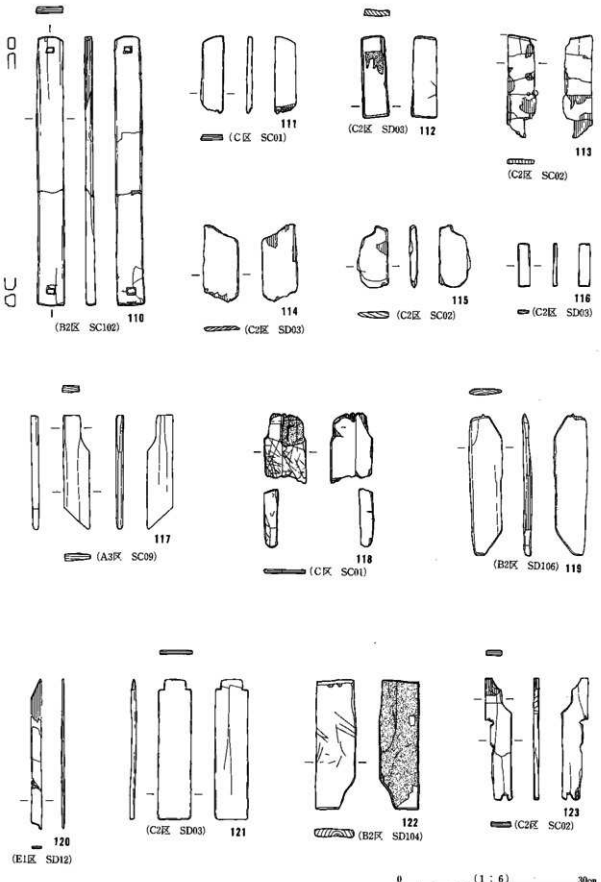
(C区第1水田)



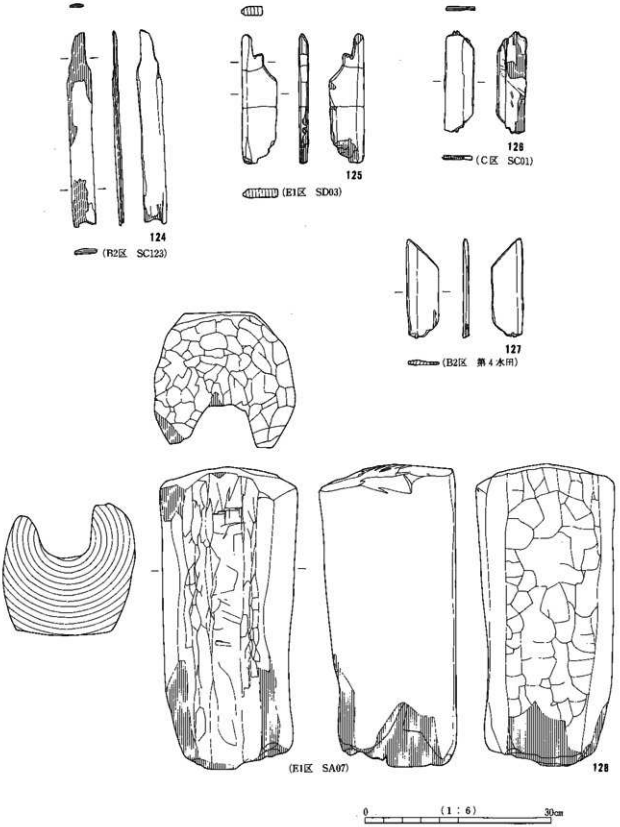
木製品20（容器）


104
(B2区　第1水田)
105
(C1区　拡張区A下層水田)
106
(C2区　SD03)
107
(A2区　SK02)
108
(C2区　外四トレンチ)
(C区　SC01)
109
0
(1：6)
30cm

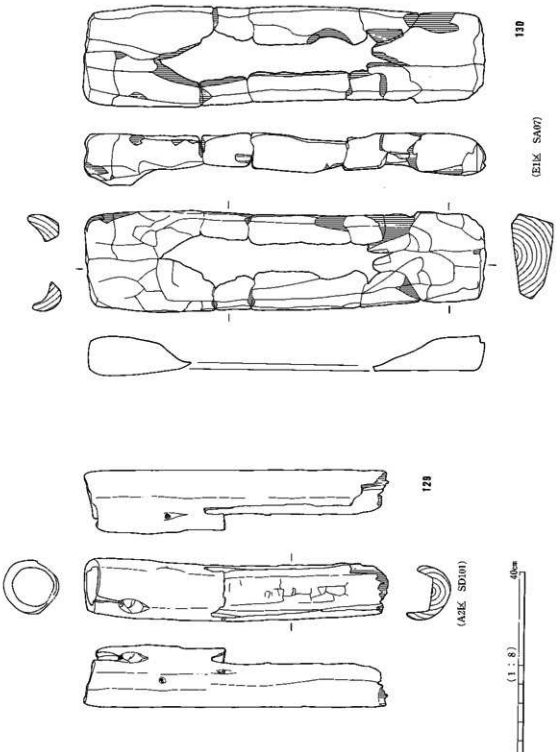
木製品21（容器）


110
(B2区 SC102)
111
(C区 SC01)
112
(C2区 SD03)
113
(C2区 SC02)
114
(C2区 SD03)
115
(C2区 SC02)
116
(C2区 SD03)
117
(A3区 SC09)
118
(C区 SC01)
119
(B2区 SD106)
120
(E1区 SD12)
121
(C2区 SD03)
122
(B2区 SD104)
123
(C2区 SC02)
0
(1 : 6)
30cm

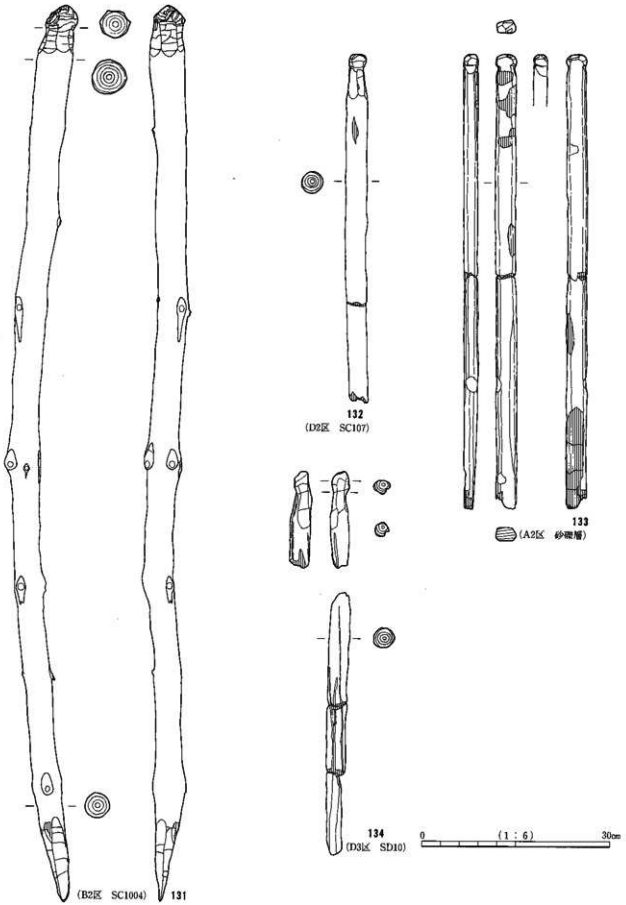
木製品22（容器）


124
(R2区 SC123)
125
(E1区 SD03)
126
(C区 SC01)
127
(B2区 第4水田)
(F1区 SA07)
128
0
(1：6)
30cm

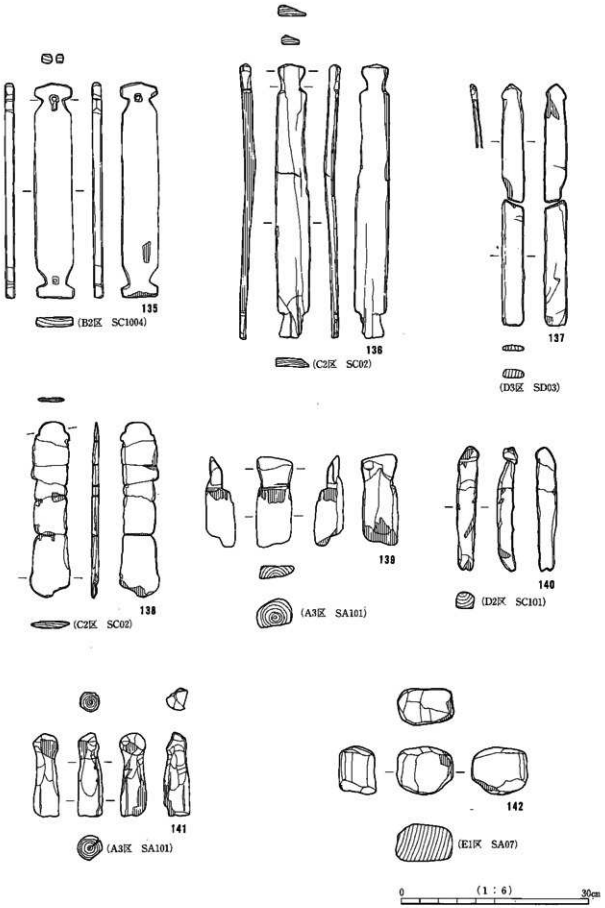
木製品23（容器）



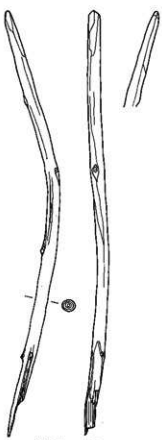
木製品24（容器）



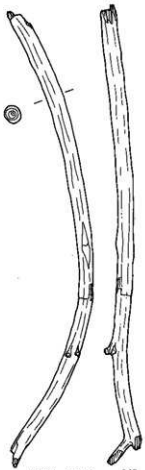
木製品25（有頭棒状木製品）



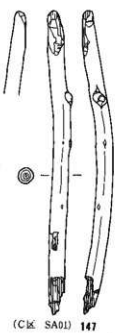
木製品26（有頭板状木製品・有頭棒状木製品）

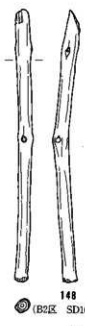

(B2区) 143

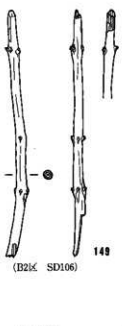
(D3区 SD03) 144

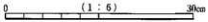

(B2区 SD106) 145

(B2区) 146

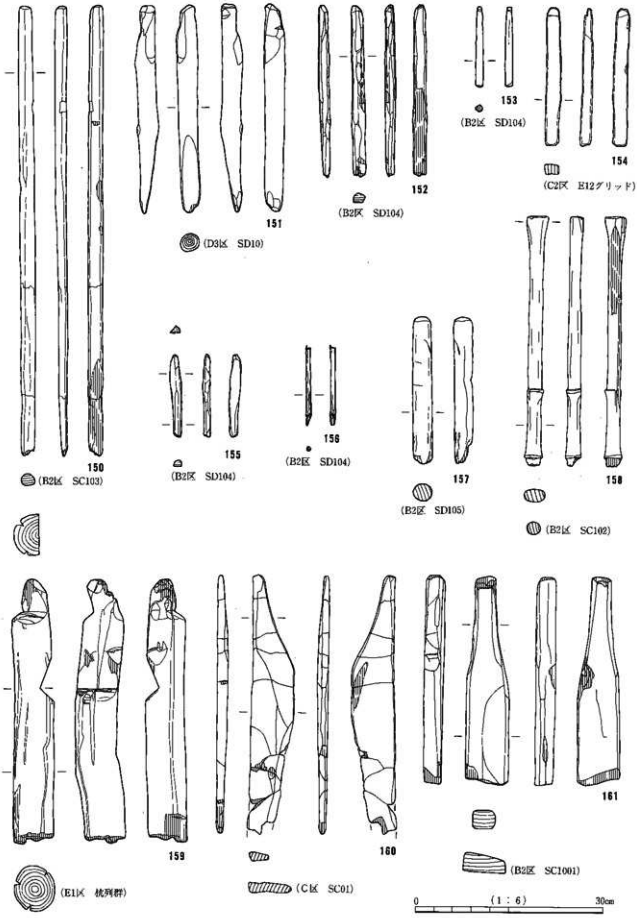

(C区 SA01) 147


(B2区 SD106) 148

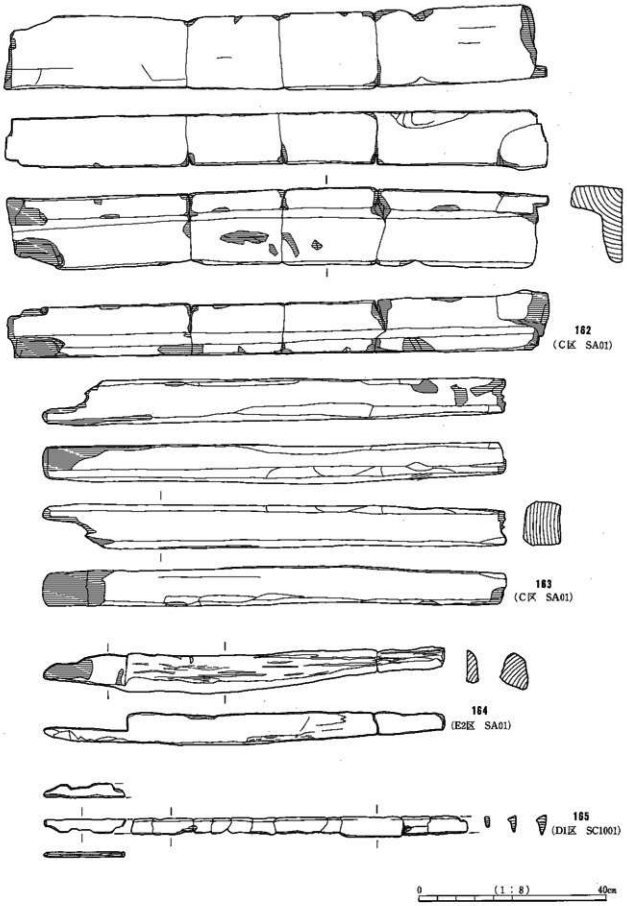

(B2区 SD106) 149


0
(1 : 6)
30cm

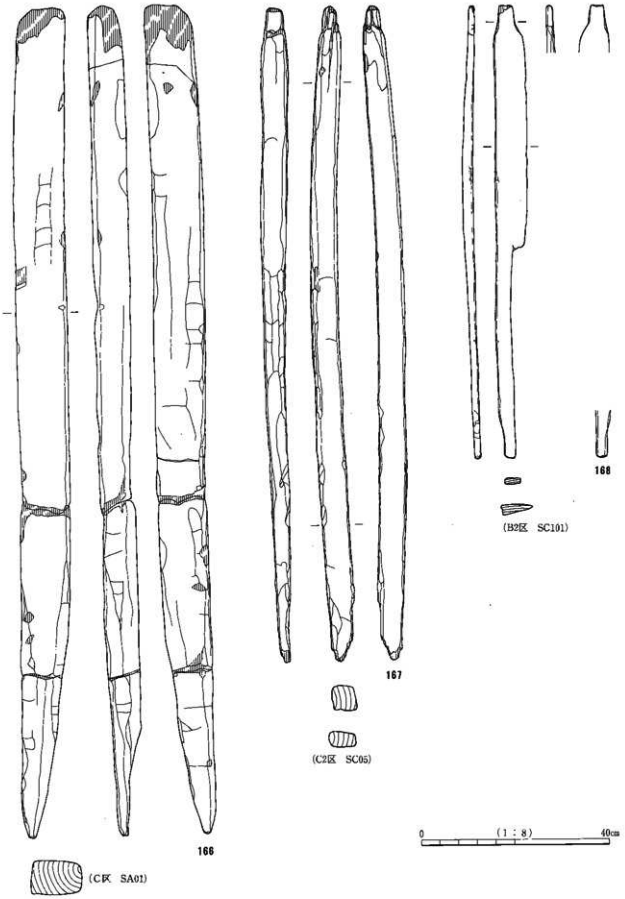
木製品27（弓状木製品）


150
(B2区 SC103)
151
(D3区 SD10)
152
(B2区 SD104)
153
(B2区 SD104)
154
(C2区 E12グリッド)
155
(B2区 SD104)
156
(B2区 SD104)
157
(B2区 SD105)
158
(B2区 SC102)
159
(E1区 杭列群)
160
(C1区 SC01)
161
(B2区 SC1001)
0
(1 : 6)
30cm

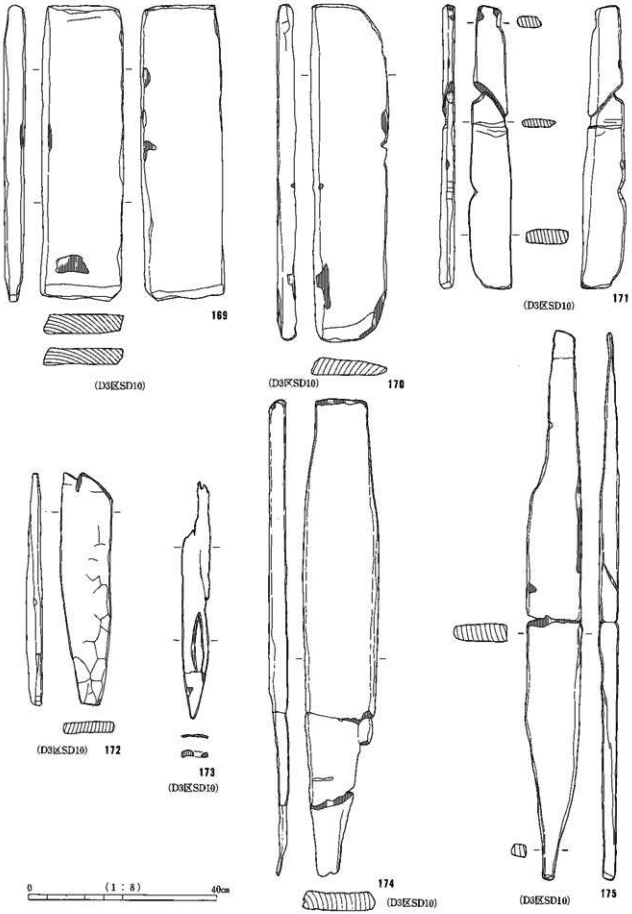
木製品28（棒状木製品）



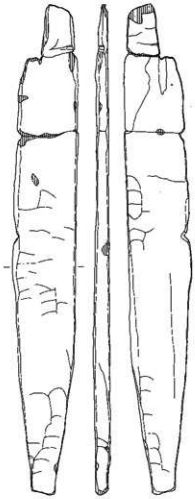
木製品29（棒状加工材）

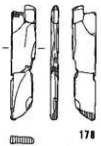


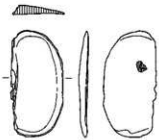
木製品30（棒状加工材）

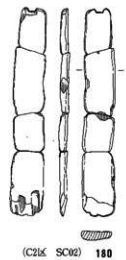

169
(D3区SD10)
170
(D3区SD10)
171
(D3区SD10)
172
(D3区SD10)
173
(D3区SD10)
174
(D3区SD10)
175
(D3区SD10)
0
(1：8)
40cm

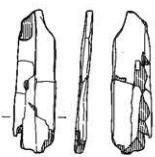
木製品31（板状木製品）

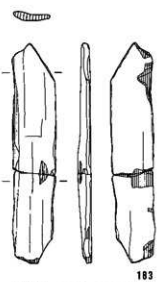


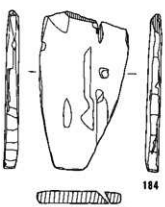


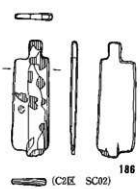






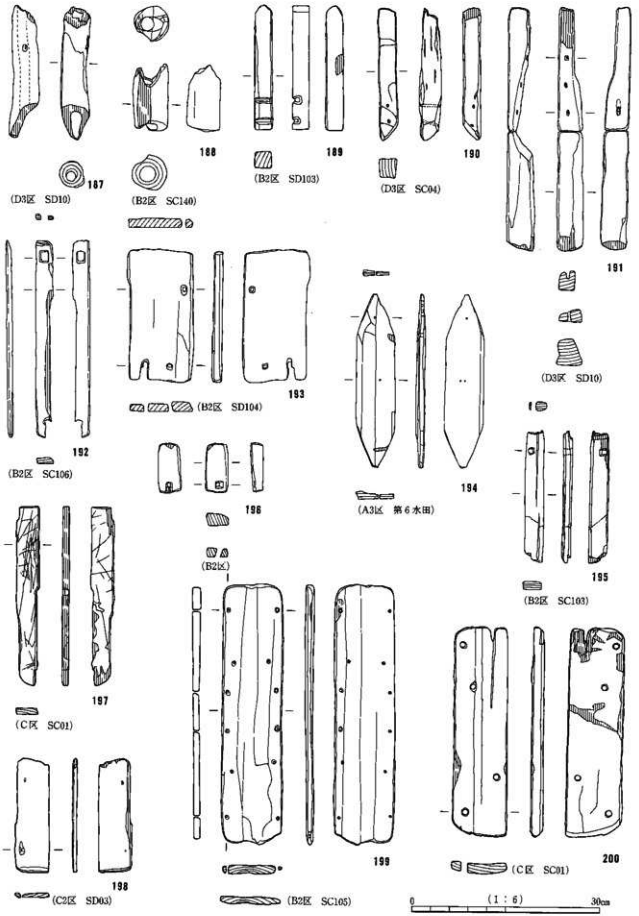




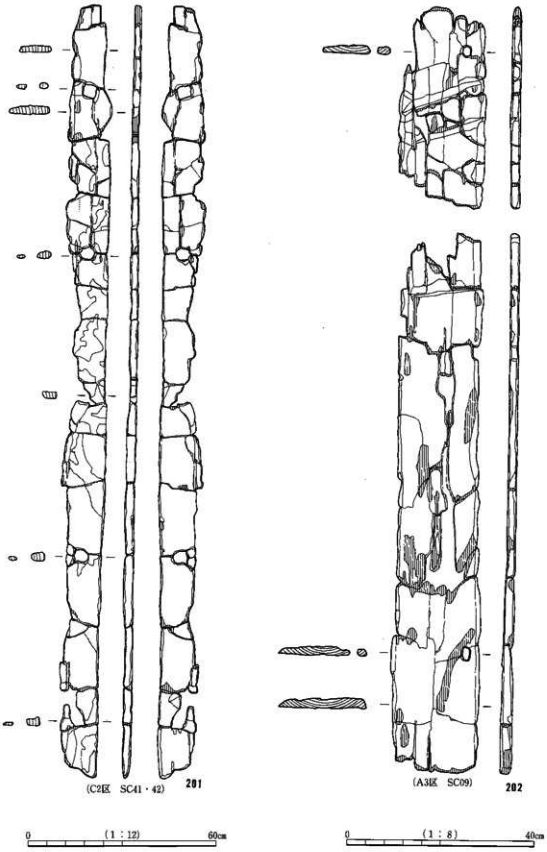


0 (1 : 8) 40cm

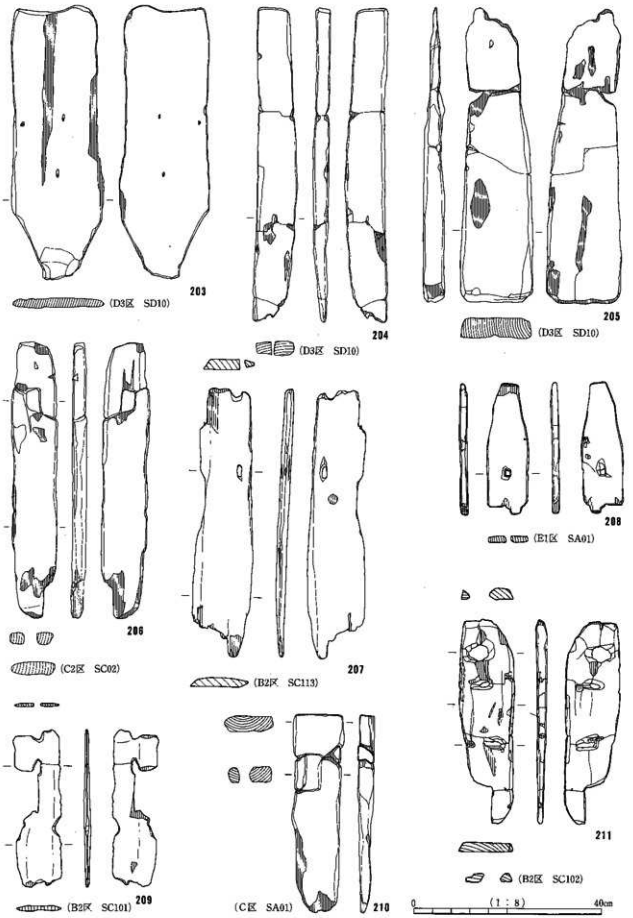
木製品32（板状木製品・板状加工材）



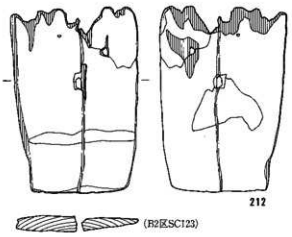
木製品33（有孔棒状木製品・有孔板状木製品他）

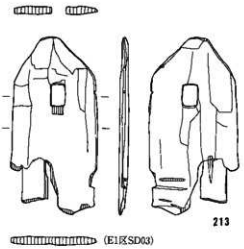


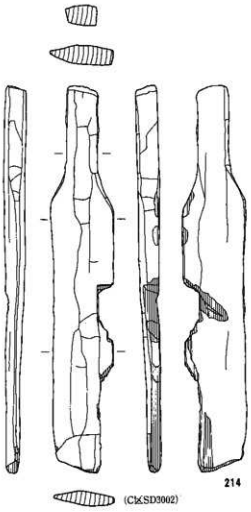
木製品34（有孔棒状木製品・有孔板状木製品他）

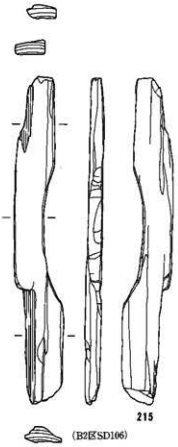


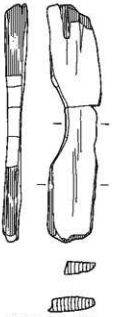
木製品35（有孔棒状木製品・有孔板状木製品他）

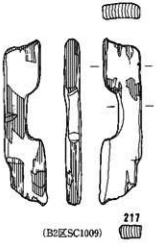






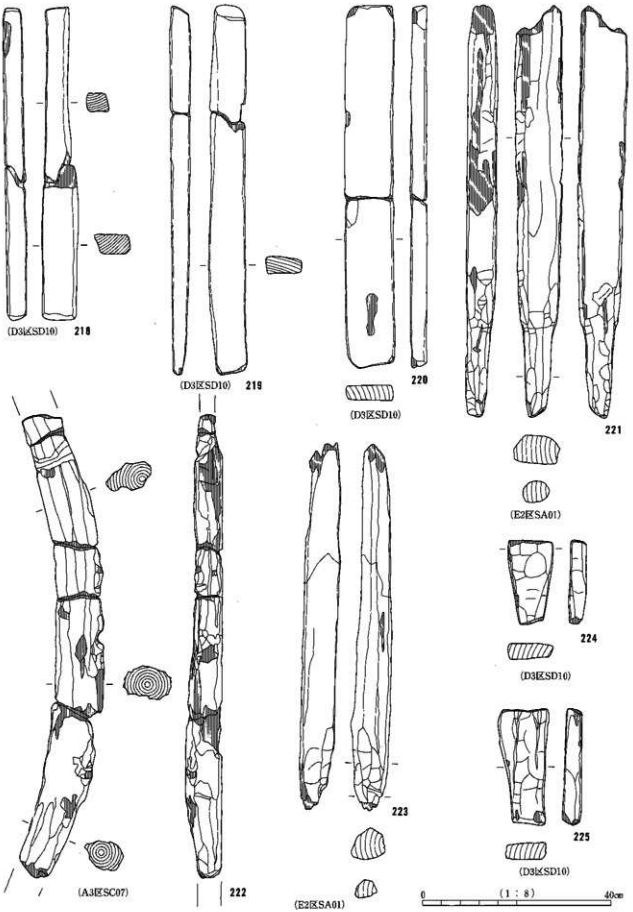




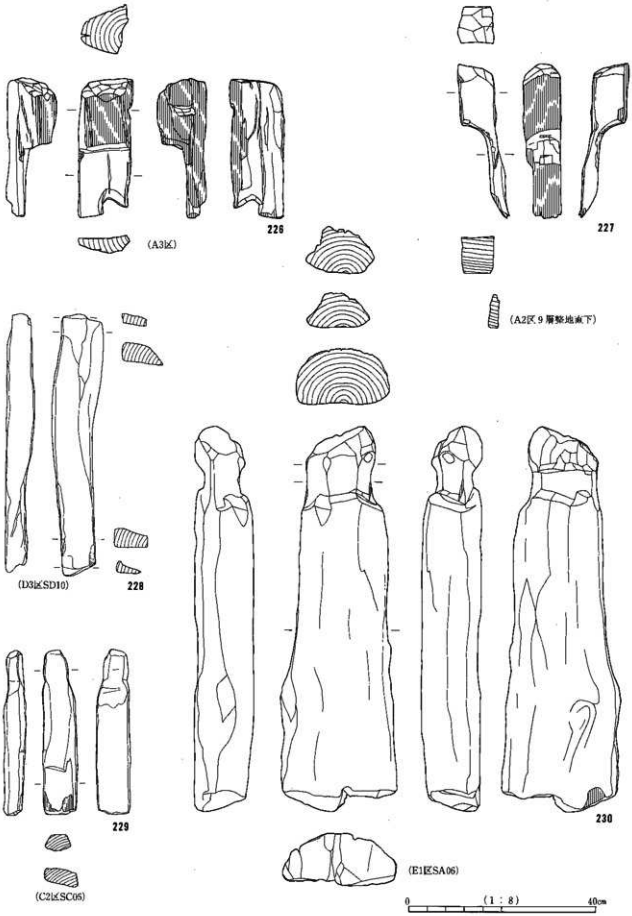


0 (1：8) 40cm

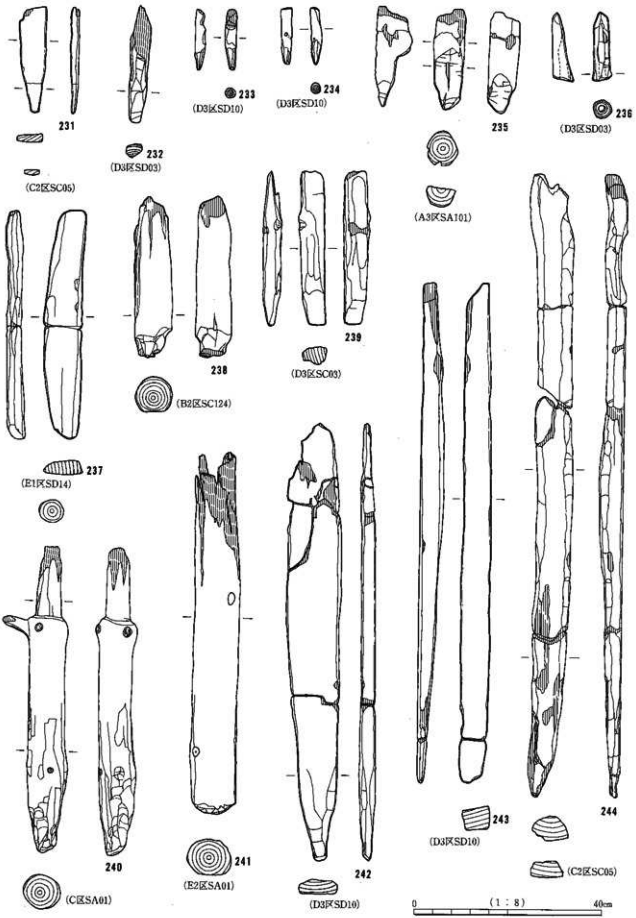
木製品36（有孔棒状木製品・有孔板状木製品他）



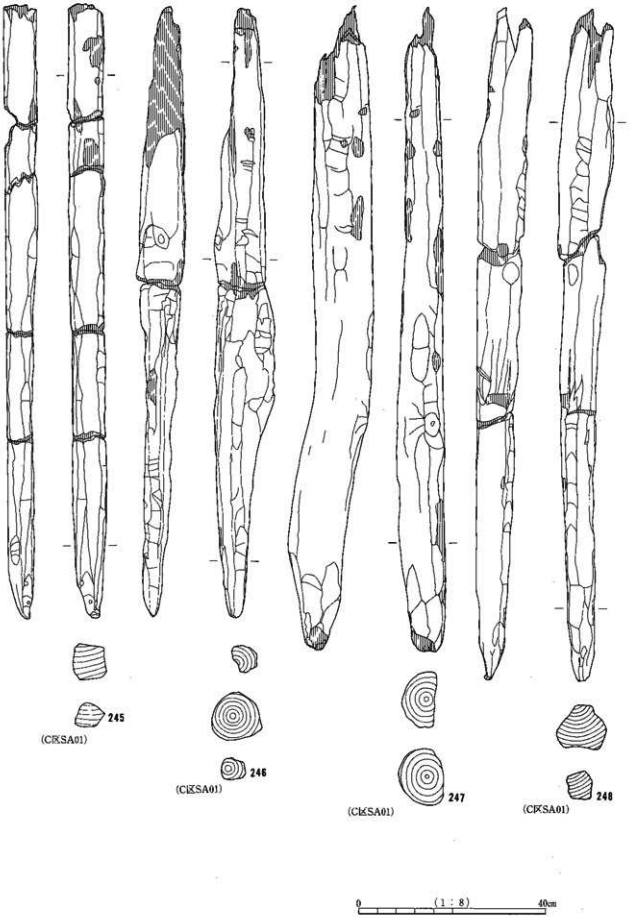
木製品37（有孔棒状木製品・有孔板状木製品他）



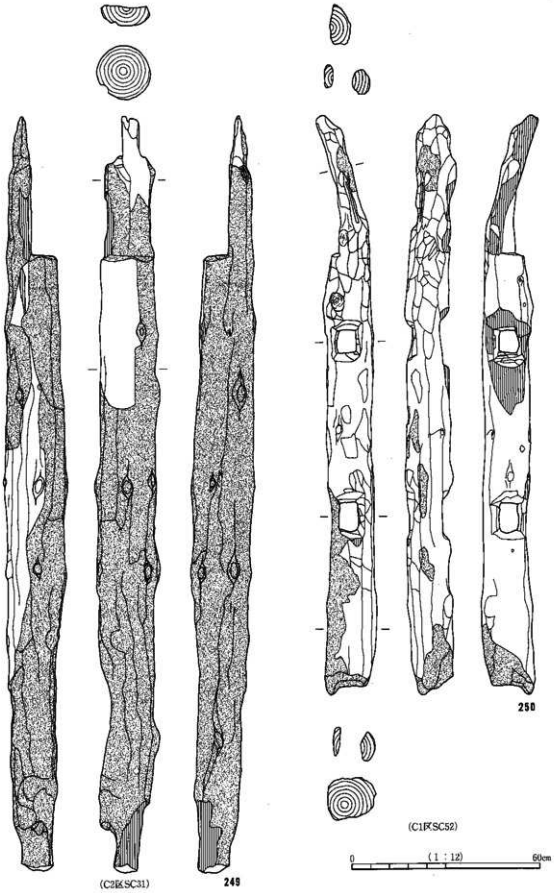
木製品38（有孔棒状木製品・有孔板状木製品他）



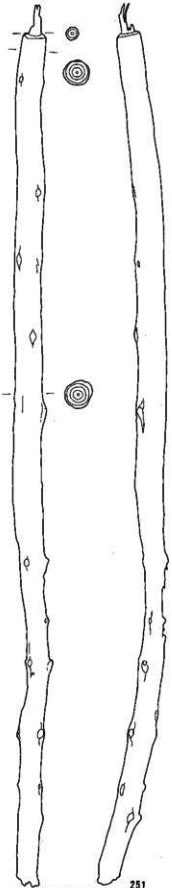
木製品39（有孔棒状木製品・有孔板状木製品他）

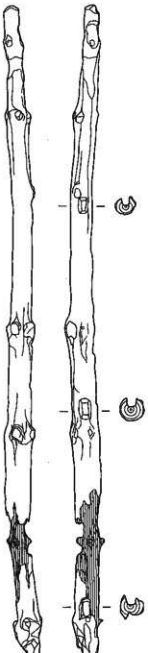


木製品40（有孔棒状木製品・有孔板状木製品他）

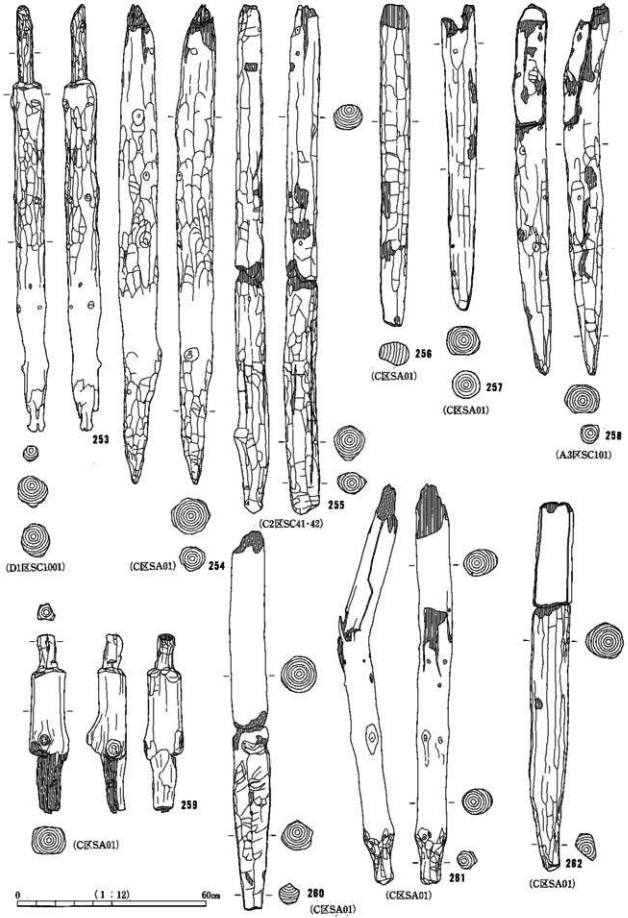


木製品41（建設部材　縦材）

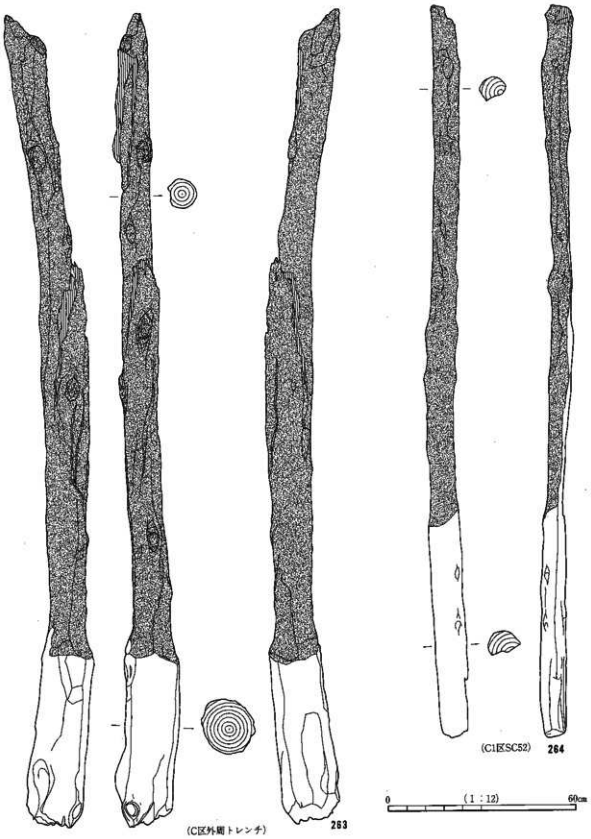




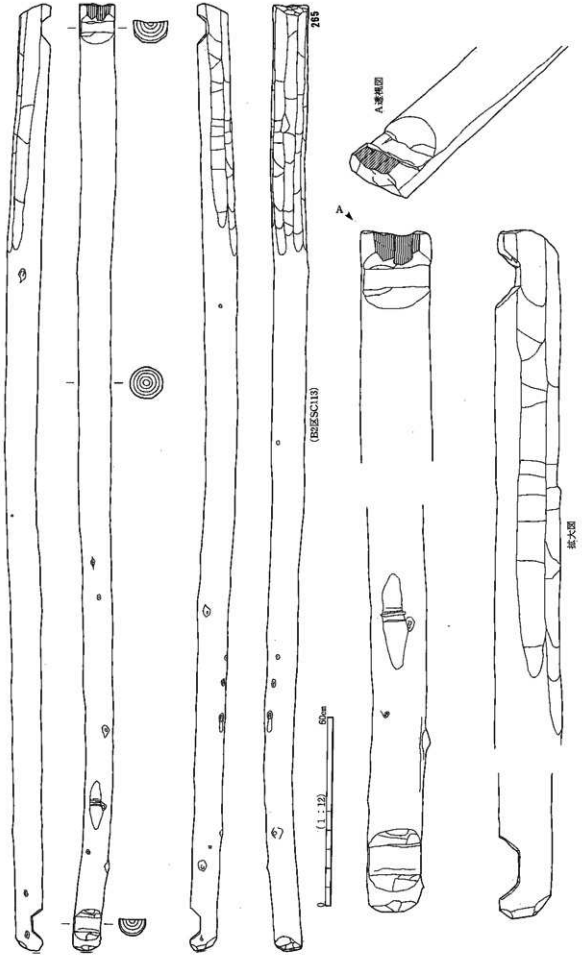
木製品42（建築部材　縦材）



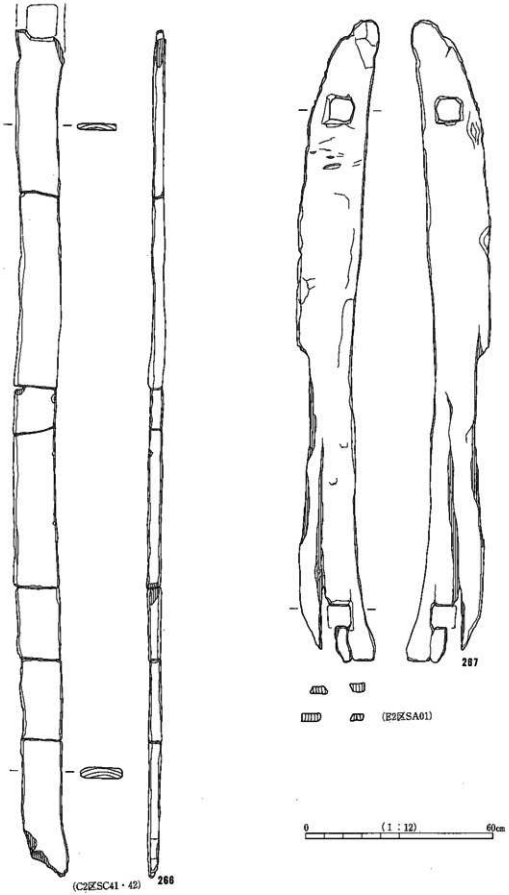
木製品43（建築部材　縦材）



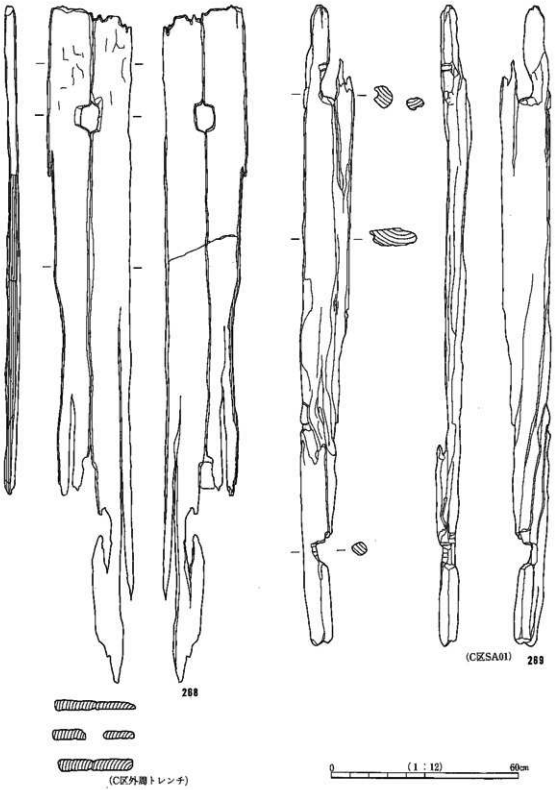
木製品44（建築部材　縦材）



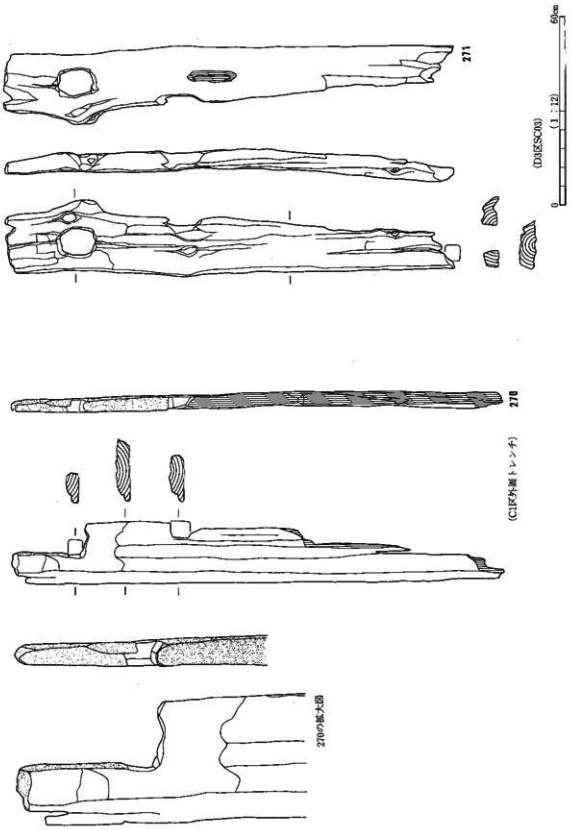
木製品45（建築部材　横架材）



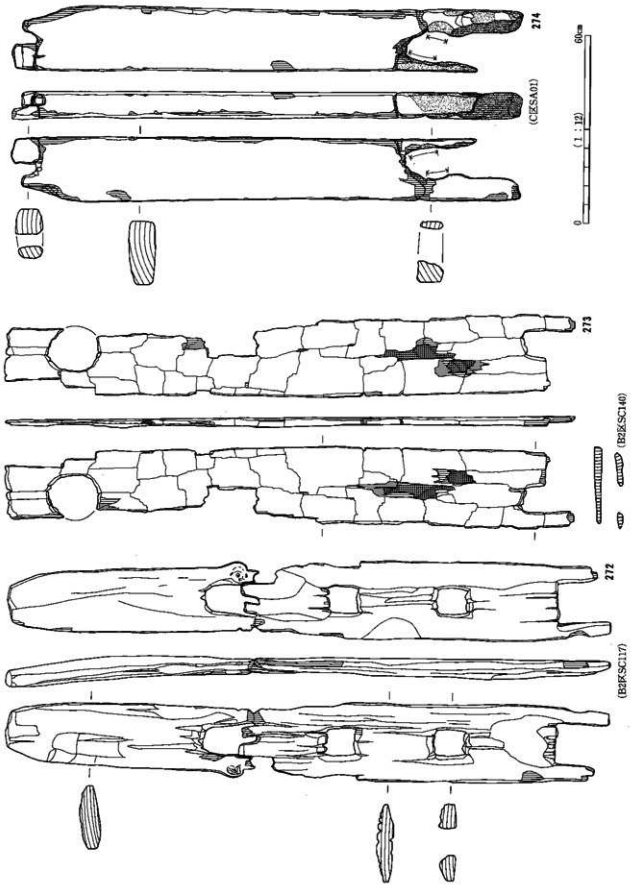
木製品46（建築部材　横架材）



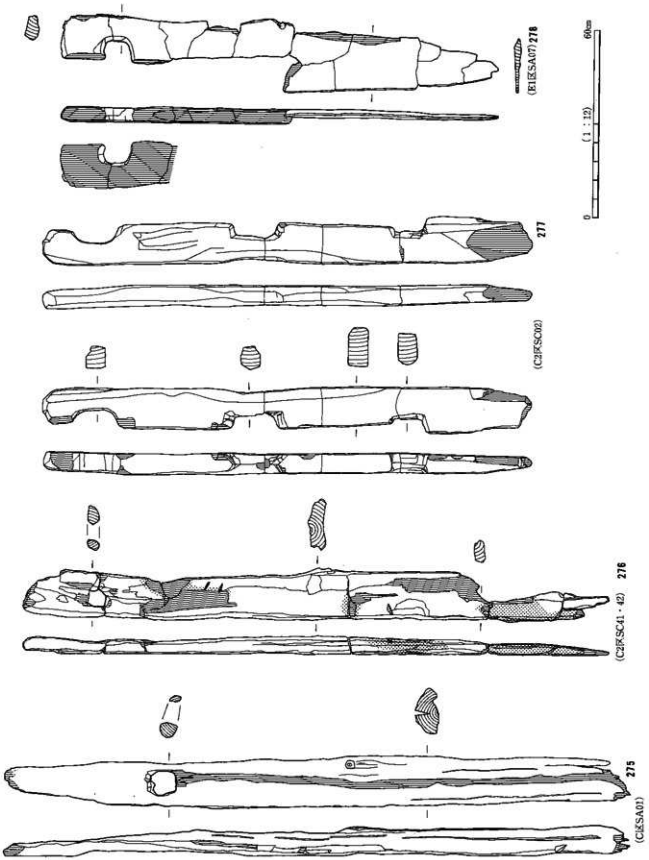
木製品47（建築部材　横架材）



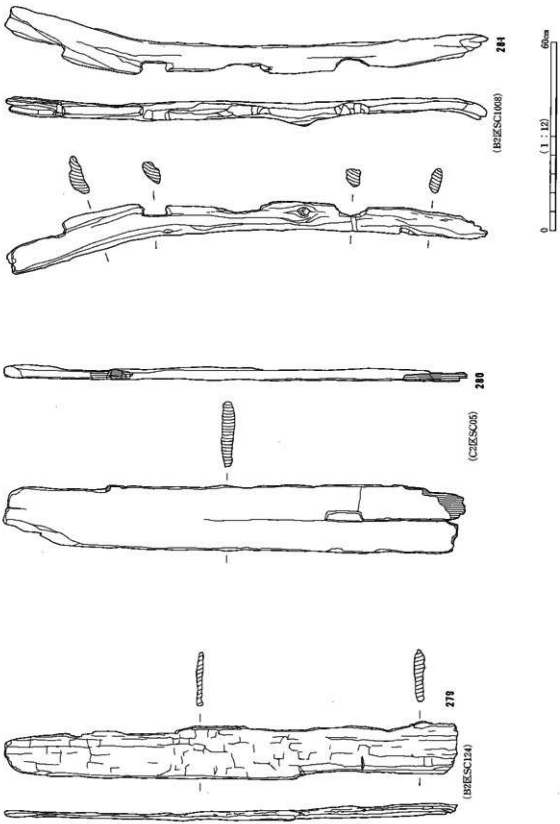
木製品48（建築部材　横架材）



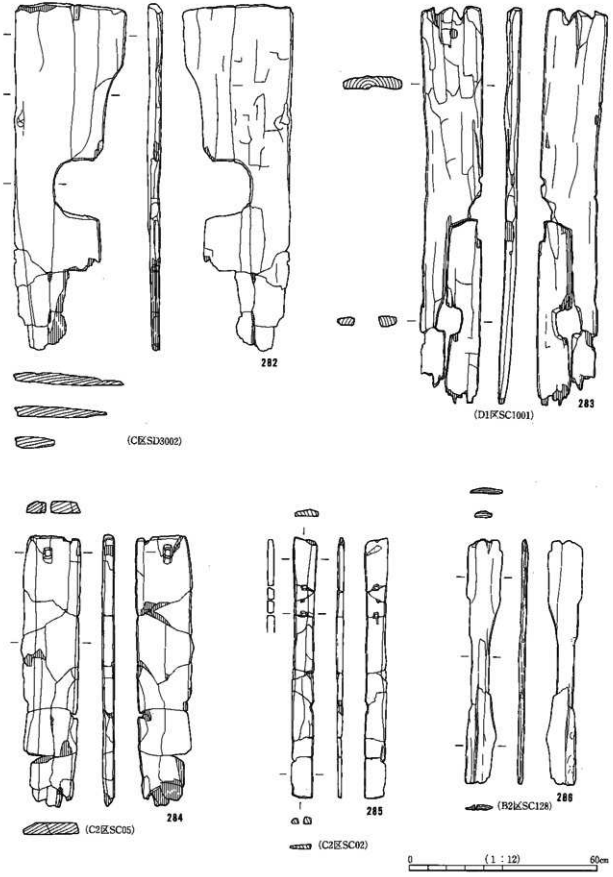
木製品49（建築部材　横架材）



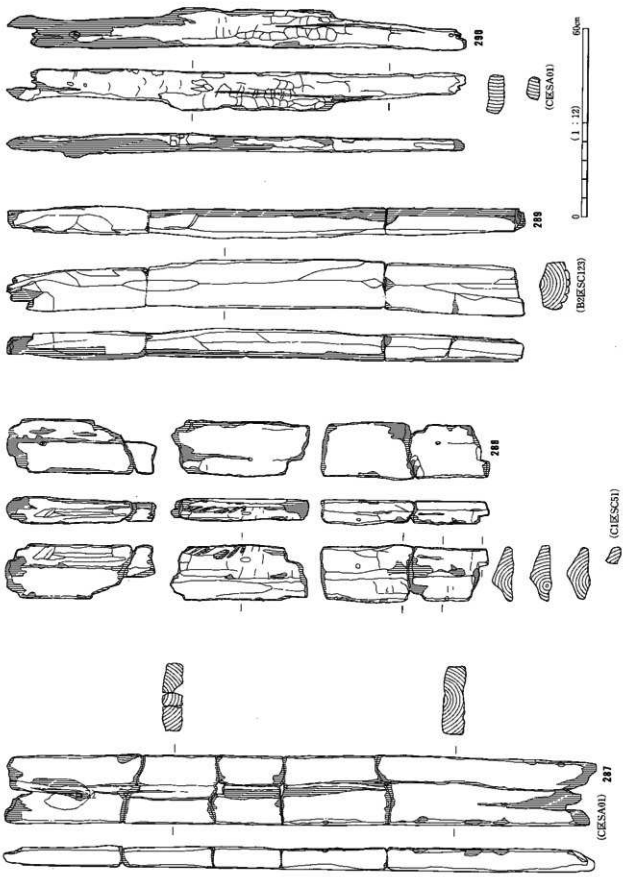
木製品50（建築部材　横架材）



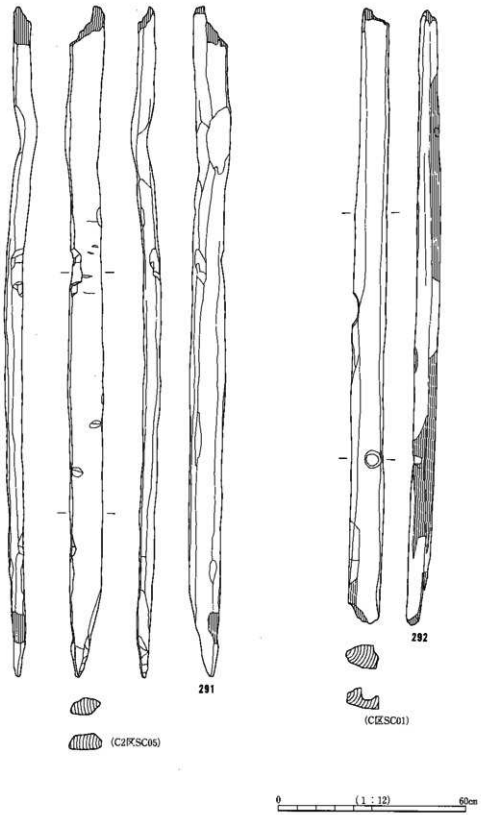
木製品51（建築部材　横架材）



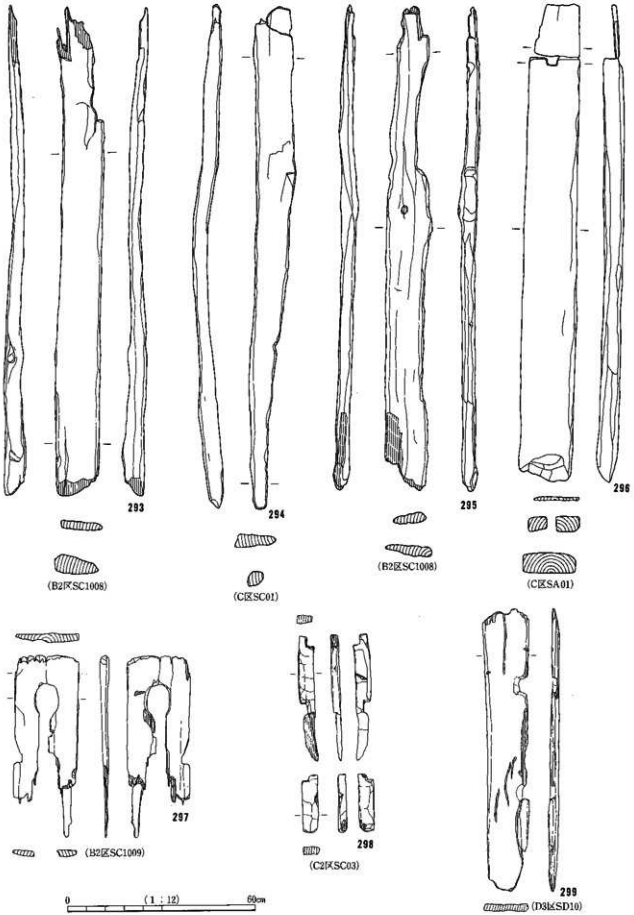
木製品52（建築部材　横架材）



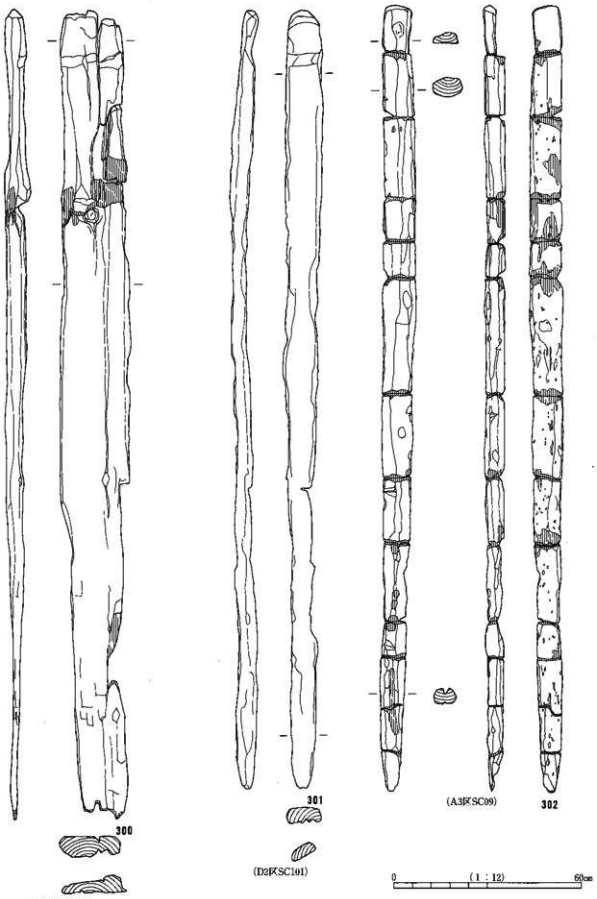
木製品53（建築資材　横架材）



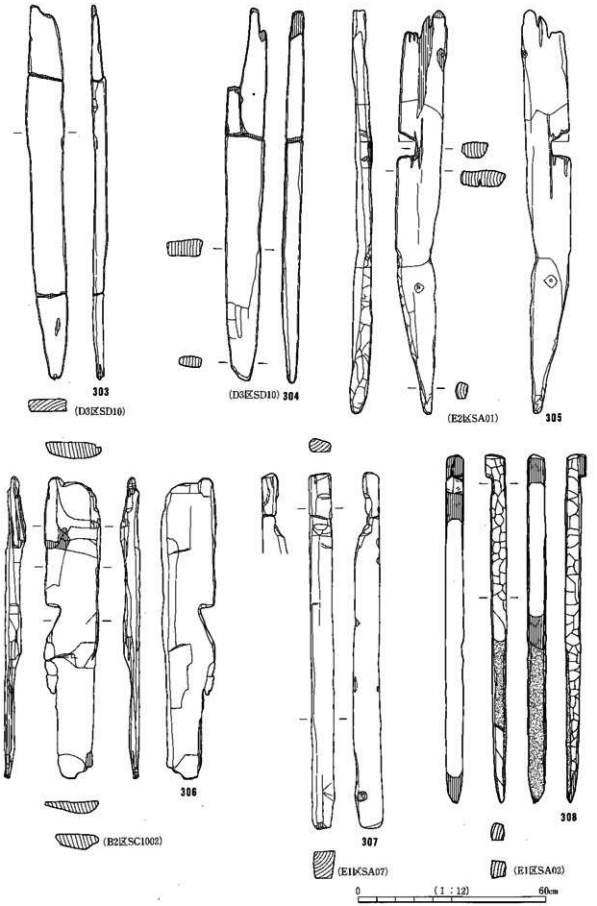
木製品54（建築部材　横架材）



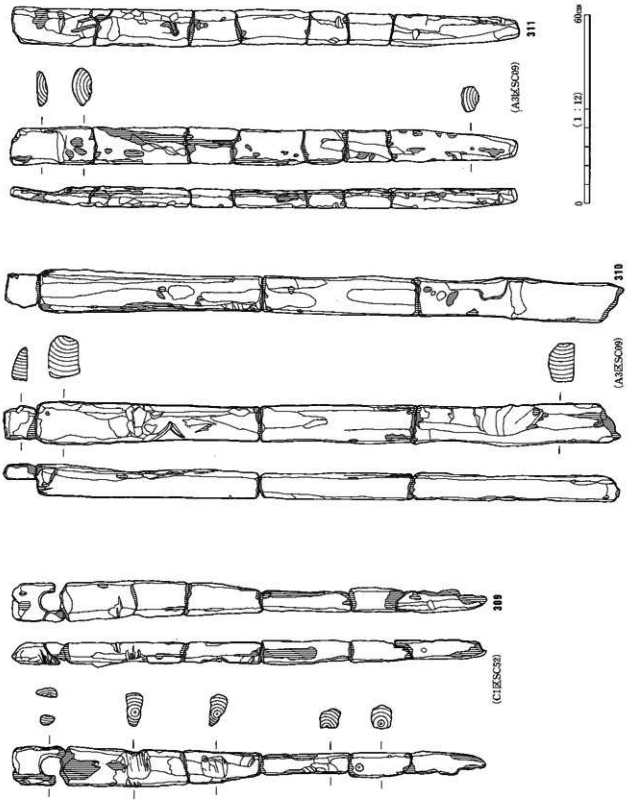
木製品55（建築部材　横架材他）



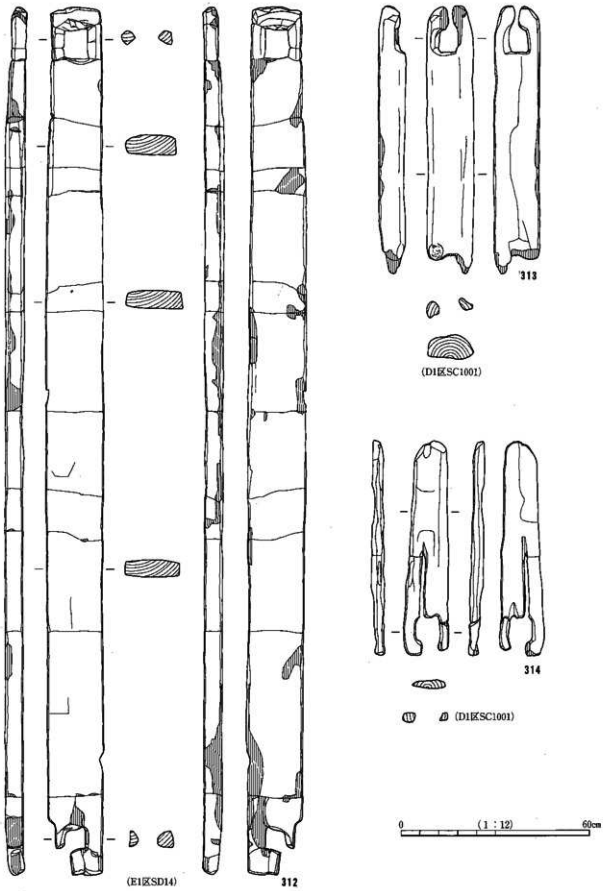
木製品56（建築部材　横架材）



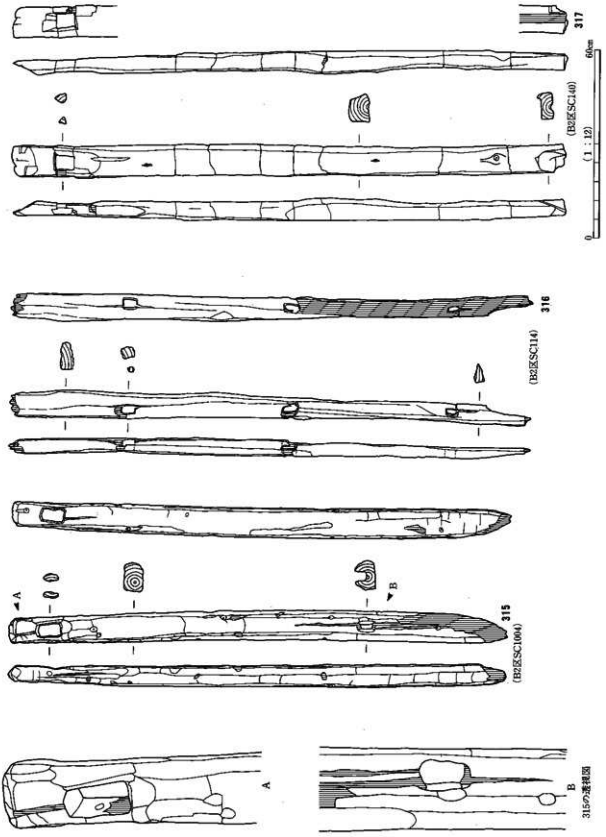
木製品57（建築部材　横架材）



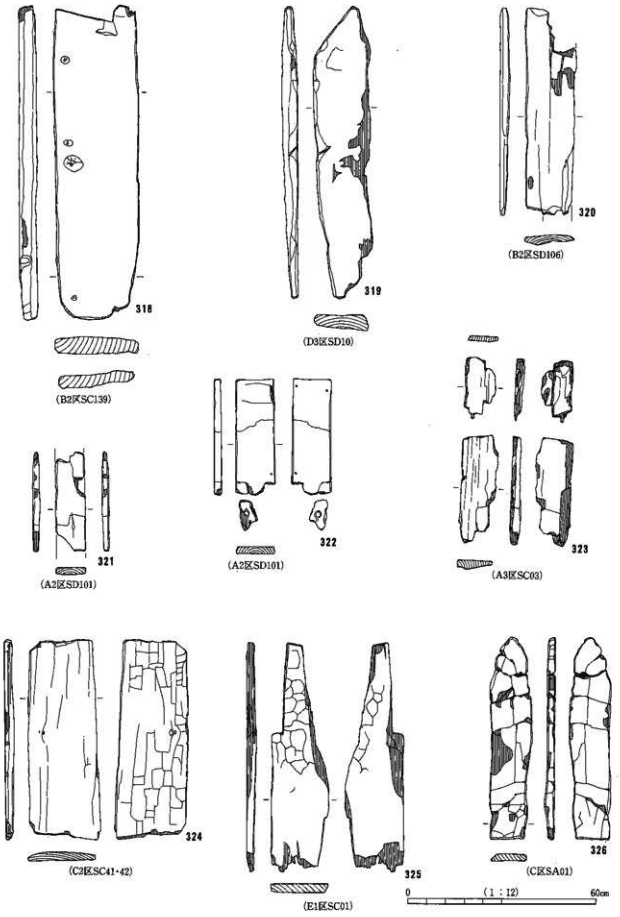
木製品58（建築部材　横架材）



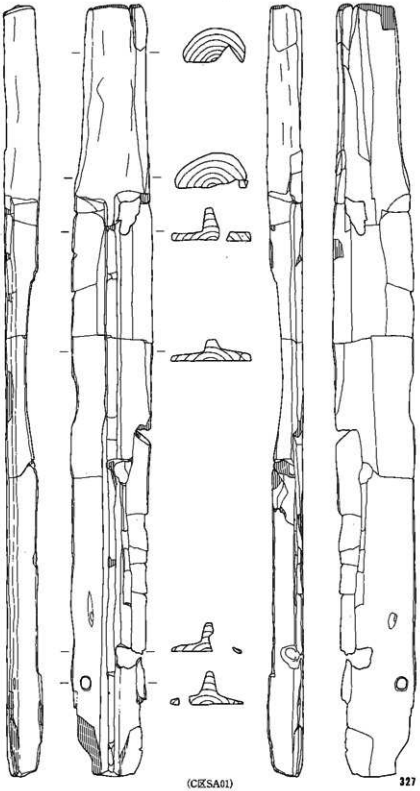
木製品59（建築部材　横架材）



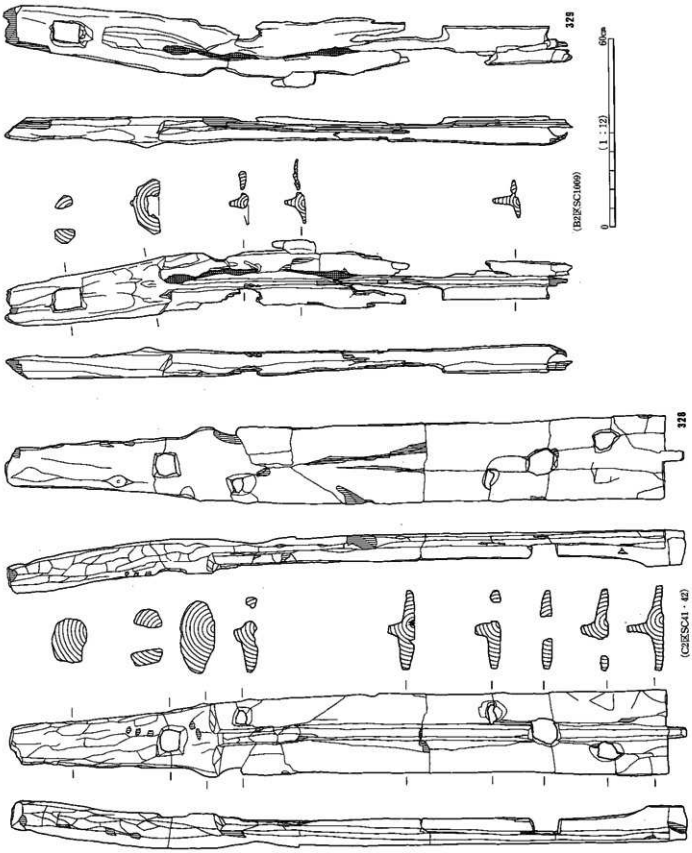
木製品60（建築部材　横架材）



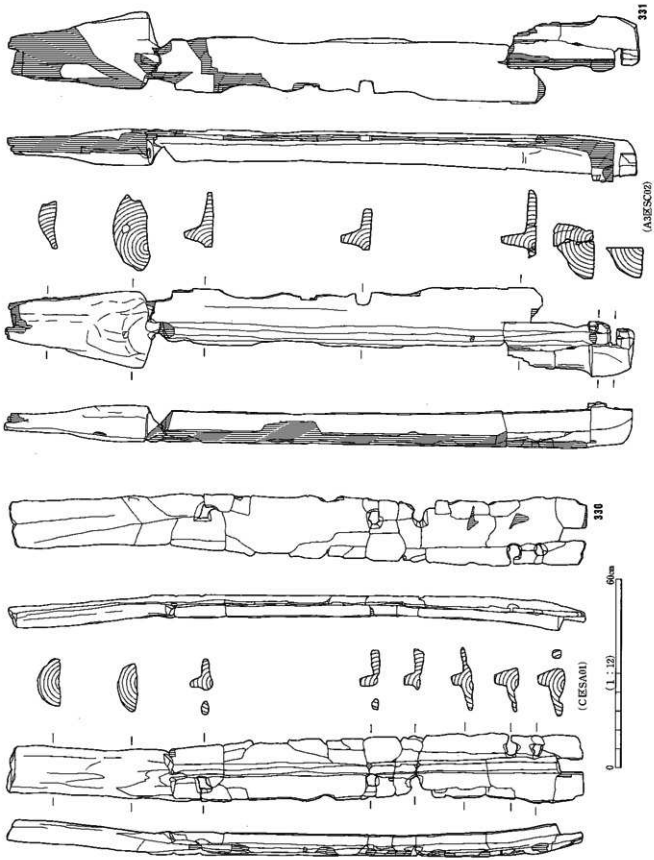
木製品61（建築部材　横架材）



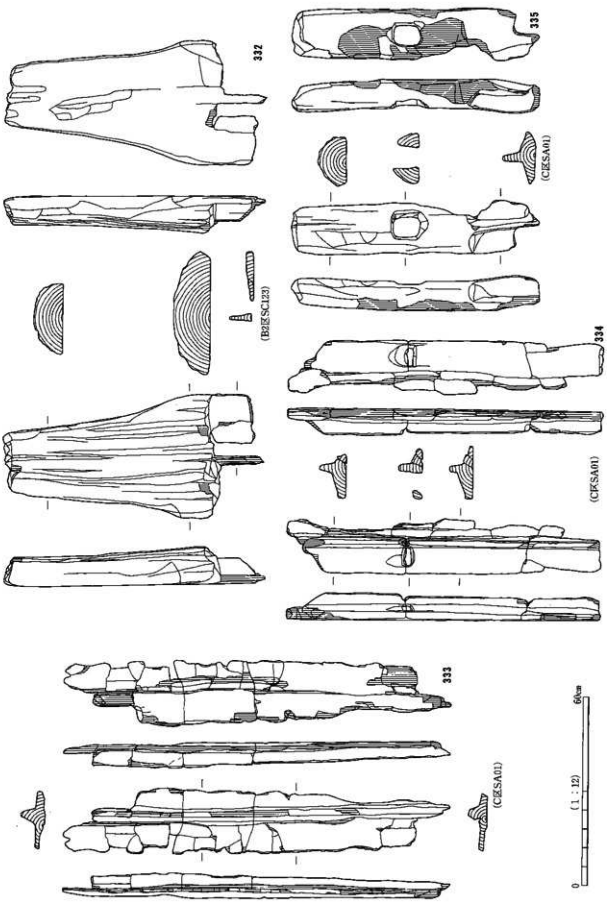
木製品62（建築部材　柵・蹴放材）



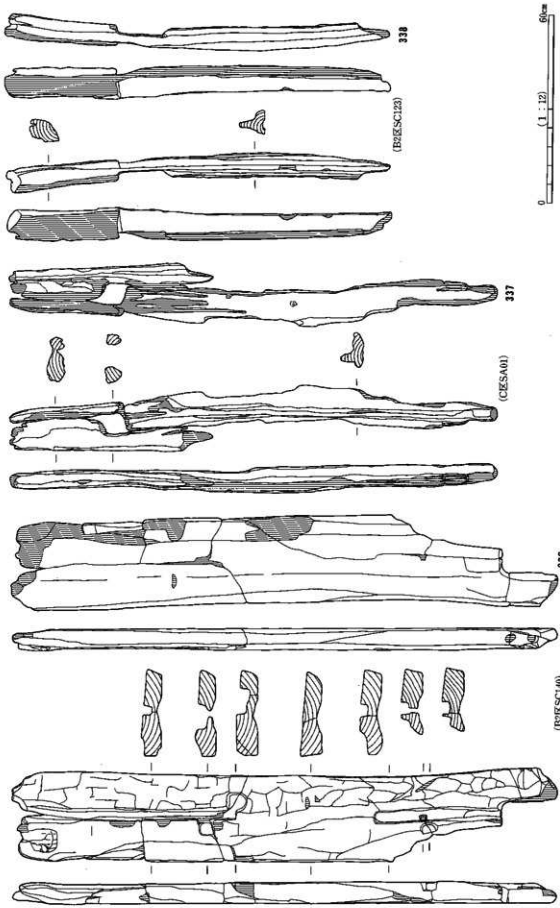
木製品63（建築部材　楣・蹴放材）



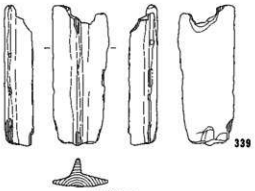
木製品64（建築部材　榻・蹴放材）

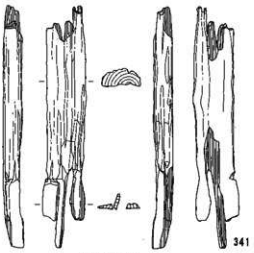


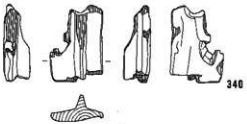
木製品65（建築部材　柵・蹴放材）

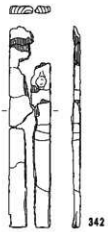


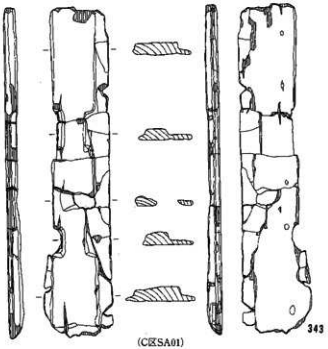
木製品66（建築部材　楣・蹴放材）





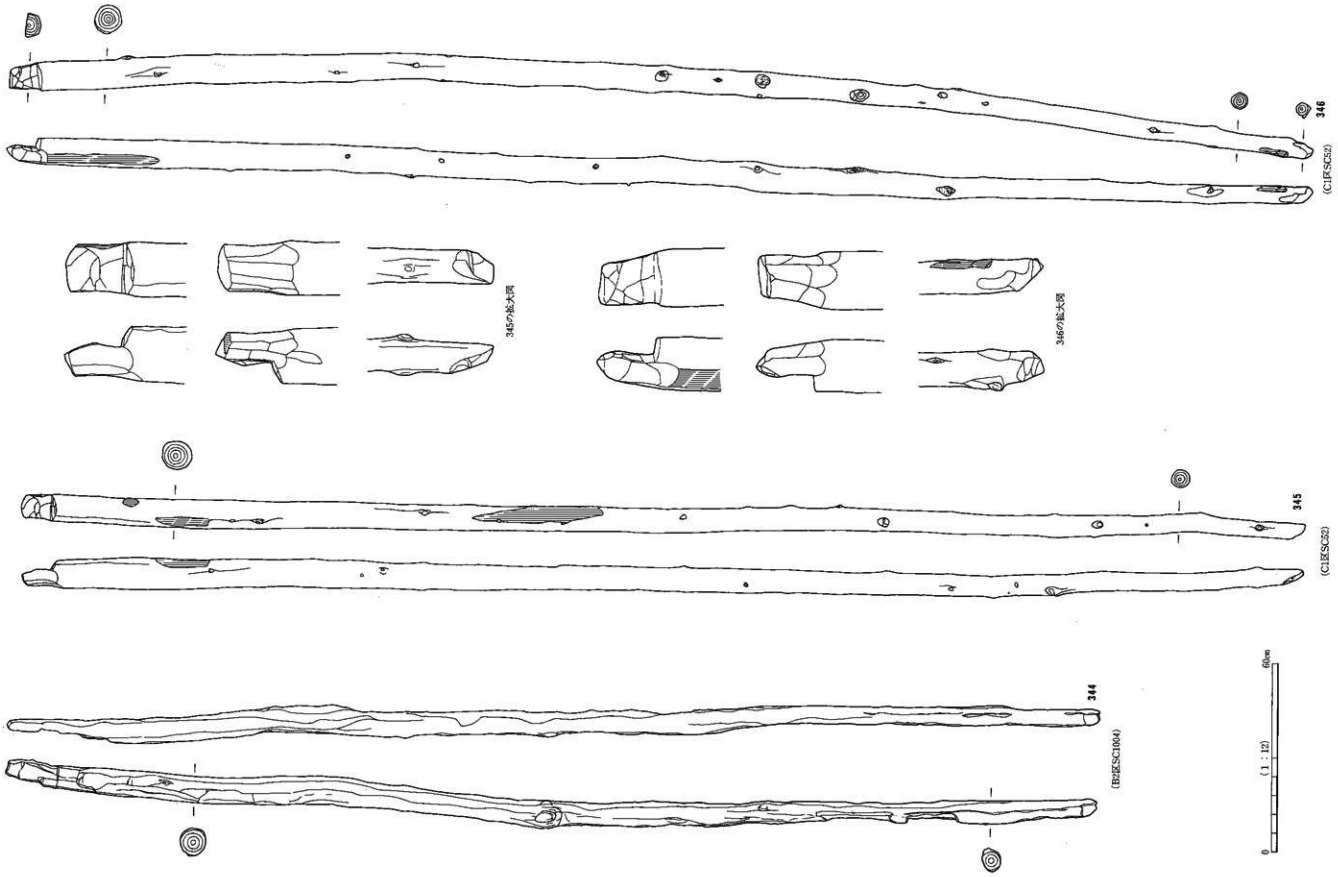




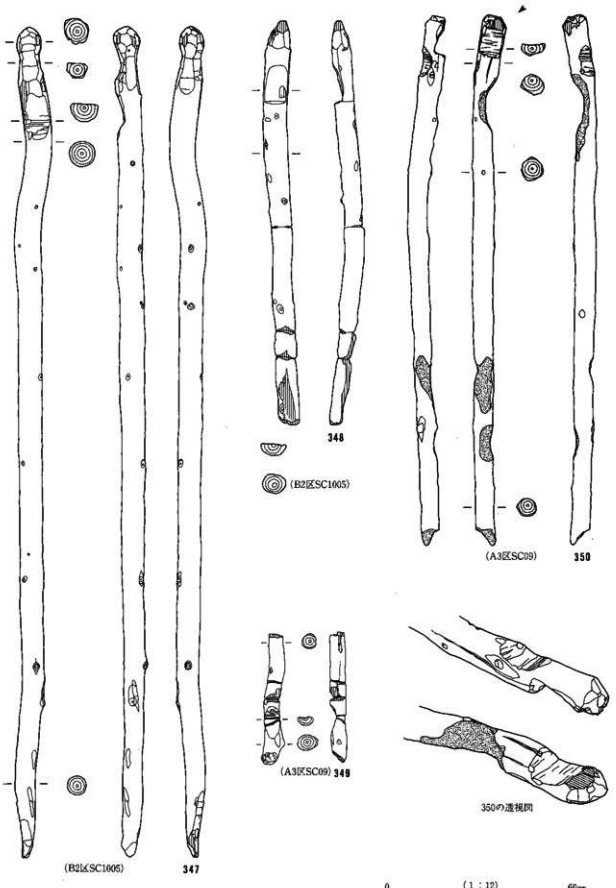


0 (1：12) 60cm

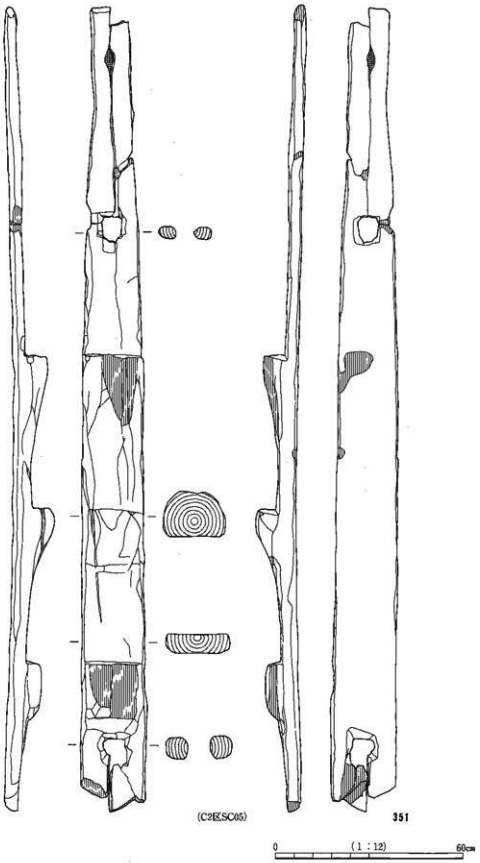
木製品67（建築部材　柵・畝放材）



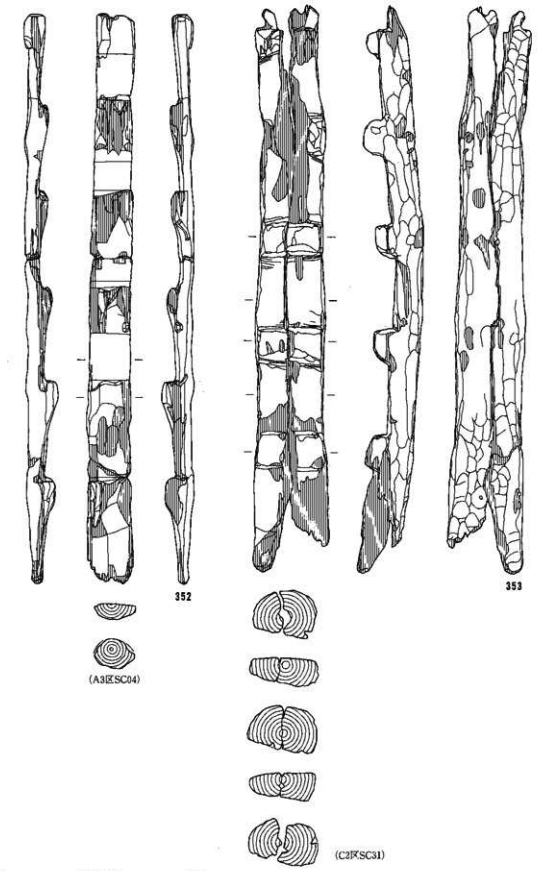
木製品68（建築部材　屋根材）



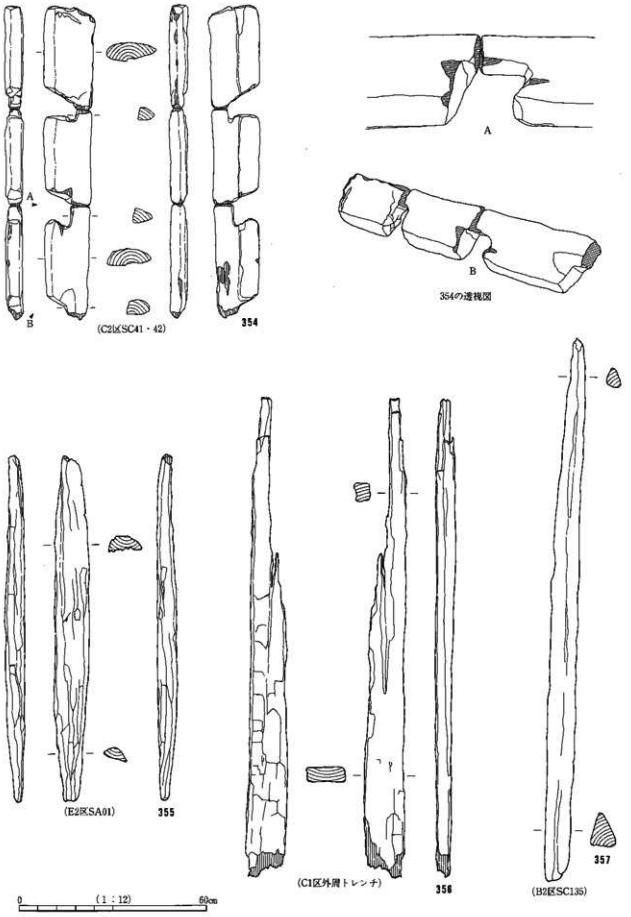
木製品69（建築部材　屋根材）



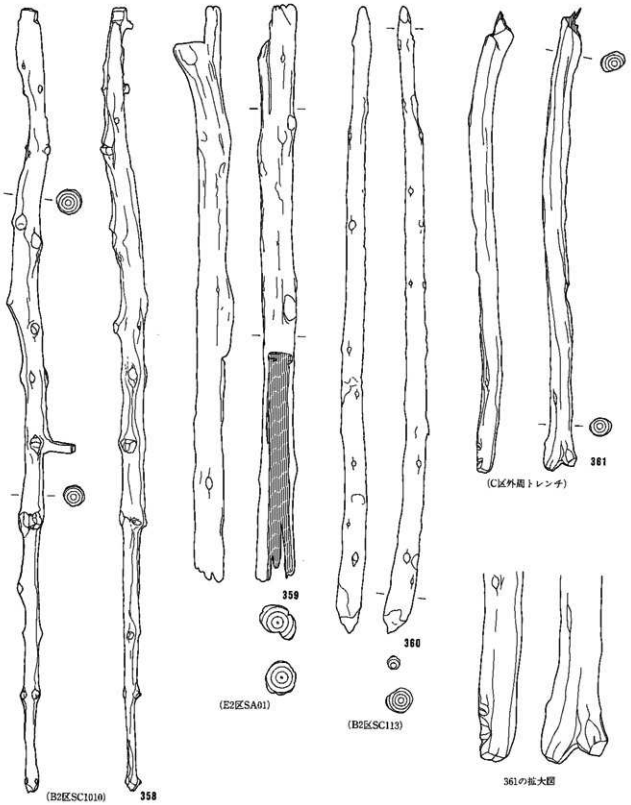
木製品70（建築部材　梯子）



木製品71（建築部材　梯子）

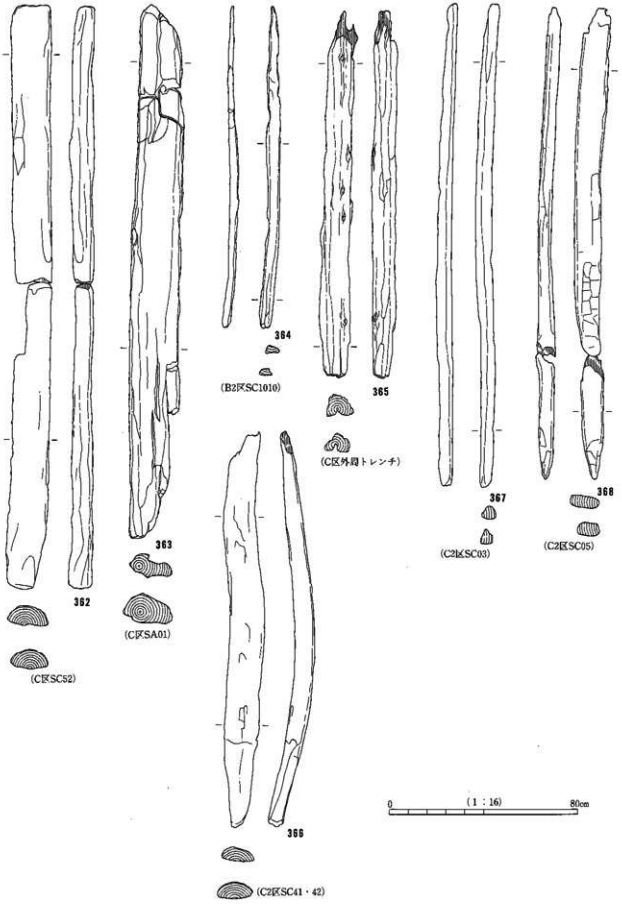


木製品72（建築部材・加工材　マセ柱）

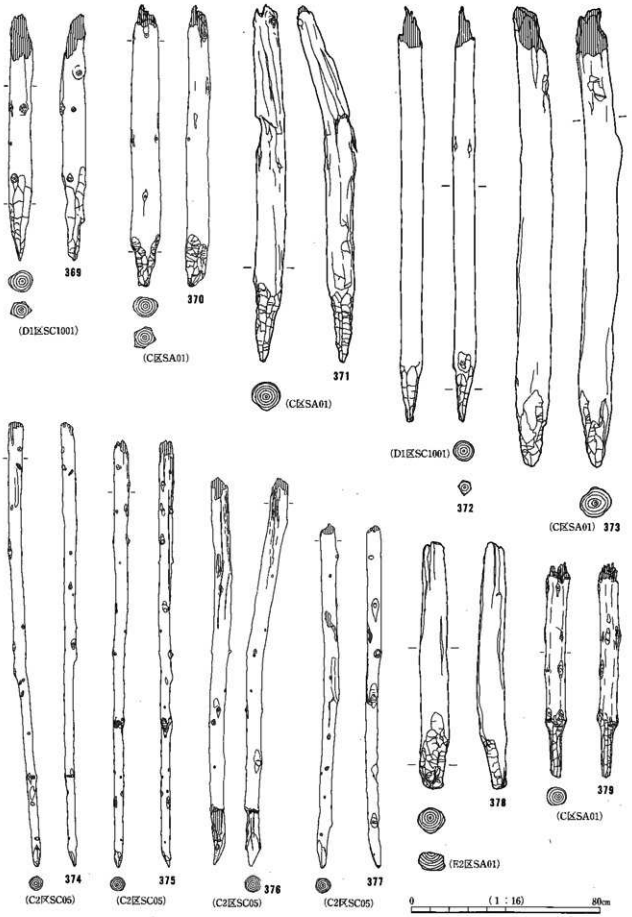


0 (1 : 16) 50cm

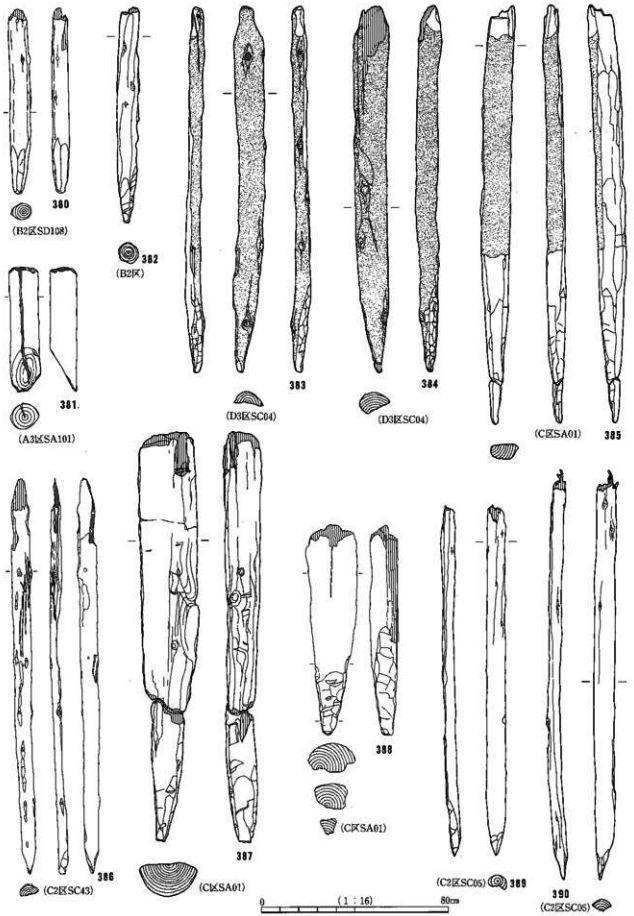
木製品73（加工材）


362
363
364
365
366
367
368
(C区SC52)
(C区SA01)
(B2区SC1010)
(C区外周トレンチ)
(C2区SC03)
(C2区SC05)
(C2区SC41・42)
0
(1：16)
80cm

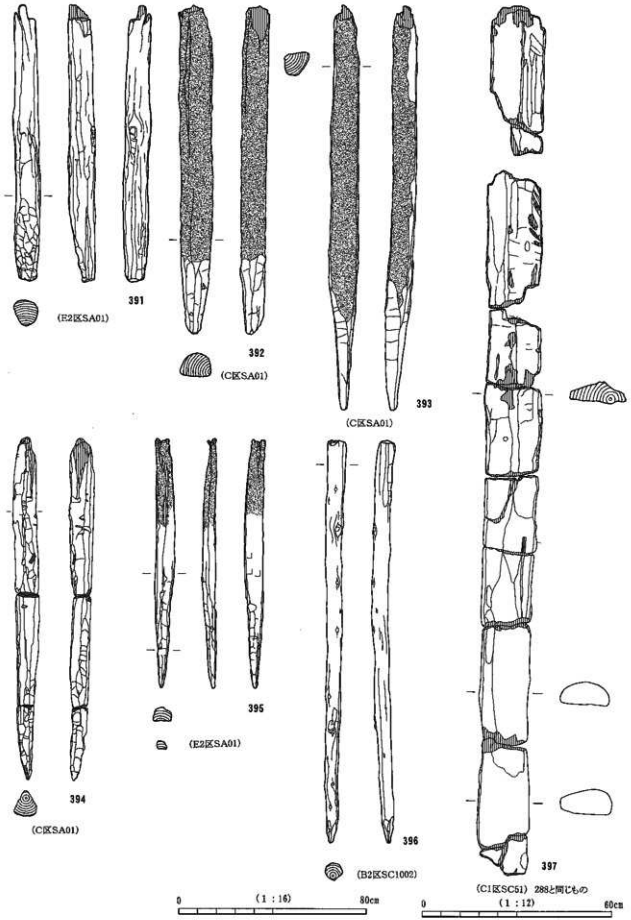
木製品74（加工材）



木製品35（有孔棒状木製品・有孔板状木製品他）


380
(B2区SD108)
382
(B2区)
381
(A3区SA101)
383
(D3区SC04)
384
(D3区SC04)
(C2区SA01)
385
386
(C2区SC43)
(C区SA01)
387
388
(C区SA01)
(C2区SC05)
389
390
(C2区SC05)
0
(1：16)
80cm
381は1：6

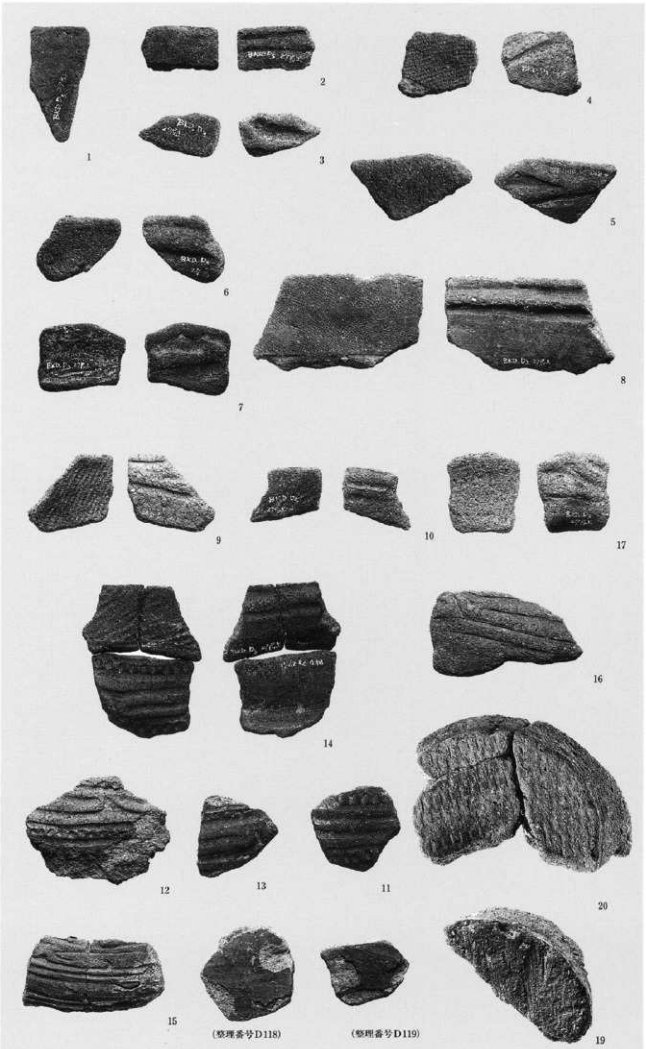
木製品76（杭）


391
(E2区SA01)
392
(C区SA01)
393
(C区SA01)
394
(C区SA01)
395
(E2区SA01)
396
(B2区SC1002)
397
(C1区SC51) 288と同じもの
0 (1：16) 80cm
0 (1：12) 60cm

木製品77（杭他）

写 真 図 版

D地区
晩期土器



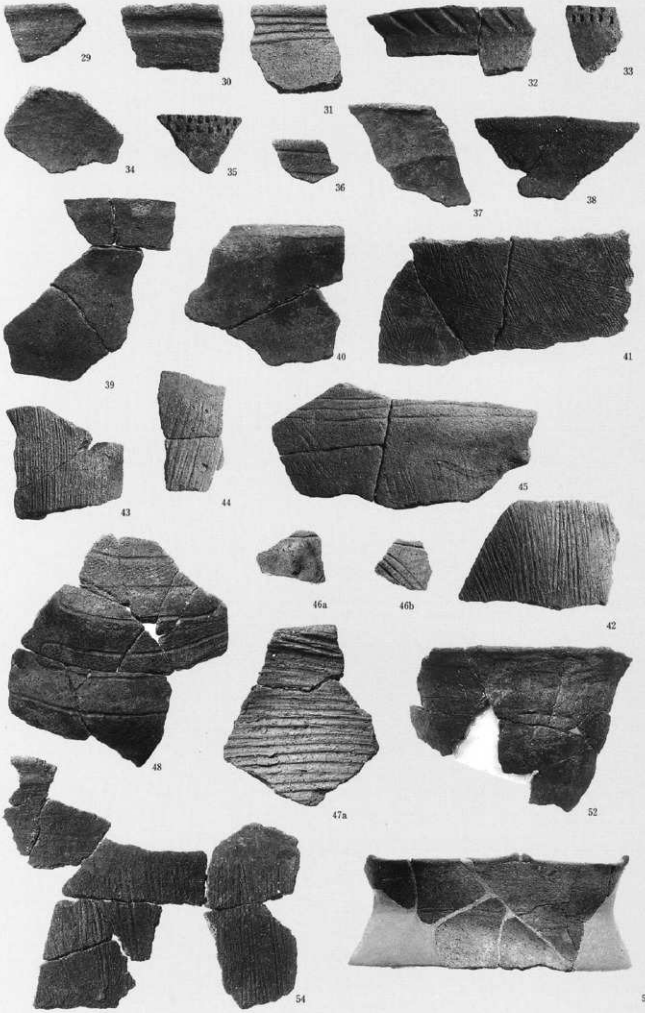
(整理番号D118)

(整理番号D119)

S≒1/2

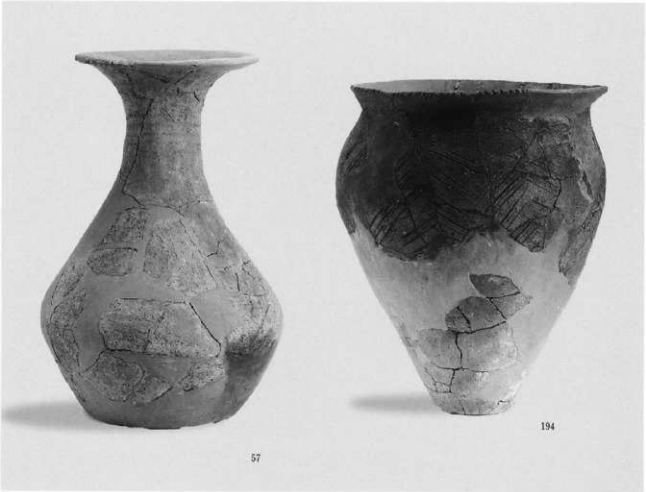
縄文時代土器 2

A地区
晩期土器



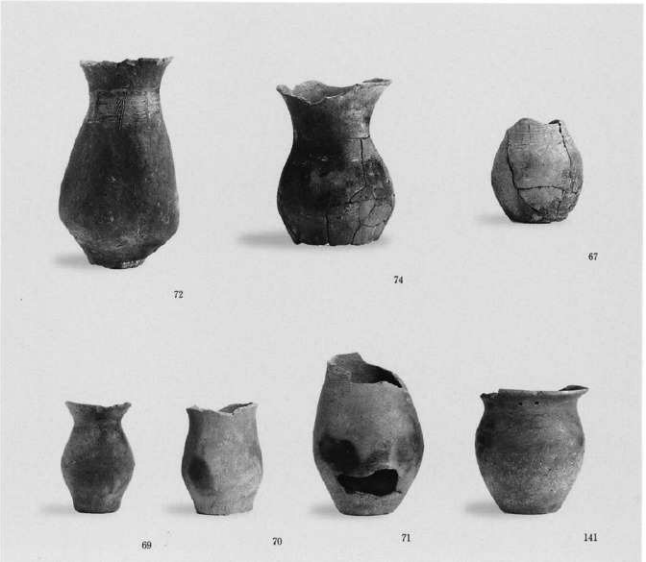
S≒1/2

弥生時代中期



S≒1/4

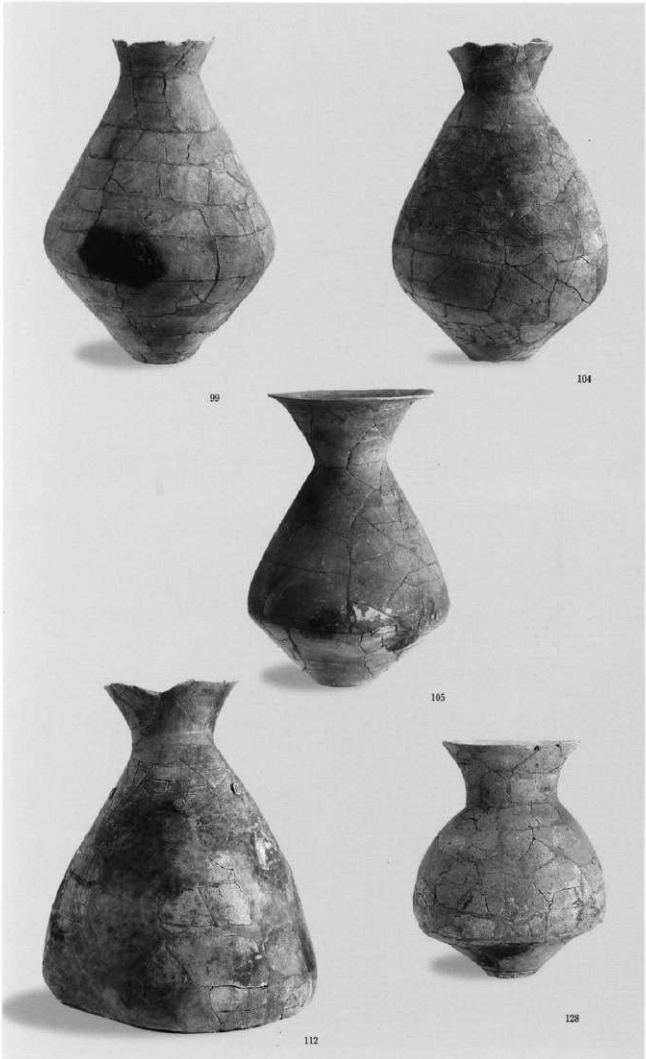
弥生時代後期



S≒1/4

弥生時代土器２

弥生時代後期



Ｓ≒1/6
(128のみ1/4)

弥生時代後期

208

221

(整理番号E15)

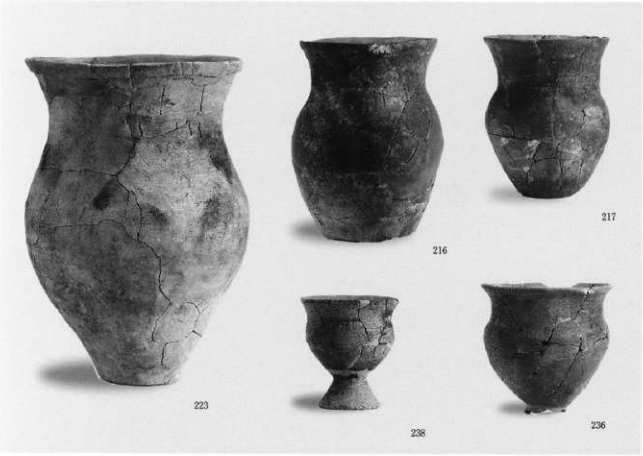
222

218

220

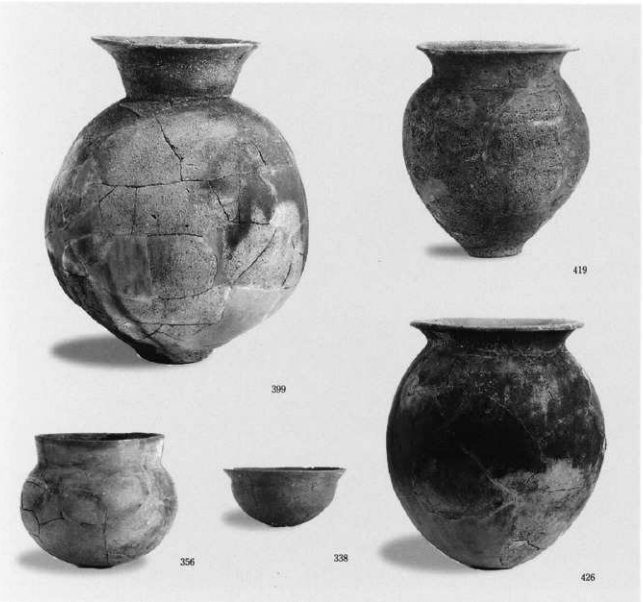
S≒1/4

弥生時代後期



S ≒1/4

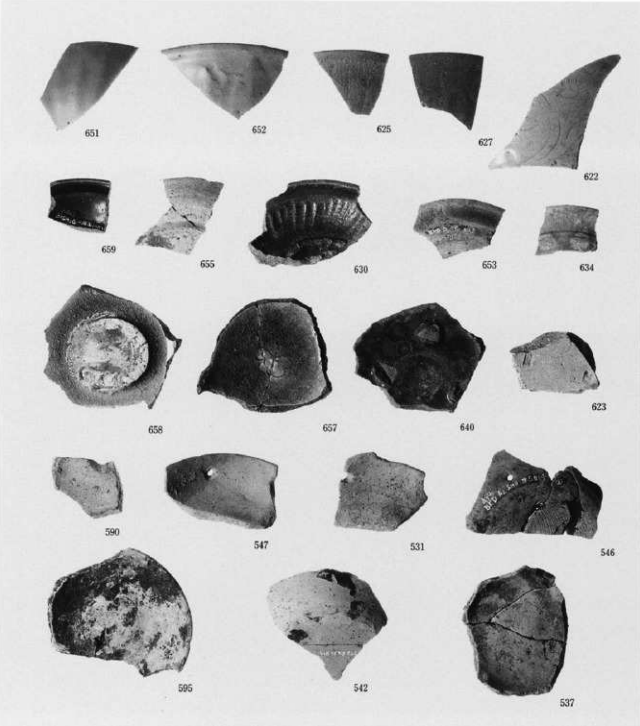
古墳時代
土師器

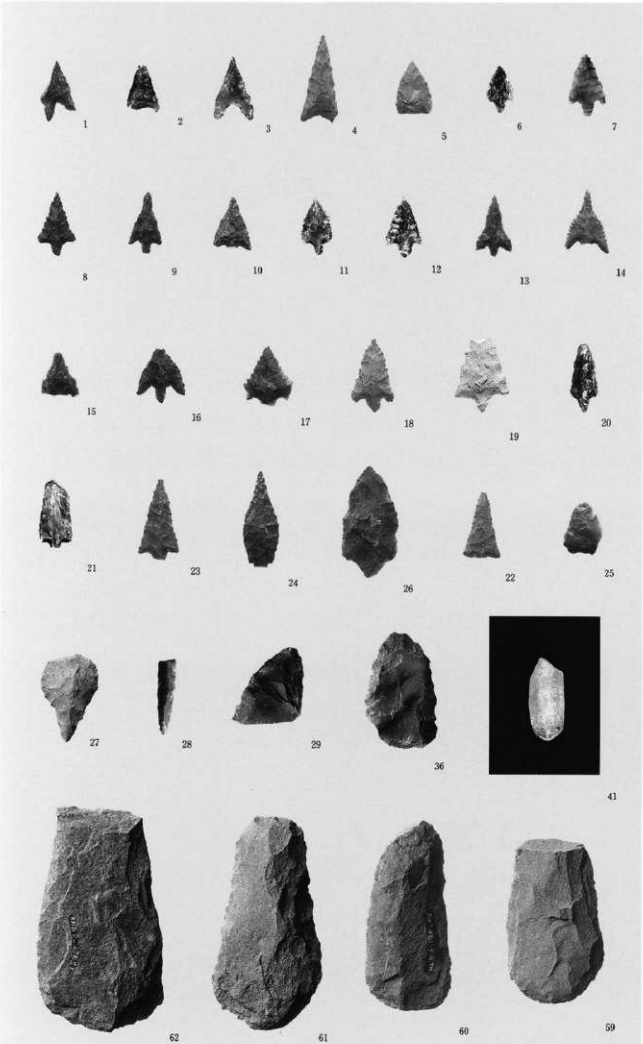


S ≒1/4

須恵器

中世の陶磁器
カワラケ





石鏃
(S≒2/3)

石錐
二次加工がある剥片
水晶
(S≒2/3)

打製石斧
(S≒1/2)

磨製石包丁

66

64

65

磨製石斧

69

70

72

71

67

敲石

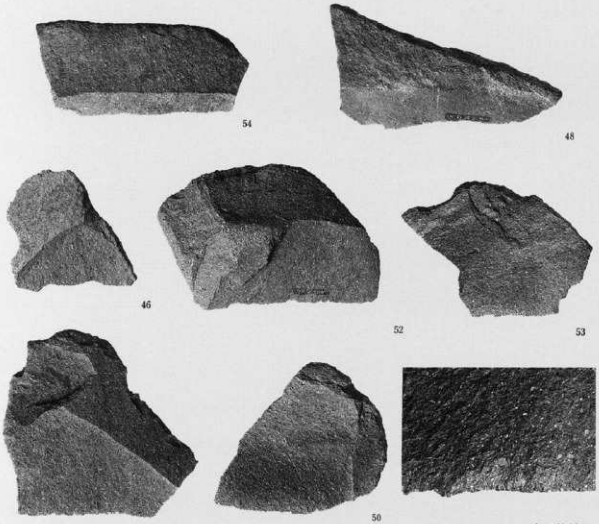
81

83

87

S≒1/3

刃器

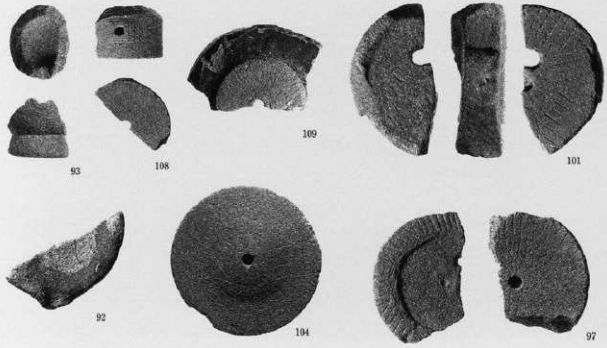


S≒1/3

軽石

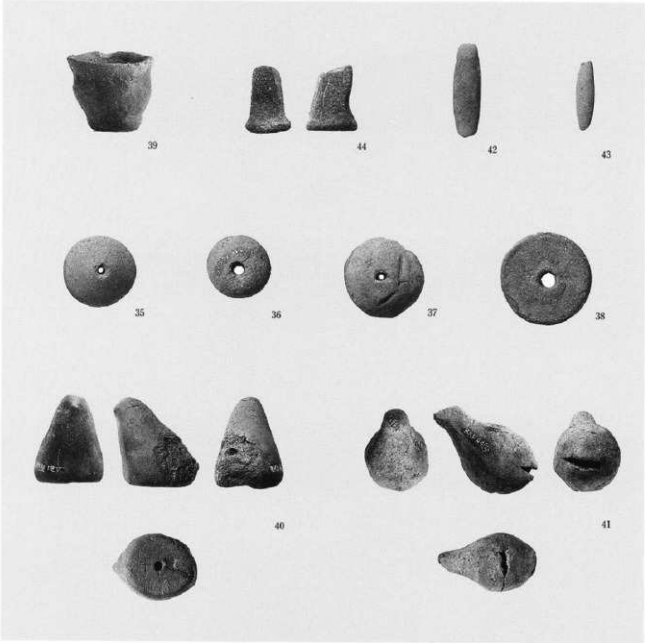
S≒1/3

石鉢・石臼



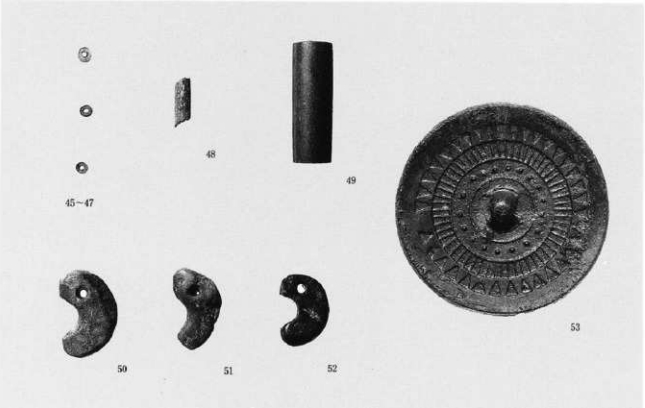
S≒1/8

土製品



S≒1/2
(鳥形土製品は2/3)

ガラス玉
管玉
勾玉
銅鏡



S≒1/1